

高遠の人坂本天山の若かりし時うちとりし熊膽なりと

て其のゆかりの人よりおこせければ

荒熊をうちたひらけしますらをが心きもこそ世に残りけれ

ある人より鈍子の口に結びつくる蝶をおこせければ

あさからぬ心くまれてさかつきに浮べる蝶の影をこそ見れ

ある人の銀にて盃をつくりておこせければ

七十の老の心を汲む人のなさけうれしき千代のさかつき

落合直亮のもとに遣しける文のはしに

あひおもふ心ばかりはみちのくの籬が島の名にもさはらば

心ある海士のすみかと聞くからにゆき見まほしき松が浦島

大和田建樹が隣に移りければ

朝夕にかよふもうれし中垣の竹のゆひめのへだてなくして

小澤侃二よみて遣しける

かけうつす小澤の水のあせざらば花の心ものどけからまし

小澤侃二の藥劑生に與ふ

くるしみをつぶさに嘗めて百草のその味ひも知るべかりけり

一すぢに學ぶころのまことあらば百の藥の道もたがはじ

少年のものに示さむとて

思ふ事なす日をいつと定めおきて若き年比あだにすぐらむ

幼き稚兒の書ならふがまだ舌だみたるを

書ならふ机のしまのしたゝみのひらふ聲さへ美しきかな

石城東山の志す道ありて出立つ別よみて送る

から人がわかれし水の心さへ汲みて身にしむ此の夕べかな

西南事件の時安國が西國へ下るを送りて

あたら身のさかりも待たで櫻島ちりなむ花の行方をぞ思ふ

永夫が因州鳥取へ行くを送りて

家離り因幡の海よるときくみるめ戀しくなきにはあらねど

小平啓三郎が陸奥へ行くを送りて

もれたるをひなに拾ひて古へのみちの奥をも尋ねもとめよ

長居せば待つ人堪へじ松島の浦のけしきはあかす見るとも

北海道へ行く人を送りて

ながめやる心の空もかよふらむ北にうごかぬ星をしるべに

五男治彦が一年志願兵にとて横須賀に出で立つ時よみて

送りける

君がためいでたつ海の横須賀のよこ浪あらず立ち歸りこむ

小西千吉が朝鮮へ行くを送りて

日の出づる我が御門への書の上に照してとほれからの國へも

明治二十七年七月朝鮮へ行く人を送りて

神風のいぶきの末になびけてよ虎のうそぶく山のおくまで  
韓國の城の上になちてわな張らば鳴も鯨もかゝらざらめや  
天つ日をそびらに負ひて船出せば神の御靈のそはらざらめや  
もろこしへ行く人に送る

唐土のよしの能く見よ日の本の花になぞふる花もありやと  
高橋某の福島に行くを送りて

君がおもひ朝夕こちに傳へなむ風ふくしまの里にいたらば  
伊勢國へ出立つ折送別會の席にて

年をのみ拾ひし身には伊勢の海の何てふかひかあさりいづべき  
おいにたる影もはづかしいすと川渡らむ瀬々をかねてしぞ思ふ

旅行

旅に出でゝ物のあはれは知ると聞く歸りくるまの足ときやなぞ

那須野にて

武士が矢なみのなごりつくりひて尾花かたよる那須の篠原

月のいとあかき夜松本の里にて

旅なればあはれふかしの月影をこの里人はいかに見るらむ

松本の里を出立ちける折弟治に詠みて遣はしける

くるま路の通はむ時にまたも來むわれまつ本の里遠くとも

淺間の温泉にて

烟たつ淺間の名にも通ふらむ底のいで湯の湧きかへりつゝ  
秋はまだあさまのみゆと思ひしに暑さは早く流しすてけり  
淺からぬ淺間の御湯は諸人をめぐみふかしの神やちはひし  
山邊の温泉にて

天皇の御幸をさへに古へは待ちしつかまのいで湯なりけり  
佐久郡松原村にて

嶺のたつあらし山中にうみなして神も心もやすみはじめけむ  
さゝ波のよする色さへみどりにて岸根をおほふ松原の池  
海の口村なる井手善平の家にて

ちくま川ふかき心にひかれて馬うち入れし君がやどかな  
甲斐國巨摩郡にて八ヶ嶽に雲のなびけるを見て

やつのにねに夕るる雲や故郷の海のおもてのくまとなるらむ  
五月十日筑波山の御祭に神輿を拜みて

十二日雨ふりくらし

筑波山くものゆきゝの早き瀬にみな川水おとや立つらむ

筑波山みねたちおほふ天雲に思ひ入るべきくまだにもなし

朝とく起きて麓の里の景色いとおもしろきを見て

霧こむる麓のさとは海なしてくもるに残るをちのやまやま



白波と見えしうねうね霧はれて田畑のおもに朝日かやく

筑波の麓なる白瀧にて

手にとれば泡ときえ行く白瀧を神のをしめる玉かとぞ見る  
女の神の山よりおつるしら瀧をみけしの糸の亂れとぞ見る

武藏國由山の里兄多毛比命の墓

山の名に残るかぶとの星月夜ひかりをさめし世を忍ぶかな

常陸國久慈郡岱田の瀧を見て

玉ひろふ袖のせまきをいかにせむ名につまれぬ岱田の瀧

上野國群馬郡群馬の松天満宮の杜にあり

千代ふべき色こそ見ゆれ眞柴つむくるまの松は神にひかれて

五十鈴川にて

夏ならばいかに涼しき五十鈴川夜すがらひびく瀬々の白波

五十鈴川の上なる鏡の岩にて

老が身のかけをうつさぬ鏡岩くもるおもても嬉しかりけり  
こけむして影さへ見えすなりにけり鏡の岩も老やしぬらむ

伊吹山にて

吹く風もえやはいぶきの山ならむ八重にかさなる峰の白雲

宇治川にて

あらそひし音は残れる川波に八十字治人のおもかけぞなき

金閣寺にて

松風は雨ときこえてふる池にかけさしおほふきぬがさの山

岡山の後樂園にて

川の名の朝日のかけをうつしきてちりもくもらぬ園の池水  
つくりけむ昔の人の庭たくみ池のころにいまもかかる  
見し人の影はうかばぬ池水にむかしをこふる鶴のねぞする

諏訪の高島公園にて

もの、ふのこ、につどひし跡なれや花とりよろふ高島の森

備中高松城趾

もの、ふの行方をたどる今の世に水もあとなき高松のさと

明治二十九年元彦とともに宮島に詣でける時輦の浦にて

さまざまの島の姿のあらはれて友ひきつる、ともの海ばら

嚴島にて

夕日かけ西にしづめる浪の上に神の宮居ぞうかびそめたる  
燈火を海の面にのこしおきて月すみわたるいつきしまやま

嚴島にて時鳥をきよて

鳥人の聞きふるしけむ時鳥みやこの人のはつ音なりけり

汽船にて河を渡りける夜

しほぐもり晴れたる月の面影に船の煙の立たずもあらなむ

諸共に神をいつきの鳥めぐり心ゆきたるたびにやはあらぬ

天橋立にて

天雲のよそに思ひし橋立をうつ、にわたる海のなかみち  
おどろきし神のねざめのま、ならむ波にころふす天の橋立

越の國にて

ふるさとのたより戀しき折しもあれ信濃の川の波の音する  
眞帆あけて信濃の川を行く船の消ゆるあたりや故郷のそら  
故郷の空なつかしき信濃川みをさかのほり行く心かな

越の白山神社に詣で

こゝもまた越のしら山知らぬ世にうつりし神の宮居ならむ

越の日和山に遊びて

荒汐の汐のやほ路のうらしほの知らぬ國まで行く心かな  
越の海や西吹く風のはやければ雲はなれゆく佐渡のしま山  
青海の上にかべるあをの嶋しるきは濱のいさごなるらむ

越の國彌彦村五十嵐某のかたにある 行在所を拜みて

今もなほ大御光はのこりけり仰げば高きやどのこすゑに  
ふみならず君がみこしの音高く千代に残らむ宿のいしすゑ

仙人

いくたびか手がひにしつ、仙人は鶴の千歳の末も見るらむ

隠士

よそに見て登ればこそは位山峰もふもともあらはなりけれ

老翁

紅のおもわのいろもしらかみの知らぬ翁とはては見るらむ

美人

青柳のほそきまゆねは風もなしに、動ける心なるらむ

美人海水浴

波の上におりたつ妹が黒髪をあがつまはやと誰か見るらむ

背面美人

靡かじと背く姿のうしろでいくその人のなけきそふらむ

漁夫

鯛願ふ人とも見えす村君のよをうみわたるこゝろ思へば

海人

馴れぬれば幸き世渡る海人だにも釣のうげなるさまなかりけり

素戔鳴尊

しらがねの國ひきよせて浮寶つくりし神はいまの世のため

仁徳天皇

漏る雨をよそにのがれし百敷のふるき跡こそ袖ぬらしけれ  
もるあめの下めぐみます心とてやぶれし宮に民をなでけむ



守屋大連

ぶつ矢の末もとほらずなりしよりやがていられし君ぞ悲しき

紫式部

なつかしき筆のゆかりに藤波の色うばはむと思ひそめけむ

小式部内侍

たらちねにさきだつ道もなく涙とまるわかれの關となりき

文貞公

思ふことなきよの月や詠むらむたまは残れる滋賀の浦わに

平相國

大野らに虎をはなちてたわやめの惠あだなる世を恨みつゝ

蘆舟に流しすたる蛭が鳥かすにあらずとなに思ひけむ

源顯家卿

男山かみのまもり末の世はあへのゝ露もひかりそへけり

源頼政

世の中をうぢの渡りと見てしよりのどめもあへぬ瀬には立けむ

小松内府

たらちねにしたがふ道をひきかへて悲しき庭の訓なりけり

熊谷直實

ひきふせて思ひかけきや梓弓とる手力の折れぬべしとは

調へる琴のしらべにふたつまをさむる道や世に響きけむ  
屈原

大きなるなげきを石といだきもちて沈むべきらの淵や尋ねし

韓信

わらはれし市路の恥は何なれやかゝやかしたるその名思へば

大葉子

から國の風になびかぬ心とてなにはの空にひれはふりけむ

風風城陥落

桐にすむ鳥もひそみて日の御旗高城の上に今なびくらむ

平知盛船やかたの塵を清むるかた

かき流す御船の塵にたぐへても行方知られぬ身を思ひけむ

新田義興朝臣矢口の波にて沈みしかた

ものゝふが恨をのみしおもかけは水の上にも今ぞ浮べし

注連かうじ松など書けるかた

松が枝に花をも實をもとりそへて歳のさかえを見する市かな

櫻畫の賛唐土にある櫻花  
なりときよて

あきつのに植ゑてや見ましまだ知らぬ人國山の花の色香を

美人の畫に

風もなき柳の糸のこしほそのうごくこゝろぞかたも定めぬ

楠正成公

みなと川かへらぬ水を心にてのちせしづかに訓へおきけむ

新田義貞

ものゝふがやしほに折りし劍太刀なげし心や神はうけひく

兒島高德

ことの葉を櫻の枝に匂はせて君がゑまひをひらきつるかな

織田右府

かたぶきし大樹の蔭によりながら天が下をば覆ひそめけむ

豊公

末遂に渡る世ありとありなれの川瀬をかけて君や知りけむ

命だにありなれ川のありはてば渡らむものと君やなげきし

利休

こほれける涙のあめの一しづくはらひもあへず身をや抛つ

西郷隆盛

ねらひつるうさぎ亡びて犬じもの道にふしける人の悲しさ

すめらべは清め盡さで筑紫の海波をさまりしその世かなしも

徳川慶喜

ありしよの夢をさまして富士のねの朝の雲の行方をぞ見る

虞舜

耶蘇が十字架にかゝれるかた

やそ人のうき世救ふと欺きて木のかみの子は現はれにけり

きのかみに高くかゝりて見ゆるかな罪に落ちたる身の果にして

亂世如盛

いとまなき民の心にかざられて國のよそめは賑ひにけり

治世如虛

これやこの治まる御代の徴とも見えぬは事のあらぬなりけり

讀史

わたの外四方の夷は日本紀世やまとこぶみにありとしも知らずやあるらむ

君臣の正しきみちをつたへこしやまとみふみぞ世の寶なる

東鑑

さかさまにみこしつかへて鳥ならぬ都に君を流しつるかな

秦本紀

壞れ行く土の根ざしはふるあめの下の濕ひのあらぬなりけり

伊達行朝朝臣が事記したる日本史の誤傳の宛をすゝきた

る書を

まことなき名とりの川の埋れ木も御代の光にあらはれにけり

土佐日記燈といふ書のはじめに

土佐の海の深き底ひに生ふときくみるめもしるきあまの燈火



埋木の花といふ書のはじめに  
たらちねを思ふ誠のあらはれて世に埋れ木の花咲きぬべし  
鳥津家邸にて犬追物を見て

引き放つ 弓矢たゆまで犬人のみかどの守り千代につかへよ  
學事

ともし火を文に照して更くる夜は消えての後の光をぞ待つ  
披書忍昔

古へをしのぶの山の奥ならでくまなくかよふ道もありけり  
從古才子皆多病于今瘦人能著書

天地の重きを筆にまかすればやせたる身とも思はざりけり  
窮當益堅

わびぬとて心の刀鍊へすばより亂ればとなりはてぬべし  
述懐

松は古い岸は田となる住の江にいつまで月の影やどすらむ  
世にしらぬ春と秋とを青山の茂き木のまにかくれてもみむ

月に我が身は早く老いぬれどまだきも若き書のうへかな  
いかにして登りはてまし日本紀やまこゝろやまとし高き齡ならずは

ものゝぶがおきふしならず梓弓いかに忘れてひきちがふらむ  
寄弓述懐

老人にかすまへられて言の葉の道にをさなき身を恨むかな  
十二月頃いたくわづらひけるが春になりて大和田建樹よ

リ『雪の山面影きえて霞む日の春あたゝかに梅かざるな  
リ』と云ひおこせければ

雪の山いたゞく老の髪の上にことしもまたや梅をかざゝむ  
眼をわづらひける時

さらでしも軒端をぐらき春雨にこのめけぶれる宿の淋しさ  
このめさへけぶれる軒の春雨にふみさへ讀ます徒然にして

船流す机の島の海人ならばやがてみるめもからましものを  
晝は見す夜はあはずて老のめに重なる雲の晴れまだになし

おなじ頃三保の松原に遊びて  
春ならで霞める三保の松原はわがみるめちの遠きなりけり

おなじ頃御嶽山の神に祈ることありて  
雲拂ふ御嶽の山のいぶきには見えぬ日のめも晴れぬべきかな

おなじ頃荒井の薬師に詣でよ  
人こそは佛の眼ひらくといへ我が目あけたまへ南無薬師佛

明治三十三年の夏の頃心臓の病あつしかりける時水神に  
祈りて

燃えわたる心の火をも鎮めませしるしみつのは神ならば神

思ふこと侍りて  
月草のうつしをめぐる人心まことの色は知るよしぞなき  
題しらず

黄金すらうづもれたるがありと聞く地の下とてなに歎かめや  
何をかは跡ふみ求めたどらしましまだ人知らぬ道もある世に

ひきとむるこの身の綱しなかりせば魂は雲居を天翔らまし  
折にふれたる

なべてよの闇になりゆく人心照るかひなしと月も見らむ  
墨田川ひらけ行く世の都鳥むかしのこゑは聞くひともなし

人知れぬ胸はしり火を山水にけつべき住ひいざ求めてむ  
月に遊ぶ我が身となしはて、年ふるさといざ歸りなむ

思ひ入る山の奥にも引く糸のかゝるこの世にうさ絶ゆべしや  
昔むして變らぬよりも偶々人となる身はくだくるもよし

富人のみさを守るはなかりけり身の貧しきやますらをの幸  
寫眞の自像に

垂乳根はいかにましけむ知らねどもよそへて忍ぶ老の面影  
高齢風流會のむしろにて

老が身をからきものとは君が代に齡をのべぬ人や云ひけむ  
君が代に齡をのべし老人はかすならぬ身もうれしかりけり

おなじ頃稻子の許より入谷の朝顔を送れりければ  
ねぶられぬ病の床のあさがほに心ひらくる花のいろかな

春懐舊  
なき人のあと遠ざかるきは見えて霞ぞ年を立ちへだてける  
春くれば故郷いそぐ雁もあるをかへりさしたる人ぞ悲しき

ことの葉の花ちるかけをとふ人の袖におほゆる去年の春風  
ありし世に思ひくらべてこの春は八十の隈手の花や見らむ

わかれにしその日と誰かしのばすの池の春風吹きわたる頃  
花鳥の春の夢路をたどりてもあとなきやどに残ることのは

夏懐舊  
ほとゝぎすかよふ山路をしるべにて昔の人の跡やとはまし

秋懐舊 遠江國井伊  
遠つあふみいなさほそ江の月の影昔の波になほよどむらむ  
初冬懐舊 谷宮奉納

袖の上の時雨をさへに運びきてかきくらしたる今日の空かな  
冬懐舊

埋火もあたり淋しと歎くらむ寄りにし人のかすしたらねば  
あとゝめぬ世となりしより白雪のふりし昔ぞいと戀しき

おも影はうもれもはてぬ雪の上に昔の跡をたどる頃かな



寄花懷舊

いにしへをしのぶが岡の春雨に袖のうへ野の花ぞつゆけき  
山風のさそふに身をやまかせけむ人はゆるさぬ花の梢を

寄月懷舊

古への人のめでけむ月かけと思へばいとゞなつかしきかな

寄雪懷舊

天翔るその面影やそはるらむさやかにもふるやどの雪かな

往時

ありありしよはみな夢となり果てゝ忘れぬ物は現なりけり  
一ふしのなに思ひでもあらぬ身に昔がたりを問はるゝがうさ

ある夜母君を夢みて

七十の老の夢路に通ひきてわかき御面を見るがあやしき

諏訪三位の君のかくれませるを悼みて

ありし世の君がひかりは残れども玉の御聲はきくよしぞなき

同じ君の五十日祭に

咲く花は池のみおもに浮びけり君が御影のかゝらましかば

おなじ君の一周年に

去年のけふ涙つきにし夕ぐれと思ふにも似ぬわが袂かな  
去年の今日光をさめし二月のもちの月日はめぐりきぬれど

青山も泣きやからさむ一年に三たびそゝける君がなみだは  
楠田某を悼みて

吉井某の父のみたまに

ありし世の聲にたぐへし梁のちりこそ今はかたみなりけれ

土屋某の忌に初冬懷舊

君まさでかれにしやどの草の原悲しきあとは霜やとふらむ

夏井某の父の忌に夏夢

短夜は程なきものを見し人のいかにたどりて夢にいりけむ

久保某の三年の祭に春夢

花園の蝶のねぶりのただしばしおくれ先だつ夢をしぞ思ふ

間宮永好が五年忌に

いつとせはまだ日も浅し君が名の忍ばれ行かむ世々を思へば

木村某の五年忌に

聲をさへとどむるわざもありと聞くなど面影の身をば離れぬ  
夢の世をいつかすごして我もまた現に君にことかたらまし

ある人の五年忌に惜花

五年のいつとは時をわかねども花ちるみれば人ぞこひしき

千野方義がみまかりける時

蓬室集 短歌

年へてもみかけはさらぬ池水に春のひかりは浮びきにけり

前田慶寧君二十年靈祭に雨中杜鵑

なき人の昔かたらふあまもよになくね惜しまぬ杜鵑かな  
郭公なく音ぞ今日を知らせける宿もる雨はときなけれども

君まさぬ軒ばの雨のおとつれも絶えまがちなる杜鵑かな

小中村清矩の五十日祭に

文机のもとによりそひありし君まつりの庭にとはむとやみし  
面影をけふのまつりのしるべにてあるじも見えぬ宿の悲しさ

同人の追悼に寄月懷舊

今はとて讀みをさめけむ書のうへに光をそへし有明のつき

みし人は行方も知らぬ大空に秋をのこしてすめるつきかな

栗田寛を悼みて

君まさば今このごろのふみがたりいかなる巻の敷をそふらむ

大澤清臣を悼みて

思ひきや去年見し面をかぎりにて今年を終のわかれなりとは

田中頼庸が母のみまかりしときよみておくりける

薩摩湯遠きさかひにありしだに戀しき君がわかれならずや

三輪田高房が一年の内に三度親族の葬を青山にいとまぬ

ることをいと歎きいへるを思ひやりて

諸共に七十のさかを越えながらわれをおくらす人ぞ悲しき

祖母が三十年の祭に寄源氏物語懷舊の歌あまたよみける

中に

陽炎のあるかなきかの身にしあれば面こそなけれ君が御影に

妻が三十年の祭によめる

三十年を夢にみなしてそのをりの現をけふのうつゝにぞとふ

安國が七年忌によめる

七年の心のやみをはらひきてまた袖ぬらすさみだれのあめ

神無月の三日慶子が二十日祭に

見はてつる影もめぐりて神無月けふ三日月の空となりぬる

冬たちてけふ三日月はめぐりきぬ見はてし人はいつちいにけむ

京都より人の松茸おくれるを靈前に供へたるを見て

昨日今日この世のおものたちし身も松の馨はめでむとすらむ

慶子が五十日祭に

今ははやのちの親をか定むらむ知る由もなき此世なるかな

中空にたゞよふ程もかへらねば今日をぞはてと思ひ定めむ

雪ふりける日青山なる慶子の墓を思ひやりて

ありし世に思ひくらべて青山のけさの雪をばいかにみるらむ

おひさきもいまだこもりし窓の内に見し世の雪を思ひ出づらむ



青山の木々の葉うつむ初雪にたまのありかも思ひきゆらむ

武夫がにはかにみまかれりときよて

たましひはわが傍に通はめど目にし見えねば面影もなし  
いかばかり今はに我を思ひけむ知らで寝しよの夢ぞはかなき

藤原藤房卿五百年忌に山居月

月ならで誰かは知らむよの中にかげ隠したる山のすみかを  
世の中を思ひすてたる山べにもなれにし月の影やそひけむ

文屋康秀千年忌に

花かけにしばし憩ひしほどなれや千年のねぶり今さますらむ  
まことある君が言葉のたくみこそ千年の後になほ匂ひけれ

田家月縣居翁祭日

いなばたをもちくる影も身にしみぬこや縣居の月の淋しさ

嵯峨野本居翁祭日

くだち行く世のさかとも思はぬは千代の古道あればなりけり

平田氏の祭に梅花盛久

家の風吹きつたへきて梅のはな香さへ久しく世に匂ひけり

八洲會の靈祭に夏月

みじか夜の月だにやどる草の露きえにし人の影はいづらは

神祇

なしと思ふ人にまかせて隠るゝはもとより神の心なりけり

神社

いましげもあらぬ社とよそにして過るを神の見ずばこそあらめ

出雲國大原野須賀神社にのみて奉りける

須賀の山雲の八重垣へだてずは今も見てまし神のみやるを  
しきしまの道はじめける古へも今もへだてぬ須賀の神垣

社頭松

年々に引くしめ繩のかはる世を松につけてや神も見らむ

人の世はかはるものとて神は松松は神にや契りそめけむ

社頭祝

神さぶる椎のこやての生ひ替りいやひこはえの世々に榮えよ

天長節

物皆は長しといへど限りあれば御世をよそへむ言の葉ぞなき

行幸

めづらしき今日の行幸の跡とめて君がみちしる武藏野の原

明治二十七年結婚の御祝ひに金銀婚といふことを

しろがねの色なる花に鶯はこがねのはねをかはしてやすむ

鶯花契萬春といふことを

なれそめし昔もとほき鶯はいまいく春のはなになくらむ

うぐひすと梅との契り深きよのあはれ幾春こめむとすらむ

東宮殿下の御慶事をことほぎまつりて

名のりいでむ千代のさつきの時鳥春のみやまに初聲ぞする

奉祝

いくはるの松のかけをかうつしけむ緑もふかき春のわか水

夏祝

年々にそはるはりたの千町田の早苗のかずや君が代のかず

寄松祝

幾年のみどりかさねて十かへりの春まつかけの色まさるらむ

末遠き小松が原のわかみどり千歳をかけてこゝにちぎらむ

山松の葉ごとに千代をこめながら末榮ゆべき色ぞみえける

千代ふべき人やすむらむ老らくも通はぬ松の門にかくれて

かくれすむ松のかけには老らくも知らぬ常磐の人やすむらむ

寄松祝

いそのかみふりにし世より矛杉の末の世とほく君や榮えむ

寄茶祝

にひこのめ白にひかるゝ粉ふるひの細かに千代の数を数へよ

寄菊祝

花の色はかしろの雪にまがへども老せぬものときくの白露

ませの内に色香をこめし菊の花よそには千代をやらじとやさく

老の波よする汀と思ひしは千代まつかけのしらぎくの花

寄瓢祝

花さきしそのよにあえてなり瓢みのゆく末ぞ樂しかるべき

なり瓢なれるそのみのかたければ千代の姿はかねてみえけり

寄山祝

神のます高天の山はよそながら君が代守るところなりけり

寄湖祝

としのなみよせてはかへる湖に老のかけこそ遠ざかりけれ

あきらけき光さしそふ湖にうれしきしほをたへつるかな

年々にみにへふえゆく湖を神もわたりてみそなはすらむ

寄雪祝

けぬが上に積ればこそは山もなれもろしと雪を思ひけるかな

寄鶴祝

千代よばふ八十の湊のあしたつも君には聲を惜まざるらむ

寄書祝

心さへとしさへ高き翁びとふみのはやしの奥にこそすめ

寄玉祝

すめらぎの御身のまもりをおもふにも玉つ寶にしく物ぞなき



寄石祝

千曲川さざれのかずをありかすによまばやよまむ君が齢も

寄民祝

あしはらや君をもとなる國ぶりも民賑はひて御代ぞ榮ゆる  
ひとかたに民の心のなびかすは瑞穂の稻のすゑもしなはじ  
子うませける祝に

君こそはこもよみこも七くさの實にまさるこもよみこもち

大和田ゆふ子の生れたるを祝ひて

ひめ松のひこえにあえて老松の齢をさへにのべむとぞ思ふ

小澤ちせ子が生れたるを祝ひて

ひきわくる小澤の水のおちたぎちせのとも清くよゝに流れむ

小澤正元が生れける祝ひに

ひなづるを養ふ千代の松かけに心なくやたれもすむらむ

おなじく宮詣の祝に

けふよりの氏子の數とさだむらむ神のみふだの末ぞ久しき

千歳廻舎の四十賀に

家の名の千歳の坂をふみそめてけふこそおいの道に入るらめ

井上頼國の五十賀に寄地儀祝

幾千代の影やうつさむ君が名の井の上の水のあする事なく

歌よむ人の七十賀に

七十はことにもあらじこと玉の八十のちまたに遊ふらむ君

人の七十七賀に

七十の上にかさぬる七のかす百よろこびのはじめとぞみる

人の八十賀に

八十の坂やすくすぐして今よりは百よろこびの春や待つらむ

人の八十八賀に

八十のさか安くすぐし、君なれば百喜びのまゆやひらかむ

高平眞藤が信濃國天照山をひらきたるを喜びて

君待ちて光みせけるあてり山いくよの雲のつゝみ來つらむ

ある人の紫の玉を持てるを祝ひて

むらさきの玉の光の世とともにあせぬやいへの寶なるらむ

渡邊千秋が滋賀縣知事になれるを祝ひて

うらさびし心なごみてさゝなみの國つ御神も君によるらし

臺灣の版圖に入れるを祝ひて

ひさ方の天津の波の音そへてその名も四方にたかさこのしま

四海清

すひぢにの神の萌しに海原の底まですめる世とはなりにき

増澤靜雄の六十賀に寄松祝

黒髪を梢のしもにまがはせて松の千歳にあえよとぞおもふ

人の六十賀に

めぐりくるその喜を今よりのいく六十かへり君はみるらむ

人の六十一賀に松延年友

幾年の友と契りし霜の松さてしもあせぬ千代のいろかな

人の還曆賀に春祝

今年よりまた若がへる春とてや花のときはも色まさるらむ

金鑽神社宮司某の賀に寄神祝

末遠き金さな山のさなかつら神にひかれて千代もへぬべし

同じく寄巖祝

里の名の兒玉は石のむかしにて岩となる世も君ぞ見るべき

よる波はけづるとすれどかな川變らぬ岩や千代の友なる

還曆賀に寄巖祝

年波はかへるがへるもうちよせてうごかぬ巖神さびにけり

人の七十賀に

世の中にまことまれなる齡ともいはれむ君と君はなりませ

君はただ世のなか人といはれなむまれなる齡安くすぐして

まれならぬよはひと君や思ふらむ千歳の末を願ふ身にして



蓬室集 長歌

新年歌

新年

みそぢよりよそぢ五十と  
はる秋をあまたすぢして  
またさらに六十のうへに  
何をしてかくは老いけむ  
ありし世を思ひ出づれば  
くろかりし髪はみだれて  
今のみにはじめしわざか  
いざさらば歎きはやめて  
ほぎ言にことあけせまし  
この身にも幸はありけり  
皇神のみち知れる身ぞ  
病さへあらぬこの身ぞ  
春さらば花にくらさむ

および折りかき數へつゝ  
あらたまの今年となれば  
一つてふよはひかさねぬ  
如何にしてかくありけむと  
わかゝりし顔もしわみぬ  
かましゝの翁となれゝど  
うつせみの常のことわり  
あたらしき年のはじめの  
しづだまき賤しくはあれど  
日の本にうまれこし身ぞ  
妻に子にいつかるゝ身ぞ  
おきなさび人もとがめじ  
秋さらば月にあそばむ

くさも木も榮ゆるときに  
すめろぎの神のことごと  
なでたまひ恵みたまふと  
中今のいまわが御代は  
こむ世にもいかでかあらむ  
四方の海となりの國と  
よきことは彼をも捨てず  
あきらけく治まる年と  
かきかぞふ七年すぎで  
この春をさかゆる春と  
うちひさす大宮人は  
大君のみかほをろがみ  
ゑみ榮えことほぎまつり  
あらたまの春鳴く鳥の  
梅さくら咲くをも待たで

あへるおきなぞ  
あれいづる青人ぐさを  
御世かさねありくる中に  
いにしへにためしもきかず  
大御代をしきますはじめ  
あま雲の行きかひしつゝ  
さかしきをこゝにもよびて  
御代の名を改めしより  
今年こそめでたき年と  
つねよりも待ち喜びて  
あたらしき年のはじめに  
大御幸みともつかへて  
あまさかる鄙の國べは  
うぐひすの聲も思はず  
都べのそのおとづれを

ひく糸の傳へおそしと  
すめらべを遙にをがみ  
かくばかり貴き御代に  
誰もみな逢へるがなかに  
内日さすみかどべ近く  
大君の御代のさかえを  
たふとく嬉しき

反歌

君が代はつかふるみちの一すぢに春を迎ふる四方のくにびと

新年松

奥山の岩にこけむし  
天雲の八重雲しのぎ  
あらたまの年のはじめと  
立てならべならぶる小松  
山深くもてや出でけむ  
ふか縁かけもしみゝに  
門ごとによそほふすがた  
くにぶりといつ定まりて  
西の海ことなる國の

まつが根のまぢみ樂しみ  
大御代をとほく祝へり  
しかばかりかしこき時に  
しづだまき賤しきわれも  
草まくら旅やどりして  
目の前に見たてまつるが

その岩に根ざしとどめて  
しみたてる松はあれども  
うちひさす都大路に  
野べ近くひきや來つらむ  
わかみどり色もときはに  
軒ごとにしたてるそのさま  
日の本のやまとのくにの  
年のはにかくしあるらむ  
國ぶりとこちたきかざり

くさぐさの木々はあれども  
松の葉の色のときはに  
大御代をよそへまつり  
ことほぎて祝ふことは  
松にこそわれは結ばめ

反歌

おく山の岩根はとほしやど近き松の常磐にわれはちぎらむ

新年宴會歌

あたらしき年のはじめに  
いとどしく樂しきものを  
肴をもかたへにおきて  
ものおもふ心もなぎぬ  
いにしへにありとは聞けど  
あたひもて買はぬ酒にぞ

反歌

今よりの年の始にあひのみておもがはりすなわがとこよたち

新年言志

あらたまのたつ年ごとに  
思ふまになしもはてめと

ことしこそ思ふこゝろを  
ぬば玉のひと夜あくれば



天の戸のしらむも待たず  
文机のちりうちらはらひ  
春夏もただすぎ過ぎて  
あらためてまたこむ年と  
いつしかと待たぬに暮れて  
かくしつゝ、經にける年を  
今年こそはけみつとめて  
身とも思はめ

鶯入新年語

ひらけ行く人のこゝろは  
ふることを誰もいとひて  
名残なくなりもてゆくを  
あらたまの年たつなべに  
契りてしこゝろかはらず  
いつしかと轉りかはす

反歌

あらたまの年の心にひきかへてむかしを語る園のうぐひす  
いにしへに生れし身とて

新年述懐

鳴くとりの聲のうちより  
ふみよまぬ年はなけれど  
秋もさり冬にいたれば  
およびをりかぞへて日數  
またさらに年もかへりぬ  
心からくゆるもはかな  
高砂の松に恥ぢざる

いにしへを忘るゝごとし  
新らしきそのめうつしに  
うぐひすの聲ぞうれしき  
咲きそむる梅のふる枝に  
語らひしことも忘れず  
去年のふる聲

何すとか今にまさらむ

後の世にあれくる人も  
耳にきくうへをこひしみ  
おもふそのせばき心に  
かくすれば今おとれりと  
もち鳥のはなれかねつゝ  
あらたしき事こそいとへ  
あらたまる空のけしきを  
しら髪の老いたるわかき  
我さへに立ち出で、見る

新年祝言

あたらしき年のはじめは  
海山もよろづ代よばひ  
思ふことたれもあらねば  
ひと言をさゝけまつらく  
その民のちからゆるべて  
とみくさの國ぞとみせむ  
中今のすぐなる御世に  
いにしへの聖の皇の  
もろ人の喜ぶこゑを

そのかみに何かおとらむ  
目の前に見るをいやしと  
ともすれば昔はかくぞ  
ふりし世を忍ぶることろ  
ふる事のそのめうつしに  
なべて世の年のはじめと  
こも枕たかきいやしき  
いれひもの同じこゝろに  
今日ののどけさ

あめつちの神もよろこび  
ものごとくに榮ゆる時と  
思ふふしわれもなければ  
ものつくる民は御たから  
その民のにぎはひ行かば  
さき草の御代さきからむ  
まつしかる民はあらねど  
かしこかる跡にならひて  
たまほこの道にもとなへ

冬ごもりまことの春を

待ちにまたまし

もろ人のほむるしらべを  
いとどしく御代さきからむ  
あたらしき年のはじめの  
ほぎたてまつる

反歌

吳竹のすぐなる御代もすぐなれと祈るいのりは我が君のため

待春

年かへりかへるときけど  
川の瀬のほこりもとけず  
あさゆふの霜おきかさね  
吹く風のおともはけしく  
うづみ火の花のあたりを  
はなはだも遠き春ゆゑ  
日をぞかぞふる

又一首

あたらしき年とはいへど  
ふゝめりし梅も咲かねば  
山の端の雪けのそらは  
ふる年と思ふばかりぞ

大宮にきこえあけなば  
いかばかり國富みせむと  
ほぎ言にひとことそへて

山の端のかすみも見えず  
しらくもの上野の岡は  
墨田川つゝ、みのみちは  
寒ささへ日にけにませば  
しばしだに離れもやらず  
いたづらに指のみ折りて

うぐひすの聲もきこえず  
長閑なるけしきも見えず  
さむさゝへ日毎にそひて  
よしさらば又たれこめて



春歌

初春

山見ればかすみたなびき  
我が宿のかきねの野べも  
をとめらが若菜あさると  
いまいくか日敷した、ば  
鶯やかけに來なかも  
冬がれの柳のえだも  
いつとなくのどけくなりぬ

反歌

あらためて春の心になることはさらば今日をや始めと思はむ

初春月

山みれば雪もましろし  
その山の雪より出で、  
きのふまできえし光も  
おのづから霞めるなべに  
梅の花ほころびそめて  
影に たぐひぬ

川見ればこほり流れぬ  
今日のはや雪間見えそめ  
珍らしく出づるも見えつ  
梅の花ほころびやせむ  
昨日まで思ひすて、し  
おく霜の竹のさやぎも  
風のゆるみに  
川みれば水もさむけし  
その水にうつれる月の  
この夕べ吹く風ぬるみ  
わがいはの軒端にたてる  
窓のうちにもりくる香さへ

初春鶯

ふる雪もいまだとけねば  
谷の戸の氷のくさび  
いかにして急ぎいでけむ  
南ざしおふるこすゑの  
いつしかと囀るはつね  
それだにも嬉しきものを  
鳴く聲は日ごとにそひぬ  
おつる日もなく

反歌

まだなれぬ春のあらしに心せよひなひきつれし谷のうぐひす

早春雪

あらたまの年はかはれど  
みな人の友待つ雪も  
しも氷寒きあしたも  
墨田川つゝみのかげは  
白雲のうへ野の山は  
たれも皆思ひくづほれ  
あづさ弓はる立ちくれば

春雨もいまだふらねば  
ゆるぐべき隙もあらしを  
わがやどの軒端の梅の  
きのふけふ咲きたる枝に  
尾羽ふれて來なく鶯  
一つ連れ二つ連れきて  
あづさゆみ春たちしより

去年かけて空あた、けみ  
ふりぬべき景色なければ  
あめをのみ詠めながめて  
よるふねの船人見えす  
みのかさのみやびを絶えぬ  
淋しけく暮らすあひだに  
朝霞たなびきそめて

鶯もきなくこのごろ

野も山も庭もまがきも  
待ち待ちし去年のみ雪も  
一時にあつめて見する

海邊霞

三保の浦の松のをちこち  
舳つぎて漕ぎかへるふね  
いはさきのきよみの浦の  
よもやもにたなびき渡り  
舳つ櫂のはぬるも見えず  
海となり にか

又一首

しながどりはあはの水門に  
けぶりたてこぎ行く船  
時のまに見えみ見えずみ  
おしなべてなれるをみれば  
よる波のおとばかりして  
ひるがへる旗のなびきも  
風もをやみて

おもほえず空かきくもり  
時のまにましろになりて  
この春のそのはつ雪も  
けふの樂しさ  
沖さけて漕ぎ出づるふね  
見るまゝにやゝきえはて、  
八重がすみ風のまにまに  
おきつ櫂うごくも見えず  
しら波のおとのみのこる

ただ向ふさがみの崎を  
真帆あけてこぎ行く船  
あさみどりかすみの海と  
みわたしの沖の島べに  
よこ濱の入り江のみをに  
おのづから靜になりぬ

初聞鶯

花おそき年にはあれど  
この朝け思ひかけぬに  
うぐひすのなく聲すなり  
大空の色もさむけく  
あらたまる心ばかりの

又一首

年ごとになきふるしてし  
あたらしと人こそきかめ  
あらたまの春まちつけて  
いつしかと來鳴くをきけば  
めづらしき聲ならなくに  
年のはにときをたがへす

朝鶯

ひと聲はねぶりをさまし  
めづらしと枕はなれて  
諸共に立ち出で見れば  
こゝもとの軒端の梅の  
花咲きにけり

雪ふかき春にはあれど  
わがやどの軒端の竹に  
驚きてたちいで見れば  
吹く風のおともさながら  
はつねをぞきく  
うぐひすのそのはつ聲を  
あたらしとわれは思はず  
梅の花さけるのきばに  
あたらしき聲ならなくに  
きく人のうちゑまる、は  
なくが故こそ

ふた聲はねざめにき、て  
わきもこをつき驚かし  
うべしこそ鶯來なけ  
南さしおふるかた枝の



又一首

この朝けうぐひす來鳴く  
わがやどの隣の木々の  
ねたき事いかがはせむと  
うれしくものきばの竹の

餘寒月

時わかぬみねのあらしも  
雪消えぬ松のこすゑも  
さえかへる夜半の寒さや  
山かぜも吹きあらためて  
その風のさゆるたかねの  
ゆふ月のかけさしくばれ  
しら雪のきらめきそめて  
袖も たも とも

梅始開

わしりてに一本ある梅  
その花のおそきはおきて  
あけくれにわが待ちをれど  
片枝だにいまだ咲かねば

その聲はいづこなるらむ  
奥にこそやとしめけらし  
朝戸あけたちいで見れば  
かけに鳴くなり

昨日今日ぬるむにつけて  
いつしかと霞みそめしを  
また更にさそひ來つらむ  
山松もましろになりぬ  
その松の木すゑをいでて  
みえわたる四方の山々  
うちつけにさえこそまされ

出でたちに二本ある梅  
その花のはやきこすゑを  
何方もまだほゝゑます  
思ひ絶えありしこのごろ

春風もやどりそめけり  
そのかけに櫻こきませ  
たちかかさぬらむ

雉

つゝ花にほへるをかの  
こゝろなくあさる雉子の  
われもまた驚かされて  
立ちぞやすらふ

雲雀

春の野の芝生のところを  
わか草のつまやこもれる  
あがるかと思ればおききて  
聲きけばうらかなしきを  
草ぐきのそのかくれがの

詠花

うまごりのあやはあれども  
しきたへの錦はあれど  
天地のなしのまにまに  
錦ともあやともいさや

鶯におどろかさされて  
いかにぞと見出すあさけ  
ぬばたまのきのふの雨を  
おそかりし心の悔も  
いま更にいろにもいでじ  
梅も 思 は む

野梅

松をこそひきにはきつれ  
その松もわか菜もあれど  
懐しみとめつゝくれば  
消えのこる雪かで見えて  
うべしこそ香は吹き送れ  
人 さ そ ふ ら し

柳

わが門のはいりのやなぎ  
木枯にえだもたわみて  
光りさへ身にしみとほり  
雨こそはみどりそめけれ  
たち歸る色しそはれば

よどいで窓の戸あけて  
うれしくも香こそ匂へれ  
なほざりになに思ひけむ  
行く水のかへらぬものを  
あさしとや我が心をや

若菜をぞつみには來つる  
うぐひすの聲する野邊を  
あさみどり霞のおくに  
ましろにぞ花は咲ける  
梅の花ありとやこゝに

きのふかも落葉ちりしき  
ゆふ月のいとにかゝれる  
冴えさえしその梢を  
その雨のふるたびごと  
鶯も鳴きてうつろひ

花の に ほ ひ は  
庭花

しらくもの上野の岡  
みな人はむれてゆくとも  
山川のけしきそはりて  
馬車おともとどろに  
酔びとはほつ枝よちとり  
こゝろさへおちるぬ花見  
言の葉のみやびもなきを  
吹く風のおとものどかに  
しづかなる心うつらで  
散るまでを見む

名所櫻

墨田川つゝみ行きかひ  
杖つきもつかずも行きて  
咲く花をわけつゝゆけば  
木かけには鶯なきて  
すがの根のながき堤を  
春の け し き は

行く水のすみだの川と  
花見にもわれはえ行かじ  
さく花の色こそまさめ  
さばへなす騒ぎにさわぎ  
わらはべは陰にたはれて  
よみつべき歌もいでこそ  
咲きにほふわが庭ざくら  
訪ふ人もあと絶えたれば  
終日にあくよもあらず

みな人の遊ぶさかりを  
われもいざ心やらむと  
川洲にはかもめつまよび  
みるも皆きくものどけし  
ゆき歸り見るともあかじ



花 盛

明治十七年三月十三日夜露  
震大雨同十五日墨水觀花

風さむみそらさへ冴えて  
墨田川つゝみのさくら  
うちたゆみこもれる時に  
おもほえぬその神とけに  
たまほこの道行くひとの  
まことともいまだ思はず  
しかすがにもだもあらねば  
堤路をはるかに見れば  
雲こそはきしにおりをれ  
いそぎつゝ車はしらせ  
白雪と見しはことわり  
咲きいでぬ木末もあらず  
おしなべて花こそさかり  
うちつけに心おちるて

河上花

ゆく水のすみだの川は  
わたり守ふねもいそがす  
ゆきかへりかよふ小船の

鳥の名のみやことなりて  
あくるより暮れ渡るまで  
たえまだにあらぬこの川

みめぐりの花ほころびて  
咲き匂ひにほへるさかり  
みやこ人つどひきたりて  
みぎには舟をきほひて  
昔にもありやなしやと  
今のうつつゝに

遊墨田川長歌并短歌

すみだ川つゝみのさくら  
咲き匂ひ匂ふをちこち  
木かけには雪こそつもれ  
春がすみかすめる空に  
水上のふねの帆かけは  
目のまへに近づきにけり  
よる波のおとものでけく  
おのつから心おちるて  
暮れずもあらぬか

反歌

みな人の心ひらけて墨田川あそぶさかりと花も見らむ  
夕花

しらひけの杜もましろに  
咲き亂れみだるゝころは  
堤にはくるまつらなめ  
ひまもなくあそぶこの川  
みやこ鳥とはましものを

咲き亂れみだるゝさかり  
こすゑには雲をなびかし  
みわたしの筑波の山は  
ほのほのとなかば見えそめ  
はなれ洲を早くはなれて  
とりよろふ景色を見れば  
行く水のかけもしづかに  
おもしろみ遊ぶこの日の

彌生山はなさくかぎり

あさまだき家路をいでゝ  
行くさきは雲かとまがひ  
しめおきししをりも見えず  
かけ毎に立ちやすらへば  
いつしかと暮れはてぬらし  
飛ぶ鳥もねぐらさだめつ  
ふもとにや立ち歸らむと  
ひむがしの山の端たかく  
木末よりあらはれそめぬ  
いにしへの人もいひけれ  
はなのこかけに

獨看花

花みつゝ酒はのむとも  
かたるべき友しなれば  
よしやその友はありとも  
かたらずは樂しからめや  
墨田川つゝみのさくら  
みな人のかたるをきゝて

いざけふは行きても見むと  
みち遠くわけ入るまゝに  
こしあとは雪とふりつゝ  
越えきつるかたもまどひて  
すがの根の長きこの日も  
いりあひの鐘もをさまり  
いざさらば里にやいでむ  
杖ひきてかへりみすれば  
夕月のかげほのめきて  
うべしこそくれなばなけと  
ひと夜ねて歸らむものを

さけのみて花は見るとも  
うちつけに淋しからまし  
思ふことこゝろあはせて  
友なきにあにまさらめや  
咲きにほふ花のさかりと  
さそふべき友はあれども

われはけふ獨ぞ來たる

花の木かけに

反歌

あつさ月はる日のどけみ  
登りたちふりさけ見れば  
春かぜにさざなみたち  
咲く花を四方にめぐらし  
ひむがしの海のそきへの  
あさみどり霞むけしきの

春眺望

み冬つき春しきぬれば  
小山田の水もぬるみぬ  
ゆだねまく時をちかみと  
呼子鳥なくこゑきかば  
繩なひし昨日のいとま  
いまよりの賤のいとなみ  
いとなしと我もおもへど  
もゝしきの大宮人の

しらくもの上野の岡に  
しのばすの池のみぎはは  
淺草のたかきいらかは  
みわたしのつくばの山  
帆影まではるかに見えて  
あかずもあるかな

山畑の麥もあをみぬ  
さくら花咲きてちりなば  
水口をあをやつくらむ  
野べに出でゝ豆やまくらむ  
時のまにはやくもすぎ  
いとなしと人こそみらめ  
年ごとのつねにしあれば  
あさ夕のそのいでいりに



くらぶ山おもひくらはべて  
のどけかりける

春旅 擬蒸汽  
旅行

まがねしく道走らせて  
とどろかしいたる旅路は  
その蔭にたちもよられず  
その糸を手にもむすばず  
この内にこもれるなして  
ふる郷をおもふころは  
もえぞまされる

世をわたる心はなほぞ

なる神のくもるはるかに  
さくら花さくと見ゆれど  
あを柳はなびきてあれど  
すがの根のながき春日を  
心だにやるかたもなく  
いとどしく煙とともに

夏歌

首夏雨

梅さくら咲ける木かけに  
しくしくにふりにし音も  
なごりなく花ちりはて、  
わかみどり青葉にそよぐ

更衣

うめさくら早く散りすぎ  
卯の花の咲く月たてば  
けふは早ぬぎかへましと  
わきもこが取りてかきなで  
いつしかと着なれにけりな  
風もかよひて

新樹風

うすくこき緑はあれど  
おしなべて峰もふもとも  
そのかけを吹きわたる風  
いかにして色をわくらむ

ものうけに雫おちそひ

いつしかと日数すぎ行き  
今日見ればただ一いろの  
雨のすずしさ

藤なみのさかりもすぎて  
あかざりし花のたもとを  
衣匣ちりうちはらひ  
白妙にひきよそほへば  
おきつとりむな見るそでに

おそくとき梢はあれど  
ひといろの青葉になりぬ  
その木々を吹きこす風の  
その風の吹きのままに

ひるがへる若葉を見れば  
さまさまにしが色みせて  
あやしくもあるか

雨後新樹

雨も雨よごろもよごろ  
その夜半も同じよごろを  
藤波のいろはうつろひ  
山のはのならの村だち  
とりどりに色ふかむるは  
ものみなのかはる姿ぞ  
いろにはあらじな

反歌

緑樹重陰蓋四隣

よひのまに色そふ見れば夏木立なほふる雨の染むるなりけり  
あさごとに常にきこえし  
この頃はほのかにもりて  
宵ごとにかぐるともし  
物ごしに見えみ見えみ  
みづ枝さす木々の廣葉の

楢の葉もかしくぬぎも  
そめわくる風のころの

その雨のいかに降りけむ  
この朝け立ち出で見れば  
卯の花はくだちにけるを  
わがやどの千入のかへで  
世の中のつねのことわり  
うつろふもそめるも雨の

うなる子があそべる聲も  
谷ひとへ隔つることく  
明らけくすきたるかけも  
八重垣をへだつるなして  
茂りあふかけかさなれば



夕月のひかりをぐらく  
市ちかくしめたるやども  
おのづから山邊にすめる

里卯花

山かけは月こそなけれ  
月かけのてらぬ夜ごろの  
よるひるの里のかよひも  
卯の花のさかりになれば  
織りいでぬ白木綿かけて  
越えなやむ道もさやけし  
みやこ人きゝにはこなむ  
かけをしるべに

待郭公

むさし野は木立をしけみ  
昔よりいひつけしを  
ほのかなる聲だにたてず  
羽をしも来てならさねば  
うぐひすの卵はあれど  
おひ出づるその子もあらず

鳴く鳥のこゑものふりて  
さとなかに住める家居も  
こゝちこそすれ

谷かけはひるさへくらし  
このくれの茂れるころは  
いとどしくおほつかなきを  
ときならぬ雪ふりつもり  
ふみわくる跡もまどはず  
時鳥いまをさかりぞ  
わが山の卯の花月夜

ほとゝぎす多かるさと、  
をとゝしも去年の五月も  
たち花のかけはあれども  
その鳥のすがたも見えず  
ちゝはゝの養ひたえて  
いかなるや故を知らねば

心をやあくがらしけむ  
をちかへり啼きて渡れば  
この夜半のくまなき影に

夜時鳥

文机に書おきならべ  
夜もすがらわが見る程に  
燈火もかゝけつくしぬ  
手枕をまかむとすなる  
軒ちかく鳴くほとゝぎす  
傾きしかしらもたけて  
おもほえぬ聲のどよみに

早苗

日かすふるさつき雨の雨の  
たかどのに登りて見れば  
をとめらは簑笠とり着  
もろ手には苗とりいそぎ  
五月雨のあまぐも待たず  
今日をかぎりに

反歌

をしみつる聲のかぎりを  
つらかりし心のくまも  
はれやわたらむ

その書をまきみひろけみ  
月かけもかすかになりぬ  
今はとてねぶりもよほし  
ぬばたまのよどこの上に  
ねぶかりし目さへさめつゝ  
しまらくは眺められけり  
心 うごき

いぶせきを思ひやらむと  
早苗とるときになりぬと  
ますらをはになひ運びて  
もろ聲にうたひかはして  
おのかじしきほひぞ植うる

うた人も思ひわづらひ  
ほとゝぎす汝に告ぐらく  
もとのごと啼きし渡らば  
夕月のさやけき夜ごろ  
よひよひにわが待つ空に

未聞子規

きゝつやと人に問へども  
子規なかなぬはしるし  
思ひ絶えありしそのこゑ  
いかばかり嬉しからまし  
ゆふ月のかげほのめきて  
をりもよし一聲なれ  
ねたましみせむ

夕郭公

橘のかをるゆふぐれ  
をりをりの空をながめて  
つれもなく鳴かぬにつけて  
今しはとわびにしものを  
夕月のさやけきそらに

溪螢

ひきわけて運ぶおそしとおりたつは今日をかぎりに早苗とるらむ  
谷かけは水こそすめれ  
ところ得て遊ぶほたるの  
瀧つ瀬に身をも浮べて  
天の戸を明るも知らず  
よとともにおのが光と  
こもりをるらむ

泊水鶏

船はて、戕河ふりたて、  
ぬば玉の夜は更けぬらし  
吹く風もすすしくなりて  
うちわたすしまの崎々  
晝のごとおしてゐるには  
くひな鳴く聲おもしろし

瞿麥露

ちりをだにすゑぬ常夏  
あけくれに養ひたて、  
そひふさせわが見る花を

みやびをもうら淋しきを  
今年だにたちかへり来て  
いかばかり嬉しからまし  
村雨のそゝぐあかつき  
はやも啼かなむ

誰もまだ聞かすと云へば  
一昨年も去年もきかねば  
今年だに啼きわたりなば  
むらさめの晴れゆく空に  
今しはとおほゆる空ぞ  
まだ聞かぬ人にも告げて

村雨のそゝぐあかつき  
わが待ちし山ほとゝぎす  
思ひこひありけるものを  
五月やみあとなくはれて  
汝もさばうかれ出でけむ

岩かけは萱こそしけれ  
やま風になびくと見れば  
夕月のひかりもからず  
奥山のいはがきぶちを  
雲霧のそのうすものに

むやひすとさわぐふな人  
しら波のおともしづかに  
あまのはら月ほのめけば  
ながめやる浦のくまぐま  
むれたてる蘆の葉がくれ  
水のをちこち

風をだにいとふなでし子  
とばりとも思ふまがきに  
露こそはあだにおきけれ



露こそはいろになしけれ  
つゆけさの乾くひまなき  
あはれその露のあだもの  
心しとおけ

観蓮

しのばずの池のさゝなみ  
昨日までありと見ざりし  
水の上にあらはれそめて  
なか島の神の宮居の  
朝風に香さへにほひて  
よるかけて咲きやしぬらむ  
葉がくれの蓮のつほみ  
しろたへに花さきぬれば  
おばしまのをす吹き通ふ  
色のすずしさ

反歌

咲きそむる池のはちすの花のかけ日毎にそはむ水の上かな

苦熱

雨ふらで日數かさなり  
ひと手には汗かきぬぐひ  
はしに立ち蔭によりそひ  
立ちても見居ても見れども  
吹く風のつゆそよがねば  
枕のみかたへにおきて  
ころにもあるかな  
天つ日の照りにてれ、ば  
ひと手には扇はなたず  
凌ぐべきところありやと  
あつけさはいよゝ覺えて  
讀みつべき書だにとらす  
歎きつゝうそぶきくらす

秋歌

立秋

秋きぬと目にこそ見えぬ  
此ゆふべおつるを見れば  
おく露のかはらぬいろも  
目に見えぬ秋のけしきの  
けふのゆふべは  
わがやどの桐のひと葉の  
吹く風のかはらぬおとも  
いつしかと變りにけらし  
うちつけに淋しくもあるか

秋風拂松

さえさえし松のふぶきも  
木かけには花咲きはし  
涼しさをこゝにあつめて  
しばらくは親しまれしを  
また更にいろこゑかはり  
何となくさびしさそへて  
かきならすことぢの上に  
春さればのどかになりて  
暑き日のかけにむかへば  
みな人のたちよるかけと  
いつしかも月日うつれば  
秋のくるときはのかけも  
おろしくる松風はやみ  
聲おちくなり

野分

はいりには真秋うゑおほし  
をみなへし眞葛にまじへ  
みぎりには撫子さかせ  
あさがほを露にきほはせ

納涼

水無月のあつきさかりを  
山川のながるゝあたり  
をのへには夕日かけろひ  
みづ枝さす森の青葉も  
山松のときはのかけも  
いひしごとと思ひしごとく

夏夜

照る月は霜かともがひ  
堪へざりしひるの暑さも  
しばしとてうちまどろめば  
茂りたる山のあなたの  
行きかへりかへり遊びて  
あかつきのしこの夜鳥  
おばしまに寄りそふまゝに  
みし夢のそのおもかけは

避けぬべきくまもありやと  
とめ來つゝ見つゝしをれば  
木末には日ぐらし鳴きて  
見るまゝに吹く風そよぎ  
いつしかと涼しさそひて  
あつさ忘れぬ

吹く風は秋おもほえて  
うちつけに忘るゝまゝに  
たましひはあくがれけらし  
清水わくすずしきかけを  
なつかしみわが居る時に  
啼きたちてねぶりさませば  
宵ながらありしなりけり  
月にのこりて

夕虫

はたすゝき尾花さかふき  
朝となくゆふべとわかす  
このごろの秋の思ひも  
ぬば玉のひと夜のあらし  
しめゆひしそこともわかす  
かりほさへ跡なくなりぬ  
わがそのは草むらしけみ  
さまざまの虫はなけども  
虫えらび品さだめむと  
夕つゆのおくもいとほ  
すず虫はまへにふりいで  
くつわ虫こゑするかたに  
名もしらぬ虫さへありて  
夕日かけにはかにくれて  
いとどしくなく音きほひて  
虫ならぬものこそなけれ

聞鹿

をぐら山をのへはるかに

かりそめにつくれる菴に  
八千草にこゝろうつして  
しまらくは慰みぬるを  
いかさまに吹きすさびけむ  
つくるひし籬もふして  
時のそのまに

明くるより暮れ渡るまで  
同じくは野べにあざりて  
夕ぎりのはれまも待たず  
思ふどちわけつゝ來れば  
まつ虫はしりへになきぬ  
きりぎりすそれもなきいで  
いづれとも定めあへぬに  
夕月のかげほのめけば  
野べといふ野邊のことごと  
木々も草葉も

まち待ちし峰のさをしか



よひよひに間近くなりて  
谷一重へだつるばかり  
このごろのきよき月夜に  
眞萩さくふもとの野邊の  
うちむれてき鳴きとよもす

反歌

我がいほのうしろの山の  
いつしかとなれるをきけば  
吹く風もやゝはだ寒み  
なつかしき花つまとひに  
こゑにぞあるらし

月前草花

もゝ草の匂へるころの  
思ふどちうまうちなべて  
かり暮らし見つゝあるまに  
行くさきも見えぬ夕やみ  
いつしかと月いでそめて  
山といふ山のくまぐま  
八千草の露のいろいろ  
また更にはれそめつ

反歌

なく虫のみだるゝ野邊を  
虫の音も花もあかねば  
野も山もやゝくれそひて  
來し跡もわかぬ木の間に  
やゝやゝに上るをみれば  
野邊といふ野邊の遠近  
鳴きいづる虫のこゑこゑ  
このもかのものに

都月

遊 び あ か さ む  
待 雁

あまのはら月おしてりて  
おほかたの秋のあはれも  
悲しさもやるかたなきを  
慰めて寐なましものを  
常世をやおそく出でけむ  
よひよひに月にむかひて

古渡霧

わたたり守船まうけねば  
をちこちの人のゆきかひ  
川風のあるゝまにまに  
石なみのあともものこらず  
さらでしもわかぬ渡り瀬  
いとどしく此方彼方を

擣衣

うちかはす槌のひびきは  
こゝもとに絶えだえなれど

むさし野の野末のさとに  
月かけもかくやありけむ  
見かへれば軒をつづけて  
つくりなすその高殿に  
宿ごとにとまるとるをしつゝ  
糸たけの聲すみのほり  
さやけさは今こそまさめ  
照る月はひとつなれども  
よるべかるらし

反歌

家居してめでけむ秋の  
見渡せばいらかをならべ  
みかきなす玉のうてなに  
家ごとにをすかけわたし  
望の夜の月迎ふれば  
盃のかけにも見えて  
わが知らぬ昔はあれど  
所から見る人からに

河月

漕き出づる船のまにまに  
棹とれば影はうかびて  
よるとしもおもほへぬ迄  
見えまがふ月おもしろし  
上つせは瀬の音はけし  
中つ瀬の中の洲さきの  
吹く風のきよきあたりを

わがやどの木末にひびき  
流れくる波にぞたぐふ  
照る月のかけや身にしむ  
ころもうつ音こそまされ

菊始開

ひと年は花のとぢめと  
植ゑたりしまがきの菊を  
ゆふべには水をそそぎて  
照る日には日影をよきて  
おほしける其かひあれや  
あさ月夜あけ行く空に  
菊のはな咲きそめけりな

観菊宴

手もすまに心をこめて  
あしたには露うちはらひ  
風ふけばしもとゆひそへ  
おのが子をおほする如く  
このごろの秋のあさけの  
おく霜のいろかとばかり  
庭もましろに



かざしをりのみて遊べば  
さかつきにこほれて酔を

久米幹文の家なる菊の花を見て

菊のはな大きちひさき  
おのづから定まりたれど  
こちよく延びまさりて  
うるはしく咲き出にけり  
あつき日のかけも覆はず  
草むらに生ひまじりつゝ  
その葉も枯れたちぬべし  
人の子をおほするみちも  
すぐれたる花こそ咲かめ  
春秋にあしたゆふべに  
色も香もよに稀らなる  
めで は や せ 人

反歌

色も香もよに稀なりときくの花人のたくみにかざられにけり

初紅葉

瀧の川うへなる畑に

たえだえに靡く薄霧

めづらしき紅葉のかげの

あるが故にそ

反歌

名にたてる往來の岡やこれならむ紅葉分け行く人の絶えぬは

暮秋

桐の葉のおちそめしより  
はたすゝき尾花にまじり  
鳴き出つる蟲の音きほひ  
さを鹿のこゑすさまじく  
もみぢ葉のほへる山も  
秋風もかざりと吹けば  
をしくもあるかも

おく露のいろもきらめき  
萩が花にほふまがきに  
木の間もる月のひかりも  
雁がねの羽風身にしみ  
神無月まだきしぐれて  
いまさらに残る日かすの

このあさけ朝日の影に  
川かみの岸根のかへで  
いざ子ども馬にくらおけ  
玉がきの木々も見がてら  
日ぐらしの森の木かけの  
見てをかへらむ

又一首

よそにのみ思ひすててし  
けさ見ればはつ紅葉せり  
家人もまだしらぬまに  
ねたしとて青きをなげく

岡紅葉

見わたしの岡の松ばら  
うすく濃く枝さしかはし  
をちこちの木末はあれど  
かのもより越えくる人も  
立ちとまり蔭にいこひて  
そのおち葉袖にも入れて  
終日に越えもえやらす

めづらしく匂ふを見れば  
木末かも紅葉しにけむ  
神のますいなりの山の  
飛鳥山ふもとにつづく  
はつもみぢ人しらぬまに

わがやどの軒端のかへで  
さし並みのとなりの家の  
いざさらば折りて送らむ  
人のそのため

その松の木のみ木の間  
秋くれば木々こそほへ  
四方山のしきはあれど  
このもより分け行く人も  
その枝をかざしにも折り  
岡ぞひの道のあたりを  
ふりはへて來てもめづるは



冬歌

初冬嵐

わがやどの軒端のばせを  
あけたてば巻き葉を詠め  
うつくしみありしばせを葉  
窓たたくものすさましく  
夜嵐のわたるをきけば  
しみたてる陰さへあらし  
ぬば玉のひと夜のほどに  
吹く風にごろくくだくる

幽栖冬來

山ふかくわれはすまねど  
神無月ふゆさりくれば  
さそひくる嵐につれて  
朝ごとにひろひもあへず  
おちつもあり散り重りて  
山ふかきやどおもほえて  
人めさへまれになり行く

庭もせにうゑおほしつづ  
くれゆけばしら露おかせ  
此ゆふみだれにみだれ  
ひるがへる音身にしみて  
一葉だにあすはのこらじ  
まがきとも庭ともわかず  
いかばかり荒れはてなむと  
夜半にもあるかな

里とほくわれはをらねど  
よも山の木末吹きおろし  
庭もせに散りしくおち葉  
夕ごとにはらひもあへず  
路だにもあらずなれ、ば  
里とほき家おもほえて  
ころのあはれさ

山家初冬

いつのまに冬は來ぬらむ  
きのふかも匂ひいろづき  
神無月しぐれしぐれて  
その木末まばらになれば  
吹く風のおともかはりて  
草も木もしほれわたりぬ  
山里のいつはあれども  
今はなければ

反歌

山里はおち葉が上におとたて、しぐれよりほか訪ふ人もなし

夕時雨

かの山の夕日かがやき  
一すぢの中のやまみち  
時の間に雲こそきほへ  
その雲をとほくはこびて  
をちこちの山をもさへず  
ひたくだりくだる時雨の

反歌

この峰のみぢ葉てりて  
にはかにも草木なびかし  
その雲をな、めにおろし  
はけしくも吹きくる風に  
見渡しの木々もかくさず  
かたおろしなる

夕日てる山のみぢは見えながら時雨をおろす山のした風

田家時雨

かり庵に引板うちへ  
おきあかしもりあかしけむ  
昨日けふや、刈りはて、  
つゆ霜もほさぬその間に  
はや はこびきぬ

反歌

神無月時雨の雲はこべどもまだかけあへぬ小田のいなばた

落葉

庭もせに散りしくおち葉  
夕ごとにひろふとすれど  
吹きはらひ拂ふあらしに  
いつしかと雪よりさきに

又一首

うなる子が手毎に持ちて  
花かごにひろひし紅葉  
そめつくすはじにぬるでに  
青きをもおきはなけかず

朝ごとにきよむとすれど  
ふりに降る時雨のあめに  
落ちつもあり散り重りて  
道は うも れぬ

歸りくるその山づと、  
いろいろの錦かさねて  
色うすきは、そもまじへ  
あつめこしよもの落葉に

山々の秋のかぎり  
目の前におもかけうかぶ

山家落葉

まれまれに見えし人めも  
染めわたす峰に木末に  
初霜やいたくおきけむ  
つくろひし庭もまがきも  
時のまにうつりかはりて  
川みればあゆとる淵も  
おちつもある紅葉みがれて  
かりびとも樵夫もたえぬ  
わが山のそのふゆごもり  
とぢはてにけり

反歌

夜嵐の吹きしく跡にかたよりてしばし道ある山のみぢ葉  
下ぬかる山の落葉は朝霜のきえてのちもふみなつみつ、

氷

さえさえし軒の松かぜ  
すきまもあるありあけ月夜

さ夜深くをさまりはて、  
あきらけくのこる朝けに



うなる子がしもとを持ちて  
おとなひの寒けくもあるか

寒夜月

すさまじき冬のながめに  
このごろの寒きよなよな  
窓の戸をおしあけみれば  
夜風もさゆるまにまに  
たかねより光あらはれ  
谷々のくまさへおちず  
見し秋のそらとも見えす  
さやけさの限りにもあるか

冬鳥

あづさゆみ春なく鳥の  
さつき待つ山ほととぎす  
秋の夜の月にむかひて  
春秋のそのをりをりに  
神無月ふゆにいたれば  
川風のわたるよどみに  
波たてばむれてかたより

庭にたちたくこぼりの  
身にもこたへて

みな人のよそに見し月  
てりまさる影やいかにと  
大空のほしきらめきて  
しろたへにふりつむ雪の  
山々のみねといふみね  
あめつちにかがやく影は  
よつの時いつはあれども  
あはれまさりて

うぐひすの時すぎぬれば  
ほのかなる初音をもらし  
かりがねの遠くきたるも  
いづれかも心とまらぬ  
山水のきしねあせゆき  
何處よりつどひ來つらむ  
風やめば底にもかづき

ふる雪のおもひすごさず  
わが宿をおどろかしくる

禁中雪

九重の玉しくにはを  
ときはなる松のこすゑも  
しま山にあそべる鶴の  
しるたへに色かはるまで  
白がねの世となりぬるを  
しらぬひの其きぬがさに  
いでたすみそらを見れば  
貴くもあるか

市街雪

たひらけき市のちまたも  
になひ行く重荷もたわに  
並べおきたなもむしろも  
たてぬきに行きかふ大路  
いざけふはめならべずして

反歌

あき物もけさはうもれて雪ひとり處をうると見ゆる市かな

ことの葉の花さへそへて  
ふみのうれしさ

今朝みれば雪ふりつみて  
そにどりの青きいろなく  
いただきの其くれなるも  
うちわたすみかきのめぐり  
神ながらめでたまはむと  
しら糸のつなさしはへて  
しらたまの君がよそひの

けさ見れば雪にうもれぬ  
しろたへの山をつみそへ  
玉ひかるあきものなして  
いとどしく處せければ  
ものやかはまし

つまをこひ友をしたひて  
へだてなくおのがまにまに  
常よりも身にしみてこそ

反歌

冬池

うかびつる蓮のひろ葉も  
今日見れば水のおちこち  
よる波の色のさむけく  
みし花のかけ残らねば  
つゝみ路の柳のかげは  
これも又あはれいくかぞ  
池水にのこるものとは  
風ぞさやがむ

初雪

かきくらすしぐれの雲と  
みそらより雪ちりそめて  
しろたへになれる夕ぐれ  
めがれせずわがをる時に

風前雪

風こそはゆきをもさそへ  
山ならずくもおほはせ  
雪こそはあやしきものよ  
神無月しぐれもすぎて  
このごろのさびしき色を  
風こそは春のけしきを

雪中早梅

雪きえばいづこのさとも  
あはれてふ人のことの葉  
人しれぬころはけみて  
あを柳もいまだなびかぬ  
さえこほる雪のうちより

冬神祇

神無月ふゆさりくれば  
道もせになべてちりしき  
いちじろく霜おきまがひ  
夕ごりもとけぬあたり  
こがらしに枝もたわます

をしたかべ千鳥も鳩も  
よびかはす聲のあはれは  
かなしかりけり

いつのまに枯れはてぬらむ  
折れ残るくきのみたちて  
あそびくる魚だに見えず  
にほひかも跡なくうせて  
水鳥のすみかとなりぬ  
あつ氷とぢしはてなば  
枯れたてるあしの葉末に

おほよそに思ひすてたる  
木末にもや、見ゆばかり  
おもほえぬ頃のながめと  
ときしもあれ人のたよりと

雪こそはかぜのまにまに  
時ならず花をも散らせ  
風こそはくすしきものよ  
ふゆ枯の野山おしなべ  
白妙におもかけかへて  
はこび來にけれ

花さかぬうめこそなけれ  
あまたにもやるらむものと  
春かぜの吹くをもまたす  
わが園のかきねのあたり  
香に匂ひけり

玉がきのこすゑのみぢ  
かたそぎの千木のあたりも  
あさ風もさむきこのごろ  
神葉のときはのかげは  
時雨にもいろうつろはず



常よりもいよいよはえて  
ちはやぶる神のこゝろの  
とことにはにあすることなく  
よろづ代に御代守ります

廣前にしけるを見れば  
世と共にかはることなく  
神代よりいまのうつゝに  
かけにぞあるらし

冬祝

神無月しぐれもすぎて  
野も山もふゆがれわたり  
ふか緑いやさかばえに  
色こそはあらはれにけり  
大君の御代とこしへに  
たち榮えさかえいまして  
とし月にあらたまるとも  
まもります神のまにま  
山おろしのはけしき時も  
天地のそこひのうらに

さゝの葉のさやぐしも朝  
もの皆のうつろふころを  
しみたてる松のときはの  
その松のときはにあえて  
仕へますものゝつかさも  
わたのほか四方の夷は  
日の本のやまとの國は  
霜雪のうつり行くよも  
常磐木のかはらぬみさを  
根ざしかためよ

歳暮歌

年欲暮

あらたまの年たちしより  
まつぶさにかぞへし月日  
今ははやのこりすくなく  
その曆まきかへしつゝ  
花もみぢ見しはきのふぞ  
あづさ弓いる矢のごとく  
夢の間にすぎしおもへば  
春秋もしかぞあるらむ  
かねてしも知らるゝ事を  
歎くはかなさ

および折り一日ふた日と  
三百まり六十日のごよみ  
暮れはつる日数となりぬ  
春秋をおもひいづれば  
月ゆきもあはれこのごろ  
行く水のながるゝごとく  
たちかへりまた來む年の  
人の世はかくありけりと  
年ごとにくるゝにつけて  
おもふどち酒のみかはし  
ほとゝぎす初音きかむと  
秋の夜の月見あそぶと  
神無月しぐれしぐれて  
いま更におもひ出づれば

おしこめて一日のごとし  
四の時めぐりめぐりて  
その年のつもるまにまに  
かくしつゝなほつれなくも  
いと なみ や せむ

かぞふればただ夢の間ぞ  
今日ははや年さへくれぬ  
老をさへかさぬるこの身  
あづさ弓はるのまうけの

除夜

うめさくらにほへる山に  
紅葉散り雪ふりしける  
かたときの夢のその間ぞ  
ぬばたまの一夜のほどに  
立ちかはりへにける世々も  
いま更にをしむもはかな  
しばしとてのむさかつきの  
いふ事もいまだつきぬに  
おどろかしける

卯の花のさかりすぎゆき  
をりをりのながめ思へば  
跡もなくたださめさめて  
あたらしき年のはじめと  
數ふればすくなくもあらず  
よしさらば心のどかに  
數さへもいまだまさらず  
いとはやも八聲のとりぞ

反歌

鳴く鶏の聲のうちだにしばしとて年のこたなと思ふ夜半かな



戀歌

春戀

いつはあれど何處はあれど  
あさ緑おほろおほろと  
ほころぶる軒端の梅も  
そとなくほふ夕べは  
待つ人もこぬものゆゑに  
いねられず小夜更るまで

又一首

わがやどの梅こそにはほへ  
わが思ふうつくし君に  
思ひつゝ待ちをるときに  
この夜半の月のけしきを  
面かけは空にうかべど  
朧夜のおほつかなきを  
いはばしのまぢかき里も  
人ごとによりてと告ぐる

夏戀

目に浮び身をぞはなれぬ  
なほや待つべき

別戀

夕づくよ見えをめしより  
うち對ひありとはすれど  
むつ言もまだつきなくに  
きぬぎぬになれる思へば  
かたらはむものと思ひし  
しのゝめの道のあさぎり  
をもほえぬかも

寄筆戀

中絶えていくよになりぬ  
玉つさもかよはずなりて  
かわくひまあらぬ涙を  
とる筆のつかのあひだも  
末つひに我がいのち毛も

寄墨戀

鳥羽にかきたる文字も  
いかにしてわが書く文の

春がすみたなびきこめて  
山の端も見えみ見えずみ  
春かぜに香を吹きおくり  
言傳もありとはなしに  
うちつけに心うごきて  
おきあかしつゝ

その梅の香をなつかしみ  
並べても見てまじものと  
たまづさの君がことづて  
わきもこやいかに見るらむ  
思ふまにいでもやられず  
いかばかりかこちやすらむ  
春がすみとほくへだつる  
きみが玉づさ

いま更にいかがはすべき

有明のかけになるまで  
思ふことまだなぐさめず  
啼く鳥のこゑうちしきり  
秋の夜のもゝ夜のながく  
あらましのことも空しく  
たちわかれ行くべき空も

思ふこといひもおくらず  
手ならしゝ硯のうみの  
かきながす言の葉しらに  
なけくそら安くしあらねば  
つきむとすらむ

讀みつべき由ありてふを  
文字の色きえて見ゆらむ

さゝの葉のさやぐ霜夜に  
かへり路のをかべの松の  
さえさえしその夜思へば  
てる月は霜にまがはず  
わかれ行くわれを送ると  
から衣うらめづらしな  
松の木かけに

冬戀

窓の戸にこがらしさわぎ  
ちざりてし君きまさずは  
燈火のもとによりそひ  
今さらになにのことづて  
晴れま待つとか

待戀

月夜には門にいでたち  
立ちても見居ても待ちつゝ  
月夜には月もかたぶき  
それながら來まさぬ我兄  
思はじとおもへばいと

玉づさのかへりもこぬは  
見る人のかきにごりたる

寄硯戀

大うみも沖ひむときは  
かきながす硯のうみに  
のべやらむよしのなれば  
わがこふる心のそこひ  
時ぞしらぬ

妹とわがいねたるころの  
木の間より月あらはれて  
面かけにうかぶものから  
吹く風は雪もさそはず  
この朝け妹がきせてし  
ほとゝぎす初聲すなり

かりがねも寒くなくなべ  
いかにしてあらまし物と  
歎きつゝわがをる夜しも  
むら時雨しぐるゝそらの

雨夜には空をながめて  
よひよひにわがおもふ君  
雨夜には雨さへはれて  
かくばかりつれなき物を  
忘れむとおもへばまして

する墨のほひやうすき  
心やあるらむ

水底も知らるとこそいへ  
思ふことおもふまにまに  
水こそはひる世もあらめ  
あらはして妹に見すべき



雑歌

夕陽

西まどに文づくゑをすゑ  
百に千にかはりかはりて  
夕づく日さすやをかべの  
あかぬまに光かくれぬ  
しばしだに影とめましを  
今にむかしに

反歌

燈火をつぎても書はよまめども今日の入日の惜くもあるかな

雷

神こそはものをもくだけ  
こしきもてむせるが如き  
蟲こそは田にわき出づれ  
除くべきよしもあらぬを  
いなづまの光きらめき  
夕立のあらひつくして  
なる神のあやにかしこき

文机にひもとくふみは  
昨日も見今日も見れども  
松の葉のかけうつりきて  
あはれその夕日のかげよ  
かぞふれば讀む書おほし

神こそはものをもひしけ  
この頃のてれるさかりに  
その蟲のありのことごと  
天のはらふみとどろかし  
そこなへるその稻蟲を  
跡もなくなせるを見れば  
いさをなるかも

村夜

ぬば玉の夜のふけゆけば  
里の子のゆき來も絶えぬ  
山まつの木の間あかりて  
吹く風も身にむ夜半を  
きたまどのひまもる火影  
夜もすがらふみよむ聲の  
あかつきの鐘

山靜如太古

あけまきをいざなひたて、  
ふみ巻をかたへにおきて  
山びとのつくれる酒を  
思ふことあらぬこの身は  
大船のこゝろゆたかに  
移りゆく世もおもほえず  
大なむちすくな御かみの  
わたのほか常世のしまも  
山家友多  
村長はしもとをおきて

啼く鳥のこゑもをさまり  
村つづきつづく岡べの  
照る月のひかりほのめき  
竹むらのおくの家居の  
絶えだえにかすかに見えて  
淋しくものこりてひびく

かの山のましば刈りつみ  
この岡の鶴にともなひ  
山びと、ともにのみつ、  
明くるより暮れ渡るまで  
春の日のどけくしあれば  
人事のしけきも知らず  
古へにありきといふなる  
かくこそあるらし  
あけくれに歌よみはたり

柴人はたきぎにそへて  
斧の柄をくたす山びと  
終日にたちかはりつ、  
もろともに心もおかず  
賑はしくめづらしけれど  
うち見るもわづらはしきを  
出で入りの送りむかへも  
山すみはうれしかりけり  
徒然をいかにせましと  
そのかみのこゝろの悔も  
友のたのしさ

川

水こそはあやしかりけれ  
湧き出づる山の井こそは  
濁りつ、しばしはすまね  
かのもなる泉をあつめ  
千尋ある瀧をひゝかせ  
そのもとの姿も見えず  
おほ船に小舟つらなめ

山づとの木のみもてきぬ  
草笛をならすあけまき  
門の戸にたえぬ友がき  
みやこべのそのまれ人は  
ところせき馬にくるまに  
柴の戸のあげたてしらに  
いつとなくわすれし思へば  
淋しさをいかでくらさむ  
やまふかく思ひ入りけむ  
いま更におもひ知らるゝ

おく山の木のしたがくり  
結ぶ手のしづくにさへも  
このもなる流をさそひ  
世とともに流れながれて  
みづちすむ淵ともなれば  
その末のつどふみなどは  
わたの原八重のしほ路の

瀧

きはみまで面影うかぶ  
糸と見てよらむとすれば  
布と見てたゝむとすれば  
ひさかたの天つをとめが  
たなすゑのうづの眞玉と  
吹きちらすかさしの花と  
生ひしける木々に響きて  
玉と散り花にもまがひ  
見る人のこゝろごころに  
仰ぎ見てめでこそはやせ

故郷水

むかしわがうまれし時に  
たらちねの心ふかめて  
いはひつゝ語りましけむ  
うちつけにきのふの如し  
その井をまかけをもすて、  
來て見れば底もにごらす  
その影のしわみすがた

これの大川

糸ならで手にもよられず  
布ならでたちもぬはれず  
雲居よりこきいだすらむ  
あまつ風くものひまより  
聳えたるいはほにくだけ  
落ちたぎつ音もとゞろに  
糸とみえ布にもなりて  
四の時いつともわかす  
瀧のしらなみ

あむしけるその井の水と  
ほりし井のいは井の清水  
言の葉もおもひ出づれば  
淺かりしわがこゝろから  
年ひさになりにし清水  
汲み見れば影もかはらず  
あはれとは汝も見らむ



たへてすむ水のこゝろの

古戦場

山みれば雲ぞたなびく  
谷みれば瀬のとぞたぎつ  
とりもちしゆはずの騒ぎ  
はなちけるその矢叫びは  
今もなほありしむかしを  
ますらをの草むすかばね  
その骨のくちぬ名のみは

反歌

石碑にゑりし文字さへ昔むしていく秋風にとはれきつらむ

桑園新興

をとめらが新桑うつと  
一手にはかたみたづさへ  
この家のをとめをむなは  
このやどのあるじの翁は  
にぎたへにまことつゝまれ  
夏よりも冬あたゝかに  
新桑のあらたあらたに

はづかしきかな

その雲のはたてなびかし  
その音のつづみひびかし  
冬枯のはやしにのこり  
おろしくる風にたぐひて  
目の前に見るこゝちせり  
草むしてあとこそなけれ  
世にもとどろに

世とともに榮えいませと

蓬

さとさかり家をらなくに  
なりのその名のりをしつゝ  
明け暮れにわが見る宿の  
おひまじるよもぎの若葉  
いとどしく茂さまさりて  
吹きかよふ嵐のほかは  
はらふべき庭もうもれぬ  
うき世にも跡たえたれば  
われぞすゑたる

松

松こそはあやしかりけれ  
やどちかく濱もあらぬを  
風やめば波をさまりて  
うちつけに權のしづくの

松不改色

霜八度おけどもおけど  
松こそはとはにさかゆれ

うたふその聲

人さかりわがあらなくに  
たまかつらくる人をなみ  
さくらをのふのたち枝に  
あやめふく頃にしなければ  
ふかねども軒もかくれぬ  
しら露のおくにまかせて  
今さらたれ訪はめやと  
おのづからよもぎの關を

庭ちかく海もあらぬを  
風ふけばなみをきよらし  
木末より落ちくるつゆも  
こゝちこそすれ

松こそはいろうつろはぬ  
その松のうつろはぬごと

その松のさかゆるがごと  
かけまくもあやに畏し  
新らしき御代とたゝへて  
もの毎につひえあらため  
いにしへになかりしためし  
うつゆふの狭きこゝろに  
かしこくも言擧げすらく  
すめらぎの跡にならひて  
松が枝のみさをおとさず  
たち榮え御代しきませと  
こひのみまつる

蝸牛

なれこそはかひある身なれ  
石ずるもはしらもなく  
かたつぶりかたきその家  
世のうさも内へは入らじ  
かぜ吹きて雨はふるとも  
よにもやぶれじ

蜂

大君は御代しろしめせ  
中今のわがおほ御代は  
あたらしき御法しきまし  
よきことに従ひませば  
つぎつぎに世にいづくれば  
身におはぬ事にはあれど  
神の代のどほきもすてず  
松の葉のいろあらためず  
千よろづの國のみなかに  
あら玉のとしにつけてぞ

なれこそは安く世をふれ  
とりふけるかやもなけれど  
あけくれにとにも出でねば  
あめふりて風は吹くとも  
かたつぶりかたきその家

蜂こそは人さすてへれ  
いにしへにありける人の  
名を呼べば手にもすがりぬ  
うしなへば我にあだみぬ  
世の中はかくありけるか  
道もある世に

三の龜を夢に見て

しらかめのしつけるためし  
龜ひめのをとことならむ  
龜こそはよはひたもてれ  
その龜のよはひにあえて  
さき草の三つの川龜  
夢がたりあふやあはずや

反歌

養蠶

うらへすゑ焼くらむ龜の齡にもわれはあきみむ酒を友にて  
賤の女がやどにかふむし  
一度はかひこになりて  
飛ぶ蝶のはねひゝるまで

その蜂をとりてなつけて  
もの問へば群れても來り  
なつくべき人のこゝろも  
そこなへば我にそむきぬ  
蜂だにもならせばなるゝ

數ならぬ身にはかしこし  
老いたる身にはふさはず  
龜こそは酒このみけれ  
その酒にわれもしみなむ  
みつとしも人には云はじ  
いざこゝろみむ

ひとたびははふ蟲になり  
ふたくさにみくさに變り  
あさ夕のしづがいたつき



その蟲のねぶれるひまも  
しばしだにこゝろ安めず  
野べに生ふる柴かりもちき  
わざぞいとなき

蝙蝠

さかしらにうち羽ふれども  
あかねさす晝はかくろひ  
たまほこの道のくまわに  
あさりつゝ遊ぶころしも  
ふたふたと尾羽うちからし  
人まねのなにのこゝろぞ

鶴

仙びとの手がひにすてふ  
世の人のねがふたからも  
てらさはば街しもせまし  
なにかしの國のつかさも  
うつせみの世の人にして  
あはれその雲居をかけて

庭上鶴馴

その蟲のおきゐるときも  
にはにたつ桑つみいそぎ  
たなすゑの御調つかふる

あまとぶや鳥にもあらず  
ぬばたまのゆふべにいで  
たちつづく軒端つたひに  
うなるがしもとにふれて  
地におち身をもすつるは  
しこのかはほり

鶴にこそ乗りてあそばめ  
腰につけふくろに入れて  
もろこしにありといふなる  
得られなば得られぞせまし  
のるよしのあるらむものか  
天のつるむら

おほ宮のたましくにはの  
あそびくるあまの鶴むら  
さざ波に千代よびかはし  
枝もせによろづ代しめて  
その鶴の千とせにあえて  
松が枝のたちさかえませ  
鳴になぞへて

反歌

牛

たてまつるおのが齡にうちそへて聲もをしまぬ鶴の一むら  
あけまきのひきのまにまに  
のつかさにいたると見れば  
水をだにくみてもかはす  
おのづから心にたりて  
はな繩をはかれし知らに  
おのが名のうしとこの世を  
ひなさかるこしの國なる  
もつたふ八十の陸路を

九重のみかきのうちに  
かけうつる池のみぎはの  
生ひしける松のこすゑの  
むれるつゝなるる鶴むら  
その鶴のよろづ代までに  
御園生の池をとこよの

あしびきのやま谷こえて  
ながれ行く川におりたち  
草をだに刈りてかはねど  
つながらるゝ身をも思はず  
心ゆくありさまなるは  
知らずやあるらむ  
道のくちつぬがの蟹は  
おのが身の横さにはしり

いかにしてこゝに來にけむ  
はるばるにおくれる人の  
その蟹のあかきまことぞ  
ひむがしの御さとの市に  
いまだ見ぬ人にも見せむ  
その蟹をきりてつくりて  
高つきにたかくもりてよ  
もてはやさまし

反歌

昔見しつぬがの蟹にもつたふ八十くまさかりあふが嬉しさ  
ある人敦賀の里に名ある所を繪にかきてそ  
れにこと書をも加へし書を見せておのれに  
一言そへよと云ひければとりあへずよみて  
あたへける歌

みゆきふるこしの國へに  
山はしも立ちつづけれど  
うみ山のけしきあつめて  
今の世にたれもめつてふ  
その山の本々のこだちも

いかにして我に見えけむ  
その海のみかきこゝろぞ  
とりが啼くあづまの國の  
めづらしきそのの形を  
まだ知らぬ人にしめさむ  
ひしほすにうまらにあへよ  
いざ今日は友がきつどへ

いかにしてこゝに來にけむ  
はるばるにおくれる人の  
その蟹のあかきまことぞ  
ひむがしの御さとの市に  
いまだ見ぬ人にも見せむ  
その蟹をきりてつくりて  
高つきにたかくもりてよ  
もてはやさまし

海はしもめぐりてあれど  
あづさゆみつるがの里は  
むかしより人も云ひつぎ  
そのうみの波のすがたも  
ふく風のおとのみきゝて

いまだ見ぬ人のためにと  
つばらにもしるす言の葉  
おもしろとわれも思へば  
ことあけぞする

字

國をうみ人をたてけむ  
語りつぎ云ひつがひつゝ  
くだち行く世のことわりと  
千萬のそののことぐさ  
から國にはじめしわざと  
書き記すことしおこれば  
やゝやゝに時にあらはれ  
のどかなる心見せけり  
かきかぞふみたりの蹟も  
うつせみの世にもてはやし  
色ぞはえある

讚日本紀歌

玉こそはこの世のたから  
人みなのおもひてあれど

こまかにもかけるうつし繪  
珍らしとたれか見ざらむ  
おもふその一言そへて

神の代のそのふることも  
古へはあり來にけれど  
事しゆくなれるまにまに  
文字ならでなにか傳へむ  
この國にみつぎまつりて  
そのわざにたへなる博士  
うるはしき姿かきいで  
鳥の跡いまものこりて  
くすはしき五のふでも  
から人にまされるすみの

こがねこそうづの寶と  
天のした千よろづ國に



こがねなき國はあらめや  
しるがねも黄金もあれど  
あめつちと日月とともに  
動きなきそのことわりを  
あやまたずしるし、御史  
うづたから御寶ぬしぞ

鈴屋翁贊

君こそはあまのみはしら  
久かたのあまのぬほこの  
いや高くつきたてたまひ  
しきしまの道のしるべと  
すなほなるこゝろの底に  
國のみはしら

反歌

大八洲くにはしらと萬代につきたてけりな君がこゝろは

山水畫

山たかく雲居にそびえ  
おびにせるほそたに川の  
しみたてる樹々の木蔭に

ふもとなる入江の岸の  
あびきする舟のをちこち  
こゝもとにながれ湛へて  
おもかけに浮びにけりな  
つり人になれくるならし  
をちかへるそのさま見えて  
ゆたけくもあるか

題山水畫

おちたぎつ鳴門のうみの  
天つちもくづるゝひびき  
をち方にさやかに見えし  
その松につづくしまじま  
浦ごとにこぎ行くふねも  
やゝやゝに隠るひはてゝ  
なりにけるかな

反歌

しほくもる鳴門の海のをち方かけのみうかぶあはぢしま山

三木某が鶴の畫のかけぢ侍従の君よりたまはりたるを喜びて歌ひとつ乞ひければ

朝日かけうらうらにほふ  
その鶴の千とせにあえて  
うみの子の八十つぎつぎに  
いつくべき家のたからぞ  
こがねにも玉にもまさる

反歌

うらうらと匂ふ朝日になくたづの千歳にあえよやどのさかえも

琴

あつさ月六つおきならべ  
物の音のそのしらべこそ  
とりがなくあづま小琴の  
しかばかり尊きためし  
かみがきの御前のおそび  
このものゝあらぬはあらず  
昔よりいひつぎこしを  
つぎつぎに世にいでそめて  
みやびたるそのたぐひとて  
これも亦もてはやされぬ  
かきかぞふ三すぢの琴は

あほ空につるこそあそべ  
榮ゆべきやどにしあれば  
たぐひなきうづの寶と  
さすたけの君がめぐみと  
これのたまもの

石屋戸に弾きならしけむ  
日の本のやまと小琴  
いできにしうづのは始め  
天つちにたぐひあらめや  
すべらぎの大御うたけも  
これにます物の音なしと  
つくし琴琵琶の小琴  
から國のものにはあれば  
さきくさの中つ世ごろに  
時うつりうつりかはりて  
いまの世に人こそめづれ

茂りあふあしの葉がくれ  
よせかへる波をし見れば  
おほ海にいづるけしきも  
かづきするをしもたかべも  
いそちかき松のあたりを  
山川のみづのこゝろの

はやしほのなる音たかみ  
よもやもにしほけかをりて  
あはぢしま松のむらだち  
家ごとにたてるけぶりも  
時のまにみえみ見えみ  
あはとだに見えわかぬまで

聲きけばこゝろうきたち  
みだりなるそのしらべの  
君も臣もよしときゝたび  
たはれ女は聲うちあけて  
いつとなくとりいでるは  
かなしくもあるか

酒

酒のまぬ人をよく見れば  
むつぶべきすべこそ知らね  
酒のめばうとかるひとも  
たわらはのたはれ遊ぶも  
思ふどちふみのまとるに  
さかつきをとり出でてこそ  
うべしこそ聖といふなれ  
さかし人いざともなひて  
大まりのみてたらはして  
たのしきをへむ

遺賢在野

くちのこるたにの草木も

歌きけば身もあくがれぬ  
いかさまに時にあひてか  
わぎをぎはわぎ歌あはせ  
月花にあしたのふべに  
くだち行く世のさまみえて

うるはしくかしこくはあれど  
なつかしきかたこそなけれ  
目の前にしたしくなりて  
うちつけに樂しからずや  
月花のうへかたらふも  
いひしらぬ心そへけれ  
うべしかもさかしといふらむ  
ひとふたのつきはあれども  
あめつちに心はやらむ

夏くればはたるとなりて



世の人にひかり見ゆてふ  
いはふちに釣するわれは  
かけ橋をふみもいでねば  
谷の戸のとざせるまゝに  
くちや はてなむ

捨子

富人のいへの子どもは  
うま人のいへのつまらは  
うつせみの世は同じきを  
はぐくまむ袖だにあらす  
あしたには寒さにこそえ  
よしやよしおやの心と  
拾はれむ身としなりなば  
にはたつみ流るゝなみだ  
いだき行く物ともしらす  
すべもすべなさ

妓

うかれてもあらまじものを  
あひも見ぬ人にたぐひて

あけくれに水をともにて  
知る人のきてだに訪はず  
世の中のまじはり知らず  
雲きりにひかりつゝみて

きぬわたにあくとこそいへ  
あまたにも子をおほすてふ  
かくばかり悲しきものか  
ひたすべきおももなく  
夕べには饑にさけびぬ  
たまほこの大路にすてゝ  
なかなかに安からまじと  
おちしひのしひておさへて  
笑みまくるちごの面わの

たはれてもあらまじものを  
よひよひに枕かはせば

世の中のうけくつらけく  
なけくその心さきだち  
何しかもうかれあそぼむ  
うたてこのをぞのたはれを  
つまとこそなれ

詠史

すがの根の長きなが夜の  
燈火をか、けつくして  
巻きかへしよみてあぢはへ  
いさをしくただしき臣の  
たまきはる身をも思はで  
あをによしならの都に  
あまつたふひめおほ君は  
春花のめでのさかりに  
家出せしその髪長を  
大臣のくらるをさづけ  
かけまくもあやに畏こき  
はてはては譲らむものと  
みかたとへにはかりし時に

われにます人はあらじと  
思ふそのこゝろもゆれば  
何しかもたはれくるはむ  
なかなかに悲しさそふる

ひさ方のあまのたりよに  
いにしへの書の紐とき  
くりかへし讀みて思へば  
うつせみの世のことわりと  
つくしけむよぞ忍ばるゝ  
天のしたをさめたまひし  
君のまにおもほしけらし  
秋山のいろなるこゝろ  
みかたとへに立ちまじらせて  
おほ君の名をさへたびて  
高御くらあまつ日つぎを  
御こゝろをさだめたまひ  
廣幡の八幡のかみの

みさとしをうけたまはむと  
臣はしもおほくあれども  
はるばるに宇佐の宮居に  
大君のみことかしこみ  
大神もかたちあらはし  
ひさかたの天のひつぎは  
あめ地のいやとほながに  
神の代にことさだまりて  
しづたまき賤しきやつこ  
いかでかは位ふむべき  
神ながらのりたまひけり  
歸り來てきこえまつれば  
君をしもあざむくものと  
髪長はいたくいかりて  
ほとほとに身も殺されぬ  
恙なくいのちも死なず  
さすらへてありけるほどに  
きみおみの正しきみちも  
あはれその君いまさずば

人はしもこゝらあれども  
清麻呂のわけのみことを  
御使にまたしたまへり  
まるいたりのり申せば  
大御ことのらしたまはく  
あまてらす神のみするの  
動きなくしらすむものと  
君臣のみちはたてるを  
いかなればことあけすらむ  
くなたふれはらひすてよと  
大御言つゝみかくさず  
大神のみことかこちて  
人をしもいつはるものと  
目の前にたけびのゝしり  
あめつちの神のまもりと  
ながらへていましゝほどに  
御代かはりこと移ろひて  
いちじろく世にあらはれぬ  
かみながや心は得てむ

くなたふれ思ひやとけむ  
世とともに守りましけむ  
萬代の臣

衣通姫

をか谷にてりかがやきし  
うつせみの人の身にして  
さくら花さける井への  
花のごと笑めるにほひに  
立ちならびめでいましける  
すべなしとうべも後の

武内宿禰

としひさにつかふる臣の  
八十歳をすぐるはあれど  
六嗣の御代をかさねて  
ただひとり君ぞいませる  
うべしこそ世の遠人と  
生みの子の八十つぎつぎも  
天のした千よろづ國に  
たぐひなき臣のいますも

いさをしく正しきみちを  
君こそは千とせのかがみ

神の代のためしは知らず  
みそ通し照れるひかりを  
うつくしき影によりそひ  
花のごとかをるよそひに  
おほ君の御こゝろ思へば  
ねたませりけむ

みかどへにまめなる臣の  
百歳にみてるはあれど  
三百歳つかへまつるは  
うべしかそ世のなが人  
君も臣もたゝへましけめ  
うつせみの代々に榮えて  
たぐひだにあらぬ朝廷に  
臈けのことにしあらぬを



わたのほか四方のくに人  
皇神のいつくしくには  
思ひ知らなむ

源親房卿

天の下おほかるくに  
とほどほしひたちの國に  
あだ守る城の上にたちて  
くに人のそむけるともに  
ひとすぢに訓へさとせる  
今もなほかたりつたへて  
みなの川ありて行く水  
君がその名ぞ

文貞公

おもほえぬひえの山かせ  
あらぬその姿は見えぬ  
さゝなみの志賀の浦わに  
たますだれ動きそめては  
大御輿あとふみもとめ  
時をしぞおもふ

さかしらの言擧やみて  
ことなりとこればかりにも

あづま路の道のはてなる  
御軍をひきるいざなひ  
大きみのみのりしきまし  
すみなはの正しきみちを  
をちをちのそのの文ども  
筑波ねのたかきいさをは  
世と共に絶ゆべくもあらぬ

にはかにも吹きし迷へば  
人しれぬこゝろはもれぬ  
よる波のよせしこゝろも  
今さらにせむすべなしと  
かさぎ山さしてゆきけむ

反歌

班婕妤

さかしかる君の御代には  
あけたてばかたはらさけず  
いれひもの同じこゝろに  
花とりのいろねにおほれ  
手弱女とたぐひありかば  
小車のひかれやせむと  
おしかくし諫めしことば  
人ぞいふなる

詠征清軍歌

ますらをのつねのことあけ  
たれも皆おもひたけべど  
劔太刀さやにをさまり  
うつせみの世はありへしを  
もろこしのからのこきしが  
すめらべにいむかひまつり  
それをしもうちきためよと

さかしかる臣とたぐひて  
暮れゆけばみもとはなたす  
世を治めありと聞きしを  
たきものゝかをりにめで  
後の世のながきためしに  
から國のさかしをとめが  
今もなほふみにのこして

水に入り火にも入らむと  
たち向ふあだしなければ  
はたの手も風になびかす  
ありありて時のゆけれや  
おほけなき心もちて  
みかどべにるやなきわざす  
海陸のそのみいくさに

大君のおほせたまへば  
わたつみの海にくぬがに  
立ちむかふあだの軍は  
くもりよのまどひさはぎて  
たむかはむ空だにあらず  
城のへにはまもりは捨てぬ  
今こそはたつべきときと  
日の御旗風になびけて  
をこゝろを四方の國べに  
こゝろたらひに

治彦が豫備見習士官に任せられる時しも

征清のことありければ軍刀にそへて送りけ

る長歌並短歌

老いたるわが身にしあれば  
國のため身をばすつとも  
あさゆふに歎きしものを  
汝こそはわれにかはりて  
國のためいのちはすてよ  
ちゝのみの父なおもひそ

君のためいのちすつとも  
よしやそのかひはあらじと  
うれしきや我が子治彦  
君のためその身はすてよ  
大君のみことにしあらば  
はゝそばの母なおもひそ

つるぎ太刀とぎし焼刃に

短歌

遊山催興

こずゑには鳥がねとよみ  
しづかなる松の木かけに  
思ふどちおり居てみれば  
みやきひく袖のゆきゝも  
おもしろみ心のどけみ  
こむ秋のみみぢもいはで

反歌

思ひこし一重も山は越えぬまにこの日くらしして遊びつるかな

旅泊

舟出していく日になりぬ  
風あらく波さへゆすり  
鳴かけにふながかりして  
しら雲にこゝろはつきぬ  
おとつれもいつせしまゝぞ  
立ちかへれども

をとつ日も昨日もけふも  
漕ぎいでむにはしなれば  
しら浪にむねはくだけぬ  
ふる郷はそらのいつくぞ  
この思ふこゝろはゆきて



反歌

行き歸る心は波にさはらねどこぎ出でぬべきふなにはぞなき

夢中旅

あしびきの山川わたり 雲居までそびえしたかね  
時の間に登ると見れば わたつみの海路にいでて  
玉もかるあまの家ちかく よる波に裳のすそぬれぬ  
ふる郷のあともしのばす 行くさきの空もおもはで  
風雲にたぐひあそぶは いつのまに世をや離れし  
いつしかも身をやすてけむ 花みれば花にたはぶれ  
月てれば月にむかひて 歌おもひことをおもひ  
ゆくりなく友にもあひみ おもはぬに酒にも酔ひみ  
おもしろとわがをる時に つま子らが聲ぞほのめく  
朝日かけたかくのほりぬ あさ飯のときすぎぬるを  
いつ迄とあさいはすらむ いざ子ども呼び起しねと  
おどろかす枕のうへに 山おろしも波のひびきも  
なほぞ残れる

反歌

椎の葉にもりにし飯のかをりさへ残れる夢はけにぞあやしき

越信濃御坂時作歌並反歌

はるばるにわけ越えくれて 時のまもいそぐたび路を  
こまつるぎ和田の手向に 千引石さやれるなして  
あづさ弓いむかふいくさ それをだに拂ひもあへず  
いたやぐしいたくおはして たまきはる命すてけむ  
そのきみらはも

芳野にて 後醍醐天皇の御陵を拜みまつり

し時の心を思ひ出でよめる歌

かけまくも悲しかりけり 亂れ世のそのものふが  
あぢきなく思ひまつりて あらびにしそのしわざを  
神ながらかしこみまして 天のした多かる國に  
み芳野のこのやまざとを かりそみの都となして  
しきませるそれだにあるを 後つひに歸りまさすて  
この山にかくれましけむ 御心やいかにかありし  
しづたまきいやしき我も そのかみを思ひまつりて  
ふしをがむみはかの前に なみだこほれぬ

又一首

いはまくも悲しかりけり 中つ世のそのみだれ世に  
あめのした治めたまふと みよしのこのやま里に  
はるばるに御輿とどめて 宮ばしらふとしきませる

倭武みこのみことの 馬とどめなつみましけむ  
ちはやぶる神のみさかは 小木曾山ひらけし世より  
や、や、に跡たえはて、 山水のある、たびたび  
川そひのみちはくえ行き 山もせに茅萱はしけり  
渡しつるかけ橋たえて きたちけむしかとりなめし  
枝ながら大樹はふしぬ ひるかみの名のみ残りて  
この皇子のそのふることも 鳥ならぬわが身にしあれば  
そことだに知る人もなし 山たにをうち越え行けば  
空よりもかけるよしなみ かり杖にあしさへきれて  
小笹にはころもでやれぬ かしこくもあるか  
うべもけに神の御坂は

反歌

跡もなき神の御坂は古へのよのふることぞ知るべかりける

過義徒墳墓弔戦死歌

ことさへぐよもの夷が 神國をうかがふみつ、  
やはらずてえしもあらねば あけくれにそこをうれたみ  
ますらをの心もちて たまあへるその人ども  
たらちねの親をもわかれ 若くさのつまをもおきて  
大君のみことうけむと みつぐりの中の山道

かきかぞふ三代の帝が その御蹟いまものこして  
さと人はかたりつぎけり われもまたいにしへ忍び  
大御かけあふぎまつると この山にたづねきたりて  
いとどしく袖ぬらしけり 旅ごろもかけておもふは  
かしこけれども

讀關城遺跡弔關宗祐靈歌

あつま路のひたちのくに ころも手のまかへ縣の  
關の城のおさへにたちて おほきみのとほの御楯と  
まこともてつかへし君は 北畠おみのみこと、  
むらきもの心あはせて まつろはぬ國をことむけ  
したがへる民をもやはし あめつちの神ことよせて  
春花のさかえむ御代を 祈りつ、ありこしこ、ろ  
あづさゆみ末もとほらず つるぎ大刀つかも碎けて  
あだのため身さへ亡びぬ よしの山よしやその世に  
残しけむ恨はあらめど ますらをのたてしいさをは  
いまの世に入こそかたれ 後の世に名こそつたへめ  
いさこともしるくしめたて 關の城のそのあとどころ  
人のしるべく

白河城懷古



あふくまの霧のはれまに  
山の名の朝日のごとく  
あだ守るおさへの城戸に  
しら河のおとにきこえて  
ゆみはずの音もきこえず  
春ごとにのこるものとは  
ふたももの歳をかさねて  
(相傳城趾有二櫻樹。丹羽長重所植。)

難波にまかりける時

豊國のかみのみかどの  
なにはなるこれの大城に  
みがきなす玉のうてなに  
下やすくたのしくまして  
あしびきの山の尾の上の  
あらかじめ思ひたまひて  
うつせみは常なきものか  
時のまにうつろひかはり  
とのぬちに仕へしひと  
大御門まもりしひと

朝日山あらはれそめぬ  
てり渡り四方をなびけて  
ありたし治めしことは  
今もなほかたりはつけど  
旗の手のなびきもやみて  
ものふのうゑけむ櫻  
香にほひつ

あはれそのおはせし世には  
萬代におほましまして  
ゑがきなす鴛鴦の襖に  
うみの子のいやつぎつぎに  
松が枝のさかえまさむと  
つくりけむこの大殿よ  
あづさゆみ春咲くはなの  
世の中のおかずなれ、ば  
いつしかと仕へずなりぬ  
いつしかと守らずなりて

今のごとなれるを見れば  
ひなさかるとほき國べに  
思ひつ、ありこしわれも  
うちつけにとどめもかぬる

明治六年四月二十日越前國におもむかむと  
する時よめる長歌

大きみのみことかしこみ  
宮ばしらふとしきませる  
大きみの御手にかはりて  
みやぬちのこと治めむと  
見れどあかね花の盛りを  
きたの國べに

又一首

みゆきふる越の國べは  
たまほこの道のたよりに  
心のみこひつ、あるに  
氣比の宮いつきまつると  
庭にたち興つくるひて  
いでたつわれは

誰もみなかなしからむ  
吹く風のおとのみき、て  
はるばると今日とひくれば  
そでの涙か

越の海のつぬがのはまに  
氣比のみや七の御前を  
あけくれにこひのみまつり  
住みなれしふる里さかり  
かりがねにたぐひも行くか

あまさかる鄙にしあれば  
行きてだに見るよしなみと  
おほ君のみことをもちて  
わか草のあゆひたづくり  
めづらしくうれしき旅に

同年五月十一日教部省の召によりて東京に

いでたむとする時よめる長歌並短歌

こしのうみつぬがの浦の  
はるばるに慕ひまるきて  
年つきもまだかはらぬに  
また更にいでたつわれは  
うちいで、富士の根眺め  
伊豆の島そがひに見つ、  
大君のみことうけむと  
數へつ、けふぞいでたつ

反歌

けひの宮な、の御まへを  
いきだにもいまだやすめず  
くさまくら旅よそひして  
駿河なる田子のうらなみ  
はこね山みねうちこえて  
ひむがしの大き御廷に  
も、づたふ八十の驛路  
たびのなが路に

箱根の湖にてよめる

たまほこの道のゆく手に  
すぎしよも越えはきつれど  
ほのかにもまだ見ぬうらみ  
旅ごろもそでふりはへて  
二子山わたくしあめの  
たどりつ、海にいつれば

はこねやま杉のしたみち  
富士のねの雲居かくりて  
このたびははるけてまじと  
あさとりの朝たちいたり  
あさ曇りいぶせきみちを  
見渡しにはは晴れそめ

をちこちの島あらはれぬ  
またさらに霧たちなびき  
ふじの根のその面かけは  
晴れぬべき景色なれば  
わがための何のあだとて  
おほかたの人は見るとふ

反歌

命あらばまたと思へど箱根山さだめがたきは雲にざりける

湯本にて福住の家にやどりて翌朝あるじに

よみて遣すとて

千よろづの翠あつめて  
こがねなす水をた、へて  
此家有萬翠棲  
金水亭號故云  
あき人のわざはなせども  
やま川のおとにはきけど  
そのをぢにこと問ひかはし  
ふりはへぬ道のゆくての  
かしこさにのこす言の葉  
いかにかもあらむ

あを葉山ながむるおきな  
あきの夜のつき見る翁  
ふくすみのやどのあるじ  
みやびをのとの垣内と  
けふしこそ宿をも見つれ  
そのみやびとはむと思へど  
とがめもやおふらむものと  
よみ見らむ君がこゝろの



底倉村温泉作歌二首並反歌

たまくしけ箱根のおくに  
かきかぞふ七つときけど  
あしびきの病のために  
こごしかるあら山なかの  
おりのほる馬にかち路に  
夏の日のあつさいとはず  
山がはのおともとどろに  
山がらかしづかなるらし  
こずゑには鳥がねとよみ  
うつせみの塵にもそます  
昨日今日こゝろさへこそ

反歌

あさいする床もゆるびぬ谷陰にまだよを残すそこくらの里  
あけたてばあけぬとあみ  
夜には八夜日には七日を  
すこやかにわが身はなりぬ  
あしびきの病の根をも

又一首

湧き出づるいで湯の数は  
そこくらの里なるみゆは  
昔よりしるしありとて  
谷かけのさかしきみちを  
明くるより日のくるゝまで  
みな人のつどふこのさと  
あぢむらの騒ぎはくれど  
川がらかさやけかるらし  
木かけには水のとすみて  
みやこべの空もわすれて  
すみわたりつれ

反歌

暮れゆけばくれぬとあみて  
たえまなくゆあみしつれば  
すがやかに心はなりぬ  
かくしてや除きやはてむ

しかしてや忘れやはてむ  
暑さをもさくるによろし  
世の塵をあらふによろし  
いまよりのこむ秋ごとに  
あみてかへらむ

宮下温泉

たまくしけ箱根のおくの  
うちひさす宮の名おひて  
その里をめしたまはむと  
いかさまに思ひたまへか  
おほ君のみゆきのひとら  
よそながら拜みしその代  
うつせみの人こそしらね  
神代よりかねてさだめて  
けふの日のため

反歌

おほ宮の下を流る、瀧川もその代の御かけうつしとめつや  
梅屋といふにやどりけるに、その家にて淨  
瑠璃とか云へるものを、かたりけるを聞き

はこね山いは根こごしみ  
谷川のながれさやけみ  
あらたまの年にひとたび  
そこくらの里わのいでゆ  
まきのたつ荒山なかに  
昔よりいひつぎ來つる  
遠御代になかりしためし  
みゆあみにあみいでませば  
ものゝふの伴のよそほひ  
里びとはかたりつぎけり  
この山をうしはく神の  
かくしこそ名づけらしも

てたはぶれに

雲だにもただよひぬべし  
三枝のみつのをごと  
手弱女のゑまひふるまひ  
みやこべを遠くさかりて  
おのづから心とまりぬ  
にこ草のそのはな妻や

遊鹽原温泉作歌並反歌

見上ぐればあやおりみだり  
いかなるや大君いつき  
山水ものどにながれて  
よそながら見る人われも

反歌

鳥だにもおどろきぬべし  
なまめける歌うちあけし  
みやびたる節にはあらねど  
くさまくら旅にしあれば  
たまくしけ箱根のやまの  
たれが花づま

瀧の湯にてよめる

見下せばにしきか、けて  
山姫のむこかとらむ  
山風もしづかに吹けば  
こゝろおちるぬ  
秋くればいははた、て、やま姫のおのれとおれる錦をや着る  
やま祇のみけしのおろしもて出なむ都の人のにしきくらべに  
烟にやこがれそめけむみゆの上のこむらは早く紅葉しにけり  
みわたせば錦か、けぬ山もなしなべてやしほのしほ原のさと

反歌

よる人のたれもむすばぬ  
くる人のよらぬはあらじ

おちたぎつ瀧のいで湯は  
算より落つるそのさま  
大なむちすくな御神の  
つくりけむそれだにあるを  
たれもみな見る人ごとに

反歌

よと共にわくにか、りて  
しら糸をたへたるごとし  
もろ人のやまひのためと  
山川のきよきかふちと  
かたりつぐらし

かけわたす種毎に糸をさらしけりわくなるみゆを高くおとして  
瀧湯山を一里ばかりのぼれば、石もてた、  
める山あり、はひ松ひまなく生ひ茂りて、  
いとめづらしきけしきなるに、うちおどろ  
かれて

反歌

やま人が据ゑけむ石か  
その石のたえまも見えず  
あしびきの山のすがたと  
見るめさへ危ふきものを  
いかにして登りきつらむ  
天 翔 り つ る

やま人が植ゑけむ松か  
その松の生ひかさなりて  
おのづからなれる景色は  
みるめさへさがしきものを  
やま人にあらぬこの身や



上野國榛名山にてよめる

あづさゆみ榛名のやまは  
あやしくもなれる山かも  
神さぶるみすがたいはば  
ぬほこととなふるいはは  
なみたてるこゝらの巖  
みわたしの目さへ及ばず  
かみ代より神の御座と  
これの宮居は

反歌

あめ地のなしのまにまに  
くすしくもたてる山かも  
大神の敷きますみまし  
うきはしを空にわたせり  
および折り數へもあへず  
そこをしも麗はしみかも  
萬代にさだめましけむ

おのづからなれる巖を宮居にて神さびいます神のたふとさ

詠筑波山歌並短歌

男の神に小雨そほ降り  
時のまに小雨は晴れて  
吹きおろす風のまにまに  
この山のすがたになして  
年たかく神さびわたり  
しら瀧のおとにきこえて  
山のたふとさ

反歌

このもには日影てりそひかのもには小雨そほふる小筑波の山  
近江國米原のみなとより、舟にのりて、湖  
水を渡りける時よめる

あさびらき舟こぎいでて  
波間よりはるかに見えし  
竹生島たけしまをすぎ  
沖つしまそがひになして  
時つかぜ吹きのまにまに  
おきつ波わけつ、行けば  
比良の山くもるにそびえ  
三上山ひがしに見えぬ  
ひえのねの麓のかた田  
そのさとにつづくから崎  
神さぶる松のしづえに  
よる波のおとのさやけく  
大君のおものゝはまに  
なみたてる高きいらかは  
あまつたふ日に耀きて  
めもはるに見えこそわかれ  
ながら山ながきうみ路を  
さざなみのうち出の濱の  
うち出で、來し程もなく  
ふな人のはてぬとつぐる  
聲きこゆなり

松本の里を過ぎてよめる長歌みじか歌

むら山のならぶすがたは  
ひがし山たゝめるごとし  
御射山は北にそびえて  
比叡の山たてるがごとし  
飛驒のねの山のこなたの  
有明山のりくら山は

いつしかと歸りこむ日を  
いはひて待たむ

反歌

つぎつぎに西山なせり  
淀鳥羽に伏見にかよひ  
かつら川鴨川なせり  
おのづからみさとおほえて  
おもしろき山のをちこち  
この里のこゝにあつめて  
夏冬の雪にすすみに  
たのしけくすめる里びと  
ほこりをるらし

反歌

いやとほに南ひらけて  
女鳥羽川木曾川あひて  
きたみなみ深志の里は  
もゝちたる家庭ゆたけし  
うるはしき水のながれを  
春秋のはなに紅葉に  
四の時かはるまにまに  
あまさかるひなの都と

山川のめぐる姿もゆたかにてみやこおほゆる松本のさと  
永夫が東京へ行くを送る

神無月しぐれもすぎて  
川みればこほりわたりぬ  
草まくらたび行く我が子  
大君のみことかしこみ  
いでたてる旅にしあれば  
さかりるてなにか思はむ  
劔太刀名をあらはして

送岩本尙賢歸諏訪歌

しほなわのこれる國への道々もあかして歸れのちのしるべに  
ひなぐもりうすひの坂は  
今この世にせきこそなけれ  
新ばりのいまはるみちは  
さかしかる峰こそなけれ  
關だにもある世にしあらば  
あつらへてとどめもせまし  
さかしかる峰だにあらば  
道なしといひもせましを  
とどむべきせむすべなみに  
立ちて居てわがなく涙  
その峰のさざりととなりて  
ゆくさきにたなびき渡り  
わがこふる心のまもり  
君にしらせよ

反歌

山見ればはつゆきふりぬ  
家にもさむきこのごろ  
いとどしく悲しくはあれど  
ますらをの心おこして  
おくれ居てなにか嘆かむ  
あすさ弓いまのうつゝに  
あらたまの年のいつとせ

諏訪のうみのころもが崎に  
富士こそは影うつすてへ  
そのかけをうち見む時は  
ふる郷をおもひ出でてよ  
むさし野の野するの遠に  
折々に我が見る富士も  
その山のおなじたかねぞ  
國こそはへだてもあらめ



その山のみねをしるべに  
まのあたりあひ見るがごと  
こゝろはるけむ

おほ空にこゝろかよはば  
目の前にこと問ふがごと

落合直澄が暫く諏訪に遊びけるが伊勢の國

の方へものせむとて旅立ちける時わかれを  
惜みて詠みて送りける

あしびきの山川たぎつ  
いにしへをしのぶ心に  
たまほこの道のたよりに  
嬉しみとわれもあひみて  
いつしかと月日もすぎ  
いとどしく惜きわかれに  
みるめなき名も恨めしく  
なかなかに何むつびけむ  
かけぬまもあらでやこひむ

反歌

ながれあふ落合ぬしは  
ふることを語らむためと  
たちよりてとぶらひませば  
思ひつゝあそぶあひだに  
また更にしたびゆくあがせ  
しほみたぬ諏訪の海邊の  
ひさかたの天のなか川  
君が行く木曾路の橋の  
あはれ今より

わがためは靡きよらなむ小木曾山みの山越えて君が行く見む

送久米幹文赴任伊勢國歌並反歌

神かぜの伊勢のうみの  
波こそはよせかへりけれ

むらぎもの心あるらし  
平らけくさきくいたりて  
踏み行かむ山のさはらず  
國人のそれのこゝろも  
古へにありときこゆる  
つれもなく上をかざらひ  
君ならでたれかわくべき  
神こそはうしはきいませ  
恙なくもなくいまして  
もとのみかどに

しが心なくてあらめや  
漕ぎはてむ磯のさきおちず  
國々のそのありかたも  
梶の音のつばらに見さけ  
ひじりらが書にしるして  
こもりぬの下にごれるも  
うなばらのへにも沖にも  
うなばらのへにも沖にも  
神こそはまもりたまはめ  
いまのごとたち歸りませ

白氏文集の題生別離を

はじめは口こそひびけ  
はじめは口こそひびけ  
はじめは口こそひびけ  
うみやまを遠くへだつる  
にはとりの八聲もすぎ  
わが草のつまも子どもも  
もろともにわかれ惜むと  
はじめは口こそひびけ  
身にしみて思ふおもひの

うめの實は口こそすけれ  
わかれてふわかれの中に  
わかれこそ悲しかりけれ  
あさ月夜あくるまにまに  
しろたへの袖なきぬらし  
とどこふるこゝろ思へば  
梅のみもくちならずべし  
たとしへぞなき

波こそはたちかへりけれ  
ふたゝびもあひ見む頃を  
よる波のたちかへるべき

反歌

君が船うらまにはてばよる波のかへるにつけて言傳はせよ

送大和田建樹歸省故郷歌

みな月のその日ざかりの  
たらちねの親とぶらふと  
ひなぐもりうすひを過ぎ  
おしける難波にくだり  
なけきつゝ船路やゆかむ  
いよの海のふたなの嶋の  
かぞへて待たむ

反歌

そへてやる扇の風はいよの海のふたなの嶋にふねはつるまで

支那へ渡らむとする人を送る

大君のつかはさなくに  
おほ海のしらなみしのぎ  
もろこしの遠きさかひに

ひとやりの道ならなくに  
おほ船にまかいしじぬき  
ただわたり行くてふ君は

述懐

天のした千よろづくに、  
あきつしまやまとの國に  
もろこしの教まじへず  
説きおける書こそなけれ  
ますらをの心おこして  
ぬばたまの月日かさねて  
しづたまき数ならぬ身も  
たまはれる神のめぐみを  
報いむがため

志を述ぶ

あめ地のたかきがごとく  
世と共にこゝろおきては  
何をかもなけきおもはむ  
あれ出づる世の人なみの  
まなぶべきもの

寒夜述懐 係征清 戦争頃

風まじり雪ふるころの  
あつぶすまひきかゝぶり

日月のてれるがごとく  
何をかもうれへおもはむ  
あめつち日月のなかに  
神ながらならふべきもの

さえ芽ゆる夜半をしのぐと  
むしぶすまひきまとひ着て



つくづくと思ひおこせば  
 もろこしの遠きさかひに  
 神無月しぐれも過ぎ  
 野に山に雪ふりつもり  
 果もなき野へ行きくらし  
 わか草のつま子おもひで  
 くだの聲きけばいでたち  
 あけたてど飯をもくはず  
 益荒夫のあるらむさまを  
 あつぶすま何にかはせむ  
 起きあがり歎きおもはく  
 國のためすてしいのちは  
 同じくはかばねをすて、  
 人やまさらむ

反歌

すべらきの仰せかしこみ  
 つかはされいでたつ軍  
 霜こぼる月さへすぎで  
 みちもなき山行きたどり  
 たらちねの父母しのび  
 たへかぬる夜半ともいはず  
 旗のかぜなびけばすゝみ  
 くれ行けど枕もとらず  
 いかにと思ひしやれば  
 むしぶすまそれもぬぎすて  
 君のためさゝけしこの身  
 おしなべて誰もおなじぞ  
 いきの世にいさをたつらむ

文久二年の八月望の頃よりえやみをいたく

わづらひける時おもひつづけける

琴をこそ友とはせしか  
 ともし火を月日にそへ  
 ひきなれし玉のをごとも  
 とこのへの塵にかくれぬ  
 老が身は目さへかすみて  
 すみだ川つゝみ行きかひ  
 小舟のりわが漕ぎくれば  
 ながれ行く水のけしきも  
 老が身をいとほぬ月は  
 すぎし世のかけぞてらせる  
 月にこそことばかはさね  
 なれみべき老の身の友

皇太后の御はふりを悲しみ奉りて

大宮のうちにもとにも  
 御民らがさわぐをきけば  
 すべらぎのかみの御祖は  
 しも雪のこほれるみちに  
 風雲のはけしきそらを  
 すみなれしその青山の

病こそあやしかりけれ  
 時ならずあるはおぞけし  
 かくすれば頭いためて  
 いきあへて苦しかりけり  
 春花のさかえしすがた  
 時のまにうつろひかはり  
 大丈夫とおもへるわれも  
 ねのみなかれぬ

明治十年九月の末つかた思ふ心ありてよみける歌

月にかたのとほき天路に  
 ものゝ音はうち静まりて天の下えだちにさわぐ人のかなしさ  
 青山の山邊にのこるかけはあれどかくれますてふ月の輪の岡  
 月の輪の御はかの空やいかならむおもかけきゆる青山のさと  
 皇女薫子内親王かくれさせ給ひて大御はふりの日

反歌

あきつ神わがおほぎみの  
 かしのみのただ一つ子と  
 いつしかも日たらしいまし  
 朝よひに笑みゝゑますも  
 樂しげくまさましものと  
 あらき風ふせぐかたなく  
 にはかにもさそひまつりて  
 吹きおほひちらしはつれば  
 とどまりてつかへし人も  
 くれまどふ心ながらに  
 みはふりに仕へまつるを



二皇女のはかに薨じ給へるを悲しみ奉りて

おほ君の御膝のうへに  
さく花のいろうつくしく  
物がたりかたりましけむ  
あらし風いかに吹きてか  
かくはしき花たちばなの  
残りさへすくなきさまに

反歌

きのふかも抱かれまして  
も、鳥のこゑなつかしく  
眞玉なすたからの御子を  
あらし露いかにおきてか  
つらなれるその枝々を  
散らしはてけむ

大君の大御心をさしくみにおもひまつるもなみだこほれぬ

海軍少將宮 華頂三品親王 御病あつしくなりまさら

せ給ふとうけたまはりて奉らむとよみける

がその日かくれさせ給ひければ奉らずなり

ぬる長歌並みじか歌

おほきみのみかどの御楯  
皇子ながらつかふる君は  
病をもはらひしそけて  
たわやめのたわむ事なく  
平らげくやくおはさね

神國のいくさのきみと  
百ちぢにせめよりきたる  
ますらをの心ふりおこし  
いつしかも日たらしいまし  
ほと、ぎすきなく五月に

咲きにほふ花たちばなの  
笑みさかえをがみまつりて  
ちはやふる神田の杜に宮爲療病  
寓子神田  
時のまもなし

反歌

ゆふかくる神田の杜の郭公ちよのさつきにきみはき、ませ  
水戸中納言の君のかくれさせ給ひけるをか  
なしてみてよめる

もの、ふの八十氏びとの  
くさぐさにみしあきらめて  
おほ君のみさきにたちて  
うちたまひはらひ給ひて  
萬代にまさましかばと  
かしこくもたのみまつりて  
おもひつゝありける君は  
雲居なす遠きくにべに  
時ならすして

父の三回忌にあたりける日よみて手向け

あはれいづらは

反歌

いつの世にまたもあひみて我妹子にありしながらのことかはすべき

慶子が一週年の祭に

あけくれに常にみれども  
あひ見すて一年すぎぬ  
春のはな秋の月夜も  
なぐさむる心はなしに  
そのなみだ袖につゝみて  
忘らるゝひまもやあると  
年つきはあやなきものか  
なぐさむる空もなくして  
たちかへりそのよの今日に

反歌

忘れむはてと思ひし今日の日は臆てそのよに歸るなりけり  
夢とのみたゝ一年は過しけりいかにかもせむけふのうつゝを  
久米幹文みまかりて十日といふにその祭に

詠み手向けける

君まさずなりにし日より およびをりかき數ふれば

春されば花みあそぶと  
秋されば月をも見むと  
もろともに酒のみかはし  
おもしろくしかぞ遊びし  
あはれ君いかにおもひて  
こゝぬかのけふの夕べを  
あらたよのとぢめとなして  
おくれるて歎くそのまに  
つれなきはあはれこの身ぞ  
をぐるまのめぐり廻りて  
その月のその日となりぬ

安政四年十月二十七日の夜妻のなくなりければ

あけたてばあけぬと語り  
もろともにありこしものを  
神無月しぐるゝころの  
おく霜のけぬるがごとく  
朝ごとにとへどこたへす  
もろともにありこしいもは

いざなひて野ゆき山行き  
高どのにまとひをしつゝ  
もろともに歌よみかはし  
しかしつゝ、あらましものを  
をとゝしのそのしも月の  
うつせみのかざりと定め  
はふつたのわかれましけむ  
さかりてこふるそのまに  
はかなきはあはれ月日ぞ  
あらたまの三年ののちの  
待ちもあへぬに

くれゆけばくれぬといひて  
たつさはりわがねしものを  
紅葉ばのすぎぬるがごと  
あともなき世の人にして  
夕ごとに見れどもみえず  
なづさはりわがねし人は



ぬばたまの夜には九夜  
ゆく水のただすぎすぎで  
紅葉ばもけふか散るらむ  
はつ雪もあすかふるらむ  
あを雲に星はさかりぬ  
いや遠くなりかまさらむ  
おくれ居てそのをりをりを  
悲しさはやるかたあらじ  
きのふけふ天翔りて  
知らまくもほし

反歌

あかねさす日には十日と  
君が住む染井の里の墓所在  
さしなみのあすかの山の  
天のはらふりさけみれば  
しら雲に月ははなれて  
うつせみはすべなきものか  
見るにつけ聞くにつけても  
あはれ君いかなる空に  
ありしよをかへりみすらむ

悼松澤義章歌

ますらをと思へる君も  
もみぢ葉のすぎましにけむ  
大和國人平田榮治が俄にみまかりけるをい  
たみて  
いつしかと待つらむ人の  
かへるべき國にはゆかず  
たまほこの道まどはして  
ならひこし書をもおきて  
み、なしの山へにおふてふ  
下ぞめのそめ井のさとに

反歌

一〇八  
たわやめの思ひたわみて  
あたらこの世を  
故郷にあるらむものを  
くさまくら旅のやどりに  
むつびにし友をもはなれ  
いかさまに思ひたちけむ  
くちなしのその花いろの  
君がいにける墓所在  
宿もせにうゑおほしつ、  
わきもこと二人ながめて  
もろともになりこし翁  
千代までもあらましものを  
この秋の月をもまたず  
ただ一人いつち行きけむ

命こそあえずもあらめ松さはその名はうせじ千代に榮えて

松澤義任の子が俄にうせしことをいたみて

よみて遣はしける

菊の花咲けるかきねを  
ふみ讀むと通ひし子らは  
世とともに長くひさしく  
思ひつゝたのみしものを  
ゆふ露のうするもまたで  
紅葉ばの散りすぎにきと

反歌

朝ごとにいで立ちならし  
もの問ふと來りしあごは  
長しへにあらまし物と  
あさ露のけぬるもまたず  
なが月のしぐるゝころの  
聞くはまことか

いつしかと歸りきまして  
みな人のかたるをきけば  
怠りて逢はぬそのまに  
たらちねの親につま子に  
あひも見ぬ道にゆくらむ  
よみつべき書をもおきて  
君は ゆくらむ  
立木定保がみまかりけるを悼みてよめる  
花鳥のをりにつけても  
君とわれこゝろむつびて  
へだてなく通ひしものを  
かしの實の獨はなれて  
世の中の悲しきことは  
杜鵑ほのかなる音の

反歌

病さへや、癒えますと  
神ならぬわがこゝろから  
いかさまに君はおもひて  
むつましき人のことごと  
かきならす琴をも持たず  
只ひとり何處とふとか  
いまよりは悲しからまし  
たまあへばあひぬる物と  
うらもなく語りし物を  
いつかたに思ひたちけむ  
わがこゝろう月の空の  
おとづれもなし  
この頃や君に別れむとも思はでのどかに過ぎし我ぞくやしき  
悼小島四郎將滿歌  
花ならば咲かましものを  
花ならば散らましものを  
冬ごもり春のやよひの



さくら花さくをも待たで  
うつせみは果敢なき物か  
たらちねの親をもわかれ  
梓弓ゆはずふりおこし  
劔太刀たかみおしねり  
ますらをや悲しかりけむ  
あまがけり後こそ見らめ  
世の人のかたりつたへて  
春花のさかゆるがごと

寄時鳥懷舊

庭にたつあさふの里は  
あやめふく頃にしなれば  
夕日さすそとも森に  
そのこゑを友とむつびて  
をり折のそのみやびも  
みな人のつどふむしろに  
うつせみは常なきものと

櫻田の義士十七人が十七年の祭によりて手  
向く

露のまにうしなひにけり  
おほ川の水のみなわも

反歌

世の中は常なきものか  
消えあえぬまに

水沫さへしばしは消えぬ川の瀬に捨てし命ぞ時のまもなき  
詠高齢歌人風流會長歌並反歌

七十ぢになれるおもへば  
我よりもまされる人の  
立ちいでむことをやさしと  
椎の葉のしひてつとめて  
くらじりに侍ひ居れば  
しら雲のとみをも捨てし  
歌おもひ言の葉おもひ  
おもしろく酒のみかはし  
これぞこの常世のさかひ  
うちつけに思ひなされて  
いまぞなきぬる

反歌

我もはや若くはあらねど  
こゝのそぢ八十ぢもあれば  
心にはおもふものから  
今日の此のむしろに集ひ  
あを雲ののぞみおもはず  
さまざまのおきな廻が  
ふみがたり文よみうかべ  
たのしけく酔ひ遊びけり  
これやこの蓬がしまと  
たち出でしけさの心も

稀なりと思ひし年はかすならで今日のまとるぞ世には稀なる

訓盲院

あづさのみはる咲く花の  
ますらをが立てしいさをは  
花のごと千代にさかえむ  
十あまり七のはる経て  
添はる思へば

反歌

いまよりの後の榮を思ふにはまだ色うすき花ざくらかな

哀兩國橋溺死人歌並反歌

ふた國の中をながるゝ  
すずみすと下り行く小舟  
ところせくつどふこの頃  
うちいだす筒のひびきは  
ひるがへる火花はちりて  
みな人のめづるそのこゑ  
いかづちのとよもすなして  
橋けたやゆるぎそめけむ  
ひた落ちにおつるその人  
水の上にかびおほほれ  
おもほえぬ今日を限りと

おほ川の川の瀬きよみ  
おほ橋のうへ行くひとの  
年ごとのつねのためしと  
おほ空の雲をひかしかし  
やみの夜の星か見えつ  
しら波のさかまくごとく  
うちさわぎ騒ぐそのまに  
おばしまは中より折れて  
老いたるも女の童子も  
水底にしづみながれて  
うつせみの惜しき命を

父母のおもてもわかず  
をさな兒の生れしまゝに  
明らけく照らすごとく  
うつせみの世の人なみに  
ことわりに過ぎてあやしと  
これもまた明らけき代の

神宮教校開筵長歌並反歌

皇神のもとつをしへの  
皇國のたふとき道も  
いかにして空に知られむ  
文まなぶ學びのにはに  
から船のあとのみ追ひて  
ゆめにだに知らぬが多し  
皇神のみちをしへむと  
庭すゝめむれつどひきて  
みふゆには雪を友にて  
かゝみともなしてむものと  
ことこのたふとさ

反歌

はらからの聲のみ聞きて  
おのづから見えぬその目を  
おろおろに諭しみちびき  
わたらはむことわり知るも  
みな人のおどろく教へ  
ひかりならずや  
そのもとの書をし見ずは  
天皇のかしこきよしも  
うつせみの世の人みな  
あし蟹の横はしりつゝ  
皇國のよゝのふるごと  
そこをしも歎きうれたみ  
はじめける學びのには  
夏の夜はほたるをあつめ  
文ならひならひいたづき  
まなばしら今日たてそむる



皇神の道も教へもなき庭の其の學びぐさ摘みなはやしそ

古典講習所開講時唱歌

春山のさくらのはなは  
吹く風にうつろふ時あり  
明らけく照りわたれども  
うつせみの人のたからと  
あめ地のなしのまにまに  
朝ごとにみがきにみがき  
天のした四方にひびきて  
かがみなす光やみえむ  
誰もみな持てりをれども  
勉めずば照りまさらめや  
すめらぎのみことをもちて  
國々のをしへ子つどへ  
上つ代の道をしへよと  
開きますけふのむしろぞ  
教へゆくのりのまにまに  
明らけくをさまる御代の  
春山のはなもおよぼし

うるはしく咲き匂へども  
秋の夜の月のひかりは  
むら雲にかけかくしけり  
おのがじしもてる心を  
そこなはずやしなひたて、  
夕ごとにつとめいたらば  
眞玉なすこゑやきこえむ  
しかばかりたふとき寶  
みがかずば光みえめや  
かけまくもあやに畏こき  
國々の博士めしよび  
いにしへの書とききとし  
まなばしらまなびの道を  
あらたまの三年をかけて  
をこたらす守りつとめよ  
みかどべの光そへなば  
秋の夜の月もしかめや

月花にこゝろうつさで  
たまはれるこゝろの鏡

奉獻 崇道盡敬皇帝御前長歌並短歌

明治十八年十二月十三日千五百年祭

天地とともにをへむと  
かけまくも畏こかれども  
後の世にいかにもどはむ  
いはまくもかしこかれども  
世の人やいかにおもはむ  
すめろぎの御心つぎて  
久かたのとほき神代の  
八十氏のそのかたりごと  
君臣のたゞしきまこと

短歌

萬代の祭の庭にしのびゆかむ御名にかゝせるとねをとこども

又一首

あめつちの遠きはじめに  
ものこそは神のはじめ  
日の御子の遠つ御祖ぞ

葦かひのもえあがりける  
しが神はあまてるかみの  
その神を君とさだめて

後にこそ人はあれいづれ  
神の代にさだめたまひて  
天の下千よろづ國に  
すめらぎの敷きます國に  
あやまたず書にしるして  
とこしへにつたへ傳へて  
明らかにしるし、御紀  
よみ見ればあやにくすはし  
みかどへに敬ひつくす  
尊 き 大 御 子

君は本民は末ぞと  
うつせみの世のことわりを  
國はしもおほかる中に  
神ながらつたへし御言  
百千々の代はかはれども  
君臣のそのもとすゑを  
いたゞげばあやにかしこし  
すめがみの道を崇とみ  
大御名をうべおはしけり

反歌

星が岡高きその名をよすがにていつの筵に天翔りませ於星岡茶亭行祭式  
萬代にうごかぬ北のほしがをかむかふところは君ぞさだめし

明治日報の干號の祝のうた

朝の日にかはる世のこと  
あさちはらつばらにかきて  
ふみはしも多くあれども  
公をそしるもあれば  
中々によからぬこゝろ

うつりゆく其のにひがたり  
里ごとにやごとにひさぐ  
かく人のこゝろのまゝに  
國ののりみだすもありて  
世の人につけゆくめるを

明らけくをさまる御代の  
ありそうみの濱の眞砂の  
ちゝ巻になれるこのふみ  
さかしらの教はすて、  
うつせみの世に詔はず  
松が技のときはにあれと

反歌

ことあけせず治めし御代の古へに歸らむ日こそ此の書やまめ

新室を壽ぐ歌

新室のかべ草かりに  
君がためえだちたすけて  
思ひつゝありしあひだに  
とし月もいまだあらぬに  
その室のけふのむしろに  
花のごとつどふみやびを  
すみやかにりにし事も  
誰 か い は は ぬ

反歌

新室をふみしづのをが立ちならし堅めし岩根萬代までに



又一首

この室は千代のわかむろ  
 桑畑をかきほに生ふし  
 松柏をよもにしめつゝ  
 しきしまの言の葉つどへ  
 樂しけくさきく住むらむ  
 家ぬしの御富のあまり  
 人もとひこむ

井上頼因が四十の賀筵に寄道祝

千よろづの書をつどへて  
 あけたてば日のくるゝまで  
 よみときしその年月を  
 來しかたはまだ日ぞ淺き  
 千代のさか越ゆらむ君は  
 その書の巻も見はてよ  
 馬のつめつくしきはめて  
 道のためいさをし人と  
 樋口某がをのこ子得たるを祝ひて  
 寶てふたからはあれど

このぬしは千代の家ぬし  
 老の身にきぬやあくらむ  
 常磐木に代をやこむらむ  
 もろこしの書よみ見つゝ  
 家ぬしのこゝろのはやし  
 あえにとて我もかよはむ

文机のかたはら去らず  
 くれ行けばあくも知らず  
 數ふればよそぞといへど  
 今よりのよはひかさねて  
 その書のかすにもあえよ  
 まどはしき道のおくをも  
 國のため世のさかし人  
 君はよばれよ  
 うつせみの人のめづてふ

寶にもまさる兒もたり  
 眞玉なすかしつきもちて  
 あけたてば笑みて見るらむ  
 世の中にまたなきたから  
 君はたもてり

風間年繁八十年になりけるが妻とたぐひて  
 今年六十年になれる其祝の歌よめといひけ  
 れば

ぬば玉のくろかみしきて  
 よつの時うつりかはらひ  
 あさからぬ妹背のむつび  
 六十とせの春秋かさね  
 君こそは世のさちびと  
 いまよりの千歳の春も  
 しらかみの頭のうへに  
 おむなさびせよ

反歌

共にねしわかきすがたも  
 咲く花の色はあすれど  
 うつろはぬよゝの契を  
 八十とせの齡へぬてふ  
 君こそは世のまれびとゝ  
 さくら花ともにかざして  
 とりかざり翁さびせよ

けゝる

父母がかしらかきなで  
 くらかりし髪はしらけぬ  
 およびをりかき數ふれば  
 めづらしき老にはあらねど  
 我をしもことほぐにはに  
 みな人のまことのこゝろ  
 世のためにいさをもたてず  
 いたづらに年をかさねて  
 今よりの世をだにへなば  
 なし得べき時もやあらむと  
 くれなるの色のにほひを  
 くれなるの面わの上に盃のかすをかさねて祝ふ今日かも

反歌

おほしけむ我身なれやも  
 わかゝりし面はやつれぬ  
 六十まりひとゝせそへぬ  
 うからどもより集ひきて  
 われもまた言擧すらく  
 身にしみて嬉しくはあれど  
 かきしるす書もはたさず  
 人なみに祝はるべしや  
 おもふこと千々の一つも  
 しわみたるわが面の上に  
 そふるけふかも



蓬室集文詞

蓬室集 文詞

一一六

新年

何事につけても、昔をのみ忍ぶ心ぐせは離れぬものなりけり。新しき年とは如何なる人の言ひそめけむ、その折はとあり、かの時はかゝりと、思ひ出でらるゝも、いとゞわれながら心やまし。かくしふねき心のつきたるけにや、すべてすべて變れるものゝ、あぢきなくなり行くなかに、たゞ一つなむ嬉しきものはありける。暮れ行く年のせまりたるは、何となく物悲しく、寒風つもり愁雲しげくして、慰めかねたる四方の景色、うち見るに消えも入りぬべき心地ぞする。つごもりの夜の更け行くさまなど、わきて物思はしきを、限こそありけれ、峰の横雲たちわかれ、鶏の八聲も鳴き盡したるに、やをら立ち出でて見渡せば、さばかり思ひうんじたる心もいつちいにけむ、にはかに晴れ渡りにけり。もの極まればもとにかへることわりにこそありけらし。昨日のけしき名残だに見えず、あしたの空に初日のかゝやき出でたるは、そゝろに心

もうかれて、あらたしきに目うつるぞ、常の習とはかへさまなる。

陸軍始

國にそむくものありける時は、物部の軍の將たち仰をうけて、鼓をうち管をならし、楯を立て鞆の音ひゝかせなど、まづつはものを整へけり。帝もこれを聞き召して、物思はしめ給ひしことなどありけるよし書に見えたる、それはあがれりし代のならはしなり、治世に亂を忘れずとのかしこき諺はさならなり、今の世にしては、四方の海、うはべこそ波靜かなる姿を見すなれ、あからしま風、人の國の上に吹かせむと互ひにいどむめれば、年の始のおほん規式にも、まづつはものゝ上をこそさたし給ふめれ。けにさることなりかし。みかどを始めたてまつり、皇子たち、大臣等はさらにも申さず、將校どものゐるたちならはすさま、いと猛く、はた雄々しけなり。その日となりぬれば、下が下までならしの場に立ち出で、

御旗のなびくを拜み、つゝの音のおびた、しきを耳にふれて、國の守を思はぬはあらず。あはれ古へとはかへさまにて、たけき國ぶりいちじくるく、さかりなる御代の様、まのあたりに見奉るもたふとし。大國主神の矛を持って、天の下を治め給ひし御いさめの言の葉も思ひいでられて、細矛千足の國の名にもはたそむかず、かくてこそ千秋萬世に天てる神の御末の、動きまさぬ姿さへ思ひ給へられて、かの文弱のつひえを、まだきにくひ給ひつべき御政なめりと、今日の御業を拜み奉るその一人の數につらなれるも、嬉しき年の始のよろこびなりかし。

春風春水一時來

うしろの山は雪高く聳えて、ふみ分けたる猪の跡だに見えず。吹きおろす吹雪の、庭にも籬にもよせきて、寒きことはけに似るものなかりけり。今年はいつかは雪消をも見まじなど、思ひうんじたりけるに、昨日の夕つかた、風のけしき聊か變りて、こちといふ方さまにぞなれる。さるは年あらたまりぬるしるしにや、なごうち語らふものから、まだとほそなど開くべくもあらねば、なほひたやごもりにのみ夜を明し

つ。つとめて楯などさしくべつ、やをら外の方を見出だせば、あとだにあらぬ雪のうちに、幽かに瀧のおとなひぞ聞ゆる。あやし、何の響きにかあらむと見めぐらせば、ひと筋の流をぞ見出でたる。さるは水上の氷やよべのぬるみに解けにけむ、けにあらそふべくもあらぬは、時のゆけるなりけり。世のなりゆかむ様もかくこそはありけれ、いかに心いられしならむからに、時の至らざらむ限りは事ならじかし。ゆるぎそめては、思ひもあへぬかたよりつぎつぎにと、のひ行くめり。このごろ聞けば、國々よりきほひのほれるますらをのむれが、心いられより誣ひたる言擧して、却りて國の法にふれ、おのれはたわびしきめ見など、やくなきものおもひをなすめり。いとく、らで、今しばし時の至らむを待ちつけたらむには、力を盡しつべきかひもありなむものを。

早鶯

年あらたまりても、四方の山の端いまだ雪解の色もなく、かき根の若菜も霜がれの中にうちかじけたるは、寒さのゝぞこりがたきが故なるべし。まして老の身は、たれこめてのみうち佗ぶめり。池水の氷れる鏡に二毛のかけを敷き、埋火の灰



がちなるに我がよの更くるをあらそふほかぞなき。閨のすきまに夜の明くるを知りながら、なほも衾ひきかづきてまたねの夢を結ぶ折から、軒近く鶯の初音ぞ聞ゆる。あやし、ひが耳かと思ふをりしも、二聲三聲うちつづけたるは、ものにもまぎれず珍らしなどはさらなり。やをら立ち出で、格子てづから引きあけなどするもおそしと見めぐらせば、ありつる四方の梢も俄かに霞めるけしきをそへ、軒端の松の嵐も何となく長閑に聞きなざる、は、思へばかれが一聲にうちもよほさる、なりけり。待たる、物はといひけむ、うべなりかしな。これをしも待ちつけたらむには、今は柳櫻とつぎつぎに春のけしきのそはらむものと、いと心おちるて。

尋鶯

今年はいかにして鶯のおそき年ならむ。去年つもりにし四方山の雪のいと深かりければ、谷のとざしやいまだゆるがざるらむ。きのふけふの日かけに、軒端の梅もや、ほころびそむる色をあらはし、門の柳もいつしか靡きをめたるに、鳥の音そへぬぞいとさうざうしき。かくて居ながらに待ちなば、いつかは聞き出でむすらむ。人に先ぜられむもねたし、さらば

尋ねてこそと思ひなりぬるに、何處かよからむ、おなじくは道はるけくとも、山川のけしきある所をこそと、友とする人二人三人してもものしつ。かた山かけの木深きあたりをこそと言ふ人あれば、竹むらある所をと言ふもあり、なほ梅ある里をこそあらめなど、道すがらいひしらふもをかしけれど、かゝるもみやびのあらがひなれば、さすがに興あり。さて終日そこ、とあくがれありきけれど、一聲も聞き出でぬは、けにいかなる年にかあるらむ。あまりに尋ね困じて、一人がいへるは、今年はおほかた啼かぬにやあらむ、かの郭公を見よかし、この年ごろは都の空に鳴く音をたちたるにあらすや、鶯もその定にこそあらめなどいふも、いとわびしく心やまし。

若菜

都大路の市こそたよりよろしけれ。時につけたるあま菜、から菜、山野のもの、何一つなきものこそあらね。はた田舎より朝ごとにもてわたるめれば、色さへいと新しく、あるじまうけなどせむにあかぬことなし。しかはあれどもかにはの田居に、太刀はきてますらをが摘みけむ根芹の深き心を見せ、

蕨を折る詞

春の野の雪に衣手を濡らして、みことの御手づから摘みたまひけむ若菜の色の、はえあるおもしろさはいつこにかはある。何事もたよりよろしくなれば、なるに従ひて求むるいたづきなく、人の心のほど、はた浅くぞなりぬる。沼におりたち雪間にあさりてこそは、若菜につけても心の深さは見すべけれ。事たりぬる末の世をのみ思ひて、古へのてぶりを知らぬ人こそ口をしけれ。

都霞

西の都ならむには、大内山にもなぞらへつべし。東の皇城なるもみぢ山の梢いたく霞み渡りて、木々のけしき、なかばは見えみ見えすみ、鳥の聲さへ奥ふかくこまれるもいとおほつかなき心地するを、やうやう梢のうち靡くは、春風の吹きおろすなるべし。見るまゝに晴れわたりて、何の木々くれの林などさやかに見ゆるに、こゝもとなりし櫻田千代田の町々、はやく霞に立ちこめて、大路行きかふ人も、馬、車の音のみ残りぬ。春の霞のいつこはあれど、都の空ばかりをかしきはあらじかし。

ひと山あさり暮らして、あるは峰にのほり、谷にくんだり、松の木かけにしばしやすらひてはわりごとう出、清水を汲みてはのどをうるほしなど、こなたかなたさまよふほどに足もつかれぬ。されどまだ蕨めくものとは目にだにふれず。籠のみいたづらにたづさへ、ゐてありきて、日もや、たくるばかりになりぬ。かくては家づとやなからまし、さらば子どものめでむ料にもとて、躑躅、董など多くつかねて、杖にすがりつ、歸りぢにうち向へるに、何となく心もつかれにけり。さて、いまひと山を越えずば、出づべき道もなし、よぎて過ぎなむには、數多の溪間をも廻りつべし、いかゞはせむとて疲れ脚をひきつ、見上ぐるばかりなる峰に登りて、や、下らむとする路の傍をふと見れば、おしなべて蕨なりけり。昨日けふの春雨に、今をさかりと崩え出でたる、まだ人も知らぬにやあらむ、踏み分けたるあとだになし。いでいでと言ひつづ、かたみにも言はで折りつ、めぐれば、早く籠にも満ちたり。今は袖にや入れましなど笑ふもあり、なごりはをしけれど、入日の影もや、近づきぬれば、またもなど、互に心



のうちにしめおきてこそ歸りしか。

春野

さわらび、つくづくしなどあさるもあり、石にしりうちかけ  
て歌よまむとあんずるもあり、ひさごの酒にこゝろ入る、老  
人もあれば、わりご開きくだものとうでて、まうほるわらは  
もありなど、くさぐさなり。あけくれ見つる都大路のさまに  
は、似てしもあらで馬車も通はず、右にも左にも踏みならし  
たる道あるかと思へば、末はひとつになりて、同じ處にめぐ  
りあへるもをかし。空はいたくうち霞みて、雲雀のあがるも  
聲のみ聞え、松の梢は一入の縁をそへて、煙にまがふも見る  
かひあり。遙に見れば桃の花にやあるらむ、赤く咲きつゝき  
たるに、入日のかゝやきあひたるいとつくし。さらばかの  
林にこそはと、そなたさまにもすれば道いと遠し。やうや  
う行きつきぬれば、はやう里の入口なりけり。かの桂園の翁  
が、野邊の遊びに暮しあまりて、といひけむ言の葉さへ思ひ  
出でられていと興あり。

初花

へ句ひ出でたるは、いふよしなくめでたくて、とばかりは物  
もいはれざりし。  
初花にいつあはましとさゆりばのゆりに思ひしわれぞ悔しき

櫻のことば

櫻こそあやしきものにはありけれ。櫻に心はあらざらめど、  
見る人によりて、さまざまに、うらうへにさへなれるがあや  
しきなり。めでたくなつかしきものにすなるは、おほかたな  
ればいふべきふしなし。困じはてゝは、心のみこそくるしけ  
れと詠じ、たえて櫻の咲かざらばなどもいはるめり。さかり  
のみじかきを歎き、散ることの早きを惜むが餘りには、かく  
も言はるゝなるべし。いと甚しきは、残りなく散るぞめで  
たきといへるもあり、これらは、けにうらうへなる心といひ  
つべしかし。かくては愛づる心も中々に薄くぞなりゆくめ  
る。よみ人の心を思ふに、さまでつよくいへるにもあらじ、  
榮え驕れる人などの時を失へるが、人わろきを櫻によそへて  
述べしなどにぞあるべき。かく様々に人の心をつくせるも、  
この花の世の常ならぬかたによれるにしあれば、中々にこそ  
めでたけれ。わろものは誰かはしかも心をつくさむ、答を數

年たち歸るあしたより、まづうち見やらるゝは櫻の梢なりけ  
り。さるは、昨日まで何とも思へらざりし梢の、うちつけに  
心にかゝるもあやし。山の端の霞もたなびきそめ、池の柳も  
やゝ青くなりゆくにつけては、心もただならず。軒端の梅始  
めてほころび、鶯の二聲三聲名のるを聞けば、いつしかと  
および折らるゝもをかし。春雨ひまなく降りて、處せくいぶ  
せきをも、ねんじて思ひけるやう、この空の晴れなむには、  
いかに梢の見まさりするやうあらむ、早く咲かせてしがなと  
明け暮れ待ち渡りけるに、二月も半になりぬ。月のあらむ頃  
になど思ひしかど、たちまち居まちもたゝ過ぎぬるぞくちを  
しき。あまりに待ち困じて、しばしやすらひける折から、ふ  
とわらはべどもの語るを聞けば、隣の家の櫻は咲きにけり、  
むかひの軒にこそ花は咲きたれなどいふ。きゝされに聞きけ  
るが、もしやと思ふ心に立ち出でて見めぐらせば、早くも咲  
き出でたるものか。あなうれし、知らでもありけるかな、な  
どてこの一日二日は心もとめざりけむ、花の思はんこともな  
どひとりごちて、俄にめづる心になりぬ。今朝咲たるにやあ  
らむ、いまだふゝめるが多かる中に、南のかたなるはおほか  
たほころびにけり。をりから朝日の立ち昇るに映えて、露さ

ふるも其の物のあかぬかたなきを願ふにこそあれ、とが無き  
ものには何の見どころかはある、おもへばおもへば櫻こそ  
は、めでたきものゝかみともいふべけれ。

花の宴

おまへの櫻今をさかりと咲き亂れたるに、鼓の音笛のねの響  
きにうちあはせて、一ひらふたひらなど、散りそめたるもい  
とめでたし。みはしのとばり高くかゝけたるに、出でたる女  
のおもて、いと物おもはし。内のおとゝがおしたちたる言の  
葉に、力及ばで花見に行きたるらむ心のうち、いとあはれな  
り。やがて車よりおりて舞ひかなでたる、更に面白し。馴れ  
しあづまのと、うちいでたるなどいといみじ。つひに暇たま  
はりて故郷に歸りけむは、心ゆきたるさまなり。人々、舞の  
面白さに盃もさしおかれて、とばかりそなたさまに向ひた  
る。今はとうちやみたるに思ひおこして、たがひにさしめぐ  
らせば、ゑひすゝみたるに、いつしか又打ち出でたるは花盜  
人とかや、おもしろくさるがうめり。これも折にあひたるわ  
ざと、けふの花の宴にはいとつきつきし。



花慰老

見るもの聞くものにつけて、まづかこたるは老のひがみにぞありける。うき事悲しき事はさるものにて、心ゆくめると世にもてはやすなる糸竹の遊、さては、わざをぎのたはれたる、あるは友どちうち集ひて、暮うち歌よみ酒のみ木の芽にる筈などにも、あはれその折はとあり、かのをりはかゝりなど、まづ昔思ひ出でらるゝも老のくせなり。數ふれば残りの齡もいと多からず、かくいやめにのみうち過すもかひあらじ。このごろの長閑けさに、野山をだにとせめて思ひたちて、童どもにひさごもたせなど、ともなひ出づ。道のほど、里中のにぎはしきも心にいとほるゝものから、念じて隅田川の堤にいたりぬ。と見れば、向ひの岸はなべて雪のふりたらむやうに眞白にみゆ。さるはきのふ今日の雨に、残りなく櫻の咲きたるなりけり。知らでありけるかな、をりこそよけれど、らうがはしき中をかきわけて木のもとに至りぬ。木かけにたゝすみつゝ、盃とうでゝうち見渡せば、いつしかむねあく心地す。うべも昔の人はいひけり、花をし見ればとはまことなりけりと、そゝろに身もうきたちて、彼のかこてりし老の

り、こゝの山邊、かしこの野邊と、思ひ至らぬくまなく尋ねまどひしも、數ふればあはれ幾日のほどぞ。思ひしなればもまだ見つくさぬに、花は人をまたぬ習とて、かたへは早くうつろひぬるぞなけかしき。あはれ世はかくもありけるものかな、またるゝほどの日數はいと心もとなく、待ち得つれば見る程だにあらざりける事よ。さはれ今より後は更に心もつくさじ、待つにつけてこそかくはをしまるれ、待たずは斯く身にかへつべきなけきもあらましや、あらいみじの花のなごりや。

躑躅

春の未つかた、山にもせしかば、樹々の木かけ谷のくまぐま、おしなべて躑躅の花の咲きみちたるに、夕日のかがやきあひたるはいとまばゆく、野火かと思ゆるばかりなりき。それとはやうかはりて、この都の家々にひき植ゑたるは、紅こきあり、うすきあり、白きもあり、紫なるもあり、樹も大きなるありて、處せく咲き亂れたるは目もあやにうつくし。それをこの頃は様々の物のかたちに作りあらはして、かのつくり菊とかいふらむやうに、こちたく植ゑ並べたるは、中々に

しらがにも、一枝かざさまほしくなれるぞうちつけなるや。かたへを見れば、同じ年の程今少しまされるなども、笑みさかえて、心地よけなるはなほわれにて知りぬ。誰もおもひの慰むなりけり。木草もこそあれ、わが日本にしもかゝる種をまきおほして、人の心をのどかならしむる、これも神のことなるみかけによれるなりけりと、嬉しき老が身に今さらことあたらしく。

花を惜む

立ち歸る年の始より、待たるゝものは多かなるに、いと心にかゝりそむるは、花をおきて何かはある、鶯、若菜、梅、柳などはさるものにて、および折り曆をひらきても、今いくかと朝夕にうちまもらるゝは櫻の梢なめり。春雨の降るにつけても、ふゝめるつほみのいかにぞと思ひやられ、遠山の雪きゆるあしたの霜に、さくべき比の遅きをかこち、吹きまよふ夜半の嵐に、枝ざしのやつれを思ひなど、萬につけて春の歎きのいとなきも、皆花の上なめりかし。やうやう二月も末つ方になりもて行くまゝに、四方の梢もいつしかと色めきそめ、山々に立ちまされる雲も、たゞならず見えまがひつるよ

あきたくさへぞなりぬる。かくて思へば、おのづからなる松の根、岩ほのはさまに這ひ廣ごれるは、花もいとちいさく、枝のさまもさばかり大きにはあらねど、いと見どころあり。その中に蕨土筆などのあるをあさりありけば、おもほえず雉子のこゝもとに飛びたつなども、すべてすべてけしきことなり。ひとのつくるをあしといふにはあらねど、なほおのづからなるにこそ、心はひかるめれ。

新樹風

うづきの未つかた、墨田川にもせしに、堤の櫻は早う緑のかけになりぬ。あはれ昨日は花の咲き満ちて、雲かとのみなむ見えわたりし。いとどけて眺めありきしうちに、筑波嶺おろしにやあらむ、にはかに風の吹きもて來てたゞさそひにさそへば、花はよもやもに散り亂れて雪とぞふりまがひし。ちる花ことなどいふべくもあらず、あるかぎりさそひもて行きて、はては川の上、洲のさきのきらひなく、ふりこぼすと見しは、いかばかりかは風の心のつらかりし。今日はうちかはりて、青葉が上を吹きわたるに、露のうち散りてそよそよと靡びきたる、風の色さへ見えて誠に心地よし。はては木



かけを走る船の、帆にさへおろしゆくなど、心ゆくかぎりなり。いくその月日もあらぬに、かくもけしきの變るものか。そのかはるにつけては、人のおもひなしも又かはるぞいとあやしき。今又あつさになりなば、この風やいかにすゞみする人のよすがとならむとすらむ。青葉が蔭にしばしうちやすらひて、

吹く風は青葉のうへを渡るなり人は舟よぶ川のみぎはに

待郭公

年たちかへるあしたより、其の折ふしにけて、待たる、ものこそ多かりけれ。鶯の谷より出づる初音をしのび、遠山にたなびく雲の匂ひをむるを心にかけて、山の端出づるかけをかこち、松の梢に友待つ雪のつもるを思ひ、すべて四の時はまにまに、待たる、物の絶えせぬこそあやしけれ。待つにつけては、その折々のけしきにつけて、哀れさも悲しさもはた多かる中に、郭公まつ心こそいと身にしみて覺ゆれ。夜すがら起きるて、格子もさながら空うちながめつ、待ち渡るに、有明月夜細う残りて、たゞ明け行く空もあはれなり。またの日は、暮れ方より村雨いさゝか打ちそゞ。今宵こそは

とたのもしく覺ゆ。はしるをしつゝやがて眺め出せば、木々の若葉に風わたりて、露のうち散る音もあはれなり。燈のものとにもよらで、今や今やと思ひあかすに、たえてつれなきも心やまし。困じはて、しばしとうちまどるめば、今宵もまた明け行く。今はいかにせまし、山べにや尋ね入らましなど、心もたゞあくがれにあくがれて、同じ心の友にうち語へば、早うほの聞きつといふ。いかゞはねたからざらむ。里わきしけるかれが心さへにくしと思へど、なほうとまれず、またも空うち見やるぞ心よわきや。

待郭公

雲か見えし花の梢も、あとなき嵐に吹きはらはれて、雪かとまがひし木の下かけも、名残なき雨に流してけり。木々には昨日の面影もなく、時のまに青葉の森とかはりはてぬ。身にかへつべき花のなけきも、今はた思ひ忘られて、郭公の上をこそはまつ思ひ出でらるれ。をかき夕暮の空に、一聲なかむともり來む雲間の初音をしのび、物憂かりし昨日の雨も、花桶の薫るよすがとぞなりぬる。けにうつればかはる人の心にもありけるものかな。

梅 雨

卯花くたし打ちつゞきて、をやみなき空のけしきに、いとどながめわびにけり。月の光もいつ見しまゝ、ぞとたどらるゝばかりなりしに、からくして日のけしきなほりしかば、ものへや行かまし、池の水草やはらはまし、しめりがちに打ち過しつる衣匣とり出で、うちさらさましなど、一日二日とめづらしき日影うち見し程に、またもかきくらしにけり。さは、いかなる空にかなりゆくらむ、此まゝに降りとほして、やがて五月雨にもたち入りなば、かりつみし畑の麥をばいかにかしてまし、今年はなりはひのたよりやあしからましなど、みな人憂へあへるもしく、いつとなくふりのみまされば、橘のかをりもなつかしからず、郭公の鳴く音も物すさましけなり。庭の蓬は刈る手ももの憂く、のき端の菖蒲はふけるすなはち露うちすがるめり。つゆに入りたちては、いよいよ空の雲たち重りて、窓のうちは終日をぐらく、まして老の目は晝だにもいとおほおほし。今ははや晴れぬべきよすがも思ひ絶えにたり、このまゝにてあまたの日數あり經むものとしもあらねば、いでや、年月おもひわたりし源氏の物語をや、この

比かけて讀みはてまし、子、うまごどもはいづらなど集ふるもをか。桐壺の露けきなかに過し給ふらむ御子のありさま、思ひやるもつぎつぎして早く讀みはてぬ。雨夜の品定は、けにかゝりし頃の事ぞかしなど、さすがに興ありて、つぎつぎ讀みもてゆくらむ卷々のゆかしさ思ひやるにこそ、しばしは晴れぬ思ひもうちなごみしか。

新竹の詞

生ひ出でたりし頃まではいとまばらにて、垣根にたてる姿もうひうひしかりしを、わか竹こよなう生ひ茂りにけり。日々に延びまさりて、今は軒端にもあまりにけり。朝風のうち吹く毎に、新皮の落ちもてゆく、いと白き粉のこほる、もをか。雀の絶えず來てあさるに、まだうら若ければ、ことのほかにうちしなふも見所あり。すなほにも延び行くものかな、人の子をおほするも斯くこそあらまほしけれ。あしきふしつけもてゆかば、遂には見所なくやなりなましと、おきふしによそへられて見るも興あり。今年の雪にはいかゞあるらむ、こむ春の鶯のふしどにやならむなど、今よりおよび折らるゝまでも、人の子はぐくむ心地せられて、



『今年生は何の節さへなかりけりすなほにのぶる庭の若竹』  
生末を今より思ふも、一ふしをとりつけむの心あればなるべし、さてこそ霜にもまけぬ操はもてつべけれ。

橘

橘は神代に早く其名きこえて、伊弉諾尊の御禊はらへたまひし時、日向の小門にしも、立ち榮えけむがいとめでたさ。さるは玉垣の宮に、田道間守と云ひし人、常世の國に渡りて、かけ・八かけ、ほこ・八ほこ、を持ちわたり來て、みかどに奉りしはいたく後のことにて、このものは、後にいふ柑子、密柑、などいふものの始なるべきよし、はやくいへる説もありしにあきらけし。さるは、そのものよ、花さへ葉さへいと麗はしく、實、はたことなる味ありて、あり來りしものにもたち優れりければ、おのづから其名のうつりて、このもの、名ともなりにけるなるべし。さるよしも思はで、橘はいにしへは無きものにて、橘の小門といふ名は、後の名をもて語りつたへしものならむと云へるなどは、よくもかうがへられざる説なり。又ある人は、それをあかす思ひてか、たちばなは、立ちはしり波、の心なりなど云へるは更に拙し。今も薩

摩の國あたりの山には、おのづからなる橘生ひしけりて、實なども多く結びて、その味こそ後の柑子には劣りにけれ、みな人の取りて食ふはさらにて、今も橘といへりと聞けり。これぞまことの神代の橘なることは明らけきを、外の國には残らで、そのかみの日向の國にしも今もあるこそ、かへすがへすめでたけれ。書の上をのみ見て、まのあたり残れるものありとしもたどらず、かにかくに古へをさたするは、近き世のならばしとはいひながら、こゝろづかひすべき事にこそ。

蓮

はちすはいつもをかし。朝とく起きいでて障子ひきあくるに、ゆくりなくとこの上までかをりくる、いひしらす懐かし。朝風の吹き渡るに、夜すがらたまれる露のこほるゝ、玉の散るかと見えてをしき心地ぞする。晝つかたになれば、堪へぬ暑さによもの草木も皆しをるゝ折から、はちすのみなほ露をたもてるこそ涼しけれ。夕立はことにをかし。風俄に吹きたちて、雨こほすが如くにおろしくる音はさらにもいはず、さるひろ葉にも露をえうけあへずかたふけば、またしももとの如くにたまれるよ。されど、うちしなひてもつれなく

起きかへりて、莖の折るゝけしきもなく、葉のうちこそなはれぬこそめでたけれ。夜になりては、草木もわかぬ夕やみに、蓮の露のみはきらきらとして、星の光に照りあひたる、螢にもまがひて殊にをかし。露の上をのみこそ取り出でていひつれ、花もまたをかし。紅なるはさらにもいはず、白き花の、處々に咲きいでゝ匂ひ満ちたるが、青葉に色うちほえたる、又葉がくれに見えみ見えみなど、をりをり打ちなびきたるさまもおもしろし。冬になりては、葉末もやうやううらがれて、半は色かはれるに、實などのこほれし莖そのまゝ残りて、此方彼方に打ちたふれたるはわろし。根をほるとて、さばかりゆたかなりつる水をひきおとして、池の面をからし、土など高くほりてあけたるは、ありし面影いつらとたどるばかりに、きたなけなるこそいともむとくなれ。

納涼

空にはたなびける雲もなく、梢にはそよける風もなし、今日のあつさをいかにしてかはしのぐべき、昨日だに堪へがたかりつるをと、汗かきなげくをりしも、友だち來あひにけり。同じ心にうち出で、いざや、おなじくは涼しき流にあそび

て、しばし暑を忘れむといふにもよほされぬ。柳橋のあたりより船を浮べて漕ぎゆく。けにこの頃のあつさ、はた誰も同じことによ、外にもあまた漕ぎ出づるがあり。かくて隅田川の方へとさかのほるに、このあたり、こなたかなたの岸の家居、いとむつかしけに立ち並びたれど、さすがに涼しき處がらなめり。東橋のあたり過くれば、にはかに世離れたる心地して、淺草寺の森の梢も近く目の前になりぬ。やゝ上りて三圍のわたりに船をつなぎぬ。人々出で、岸におるゝもあり、あつけきに、何かはとて船にとまりて見渡せば、堤の木々の風にうち靡くもいと涼し。筑波の山は晴れたる空に高くあらはれ、舟の帆かけは遠近の洲崎を上り下るも見ゆ。渡し船を見れば、ひまもなく乗りこほれて水にひたれるも、今や沈み入らむとあやふし。されどいとかるけに、向ひの岸につきぬるもをかし。たはれめなど乗せたる舟は、あつき避けむにはあらずやあるらむ、ところせくものゝ音うちならして聲はやりかなるなど、いとみだりかはし。かくて酒とり出でわりごなどうち開きて、のみくひつゝ心をやるに、すべてすべて、あつき名残なくなりはてぬ。

から衣つゝむにあまる涼しさをいざ舟ながら乗せて歸らむ



沖にあまた浮べるは、例の鳥なるにやとうちつけに目ぞとま  
る。

幾世へてすみだ河原の都鳥かはり行くせをなれも見るらむ  
かくいふ程に、おりたる人も皆来あひぬ。さらば今少し岸を  
離れて遊ぶむなど云ひて、かぢとりども綱をときぬ。棹さす  
まゝに、堤の人影も遠ざかり、家居のさまも、うち見るにい  
と興あり。かくて日もや、西に傾きぬ。このごろのをりもよ  
かなれば、同じくは月の出じほを待ちてこそなどいふ程に、  
早くもかやきいづるものか。あなあはれとうち對へば、今  
まで見えし四方の景色もながめうちかはりて、繪にも筆にも  
かきつくしがたきぞいみじきや。人々盃の数も重りぬ、夜も  
や、更けぬべし、さらば漕ぎもどしてむ、家なる妹がなど歸  
り心つけるもあり、さらばといひて戻しぬ。かへさは水にま  
かせたれば、楫取の勞もなくいとやすけなり。たゞ波の上は  
まことに金の龍のうかべらむこゝちぞする、その中を船のし  
づかに下れるさま、いかでか心のゆかざらむ、初夜過ぎぬる  
頃にもとの柳橋につきぬ。

夏日舟行

るさまなり、されば春秋といはず、皆人のめで遊ぶらむあた  
りに、處は少し離れたれど、かゝるしれごとをしもなすら  
む、いとあぢきなき事なりなどいふも、舟酔ひの酔ひ心地に  
くづしいづるさまに、をかしく漕ぎかへりぬ。

螢過窓

かたき文のこゝろを、思ひあきらめむと、文机のもとに數多  
の書ども置きならべ、燈火ちかくうちか、けなどする折し  
も、庭のわか葉にそよそよとおとなふ風の、いかにしてける  
にかあらむ、窓のうちに吹き入るよと見しほどに火は消えけ  
り。軒端にかゝけし燈籠もひとしく消えたれば、あなやと見  
いだせど、空は五月の宵やみなるに、松杉のかけいとをぐら  
く、何のあやめもわかず、手、たゝきなどすれど、わらはべ  
どもはねぶたきにやあらむ、とみに出でず。しばし見やれ  
ば、星の光かと覺ゆる物、しける木の間に二三見出でた  
り。この頃のあまもよに、いとめづらしくおほえければ、晴  
れにけるにやなどうち眺むるに、星の數そふよと見えしはあ  
らざりけり。螢の風にうちきほひて、たゞこゝもとに寄りく  
るなりけり。とばかりありて、軒端はさらなり、此方彼方に

いまだ涼みには早けれど、春の梢のなほ忘れぬに、四方の  
ながめも見がてら、此頃のうらゝかなる空の景色に思ひおこ  
して、またも隅田川にもものしつ。棹さしのほるほど、堤の木  
木は皆がら青葉が蔭となりはて、花のみ雪は跡なく消えは  
てにたり。ありし花の頃は行きかひの馬車しけく、いと騒が  
しかりしを、ひきかへ今日は靜かに、塵などいふもの露もな  
ければ、中々にしめやかなり。舟は波のまにまにさかのほり  
て、離れたる洲さきに暫し繋ぎぬ。筑波山、けふはいとよく  
晴れたり。西に向へば富士の山まで遙に見渡さる。川ばたの  
ねぶに水鶏のしばしば啼くがあはれと聞けば、席を帆にあけ  
たる舟の、ひたくだりに下るなどさへ、心ゆくさまなり。都  
にもて出づれば、むとくなる瓦なども、烟たてるかまどのさ  
まは一入見處あり。うしろを見れば、樹々のしける中に塔の  
見ゆるは金龍山なめり。この頃いかなるをこの者のしわざに  
か、なにがしの山のかたちを木もて造りて、塔にも並ぶばか  
りなるいといやしけなり、あなつきなしとこれにぞおほゆ  
る。この東の都にては、名たゝる川々もいとすくなきを、こ  
の隅田川のみぞふるき名所なるは更にもいはず、業平朝臣が  
都鳥の歌よみしもさすがによしありて、今しも思ひあはさる

飛びまがひて、窓のうちにさへ入るもあり、ほのかながらも  
書をさへ照したるなどいと興あり。よびにしわらはべども  
も、今始めて來り、ともし火はうちわすれて、團扇など持て  
來て騒ぐもをかしく、ともに立ちいで、なむ、しばしは書の  
上をも打ち忘れたりし。

觀月

月こそあやしきものにはありけれ、うち見るまゝに何となく  
心もしめり、かぎりなき千里の外の空をもしのび、見ず知ら  
ぬ遠きむかしも目の前に浮びて、そぞろに涙もさしぐみ、あ  
はれとうちひとりごたる、折から、空とぶ雁の聲を連ねて鳴  
きわたり、松吹く風の軒端を過ぐるなど、けにあはれなる極  
みなり。かぐや姫が月の都に歸らむ別れを、かねて思ひて、  
夜な夜な月に泣きけむ心の程さへ思ひやられて、はてはて  
は我が身もあくがれぬべくぞおほゆるかし。かく思へば、向  
ひの高殿には小簾高くまきあけて、琴笛の音に雲居をひびか  
し、をりをりは、さうかをし、今様謠ひなど、いと花やかに  
遊ぶらむよ。空飛ぶかりも歌の聲にあはせ、松ふく風もおの  
づから琴のねに通ひて、おもしろきさまなるもふと耳にぞと



まる。おなじ月の光も、見る人から斯くけしきの變れる。さは、あやしきものにもありけるかな。艶にも、すぐくもといひおきけむ、昔の人の言の葉さへ思ひしられて、いとこそいみじけれ。

對月言志

艶にも、すぐくもといひけむ、月こそけにあやしきものにはあれ。秋の夜のつれづれなるまゝに、とふ人もがな、と思へど、柴の戸おとづる、人もなければ、かたはらなる厨子の書ども、そこはかとなく取り出でて、ひろげもて行きつゝ、見るまゝに、窓のうち、俄かにあかるくおほえければ、立ち出でて障子ひきあくれば、いつしか月の立ちのほれるなりけり。あなやといふまゝに、書をば讀みさしてうち對へば、淋しと思ひし心も慰みぬ、うれはしとかこちしそらも、こよなくうち晴れて、けに月こそ人の心を慰むるものにはありけれと、とばかりうち對はるゝうれしさは、ものにもたとへつべくもあらずかし。わらはどもにおほせて、盃もてこ、肴はなくとなどいひつゝ、二つ三つ飲みもてゆくまゝに、月はますます澄みのほりにけり。机のあたり開きおきける書の上ども、

一むらの雲にはかにたち出で、月の面を覆ふも心ありてにやあるらむかし。

尋紅葉

きのふは海邊のかぎりあさりありしが、それとおほしき梢も見えざりしこそ、なごりさうさうしかりしか。けふは處かへて山へや行かまし、里をやたづねてましなど、いひしろふもさすがに興あり。やがてとに出づれば、ゆくりなくあけまきの來あひたる、見れば大なる籠に柴かり入れて、牛におほせたる中に、赤きがまじれる。めづらしくて、何處にさる紅葉はありしぞと問へば、このうしろの谷かひこそ、このごろいと美しうて、いはほも照るばかりなるを、知らぬ人もおはしけりと答ふ。いとうれしくて、うといふまゝに、そなたさまに物しつ、けに云ひしもしるく、そのあたり照りかやける木々のけしきたとへむかたなし。昨日のわびしさもうち忘れて、とばかりはながめ入りてをり。

觀楓

この頃下野國鹽原の山の紅葉いとよかなり、いざかしと人の

うちつけに晝の如くなれば、心もたゞうかれにうかれつゝ、始めにひきかへてそゝろに一ふしうちいでらるゝも、我ながらいとをかしきや。かくて、つらつら思ひめぐらせば、あはれ我が身もあまたの年は經にけり。この月影も幾よをかながめ來つらむ、わか、りし時、その國その里にて眺めたりし、その折はかくこそありしか、中頃のよにさすらひにし、その海邊にては、海人の苔屋にうちしほたれし、そのよの影はしかこそありけれと、千里の外まで残るくまなく思ひやれば、たゞその折の心地ぞせらるゝ。けにつもれば人のといひけむ老も、まのあたりかく攻めよりきぬるを、月の影はその折々に少しも變りやはする、今よりのちも又いかなる影をか見むとはすらむ、おもへば我がよも程なしや。年來おもひわたりしほいの事とは、何一つせしやうもなく、徒らに斯く數多の年月をのみ過し過して、珍らしからぬよにあり經るも、月の思はむ事こそけにやさしけれと、盃も暫しは前にさしおかれて、來しかた行くすゑ思ひわたせば、始めおもしろしとうち對はれし月も、いつしか袖の涙にうち曇りて、慰めかぬるつまとなりにけるぞはかなき。よし是もわれからなめり、思ひいらじと、せめて思ひかへしつゝ、うちながむれば、

すゝむるに、をといらへてやがてものしつ。道はいと遠けれど、かの蒸汽車といふものあれば、時のまに麓に至りつきぬ。それより分け入れれば、聞きしにもまされる處なりけり。のほりはいともしもさかしからねど、岩のかけ道など折をり絶えたる所あるを、このごろ洞門などいふを切り通せれば、さばかり人も馬もなつまず。道すがらながめやれば、こなたかなたの山々は雲井に聳え、谷の下水いといさぎよし。都にて思ひけるやう、山のくまぐま、谷の木かけなどにこそは、よろしき紅葉はあらめ、それをあさりて皆人の見るにこそ、と思ひしはあらざりけり。見渡すかぎり、おしなべて紅葉ならぬかたしなければ、さは、かゝる所もありけり、とうち驚かざるばかりなり。紅のかぎりなるもあり、黄なるがうちまじりたるもあり、松杉の枝をかはしたるは、青地の錦と見ゆめり。散りそむるもあれば、色つきそむるもあるなどくさぐさなり。大かた皆なしのまゝにて、とりつくるへるがあらざりければ、おのづからなる木々の氣色、山のたゞすまひなど、繪にもかゝまほしくおほゆ。をりをり烟の立ちのほれるは、みゆの湧く所なり。人々ゆあみせむとて、山の木かけ、谷のはざまなど、おりのほるも亦さらに興あり。處から一しほな



る紅葉のながめなり。年來都のうちにのみ住みて、かばかりならむあたりのありとしも思はねば、せばかりし心のくいも今更なれど、いとほぢがましく。

初霜

虫の鳴く音もいつしかとぢめて、梢の紅葉やうやう散りはつる夕ぐれ、窓うつ嵐のいとあらましきに、うちもねられず、埋火などかたへに寄せつゝ、秋のわかれも今更に思ひ出でられて心もたゞならぬに、よなかうちすぐるころより静になりぬ。しばしとうちまどろめば、はやう曉がたになりけり。鐘の音の常よりも冴えて聞ゆるはあやしと、やをら立出でて北窓を細めにひらけば、あなめづらし、垣根も草もなべて眞白にぞなりぬる。露おかせてこそ昨日は見しものを、俄におもがはりせる、はたあはれなり。ませのもとに、いまをさかりとうつろひわたれる菊の、おのれひとり霜にもけおされず、なほくれなるに匂ひ出でたるが、をりからいと興あり。寒きしもあさに、かいねりこのめる花の色あひおもほえて。

爐邊閑談

忘年會

年は忘れむとして忘らるゝものにもあらず、それを忘れむとすなる、いとあぢきなきことなり。人のこの世に生れしあひだの、長さ短さ、よきこと、あしきことも、この年をつみてこそは知らるれ。されば年こそ貴きものにはありけれ、わかかりし時はとあり、中比の世にはかゝりなど、思ひ出でらるるなが人には、皆此年こそはなるめれ。それをしも忘れむとすめるは、なさけ知らぬ人の心と、心なき人といひつべし。おほかたは、かゝるしれごとをいひ出で、酒のみ戯ぶるゝくさはひとするにこそはありけれ。されば如何に思ひて今日のまどひはするぞといふ。よくも問はれにけりな、この年よ、しのべども忍べども、はかりなく限りなきものにしあれば、いたく戀ふる餘りには、おもひもそこなはれ、心肝も、はた盡きぬべし。彼の貫之の朝臣が、女子の死にけるを歎きて、忘れぐさのしるしをたのめるも、ひたすらに忘れむとはあらで、またも戀ふるちからにこそはつみいで給ひにけれ。よしや忘らるまじきにもあれ、忘るゝ道あらば暫し忘れて戀ふる心をやすめ、またも忍ばむ力を養はむためにと思ひおこし

山里より、年の終の寒さふせぐべき料に、炭をしもあまたおこせたる。同じくはこれを火になして、人どもつどへて夜もすがら酒のみ、物がたりせばやと、これかれ呼びにやりつるに、思ひしごとくつどひぬ。花の如く盛りにおこしもて来て、こゝかしこに置きつれば、このごろの寒さも覺えぬまでぞなりにたる。さて、くつしもてゆくまゝに、あるは一年の早く過ぎぬるを歎き、あるは歌文のよしあしをあけつらひ、あるは過ぎにし昔の代々のありさまを今のよになぞへ、あるは目の前にかはれる人のよを驚ろきなど、ことおほかるに、夜も更けにけるなるべし。ほのほもや、うすらぎて、灰がちになりぬるさへをかし。わらはども呼びて又つがするに、程なくもとのごとくなりぬるも更に興あり。夜なか過ぐる頃より、風や、荒々しくなりて、星の光もきらめき渡り、月さへ軒端にさし入れば、うち見にはいと寒けれど、うちには隙なき火のかをりに、そら咲きの梅が香さへうちそひて、うちつけに春めきわたる心地するも、いとどのかなるよのさまなり。もろともに春まつまでは埋火の花のあたりを離れずもがな

て、人並に立ち出でたるにこそはあれ、ひたすらに忘れはてたらむ、いかにいひがひなからまし、されば今日のつどひにいますかる人たちとは、うらうへのたがひにこそあれ。そらおほれして其なかにしもまじりたるらむ、人めにはさらに變らぬなり。されば人も、えとがめたまはじ。きんぢが、斯く問へばこそは、しか思ふとだに云へ。おほかたのしれ人にはなきかぜそや。

歳暮

四十五と數多の年を送り迎へし折をりも、ひと方ならぬ歎きはせしかど、今年に似たる思ひはいまだあらざりけり。六十ぢになりぬるよと、われながら驚かれしもあはれ昨日ぞかし。春もすぎ秋もくれて、まだ何事も思ひあへぬに、いつしか歳の暮にもなりにけり。若かりし時おもひけらくは、七十は古より稀なりとしもいへば、けに得がてにこそはあらましか、せめては、曆の數の立ち歸るべき世をも見てしがな、と思ひしは今更をさなかりけり。今はまた七十をも待ちつべくや。さはあれ、年のみふくつけくむさほりて、何一つせしわざぞなき。いふがひなき身はさらにて、年來ものせし抄物の



残りをも書きをへ、後の世にも残さまじと、あけくれ、人知れぬ歎きのきりも、聊か思ひはるけてまし。さてなむ、つもれる年の數をも喜び思ふべき。さはあらで、徒らに年波をのみ面の上によちよせたらむ、かへりて松のおもはむ事こそはづかしけれと、常だに歎かれし年の終を、今更にとりかへすべく惜しむもはたはかなの心のほどや。

行幸を拜む

一人出づることたやすからずと言ひけむは、人の國のさたなめり。わが君天の下知看してより以來、萬の政を聞看すいとま、春秋の花紅葉につけたる御幸はさらなり、河邊に逍遙したまひては、すなごりするむらぎみにもまじり、野山に狩したまひては、いめ人にも行きならはしなど、おほん心を慰め給ふはさるものにて、賤が家居の佗しきをも親しく見そなはし、民の愁へにしづめるをもまのあたりきこしめさむとの、かしこき御心おきてなるべし。されば行幸のつらをもよろづことそがせて、ことさらにやつしたまふとはあらざめれど、すべていたづらなるかざりをとめたまひ、御供にも、みもとに仕へまつるかぎり、さてはえさらぬまうちぎみたち

をのみひきつれたまへば、おのづから世の煩ひもあらず、物の費、はたはぶかれて、諸人の喜びのみぞあるべき。古へのさかしき御代にも、おほんありきのついで、大路に拜み奉るをために、したしくものたまひしをり、その女、大君にますらむとは夢にも知らず、家に歸りてそのよし父につけて、始めて知り奉りしもあり。野山に若菜つむ子をみそなはしては、おほんみづから、その名を問ひ給ひて、われは天の下しろしめす君にますなり、われをこそせうと、はたのまめなどのたまひしふることのはも、今に残るめり。さやうにてぞ世の有様をもしたしく見そなはし、隠れたる事をもあきらめ給はむものぞかしな。かの六宮したがひ百司つかふ、といふらむやうなるは、うち見には、いともいつくしくたふときおほん有様ながら、國のおやとましまさむおほんつかさの上にては、なほあるやうあらまほしくやと、けふの大御幸のかたじけなさを、をろがみたてまつるまゝにするしつ。

允恭帝藤原宮に花を觀給ふかた

御衣とほりけむ、うるはしき御姿の光はさるものにて、今を盛りと咲き亂れたる花のもとにみた、しまして、帝の美しくいられさへして、われながら苦しう思ひなりぬるもかつはうたてし。かくうち過すほどに、ふとほかのことより思ひうつして、ゆくりなくさとり得られたる、さらにたとしへなし。さてもかほどのことわり、さばかりの年月われも人もなにかは思ひよらざりけむと、いとあやしきにつけても思ひがけぬ心地して、なごりなくこそ、心の行き侍りしか。

閑居待友

と見くらべ給へりけむに、かたみに照りかはし、匂ひあひたるは、千歳の後に香さへとまれる心地ぞする。后の御心をば帝も心ぐるしとはおもほしためれど、なほ捨てがたきものにおほしてや、さくらのめでとはのたまはせたりけむ。姫の御心、はた后をかしこみますものから、うみのはまものとは歌はせ給ひたりけむかし。さばかり花なる御心とも知らで奉りたまひたりけむ、后はたいかにくやしとおほしたりけむ、天曆の帝が、せちにこひたまひしを、いとほしみて、中宮の御妹をしも、かりにあはせまるらせたりけむにいとよく似たり。昔も今も、この道こそけにすべなきものなりけらし。かけうつしけむ井の上の水の心をくみまるらすも、いかにまばゆく、花やかなる御契にかましましたりけむ。

心ゆくもの

年ごろあんじわづらひける書のかたきふしを、とやあらむ斯くやあらむなど思ひこゝろみ、あだし書の巻ごとにも思ひ出でられ、人と物語らふ上につけてもいかかは心とまらざらむ。花のあした月のまへにも、このことの思ひ離れぬぞあやくなる。なほつひにさとりうまじきものにやと、はては心

世のまじらひを厭ふ翁あり、山の奥をば求めず、市中なる殊に賑はしきあたりに住みけり。門は葎ならで、いつもくる、かけがねにさし堅め、隣のゆききもたはやすくはせぬ家なり。されどおのづから來通ふ人ありて、とぶらへるがあれは、いと喜びてもてなしけり。かゝるあたりはつきななめり。片田舎などにもこそといへば、笑ひて答へず。さるは朝夕に書をのみ讀みて、折々はめのわらはなどに物をしへながら、酒をなむ好みてのみける。さても同じ心の友どち、久しくものせぬをりは、今日はなにかしが必ず訪ひ來む日なり、しかじかの歌をなむおこせたる。このごろ、よみかはしたる書どもの難きふしをば、よべこそかくして思ひ得たれ、何



の書の抄物は今日なむ書きをへつる、いかでとく逢ひて見せも聞かせもせましなど、たへがたけに見ゆるをりもあり。さりけれど、世のわたらひなどの事はすべて知らず、人聲のさうざうしきも耳に入らずやあるらむ、いつもいつも、心のどかになむ過しける。都の片ほとりに住みながら、朝夕に馬よ車よなどの、しりて、みかどまゐりする人の心とは、うらうへになむ。

名所松

おとひをとめとあひ並べて見たりけむは、藤原の御世の古へなり。われ見ても久しくなりぬとのたまひし。みかどのおほんうたにめでたまひて、大神のけぎやうし給ひしなどいと尊とし。秋風うち吹くからに、波の音あはせたりけむ、今も耳に残れる心地す。下枝を洗ひし波に、奥つ風を思ひやりけむなども、いとけしきあり。かけひたしつる渚もいつしか遠ざかりて、時世を経るまゝに今は岡べにぞたてる。桑田の變とはかへさまなるながめなり。梢のいたく神さびにけるは、岸の姫松などいふべくもあらずかし、あはれ今よりのち、はたいかゞは變りゆかむとすらむ、千歳の後まで思ひやらる、松

の上なりけり。

渡邊千秋庭園記

小舟よる芝の浦のあなた、旅人の宿かる品川の驛よりはこなたにありて、いにしへは「たかなはて」といひける、今はよこなまりて高輪とぞいふ。山かたつきたるあたりによろしき名所あり。前は海に臨みて大路につらなれども、波のひゞきに往來の音を消ち、うしろは樹々高くかさなりて、世の塵をへだてたり。そこに名高き楓あり、名をとへばかきりの紅葉とぞいふ。こゝはいにしへ徳川幕府のころ、世々の將軍の鷹狩のついでに、暫々此所にいこひて紅葉をなむ見ける。みともにさむらひける人の、よみたる歌の詞をとりて、しか名づけたりとなむ言ひ傳ふる。おのれはこの紅葉のさかりに、たまさかに此所に来あひて見しは去年のことなりき。岡めきたる所に、一本の楓のいと大なる、梢は雲を凌げらむさましたり。その梢、四方にひろがりて日のめはみせねど、色のうつくしく照り渡れるさまは、百千の錦をはりたらむがごとし。そのもとの大なる、枝ざしのふりたる、根などさ、けたる、幾百年をか経にけむ。かばかりなる楓は、この東のみさにと

いまだたぐふべきはあらざりけり。かたへに松の大なるがたてる、そのたけいくつゑともはかりがたし、そのふりたるさまは、神代のこと問はまほしけなり。もみぢに立ちまじりて、千代のみどりをうちかはしたるもいとめでたし。をかをすこしのほれば古井あり、大なる石を立てめぐらして、底には水いと清らに澄みたり。この水を汲みていつも將軍の茶にす、めし例とかや。されば早う林春齋の、そのよしかける碑もありしとか、今はいづちかもていけむ、たゞその跡のみぞ残れる。庭のさま、すべてたゞおのづからにまかせて、つくれる所あらぬぞめでたき。海を見やれば、安房上總の山々もただこゝもとに見えて、遠く近く、舟の行きかよふさまなど、すべてすべといふべきにもあらず。この家のあるじ渡邊ぬしは、いかなる幸ありてかゝるあたりをばしめたりけむ、これはた所の名におふかぎりなき恵の露をうけて、かぎりあるこの身のやしなひとせよと、神のたまはせたるならむかし。あなめでたのこの家所。

何がしの別業に遊ぶ

見入れの程おくゆかしく、中に池あり舟など繋ぎたり。うし

ろによろしき程なる山あり。その山のはざまより瀧おとし水はしらせたり。松などはいとふりて、これかれたり。あるじのすまひとおほしきは、すこし奥まりたるかたに、二むね三むねたてつゝけたり。をすひまなくかけわたして、うちのさまは見えぬものから、をりをりわらはのとに出づるがあるなどいとなれたり。心にく、見ゆ。偕もいかなる人の住めるにかあらむ、しばしうち入りてをなどいへば、いかでさはせまし、あるじの名も知らぬにといふもあり、またなにか、やさしけに住みなせるを、えとがめじなどいふいふ、門の開きたる方より入るもあり、さればとみなそのあとにつきてものしつ。至りて見れば、よそなりしよりは一きはまされり。水のおとなひ近く聞え、鳥のさへづりなども靜なるに、傍なる芝生におりてうちながむれば、はやひさごの紐など解くもあり、え制しもやらでとりかはせば、所から酔もす、みぬ。すまひのかたを見出せば、かなたにもはし近く眺むるなるべし、きぬのつまなどほのかに見ゆ。すこしは風も吹けかしと思へど、いと長閑なる夕ばえに、すだれも動かす。このまゝにて立ち出でむも心あさくやなど、酔心地にざれて、めのわらはの來るにつけていひやる。



あたひなきこの山水をくみそへてのむ盃のかすもまさりぬ  
かれよりも、なれて、口とく、  
おのづからせにおりたちてくむ人は酒の泉も盡じとぞ思ふ  
から歌の心をおもふなるべし。

後赤壁賦に擬ふ

神無月の望のころ、ある處を出で、家に歸らむとす。友だち  
二人ばかりいざなひけり。山坂にかゝれば、木々の落葉ちり  
しき露いといたくおきたり。わが影のうつるにおどろきて、  
と見ればはやく月ののほれるなりけり。歌ひかはしつゝ、行  
く。すでにしておもへらく、かくまらうどのありなむに、酒  
なからむいとさびし、酒ありなむにも、さかななからむ、は  
たさびしからまし、今宵の月いと清し、これをたゞにやはと  
いふに、一人の曰く、けふの夕ぐれに、釣して魚をなむ得た  
る、松江の鱸ともいふべきなりけり、おもふに酒こそなけれ  
と云ふ。さてしもあらねば、家に至りて妻の女にかたる。お  
のづから、かゝるをりもやとおもひてなむ、まうけ置きつる  
といひて、酒を取りいでつ。いとうれしくて、ふたゝ赤壁  
の江に舟をうかべつ。水のたぎつ音たかくなりまさり、山や

せいはほ聳えたるあたりに、月すみのほりぬ、ありし遊を思  
ひ出づれば、あはれこのごろぞかしと思ふに、そゝろに月日  
の經にけるも知られたり。舟よりおりて岸にのほりつゝ、虎  
豹のすみかとおほしきあたりをよち、虬龍の行きかふいはや  
だちたるかたをもあさる、いとものすごし。二人は舟にのこ  
りてから歌うたふ、聲いと高し。かくうたふにひゞきあひ  
て、草木もふるひ山谷も鳴りわたりぬ、これを聞くにもものさ  
びしくなりて、えあらねば舟にかへりぬ。ともづなをばとき  
はなちて、去るを波の心にまかせつゝ、酒のみかはす。夜は更  
けにけるなるべし、四方のけしきいみじくしづけし。かくな  
がむるあひだに、鶴一つ飛び來れり、翅などの大なるよのつ  
ねならず、鳴く聲いと長し、わが舟ちかくかすめて行くさま  
ことさらめきたり。家にかへりて、とばかりねぶれる夢に、  
仙人とおほしき來れり、羽衣など着たり。ありつるあたりの  
心地してうち對へば、かれ云へらく、赤壁の遊、いとたのし  
かりしはやと云ひけり。名をとへどこたへぬにて知りぬ、よ  
べ舟をよぎりて鳴きしは君なりけりといふに、うちわらふと  
見てさめぬ。もしやと思ふまゝに、戸おしやりて出で見しか  
ど、そのいにけむかたも知らざりき。

りなむかし。

琴

蒸汽車

ふみのつかさにて、ものゝ音のおやと定めたりけむは、今さ  
らいふべくもあらず。さうの琴、びはの琴など、からの國の  
ものにはあれど、おほん遊びのをりをり、まづなつかしきも  
のゝ音にとり出だされて、いとめでたきを、世の末こそは悲  
しけれ。今の世に、かのもてはやすめる三すぢの琴は、その  
かたちのいやしきはいふもさらにて、その聲いとみだりがは  
しき、それにあはせてうち出づめるうたひものゝさま、男、  
女の、みだりがはしきふしをのばへ、樂しきに過ぎては過差  
の心をとらかし、悲しきに過ぎては人の心をやぶりなど、太  
かたのよにつけて物のそこなひとなる事多きぞかし。しかあ  
るものを、世の末とて、さる器具どもをやんごとなきみうへ  
にも、うち聞かせ給ふ事となりぬるよ。おもへばおもへば、  
けにこそいとうれたけれ。また世に一すぢの琴、二すぢの琴  
とてもてはやすめる、これらは、いたき後の世の作りものに  
て、ふるること好む人の耳にはふさはしからねど、かの三すぢ  
のに思ひくらぶれば、そこなひもなく、うたのさま、はたい  
やしからねば、今の世のひきものには、ゆるさるゝかたもあ

むかしなかりしが今の世に多かるものゝ中に、あやしきはこ  
れかれあれど、心も詞も及ばぬは此の車になむありける。な  
る神よりもおどろおどろしくとゞろくに、ふと見やれば、や  
がて目の前を過ぐるもをかし。烟の細う残りて風になびきた  
るは、夕立はれてなごりなき空に、虹の掛橋うち渡せらむさ  
ましたり。笛の音の遙に聞ゆるは、早う彼方に行きつきたる  
なりけり。と思ふ程もなく、またこなたさまに走りくるは、  
けに定まれる時をたがへぬなめりとぞ見ゆる。道の長手をち  
ぢめけむ仙人の術は知らず、燒きほろほさむと言ひけむ人の  
心よ、いかばかりのなけきをかせられけむ。何がしの親王の  
佛の御石の鉢を要しながら、百千萬里の道を取りにえゆかず  
なりにしは、古への事にこそあれ。西の國にては、此の車か  
よはす道いたらぬくまなくつくり通して、たとへば蜘蛛のい  
のやうになむあるとぞ聞く。海の道はた同じさまなる船みて  
つゞけて、何處のはてまでもさはらず到るとし聞けば、今の  
世にしては何事の便もよろしく、あがる雲雀となりてしがと



願ひけむ人も、時の間に都のそらに至りぬめり。これは國しのぶ人のたよりなり。さらぬ別れのありもこそすれ、今一度とぶらひ見よと告げおこせたらむ、すなはち至りなむには、親のかほをもをがみつべし、これは孝ある人のためともなりぬべしかし。あはれ何につけても、開け行くめる世の姿こそ嬉しきものにはありけれ。

博覽會

上は帝后の御装束調度より、攝關大臣の家の具、年の内にありとある公事規式の時々えうする物、また物部の家にて世に名高き鎧、太刀、弓、矢、旗、指物、いまの世にむねとつかふべきつはもの、代々の宸筆、さては古へにきこえてかきの水ぐきの跡、ふるき文書。繪まきもの、家居の具足、飲食のうつはもの、また本草にあづかれるこゝのは更なり、遠き國々、高麗、唐土をはじめて、天竺西洋の國々の、名をだに聞きしらぬ草木のすがた、山のものにてははけしき獸、海のものにてはいかれるいをより、くさぐさのいろくづに至るまで、またかしこき獅子、熊のいけるさながら、大きなをるち、あやしき鳥などを、かひつなぎておける。あるは今

の人の、くさぐさに思ひをこめて造り出せる船、機械、はた物よりはじめて日々家にてつかふべきうつはども、また女のかしらのかざり、わらはべのもてあそびなどやうの物まで、すべて幾千萬とか、數をつくして並べ立てられたる、うち見るに目もあやにて、云ひつくすべくもあらず。かゝる事は、古も好古の會など名づけて、國々に物するはありしかど、皆いにしへにのみかたよりて今の世の物までに渡らず。そのむきむきにのみありしを、この博覽會のおき物はしも、いにしへ、今、遠き、近き、世界にありとあるものを一目に見せたるは、西の國にならひての事なりとか。かゝる珍らしき物どもを集めてたやすく見するは、諸人のさとりをひろむるに、これにます事はあらじとこそ。あはれこれを數十年さきになくなりし人に見せたらましかば、いかにめでくつがへらまし。われら、折々まかりかよひて見るすら、見るがままにいとめつらしく、あく時あらぬわざなるをや。この世に同じく生れてかゝる時にあへるも、かの佛のいふらむ優曇華の花持ちつけし類とやいはまし。何くれときたする言の葉もなければ、たゞありのまゝ、に一言を。

筆寫人心

鏡こそ目に見ゆる物をばうつすなれ。めに見えぬ心のくまぐまを餘りなくうつし出づるは筆にこそありけれ。さるは人の心のうちばかり、くま多かるものはなかりけり。しのぶ山通ふ道なき奥までも、明らかに寫しいづるは、筆こそけにいとあやしけれ。こひする人のはかなき片思ひに、あくがる、ばかりなる心をも人に見せ、うき事かなしき事に思ひあまりて、草にも木にも云ふべからぬをも文字に慰め、風雲もかやはぬ、千里の外なるあたりまでも、此のみちのみは、さはれる山川のなきぞうれしき。あはれ物書くことあらざりけむ昔の人は、いかに心のいぶせかりけむ。鳥の跡を見つ、うちまねぶにあはせて、まづ筆といふもの造り出でけむ人こそさかしけれ。繪の道にとりても、はた此のうつはこそ大事なれ。大空にかゝれる月日星の光、世界にありとある海山草木のたすまひ、めにちかき人の姿、家居はさらなり、目に見えぬ鬼神のかたちをさへに寫しいづめる。みな此の筆のはやしを硯の海のほとりにかまへ、しづかなる方にむかひて、言の葉の花さかすらむあけくれの樂こそ、千々のこがねにもまさり

ておほゆめれ。こがねは、盡くる世もこそあれ、これはしもつくる世あらぬ實なりけり。さる實を持ちながら、しりくはへがちなるおのがどちこそ、いとめいともかひなくおもてぶせなりけれ。

以人爲鏡

龜を以て鏡とするも、鏡に心あるにはあらず。われに心ありて、かれにうつしてかたどるなり。人を以て鏡とする、はたこれに同じ。かゝみとなるべき人、わがために心あらず。古人はさらなり、今の世の人とても、そのなせる行を見、そのいへる言の葉によりて、わが心をうつして、あととめもて行かば、いづれかまことの鏡ならざらむ。しかはあれど、今様の八つ花形のさきらめくなどは、うはべこそ曇なく見ゆれ、古代の鏡の、かけ消えて見ゆるにこそは、まことのその光はありけれ。鏡はよきもあしきも、かれに心あらねば、わがえらぶに依るものぞかし、擇ぶ心くらくして、徒らに影をうつしたらましかば、我がかたちも遂にはゆがみもて行きなまし。石甍姥いしむらめの作りましけむ鏡も、はじめの度のは、八百萬の神の心に叶はざりしぞかし、ましてうつせみの世の人の作り



なしたらむ鏡は、うつすべき人の心こそ大事なるべけれ。

植木をあきなふ辭

あたひ無きかと思へば、無きにもあらず、さらば有るかと思へば、定まりたる値の無き物こそあやしけれ。何がしの祭、くれがしの縁日などいひて、片田舎より、いろ／＼の植木どもを、そのあたりの道もさりあへぬまで、もて並べ置きてあきなふ。おのづから其の本草ようする人は、そこに出でてぞ買ふ。賣る者は、この値ひを言ひ増して賣らむとす。買ふ者は又その直をおとして買ふが世の常なれど、稀には値ひの高きいやしきにも係はらで、買ひもていぬるなど種々なり。松の木のいたくからめき古びて、片枝はなくなりたれど、切りすかして、つぎつぎしく作れる、打見にはさるべき家の軒端のものとも見なざる、が、あたひを問へば、こがね拾兩となむ言ふ。あなかやすし、とためらはず買ふもあれば、また櫻のいと木高き枝ざし四方に生ひ繁りてたゞならず、けに是こそは吉野の花の種ならめと思はるる、直を問へば是も拾兩とぞ言ふ。買ふ人の云ふやう、いと高し、一兩にまげよと云ふ。いな是はさるる物には侍らず、なほ言ひし直にこそ

すきに馴れて、後までも其人の上などの事は顧みず、さて遂にははぶらかすめり。これを思ふに、本草を商ふと同じ事なりけり。本草は情なき物にこそあれ、人は心あるものなるを、さる類に思ひあつかふ人こそ、けに心なけれとなむ言ひける。これは然る事の様なれど、買ふ者は、もとより何も思ひわかぬ目つづれば、答むべき限りにあらざるべし。なほ賣る者こそわろけれ。一兩の本草を五兩に賣れるは、買ふ人の眼のゆがめるなれば、それはせむ方なし。五兩のあたひ有る本草を、如何にみづから思ひおとせばとて、一兩に賣る事やは有るべき、その答は猶ほ賣る人のかたにこそあるべけれ。

兒童を諭す

魚も多かれど、まことの子となるもの稀なり、菴羅花多かれど、このみを結ぶことかたしと云へる譬もことふりにたれど、その多くの中にて、うをとなり、このみとならむ、いかかは喜ばしからざらむ。軒を並べて生れしみどり子の、乳をこひ、腹ばひ、歩み、物語るにいたるまで、そのさとりいづれか同じからざらむ。およすけもて行くまゝに、手習ひ書讀

賣らめと曰ふ。斯く言ひしろふ程に夜も甚く更け行く。賣る人の思へるやう、なほ賣りてむ、これを田舎に持歸りたらむには、いたき費なるべし、世の諺に、損をして徳を、と云ふこともあめれば、然れば賣りてむ、とて手を拍てば、買ふ者いとしたり顔にもていぬめり。さらば本草には定まれる直と云ふものは無く、大かた買ふ人と賣る者の心による事になむ有りける。あはれ本草を作れる人、また其の本草の上にも、たとしへなき幸と幸なきとこそは有りけれと言へば、かたへの人の云ふやう、似たるものこそあれ、此頃の仕官の様を見よかし、かたぢいかめしく、物言ひつぎ／＼しく、才などもすぐれて、けに是こそは公のみ爲めともなるべき人にあめれ、いかで彼れを我がつかさへ引入ればや、何ばかりの俸祿ならば諾ひてむやと、さるかたよりあない言はすれば、月に五拾兩を得むと云ふなり。さらば得させむとて引入れて見るに、思ひしには似てもあらず、何事もいと疎く、ろうなく、果はふようのものにさへ見なすめれど、始め我が過に引入れたらむ、人間もあしかりなむと、しひて思ひのどめつべし。また聊けなる俸祿にて引入れたらむ、思ひの外に心に叶へる、これこそは、いたきやつなりと思へど、其の始めのかや

むさまも同じくしていまだわかれず、や、人となるに及びて、一人は遊びの道に心をよせ、一人は物學びに心を入る、これぞ道のわかる、始なる。楊子のちまたに墨子の糸を悲みけむもこの時なりかし。つひに一人は高き位にのほり、世を政ごち、また人の上に立ちて物を教へ、世のためになることをつとむるからに、人にも尊ばれ世にもてはやさるめり。一人は世の渡らひをも失ひて、ふくろをかづき、ともびと、なり、あるは馬おひ、車を引きて、からく命を過すめり。生れしはじめ同じき者の、末をことにするは、如何なるいはれに因る事ならむと思はざるべからず。勉めよや、あごたち、怠りそや、さきんたち。

水鳥

水鳥どもの馴る、さまこそ、あはれなるものにはあれ。人にうときものにはあらねど、ともすれば驚きがちなるもかれが常なり。大井川にものせし時、水のうへ處もせきまで浮びるたる。つま呼びかはすもあり、はね打ちふるふもあり、友とむつる、もあり、岸のかたながめ出だせるもありてさまさまなり。おもしろしと見るに、水上より筏のあまた下り來れ



るが、や、近づきにければ、いかに騒ぐらむ、いつかたにかは立ち行かむとすらむと、目もはなたずまもりたるに、筏はひた下りに下る。さて水鳥どものつどへる中を漕ぎ下すに、すべて驚くけしきなし。棹とりなほせば、いささかたよるもあり。さしくだせば、あとよりむれて追ひ行くさまなるもあり。筏士の無心なるに、鳥もまた心やあらざりけむかし。人の池の面、わなはる塘のほとりなどには斯くやはある。なるれば馴る、物にもあるかな。人の心もまたかくこそはあれと、感ありてこそしばし立ちとまりしか。

思往事

ともし火をか、けて、つくづくと思ひ出づれば、かぎりなく變れる世をも見しかな。その折々につけて、心もはた千々に變れるぞあやしき。天保のすゑ、弘化のはじめなど、徳川の代もいまだ盛りなるころほひにて、ありなれたる政には何の心もあらざりき。嘉永、安政の頃より、こと國の事、世にこりけり。さるにつけては、やうやう世にもてわづらひ草とぞなれりける。はてはては上をなやまし、國をそこなふにも至れりけり。そのかみ思ひけるやう、あはれ古へは、みか

どこそ天の下の事はしりたまひにけれ。中ごろより幕府といふもの始まりて、君をば、ないがしろにすめり。これは、まことの道にあらず。いかで昔に立ち返らせてしがなと、はじめて我も人も思ひそめたりけり。文久、元治となりては、古き軍物語にこそは見つれ、ゆめにもまだ知らざりし戦といふこと、こなたかなたに起り、おとにのみ聞きつる矢叫びの聲さへ耳に觸れしぞ其の折はいとあやしかりし。それにつけても、みかどの御代を願ふは此の頃ぞさかりになりぬる。あるは異國の舟どもと戦ひ、あるは長門の國に討手の軍を起しなど、さまざまの事ありしなかり、さばかりかためたりし二百餘年の征夷府のおきても、くづれそめては龍田の川の濁れる名のみぞ流しける。かくても、いまだ祖宗のこゝろを思ひ、ひたぶるに誠をつくしけるともがらも、天の下半に過ぎにければ、たやすくはえ動かじものをと、誰も誰もうち思ひけり。慶應になりて、にはかに將軍の職を辭し、政のもとを朝廷に還しまるらすとのふみをば捧けたる。上にもやがて其の請を許したまひけるよ。天の下の人も、誰かは始めて打ちおどろかさらむ。おもはぬに伏見の戦にはかに始まり、きのふまで天下を打ちなびけし將軍も、朝敵といふ名おへるな

どは、おなじ世にあるらむ事とも思はれず。けに夢の中なる夢なりかしな。かくても、彼のいかでと願ひわたりしみかどの御代に、いつしか立ち返りぬる嬉しさは、やらむかたこそなかりしか。國々、ところどころをしれりし君たちも、皆みかどの御掟に従ひて其の所領を奉り、その下とある武士どもの、勢・猛なりしも、あるは物つくる民となり、あるは物うる商人となりなど、目の前に立ち變れる世こそ、けに思ひもあへざりけれ。よき事にはあしきことがこまれるわざとか、

寄道述懐

今となりては、異國のあやしき心さへうちまじりて、賢こそおほんうへをさへに、さたする者もやうやうありとか。人は自由おのがまにふるまふことわりあり。憲法は君の心におこなふものにあらずなど、心にまかせたることを云ふらむよ。今より後はた如何なるさまにか變りゆかむとすらむ。古へのかしこき代々の帝の、定めおき給ひけむ國の掟も、遂には亡びはてましと、かの憂かりし世さへ、今更にもものがなやと打ちうめかるゝぞわりなき。五十路にいさゝかあまりぬる身にさへかゝり。ましてさかしき老人も、いまだ多くぞ世には残りためる。如何なるおもひをかなすらむ。いとものとも聞かまほしくて。

かくしも道のすたれにたる世に、何を生けるかひにかは長らへまし、と思ふこそむねいたけれ。山の奥なるすみかと思ひ入る折なきにしもあらねど、引く電線いとのたよりにつけては、なほ聞えくる事こそ絶えざらまし。かしこき臣のみかどに立ちけむ世に生れけむ人は、物思ひといふ事知らでありけむ。うかりし世にありへけむも、かへりて忍ばしき事の多かるは、ひがめる心の思ひなしにや。日本は神のおきて給ひし道こそ行はめ。名も聞き知らざりし異國の道をしも、あが佛とあふぎをる人の心ぞかなしき。あはれわたくしのなけきならば、何がしの淵をも求めてやみなまし。亂れ世に生れけむ人の命のはかなさにくらべても、あまたまされる身と思ひなれぬこそは、けにやる方なき身のなけきなりけれ。思ひ入る山の奥にも引く糸のかかるうき世にうさ絶ゆべしや

古戰場を弔ふ

藤川に至りぬ。關屋のあとはいまだかならず。右のかたに松尾山、や、離れて左のかたに天満山みゆ。關が原のうまや



に至れば、連れる山々、桃配、南宮山など、木立ふかくしけり。慶長のむかしを思ひやれば、いとあはれなり。えも去りやらず、しばしうちやすらひて、と見かうみ・見つゝ心もたゞならず、其の昔おほえて何となくさしぐまるゝもかなし。石田三成が豊臣氏のおとろへをいたく歎きて、關西の大名どもをかたらひ、さばかり勢をふるひけむ徳川氏を打ち滅ぼさむと思ひ立ちけむ雄々しさよ。故太閤のみたまも、天がけりて如何にその志を嬉しと思ひ給ひけむ。軍のかちまけは時の運にありて、戦の罪にあらずとこそいへ、豊臣氏の衰へ行くべき時來れるはせんかたなし。さりとはた徳川氏の此度の軍、不義なりともいふべからず。居ながら關西の軍をむかへて、待ち戦ふべきにあらねば、こゝまでうちのほりけむ。さるかたにいみじき智略といひつべし。たゞ惡むべきは、かの松尾山にたて籠りけむ秀秋よ、おのが養ひ立てられし太閤の恩を忘れ、何の恨もあらじに、秀頼おや子の心をも思はで、ふた心おこしけむ。ことわりしらぬものゝふの習ひなりとて、あまりなる心ぞかし。其の日となりての戦は、此方彼方のつはものども、皆とりどりにかたきを引きうけて、更にひまもなし。矢叫びのおとは、こだまをひっかし、流る

る血汐は、山川となりて、戦たけなはになりけり。あるは進むもあり、あるは退くもありて、いづれともいまだわかぬものから、さばかり思ひ入りたりけむ心のほどもあればにや、ともすれば西の方進みざまになりぬ。よき頃なりとて、三成がかたよりとぶ火をうち擧げけり。かねていひかはし、南宮山のみかたに知らせつれど、更にこたへず。それをいかにと思ふ折しも、おもひがけぬに、彼の松尾山より、ひたぐだりにみかたの陣に打ち入るものか。年月かけてたばかりけむ心も、みな水の泡と消えはて、東の方の勝となりけむ。その時のありさま今も見ると心地ぞする。あはれうち滅されけむつはものゝ心よ、佛のいふらむ妄執ともなりぬべしかし。君おもひの誠、今はむなしと見なしたりけむ三成が心、さばかりと思ひやられて、いとこそいたましけれ。さるを、此ぬしの心のほどをも思ひたらず、姦臣ぞなど、あしさまに言ひなすらむは、いと心うき事なり。それも徳川の世のほどこそあらめ、今しも誰にへつらひてのあけつらひとか。けふしも此所<sup>こゝ</sup>に來りて思ひ出づるまゝに、甲ひがてらとぞ。

## 大和田慶子のみまかりける時の詞

今は限りのさまなりと人ども來ていふなり。うち聞くに、とみに物もえ言はれず、しばしはたゞ呆れてあり。さてあるべきならねば、行きて見るに、人ども物にあたりまどふ。ねたる所に入れば、屏風など立てめぐらして、はやく枕かへたり。顔におほへるもの、やをら引きあけて見るに、まだ昨日に變らぬかほして目はふたぎたり。うち見るに胸苦しければ、かたへにのきつ。こたびはとてもいゆまじき病なりと、くすしなども云ひければ、その心はえながら、さりとも神の御たすけもありなむ。かく長々と打はへたれど、この日比までは餘りことさまの苦しきもなければ、おのづからいくるやうもやあらむと、親の心には頼みわたりつれど、いにし十日の曉より俄に容體かはりて、藥などもとほらず。ものくふ事もやみて、時々苦痛の聲なども聞ゆるに、思ひたえたるさまなれど、今このごろ、かくあらむとはさすがに思はざりしをなど思ふに、せきあへる心地していはむすべもなし。袂をおさへて、しばしは家に歸りしかど、さてもえあらねば、また行き見て見るに、やうやう人どもこゝかしこよりつどひて、互ひに泣き歎きなぞす。これを見るに、聲をもあけまほしけれど、しひて、ねんじて、鼻うちかみなぞす。今は言ふかひ

なしとて、人どもあとのおきての事など何くれと云ふに、すべて物もおほえず、たゞ人のをらぬあひだを見ては、しのびに袖のみぞしほる。母も此の日比、よるひるわかす傍にのみ著添ひたりし物を、今はなき人になりぬなど泣きの、しるに、これもまたかなし。残り置きける二人の子を見れば、何事ともまだ聞きわかぬ程にて、さのみも泣きさわがぬぞなかなかに悲しさはまされる。子はまさるらむ、子はまさりけり、といひけむ、ふる言の葉を思ふにも、見捨てたりし親のこゝろ、いかばかりかは有りけむ、と思ふにいとたへがたくて、

をさな子をあとに残して別れけむ今はの心いかにありけむありし折々の事など思ふに、その時にはかゝりき、その折はしかりきなど、今のやうに面影に浮びぬるもせんかたなし。はうぶりの日は、朝とくより其の用意とて人々騒ぐに、何事もおほえず、たゞあきれて見つゝをり。時なりぬと神牀をまうけ、神たて、海山のものなど供ふるに、さらにまことの事とも思はず。ものもえ言はねば、たゞ歌をのみぞ心のうちによみいづ。

年月をあとに返してありし世の我が子のゑまひ見る由もがな



さめやらぬ夢をさましていつしかも眞になしと思ひ定めむ  
玉牀にいつくを見れば昨日まで我が子と思ひし名残だになし  
いまはとて此世のえにはつきたれど離れぬ影は親にそはなむ

河合菝子を悼める詞

文かく道に上手なる人はあれど、菝子刀自の如きはたやすく  
得がたし。おのれ刀自とあひしれるは、この文のつどひぞ始  
めなりける。その書ける文を見るに、けに今の世のあしきく  
せをさけ、中比の世の手ぶりをうまくさとりたり。才の程  
も、なまなまのはかせにまされるが、めづらかに思ひなされ  
しを、ことしの秋はかなき風にさそはれて、今はなき人の數  
に入りぬるぞあはれに悲しき。近き比は西の國風さかりに行  
はれて、女にも物學ばせ、からの、やまとの、文か、しむる  
公のおきてとなれり。さるにつけては女學校などいふした、  
かなる名をおほせて、こゝにもかしこも建てつらねため  
り。教師よ學生よといひの、しるが、書けるものを見ればい  
とふつ、かに、中つ世などは思ひもかけず、今の世のふりに  
もそむけるが多かり。さるに刀自は、その方にははるかにか  
け放れて、いさ、かも世に誦はず。むらさき、赤染の匂ひを

おひ、さらしな、いざよひの影をしもこひねがへるものか  
ら、そのあとになづまず、其の心をなむ深くさとれる。吉  
野、初瀬の花をたづね、越路の雪ふみ分くるなどは、女の身  
にてはありがたきを、刀自は西の國に生れてるながら、須  
磨、明石の名所をしり、東の旅に出で立ちては、富士の高嶺  
をながめなど、おのづから心のたくみまされるも、おほろけ  
にはあらざりけらし。それぞまことにをみなごの本ともすべ  
き言の葉ぞと、人ももてはやし、おのれもしかなむ思ひつ  
る。かへりて大かたには知られずなむある。すべて世の中の  
こと、まことの宜しきは隠れて知られず、なまものしりの時  
めく、昔も今もめづらしけなき事にはあれど、刀自にして世  
のかぎり時にもあはず、いまださばかりといふ年にもあらぬ  
に、世を早くせられにたるは、天地の神こそ思ふさますら  
め。空蟬のおのがどちにはいとあかず。いかばかりかは悲み  
をしまさらむ。あなしのばしきかなや、河合の刀自。

送別會の答辭になづらへて

都をはなれて、遠き伊勢の國にしも旅立つ事は、住み處もと  
めむともあらず。また身をえうなきものに思ひなしたるに

もあらず。されば、見るにさやけき方的の浦、これとさした  
る心あてなきが如くなれど、年ごろ大御神の宮に詣で奉らむ  
と思ひかまへし折から、その國の文ならふ人どもの許より、

社頭祝

しづまりましけむ神代の事はしらねど、山のた、すまひ、木  
木の姿はいふもさらなり、御社のさま、處から神さび渡り  
て、人のよの事とは見えす。みづがきのかたへに、櫻のいと  
大なるが、二本三本、梢は雲をしのけらむましたり。春ご  
との花の盛は、たゞ降りつむ雪かと見えて、はふりが舞の  
袖にもめぐらしけむ心地す。あるはおりる雲かとまがひ  
て、天降りましけむ其の世のさまも思ひやられ、あるは錦の  
とばりか、けて、まごこおふすまに包まれましけむためし  
も思ひ出だされたり。いく代を経てか人はうつり變りけむ、  
神はなほ昔ながらにめでたまふらむと、かしこくもうちまも  
られて、  
神代より幾代の春を咲き散りて花やむかしの香に匂ふらむ

文章會開筵祝詞

學の道こそ盛りにはなりにけれ。文かくわざは、とり立て、  
物する人も世にいと稀なりしを、時の來ぬれば、かく同じ心  
の友だちうちつどひて、今日のまるとるを開くこと、ぞなりに



ける。あはれ今より後、このつどひの絶ゆることなく、次々にさかりになりもて行きなば、源氏、狭衣のみやびをあざむき、さらしな。いざよひの上にも出でぬべき文ども、あまた出できぬべしと、喜びうれしみ思ふがあまりに、  
文このむ梅さへ匂ふ此の宿に今日のまといひのひらけぬるかな

長善館の開館式につらなりて思ふ心を

述ぶ

武郷まだいと若かりし程は、天保、弘化の比なりき。諏訪にありて、長善館に日々に物學びに行きかひしつゝ。文の道に、武士の道に、いそしみたりし間のこと、思ひ出づればあはれきのふの心地ぞする。はからざるに其の館もあとなくなりて、あたりは草むら生ひ茂り、あるは畑とすきかへして、そことしもたどるばかりになりけり。うち見るごとに夢かとのみおほえて、古へなつかしくありけるに、こたび此の東の都にしも其のかたをうつして、その扁額をさへもとの如くにうちたる。再びその世にあへる心地するも嬉しきものから、今はありし友どもも見えず、たゞわれ一人残れるが如きも、そゝるに感情に堪へず。しかはあれど、武郷が今日此の席

に列りて此のことにあへるも、老の身たもてるに依れるをなむ喜びぬる。故これを今日の賀辭にかへて、いさゝか思ふ心を  
年を経てあひ見る今日の嬉しきに長らへし身の善きを知るかな

某學校の卒業證書授與式の筵にて

ことたまのさきはふ國とはうべもいひけり。天地の開け始まりける時に、天神の伊弉諾、伊弉册の命によさし給へりし御言の葉の旨ふかき。伊弉諾、伊弉册の命の、女神、男神となりて、天の御柱を廻り給ひし時の御言の葉のすなほなる。あはるは素戔嗚命の八雲の御歌、下照姫のひなぶりの御歌など、一もじをだにあやまらず、八百萬の年を経て今の世に語りも傳へ、書きも傳へて誰も云ふめり。四方の海、萬の國、いづれの處にか神代の言の葉のさながらに斯く残れるやはある。こゝとたまのさきはふ國とはうべも言ひけり。しかるを後の世となりては、唐土、印度、西洋の國々の言の葉ども入りまじり來て、まことの道をかきくらし、たふとき神言も谷のうもれ木、世にあらはれず、みやびたるふる言の葉も、くもり世の月の、ありと知られぬばかりになむなりぬる。物きはまり

ては、もとに立ち返るべき理とかや、この一年二年は、御國の語をもて學の道たどらむもとにせよとのさとしおこれりけり。故こゝにもかしこにも、さる書讀みとく事となれるぞ嬉しき。されど久しく廢れにたる事なれば、さかしき人もなほ知りがてにすめるを、いかで其の本つ言の葉のまことのさまを傳へ習はしめてむと、思ひおこせるいづこはあれど、この學校やまつの處なるべき。はたして其のしるし有りて、去年の冬よりつぎつぎ教へおもむけし書ども語ども、みなよく心にうかべ、はらに味ふるばかりになりけり。いでや、そのよし記して、學べる人どもに授けてむと、今日よき日にこの處につどへて、あかち與ふるは、喜ばしき事のかぎりにぞありける。武郷はた此の處にたづさはりにければ、うれしさやらむ方なく、けふの筵の祝ひごとにかへて、聊か其のよしを述ぶるになむ。

老人を祝ふ

若き人をおほしめして、都のうち老びとのなくなりけむ世のためしはいとゆゝし。さかしきみかどの御世には、天の下に年老いたる翁媪やあると、召したづねて、古への掟

のありさまを尋ね問はしめ給ひてこそは、政をも行はしめたまひけれ。なのめならむ人だに、あまたの世を経るまゝに、は、おのづから目にも耳にもとまるふしどもすくなくらむやは。まして心あるきはとなりぬれば、何くれにつけて、古へはとあり、其の折はかゝりと、まのあたりに思ひくらべて打ちかよはしなむに、世の中のこと、鏡にかけたらむにひとしかりぬべしかし。かの七の翁がまとるせりけむも、やまと、もろこし、めでたきためしに引出でぬべく、こゝの、兒らがまけてやみにしも、吳竹のよの言の葉に残るめり。おほやけのよつぎが、もゝとせあまり五十ちの齢かさねてこそ、かしこきみかどの御つぎつぎ、世の治り治らぬをも明らかに語り傳へにけれ。目の前の理をのみ云ふめるあやしき夷の教などにこそ、ふるきをばおとしめ云へれ、もろこしにも、人はふるきをたふとぶ、などいへる本文ありかし、まして神代の道理をもとゝして、立て給へりけむすべらぎのおほん國には、なほ老人こそ世にまたなき寶なりけれ。あはれ今より後も、老人のつぎつぎに世に残りて、昔のりを忘れざらむ事をこそ教へ傳へまほしけれとぞ。何がしの翁が、つもれる年のほぎごとし給ふと聞きて、それを祝ひがてら、その筵につどひ



て聊か思ふ心を。

男子うませたる人を祝ふせうそこ

かぎりある人の身に、限りなき大事をなし侍らむする事は、いと難かめるを、子うまごと、つぎつぎにいたづきもて行き侍らむには、遂に大なる一つのいさををも立つべきものになむ侍る。されど、そのうみの子のなき人こそ、いとさうさうしきを、こたび生まれ給へるちごの、男にてさへおはするは、年月いたづき給ふめる御學のすぢにとりては、いかばかりかほと、御心のほど思ひやりまらせて、こゝにも嬉しくなむ。たゞ、む月のいただきもちひのほど、才學はちぢになど、いかに心のかぎり祝ひ給ふらむと。推測りまらせてなむ。このうぶき、いとなれて待れど、

年の内はいまだ巢だたぬ雛鶴の風をよくまの袖としもなれとぞ。むらいの罪はみゆるしたまひてよ。十二月の十七日。

岡谷きわ子記事

上野國邑樂郡、館林藩主秋元家に世々仕へて、其の家の老を つとむる林庄左衛門成昌といふ人ありけり。後に恪齋といへ

り。それが子を友紀といふ。友紀の妻の名をきわといふ。これも同じき藩土岡谷喜兵衛繁正といへるが二女なり。いとけなくして父を喪ひ、母に従ひてその家に養はれけり。其の兄を繁實といふ。これも同じく世々家の家老の家なりけり。きわ幼き時より世にすぐれてさどく、何事も人にまされけるが上に、かたちはたいとよかりければ、かの友紀に思はれて、年十八にして其の家にとつぎにけり。いもせのなからひもいと睦ましくてなむありける。かゝる程に、元治慶應の間、朝廷と關東との御事おこりて、天の下の人心二つなりぬ。この館林の藩主秋元志朝ぬしは、長門國萩、藩主毛利定廣後元徳しとは、兄弟にてありければ、關東よりも一きは目をそばだてつゝありけるに、藩の内の人々も、あるは東につき、あるは毛利氏に心をよせなどしけり。さるを時のおとなにありける岡谷繁實は、もとより重きことわりをむねとして、心を朝廷によせたりければ、しばしば關東の疑をなむうけたりける。されどそこに少しも心を動さず、人々をいざなひて尊王の道をかたく守りつゝありけるに、かの林氏、またその餘のともがらは是に従はず、心を東によせければ、藩のうちおのづから二つに分れば、火水の勢をなむかはしける。友紀

の妻きわは、その中にはさまりていとくるしき中にも、夫によく仕へ、父母の怒をやはらけ、兄繁實の事に蔭ながら心を傷めつゝなむありける。その後いよいよ關東より萩の討手むけむとしける時は、繁實ひそかに君の命をうけて京都にのほり、時の大臣執政などに事はかりしけるが、その事行はれず。遂に元治元年十月に罪せられて、その國のとははれとなりぬ。かゝりければ、林氏のともがら時を得て、勢も盛になりけり。繁實は重き罪ありとて、家の祿をも取りあけられぬ。きわの悲み言はむかたなく、たゞ涙に哽びてのみなむありけれど、人に對ひては更に色にも出ださず、ますます能くその家に仕へてありけり。

明治中興の御政行はれしより、藩をやめ縣を置かれにししかば、さきの武士たちもみな民と一つになりて、この林氏も商のわざを始め、同じ國の並木町といふ所に家をうつつして、石きる工どもを集めてそれをあきなひけるに、日にしたがひて賑ひけり。妻きわも、もとよりさかしき女なりければ、あかくれにその商の事どもを物に書き記し、何くれと取りまかなふにつきなからず、いと能くその道にも堪へたりしかば、家もよく治りにけり。月あきらかならむとすれば、浮雲の隠せ

るためしとかや、この石うる業を治めける頃より、同じ國の梅原村の民に、野口長四郎といふ石工あり。これを林の家に雇ひて、商の事ども打ち任せけるに、このもの始めはいとよく勵みて、その業もはたいたれるものなりければ、おのづから其れにつけて商もひろまりにけり。さるからには何時となく驕れる心いで來て、よからぬ事どもたび重りけり。されど友紀親子は萬に見ゆるしつゝなむ過しけるに、この長四郎さる悪しき心のうちに、何よりもあるまじきは、あるじの妻きわのかたちよきにぞ思ひかけたりけるこそ事のおこりなりけれ。さるはこの男、今年三十四になりぬ。きわは、三十七にて、盛りはや、過ぎにたれど、もとよりよろしき聞えの有りければ、この男見そめしより、やる方なく想ひこがれしなるべし。しばしば其の心を通はしけれども、さるかたにいと正しき女にて、いかでかは従ふべき。ある時はことよく云ひのがれ、ある時はあるまじきこと、いたく恥ぢしめなど、萬につけて遠ざければ、このしれもの、いみじくいきどほりて、はては親子、妹脊の中を裂きて、女に恥を與へむとなむ思ひ構へたりける。その後何時となく、きわの爲いと苦しくはしたなきこと、やうやう出で來ぬ。いと堪へがたく、さり



とて人に語るべきに有らねば、心一つに裏みあまりては神佛に祈りけり。いかでこの男の、かゝる心やめ給へと願ひつゝ、ありふるに、わびしき事いとつもりて、今はこの身のやらむ方なく、いかにせむ、夫友紀に此の事つけたらむには、よからぬこと出で来ぬべし。ありありて家のため身のため、いみじき恥みむよりは、死して操のほどをも世にしらすべく、このしれものゝ、いとにくゝ、めざましき恨をば、天翔りても思ひ知らせむと思ひなりぬるこそいとあはれなれ。ひとまをはかりて書きける文の詞のあらまし、

すべて、わらはが心をさなきよりして、かゝる事に立ち至れるなむ、言はむ方なき事なりける。さるは彼のしれものが、たくみなりとはつゆ知らで、さいつ頃、この家の雇あけて、わが家へ歸らむ折には、よろしき衣あまた着せて給へなど言ひしかば、それいとやすき事なり、與へてむといらへしかば、さらばそのこと、一筆なりとも物に記してえさせよといひける、何心なく書いて與へしことありき。その後人見ぬをりには、より来て、わが言はむことに従ひてよなど、たびたび云ひたりしかど、さる事たはぶれにも聞き入れず、きびしくこぼみしより、いたくいきどほりて、この事あるじに告げ

もしたらむには、いみじき恥みせて、わが身はいかなる罪にもあたらむなど、恨み言ひける折もありき。さてその後も、なほさまざまに言ひよりしかど、つゆきゝ入れぬ所より、なき事をつくり出でて、わらはと父上と、あるまじき事ありしを見たり。それを、人の口かためむとて、よききぬを與へむ、人にな言ひそといひたりしにはあらずや、そのしるしの書、えさせたりしは忘れたりやなど、思ひかけぬ事しこしらへて、わらはを責む。この事人に云ふべきにあらねば、神佛に祈り、かれが心のうち和らぐ折をなむ、萬につけて願ふより外の事なかりき。この春の比かとよ、かのもの夜中に庭の中に忍びてたゞすみをりしを、父上の見つけて怪しみ怒り給ひしも、妾つねに心ありての爲業なりし事はしるく侍り。その後はとかくにわらはがつれなきをにくみて、この事必ず報いせむなどをりを云ふ。その顔つき、更にたゞ人とは見えす、ものゝつき添ひたらむ心地して、いと氣おそろしく、身の毛もよだつばかりになむ。この事ありのまゝに告げまゐらせたらむには、この家の恥かゝやかさむ事も出で来ぬべく、命いきて恥みむよりも、かれを殺してこの身も死なばやと思ひめぐらしても、女の身にては思ふまゝにもえはたすまじ

く、うちもらして中々の恥にもなり侍りぬべし。思へば猶わが身死するより外に道あるまじく、且は死して此の恨をかれが身にはらさばやと思ひなりぬるも、けにせんかたなき心の程と見ゆるしたまへ。

など、いと多く書いて、それをば深くものゝ中に隠し置き、かんざしに小さく結べる紙のはしに、この書き残せる文ある事をするしおきて、明治十三年八月九日の午後九時ばかりのことなりき。人まをうかゞひて心づよくも思ひ立ちぬるものか。一尺二寸ばかりなる刀を取り持ちて、おのが寐どころながらに、みづから咽をさし貫かれにけり。家の内の者どもは、をりふし外に出でしもあり、あるは夕べのをし物のあとの事などに心入れて、くりやの方に離れ居りしもありて、さらにかゝる事とは夢にも知らざりけるに、きわが閨の方にありたりて、いたくうめく聲の聞えしかば、しもづかへにてありし女、いぶかしと思ひて急ぎ行きて見るに、きわが鼻のあたり、おびたゞしく血にまみれたりしかば、怪みてやゝと驚かしけれど更にいらへもなし。こはいかにと大聲に叫びければ、その時にぞ家の内の者ども皆みな馳せ集りにけり。さて見るに、何かは堪へてあるべき。咽には刀を鑿もとまでさし

貫きて、さきなほ深く腹のうちまで突き入り、兩手はいたく血に染まりてをり。夫友紀もあからさまに物へまかりけるが、驚きあわてゝ立ち歸り、とりあへず醫師を呼びなどして、萬にあつかひけるに、早く息は絶えはてにたり。いはむかたなし。さてしもあるべきならねば、そのよし司につぶさに聞えあけて、なきがらをば其の里の善長寺といふに葬りけり、一家の歎き悲みなどいふも愚なり。かの長四郎もひとやにめし入れられて、たびたびの責ありければ、始めこそかく言ひのがれて、まことの事をばあかし申さゞりけれど、遂に罪におち入りて、三年の懲役といふ事に定まりにけりとぞ。これをつらつら思ふに、女の身こそいと悲しきものにはあれ。いかなるまがごとにか、かゝるしれものにしも想はるる身となりて、はては命を捨つるなかだちともなりにしことよ。かゝること、昔も今も多かめれど、きわがかく潔き死を遂けたるは、古へ袈裟が夫の命にかはりしためしにもはぢすとこそいふべけれ。さてもなほ、かのしれものが行末いかならむとすらむ。死したる人の魂も深くおもひ入りたりけむ。このまゝにしもえあらじかし。今こそは見めなどみな人いひあへりとや。



はけしかる岡のやかたの霜の夜に立てたる心松は見すらむ

### 今昔宇治抄序

人のすまひのまことのよきあしき、その内にすむらむ人の、心の奥の深さ淺さをつぶさに探らむとならば、中門、寢殿、對、渡殿、むねむねしきさまをのみ見たらむには、更にえうかがはじ。かくれの方なる庭の木立たかくすみなし、池の心ひろく水まかせたる、または築地の處々ゆがみたる、柴垣のやつれたらむ方に葎生ひしけり、鳥蟲ゆたかに栖ませたらむ有様などにこそ、住む人がらのみやびもしられ、心深さも思ひやらぬべけれ。古のふみ讀まむにも、この心ばへなくてはあるべからず。正史のむねむねしきは、うるはしき方こそあれ、あらはれたる世のさま、人々の心ばへ、都・鄙の狀態も大方にこそしらるめれど、かくれたるくまぐまは知る由なきを、中頃物語といふ一種のふみありてこそは、よきがよく、あしきがあしきは更にも言はず、うち見には、天下能く治れりと見ゆるも、中々にと、のひ難かりしさま、その代に當れる人の心の正しと見ゆるも、却りて下の心のゆがめるなど、まことに鏡をかけたらむが如くなるべけれ。かつは正史

は男文字してかきすぐめたるが、物語は女もじに書きやはらけたる、文の上につきても能く知らるゝ事なりかし。なかに今昔、宇治の物語は、中古の世がたりを大かた残さず、よきこと、あしき事、をかしきこと、いまはしき事のきらひなく、雲間の月のもるゝかたなく、軒の玉水つづつと書きしるされたる、さるかたにとりては此の二書にまされるはあらざるべし。久米大人、こゝに思ひとるかたありて、一つには其のかみの有様を知らしめ、一つには文かく人の本にもなれかして、さるべきかぎりぬき出で、すりまきになし、あまねく人に讀ましめむといへり。おのれも早うさること思ひつきてはあれど、何くれと事繁くて、えものしあへざりしを、いちはず思ひ立たれたるは、喜ばしき事の限りになむありける。あはれ今よりこの二書の世に知られて、誰も見やすくならなむは更なり、文かくさままねばむにも、これにまされるしるべはあらじとうち思ふまゝに、いさゝか筆とりてはしがきにかきしるしつ。

### 榮華物語序

はやくの物語は、竹取、うつほを始めて、いつれもたゞ世に

ありとある面白きこと、あはれなる事どもを取り集めて、古歌のこゝろにあはせ、あるは作者のこゝろと作りし歌をもまじへて、すべて女わらはの慰みに書き出でしものなるを、この物語はしからず。御世御世にありしことも、帝后の御上、攝關大臣の事どもまで、そのありしさまをつぶさに書き出でられたるは、まことに一機軸をかまへ出でたるにて、これにつぎては、おほやけの世繼、續世繼、さては保元、平治の物語などなるべし。されば今世にしては、詞花言葉のもてあそびのみならず、はかばかしき六國史につぎたる宜しき公さまの歴史とまをすべきぞかし。むかしより世の人ともすれば源氏物語のこゝろ言葉の麗はしきをのみめで、この書のかゝる貴き故よしあることをも思はず、これをば二の町となむなすめるは、いともあたらしき事なりかし。然るに、今し史學さかりに世に行はるゝにつけて、おのづから此の書の心をも講じ、人にも教ふる事となりしは、誠にしかあるべきことにて、作者もはた本意ある事と思ふべからむかし。そもこの書の姿は、かの源氏などにならひて、なべてを女ぶみに書きつゞり、其頃宮仕せる女房の書きたるさまに物して、宮中のみそかごと、家々のいさゝけごと、女どちのことどひさま、

きぬの色あひなど、よろづこまやかに書きつゞけたるがうへに、人々の心のくまをもおしはかり、心ばへのあはれにふかけなる、いかなる人の作りしならむ、ふるくは藤原爲業朝臣なりといひ、あるは赤染衛門なりともいへる、いまいづれともわきがたきが中に、その文詞のたをやぎたる、心のめゝしきなどよりいはず、赤染のおもとの方ともいふべけれど、又しか見もて行けば、おもとにしては時代のうちあひがたき論もあり。爲業朝臣としては、文詞のをゝしからぬなど、いづれがいづれともわきがたし。さる考どもはおきて、この物語よまむとするに、今のすり巻は文字の脱けたるやゑりそこねたるや、またいつとなく文の誤りこしなども多くありて、とにかくにすがすがしくはえ讀みとき難きを、こたび其の誤どもを正し、この全書の例として、みやび言葉の、今の耳には物遠き、心のきこえかぬる事どもをも、かつかつ頭にしろしたる、思ひ立ちいとめでたし。かれその功をものするついでに、いさゝか此の書につけるゆゑよしをも言ひこゝろみたるになむ。明治の二十四年四月のなかばのころ。

### 大鏡序



ふりにし御代御代のさまを、さながらに語り傳へて、世と共に長く遠く忘れざらしめんとては、昔は語部かたりのといふものをさへ置かしめ給へりけむ。さるを、からぶみまる渡りこしこのかた、ふみといふ物を先に立て、語言をばのちにしたりき。それはた世のいきほひにて、たよりに従ふわざならめど、其の世のさまをまのあたり見聞が如く心得むには、人の國の言葉にて識せるふみの上に尋ねべきやうぞなき。豊崎、大津の宮の頃は、もはら其のからざまをのみむねとはせしからに、上つ代の事をさへ、それに似せむとしるしなほせるものあり。家々の書、はた史らが心のま、につくり改めて、やうやう飾れる事もいで來、いつはれる事も多くなりけり。清見原のみかど、是をいたく愁へまして、稗田の阿禮にふるこのま、をおほみ口づからのりごち給ひにけり。さるは上つ代のあとは、この言葉ならでは傳へがたく、はた傳へたりとも、そのまことを失ひたらむには中々なりと、かしこき大御心におもほしめしたりけらし。奈良の大御世にいたりて、其の大御ことのま、を、太朝臣にするさしめ給ひしは、世にかくれなき古事記なれば、是をしも誠に正しき御國風の書とはまをすべし。さればその古事記を本として、御代

御代のをも記さしめ給ふべきを、日本紀を始め次々の五國史といふもの、何れもした、かなる漢風にするさしめ給へるにつけて、かへりて古事記はかたへになりて、一たびは世にさるもの無きが如くにさへぞなりにける。然るにこの大鏡は、さる世の好みにもならず、御國言葉をもてありの儘に御代御代のさまをしるしたるは、古事記とはつくりざまこそは變りたため、うるさき漢風をのぞきて、誠のかたをつ、ます隠さず、よき事あしき事、つぶさにのせたるは、古事記につぎて中々に正史とまをすべしかし。つくりざま、はた榮華物語などのやうとは異りて、すめらぎの巻まき、大臣のまき巻とくだりを別きて、そのかたさまのすぢをむねとしるし、文のさまめ、しからず、たてたる心はた雄々しきは、すべて其さまを得たりといひつべし。此の書あまねく人に讀ましめたらむには、うもれたる皇國の風をも知らせつべきものぞと、久米ぬしの常に言はれたるが、こたび其ふみの寫しひがめたるを正し、あやまりを改めて、よろしきすり巻としもなしつるは、まめなる心のほに現はれたるにて、けにいさをしき事なりかし。今より後はうもれしふみの世にあらはれ行くはさるなり、清見原のみかどのかしこくおほした、せ給ひたりけむ

大御心のすゑもとほりて、古事記につぎたる史の世にありと知られ行くべき時の來れるなりけりと、よろこばしさのあまりかくなむ。

### 歐洲紀行序

世の人並に、知らぬ世界に旅立つことは、かの文明とか口ぐせに云ふらむ其の國のふりまねばむともあらず、その國王のおきてを慕ひて、まつろへるにはもとよりあらざるなり。さらば何の爲の旅行ぞと人いぶかるめり。おのが思ひ立つよしはことなる故こそありけれ。さるは我が神代の傳を見よかし。かの國々は、伊弉諾、伊弉册、二柱のなしたまひし國にもあらず。しほのあわの、おのづからに凝りなれるいやしき國なるはさらにて、その始は民草のところどころに出で來にしを、水草をおふとか云ふらむ様に、此方彼方にさまよひつづ、一むれ二むれと、遂には村里をなしたりけむ。されど衣食を教ふる神もあらず。すみかはた此處彼處、木のうつほ、土のむろやに栖みたりけむを、年月経ればさすがに人の道をも知り得たりけむは、さやうにたしなめる中より、かへりてつとむる心は盛りになりしなり。亂るゝ世は盛なるが如し

といふらむたとへの如く、物のす、みもいそぎたる、はたとわりなり。わが御國は、萬こと足らひて、あかぬことなきま、に、おのづから勉むる心うすく、おこたりがちにぞなれる。さて遂にはかの國々のあなづりうくる様になりこしも、いひもて行けば國がらのこよなきによれるぞかし。さるを今、まのあたりにかの國の盛なるさまをのみ見て、何事も及ばぬものと思ふらむ世の人の心こそいと愚なれ。されどおのれはた行き見しさかひにあらねば、なほ彼の國々のまされるやうやある、またその古き神代の傳やあると、そのこと知らまほしさに思ひおこし、なれば、かの今の世の物事の、さかりなるさまをばうらやまず、見むとしも思はず。かくれたるかたにて、人のえ知らぬ國ぶりをしも、あなぐり見おかむとての業なり。もとより世には盛衰といふこと離れぬことわりにて、かのえびすどもが幸つきて、遂に衰へ行きなむも、今よりおよび折りつべし。はた獨りわが御國は、さるいやしき國どもと、今こそ肩をも並ぶべけれ、後には皆みやつこ國とまつろへ給はむものぞと思へば、さのみ世人の如きあらぬ歎をもせず。さりとて、その國々の古今のさま、詳しくしるし置かざらむには、後に傳へて、その折はか、り、その人こ



そは、早くその世にしかいひ置きたりけれと、後にはた思ひ合すべき由あらねば、かくは思ひ立ちにしなり。今の世にしては、いかに程知らぬ言草の根に人のいひなすらむ。今より千歳五百歳の後には、此のしるし置けるふみ、また明らけき鏡ともなりなむかし。

木芽説

花のあした、月の夕べはさらなり、むつまじき友だちの來あひたる、昔の人に珍らしく逢へる折など、何よりもさきに取り出でたる、いとつぎつぎし。今の世のならばしにはあれど、この物なからましかば、いと手づ、にぞ覺えなまし。くだものなど、はこのふたにとり据ゑ、盃もて出なむにも、まづ此のものをあらまほしけれ。かくまでなつかしきものを、いかなるをこのものか始めむ、茶の式とか、傳來とかいふ事をいひ出でて、物好みするものは、何がしの釜、くれがしの茶入など、くさぐさの物の具どもを遊び、すきとかわびとか、あやしき名どもをことごとしく言ひ立て騒ぎて、われ人に劣らじまけじと、茶會などいふ事をし、その定めのみさりおとりを評じ云ふめるこそ、いとかたはらいたく、この

もの、ためにも、いみじきそなひなるべけれ。かゝれば心あるきは、昔も毀茶論など書けるがありとか。さはあらで、いとみやびに、心靜かに飲みかはしたらむには、いかにめでたからまし。酒は人の心をも慰め、やしなひをも助くるかたはあれど、その程にすぐれば、いみじきそなひもまた多きを、さるかたに人のむつびをたすけ、心を靜かにあらしむるは、茶のいさをもまた捨てがたきかたなるべし。

國體論

蘇我のえみしが、さかしまごと思ひかまへし時に、漢直らまのあたが其のかたうどしけるを、をしへおもむけむとて、天地の始より君臣の道ありといふ事をしも、しめしたまひにけり。いみじくもさとしたまへる道理かな。けに君臣の道は開闢の始にこそ定りにけれ。かの國つちいまだ浮きたまよへる時に、大空に葦牙の如きもの燃えあがれり。これをものざねとしてこそ、國常立尊をはじめ、伊弉諾、伊弉册の尊もなり出でませりけれ。その伊弉諾の尊の御子に、天照大御神はあれまし給ひにけり。その大御神は、今のすめらぎの大御祖よ。これを思ひ奉らば、まづ君の御すぢの、天地と共にあれ出で給へ

ることこそ知らるべけれ。この時、いまだ青人草といふものも何も世にあらざりけり。その人草よりもさきに。君のみすぢのまづあれいでたりしは、君の御國なるしるしにあらすや。さればこのただよへるくにつくれとしも、いざなぎ、いざなみの神に、天神の仰せ給ひしも、青人草まことにもとならば、君のおほん種をしも、まづおほしたまはじかし。君ありてこそ民もありけれ。これぞ國の大本なりける。さるること國のさかしらごと世に行はれてより後は、天立國爲民也などいふことをさへ、正しき道のやうに言ひ立て、かにかにあけつらふめりし、古き竟宴の歌に、

葦かひのなみのきざしも遠からず天つ日嗣の始めと思へばとぞよめる。あしかびをしも、天日嗣のもと、心得たりけむ昔の人もありけり。五百歳よりさきの友なりけり。千歳よりさきの友なりけり。

歌人論

ものは、盛なる時にすぐれたらむよりも、衰へたる時にあたりて、その道を失はざらむこそたふとかるべけれ。古への御世御世はさらなり、藤原、寧樂のおほん時こそ、和歌の道の

さかりなりとは申すべけれ。其の世に當りて、人鷹、赤人などいへるこの道の聖いましけり。けにその道には古へ今をかけたるすぐれ人と申すべきなれども、盛なる時に當りて出でられたるは、その世にありてはおのづからしかもありぬべきが如し。弘明天長の頃となりては、上の好みにならひて、かろうたさかりに行はれ、わが敷島の道、あるか無きかになりもてゆきつ、ほとほと地をはらふにも至れり。さるを其の時に當りて、世のさまに諂はず、やまと歌に心をよせられたるは、野宰相、在納言、さては僧正遍正、ほり川のおほきおほいまうちぎみなどこそは、ひとりなほ此の道を能く守られたりと申すべけれ。中にも業平朝臣、小野小町、いせの御など、いとめでたき歌よみなり。これらの人々こそ、道の衰をもておこしたるいさをは、人丸、赤人にも恥ぢずと申すべけれ。仁和の帝この道を好み給ひしより、下もおのづから其の風に靡きにけり。延喜の頃に至りて、再びこの道さかりになりもて來つるまゝに、貫之躬恒のぬしたち出でられたる、けに古へにもや、立ちまされりけり。この御時にあたりてこそ、すぐれたる人々もあまた出で來にけれ。されど其の盛りをその世に見つるは、かの衰へたりし世に守られけむぬした



ちの遠きいさをとぞ申すべき。さかりなる時にすぐれたらむは、けにめでたき事にはあるべけれど、衰へたる時に當りて、古へのさまを失はすいませしけるぬしたちこそは、さはいへどなほこの道の聖とは申すべけれ。

國文の利害を問ふ主司に代る

近きころ、かなの會といへるがおこりて、假名もて萬をしるす事を始めけり。かくてやうやうにこれをおしひろめむには、おほやけ、わたくし、すべて書きと書くふみをば、悉く假名にしたらむには、いとたよりも宜しく、からもじのかたきふしをまねぶいたづきをさへにはぶきて、そこばくなる世の別益なりと云ふあり。さるをまた漢籍好む人は、いたく是をしりぞくめり。古へより行はれこし文字を、今俄に假名のみに替へたらむに、更に世の益あらじ。その始めは、人國のものにはあれど、年久しく人の心にしみつきためれば、おのづから此の國の物となれり。便だによくば何のにくむ處かあらむ。かつはこれを學ばむにも、昔よりその法あれば、さのみいたづきもいるまじ、かへりて假名にてもものしるさむこそ、ことは多くくだしく、たよりあしかめれなど、互に

さむといはば、いみじきひがごとなるべし。もし古へに及ほさざらむには、から書まねぶいたづきも亦捨てがたかるべし。また漢籍にふける人の思ふ心もいかなり。古へのことはとまれかくまれ、今より後はこの假名もてしるしたらむには、いとも便よかるべく、かの六國史はさらなり、あがれるよの書ども、漢文なるは、その漢文の潤色といふもののおのづからそはりて、まことの旨を失へるが如し。今にして、古への事をつまびらかに知りたきは、漢文なるが故なりけり。此の事は我が古學の先師たちの、つぎつぎ言ひ置かれたることども多きを、からぶみ好む人は、おのがかたにのみゆがめて、その害を知らぬなりけり。もとより人の國のことばを以て、わが國のことを記すべき理ことわりやはある。いつこにさる國かはあるべき。いと知り易き道理なれども、ゆがめる心は俄にためがたきなるべし。さらば今より後は、この假名もて萬の事をしるし、上はみかどのおほん上より、下はいやしき賤の男のしわざ、又そのことどひ、又そのよのありかたなどまでつまびらかに記しおきなむには、千歳の後に至るとも、今の、古へを見るが如くにはあらず、いと明らかなることなるべし。かく定めもて行きなむには、古への事知らむに

おとらじまけじとあひ挑むめり。おのれは、いかしほこの中取りもてる中臣にはあらねど、其論どもをことわりて曰く、是皆おのが好むところにかたよれる説なりけり。まことの正しき論にはあらざるなり。さるは彼の假名のぬしたち、いかに世の中を假名のかぎりにせむと思ふとも、古へ神代の御書、すめらぎの御代御代の御史、律令格式の書、國々の風土かける記、すべてあがれる代の文は、悉く漢文にもものしけり。今おしなべて是等を假名に改めむとすとも、ひとたび漢さまになりし文を、もとにかへさむ事いとかたし。まして假名かく人には、又そのくせもありて、しかことごとくは改め得べくもあらず。中々に古へに遠きこともありぬべし。たとひ如何に能く書き得たらむにも、漢文にもものせしものと文ども、今にしては捨つべからず。残り置きたらむ限りは、それを讀むべきすべならはで、はたえあらめや。學ぶいたづきはたなからであらめや。これは古き書どもを能く讀みたらむ人ならは語るべくもあらず。ただよこ紙やぶらむやうに、古書をも悉く假名になさむ、なでふ事かあらむなど云へる人とは、ともし論じがたし。かなのぬしたち、今より後の人をいざなはむ心は、さもありぬべし。それを古へにも及ほ

は漢籍まなばずはあるべからず。假名文字かく道、はた學ばずはあるべからず。これをにくむはわが寶をすて、人の國の寶をえうするにひとしかりぬべし。かつは今の世にしては、人ごとに漢文まなぶべくもあらず。まして今日の事いとむ賤の男、賤の女、また山がつ、村ぎみらが、さることにひま入りなば、おのづからなりはひをも失ひてむかし。さらばこれをば物學ぶ人の上として、なほ大凡の人は假名もて世間のことを記し、世間の事を心得たらむには、便よきことならずや。世には昔今のわきあり。高き、短き品ありて、ひと様ならぬをもいはず、おのが好むところに、なべて引き入れむとする、中道を失へりと謂つべし。しかればからぶみまねぶ道、捨つべきにあらず。また今より假名もて萬を記しゆかむ、いとよきことなり。かなぶみつかはむに、上下の間にさるることなき道理なり。たれもたれも、進みて此の道ものしつべきことにこそ。

大鏡を見ておもへることども

入道殿下のありさまを申しあはせばやとて、年老いたる者どもうち集ひて、ことさらに語り出でけるこそ、まづいとあや



しけれ。しかあなちに出でずとも、今の世の事なれば宜しきほどのもの、誰かは大かたに知らざるがあらむ。それをいはむとて、おほしき事はぬは、けにぞ腹ふくる、心地しける、かゝればこそ昔の人は、ものいはまほしくなれば、穴を掘りては云ひ入れ侍りけめなど、こと様なるなげきかな。世の中の攝政關白と申し、大臣公卿ときこゆる古へ、今の時の入道殿の御ありさまのやうにこそはおはしますらめとぞ、いまやうのちごどもはおもふらむかし、されどそれさもあらぬことなり。といへることゝもよ、過ぎにし昔のことならばこそはあらめ、まのあたり榮えますらむ人を、さやうにことごとしくくづしいで、はらふくる、歎きをなし、世間の人をしも今やうのちごなどおとしめいへる、あるべきことかはな。さればその言の葉のうちに、はやく入道をしりぞけて、世間の人のさる老狐にしも欺れをるはかなさを、夢うちさましたるものなりとは知られぬめり。さるは其かみ帝をもないがしろにし奉り、わがまゝに振舞ひつゝ、時の勢ひありけむ人を、あらはに言ひ出でたらむには、いみじき罪にあたらむはさるものにて、さては中々に世にもたはやすく聞き入るべからねば、入道の榮をおもてにたて、したにはけしかり

らぬ心ありしさまを、そこはかとなく書きまぎらはしつゝ、心深くしるし、書なれば、ふと見たらむには、かの榮華の物語にも、けぢめわかれぬが如くなるべきぞかし。その中に、小一條院の東宮のがれ給ひし御事をしも、この入道の萬たばかりつゝ、おしてとりさけまるらせしやうだいを、なにがしが詳いくうけたまはれるさまに、つぶつぶと語り出でたる、これは入道の何の榮花にかあらむ。いかに世に幸あるさまのことを、心ゆくまで語り出でたりとも、かゝるあさましき心ありなむには、いみじきぬす人のなりあがれるにもひとしかりぬべし。まこと入道の榮をしも語らむとならば、更にかゝる事しるすべくもあらじかし。人の思みて言はねばこそあれ、今の世にして語りおかすは、つひに知る者なくやならましと、世を慣れるあまりにこそ、あなの底までも深くも思ひ入りたりけめ。さるしれものに、はかられてをる人をしも、今様のちごとは云へるにこそありけらし。されば此の大鏡かき出でけむ人の心は、いみじうさかしう、後の世までも深く思ひ至りけむとぞ、思ひやらるゝかし。二條后と業平朝臣とのうへを語り出で、末の世まで書きおき給ひけむ、おそろしきすきものなりかしな。いかに昔は、なかなかけしかり

る事も、をかしきこともありけるものとて、と打ちわらひけむみづからの上を思ひつゝけてかたり出でたりけむ。けにけしきことにて、いとやさしけなる心にこそは。

二荒紀行

明治十八年

八月の十六日。この頃の残れる暑さをも避けがてら、年來おもひわたりし下野國二荒山にもせむと思ひたつ。友とする人は小中村の義象なり。その日の午前八時ばかりに上野にいたりぬ。こゝより宇都宮といふあたりまでは、蒸汽車の通ひあれば、往來もたやすし。されど車の内ながらは、いづかたもよくは見やられず。たゞとゞろく音のみ耳にひびきていとうるさし。この日しも空よく晴れたれば、暑きことかぎりなし。窓のうちに日影のさし入るにあはせて、人ども數多あひ乗りたれば、いぶせさものに似ず。からくして、午後二時する頃宇都宮につきぬ。そこにてものたうべて、車にて出でたつ。道すがらいとあつし。とくじらといへる宿過ぐる比より、いづくの山々も雲にかくれて見えななりぬ。

ふたら山夕立すらし玉くしけおほふ日かけの雲のさわけるかくいふうちに、俄につよく降りいでて、道さへ川を流すば

かりなれば、車もなつみて、え引きやらす。まだ早けれど大澤といふ驛にやどりぬ。夜もすがら雨いみじう降りて、なれぬ旅なればいといふせし。

十七日。夜あけがたに見出せば、空いとよく晴れたり。あけはなる、頃に立ち出づ。今市の驛近くなるころ、遠き野末より朝日のかゝりやき昇るさま、目もあやなり。しばし今市にこひて日光町につきぬ。こゝにてあないの者とりて、霧降の瀧見にもものしつ。大谷川を過ぎて、右に沿ひて、なほ遠く分け入る路なり。小倉山などいふを過ぎて瀧のもとに至る。こゝまでは一里半とぞいふ。谷をへだて、向ひの峰より落つるを見る所なり。水上にて二つにわかれて、右のかたなるは障るものなく斜めに下まで落つ。左なるは、なかばにて岩にせかれて、左に折れて、それより横さまに流れおつ。なほ能く見むとて、谷の底なる木の根をつたひ、朽木などのたふれたるをくゞりて、瀧のもとまでからくして至りぬ。見れば、上にて見たるとは又ことにて、瀧のしぶき、水烟の立てるさまなど、霧降の名にたがはず。

天にます神のいぶきの末なれや雲居にかゝるきりふりの瀧もとの道を下りはて、こたひは東照宮の廟を見むとてそな



たにもものしつ。大谷の川にかけたる入口の橋を神橋といふ。こなたかなたの岸の巖そびえて、水はさをにたぎち流れたる。それにかゝれる橋、丹塗のうるはしき目もあやなり。かかる山の中にいとつきなし。

青淵にすめるみづちもおどろかむ耀やき渡るさにぬりの橋この橋、古へは山菅の蛇橋といへりともに見えたり。さらばみづちもすみぬべくや。右の方の入口に本宮の社あり。これは式内二荒神社の御子神なりとぞ。や、のほりて左の方に満願寺といふがあり。こゝはもと御本坊と云へる所にて、今もそのあと残り。徳川氏の、おのが家の行末をあやぶみて親王を申し下して、祖先の祭に仕へ奉らしめたるさへあるに、かゝる山の中にもおはしまさせむ、そのかみ思ひいでらるゝに、涙もとゞめかたし。それより石の大鳥居を過ぐれば、くさぐさの樓ども堂ども、あまた立ち並びたり。陽明門、唐門、拜殿、本社、奥院など、凡てこがねしろがねをちりばめたるさまは、かねてかばかりこそはあらめと思ひし心には、さしもおどろかれます。よしや驚くばかりなりとも、すへらぎの御ために、まめならぬ臣のあとと、めたらむみや居は、さらになつかしからず。北條氏のあとにならひて、先帝

りに出でたつ。きのふ渡りし大谷川をわたりて、ふたゞび彼の宮の鳥居のあたりを左さまに過ぎつ。音にきこえし裏見の瀧は、道よりは二十町ばかりのまはり云へれば、あないものして其方にと趣く。道より右の方なる山懐に深く分け入りて、水の流に沿ひつ、行けば、川のほとりに家一つあり。そこにて持ちたる物などみなあづけて、わが身一つを出でたつ。これより上は道いと細くさかしく、木の根草のかつらなどまつはりて、をりをりは踏み分けたる跡さへなき所あり。七八町も登りたらむとおほしきに、轟く音きこえて、むかひに瀧見えたり。瀧は三筋ありて、中なるを裏見の瀧といふ。さし出でたる岩の上より落ちくるさまいとすさまじ。左なるをあひ生、右なるを白糸の瀧といふ。中なるは瀧の幅もいと広く、左右なるよりは大なり。左の方なる瀧のものと巖をつたひ登りて、からくして中なる瀧の中程とおほしき處に、横さまにのほれば、巖にくほめる處あり。其處に至ればはやく瀧のうしろなり。いとめづらし。真向より見れば更にありとも見えぬに、さる處のありて、人のたゞすみ居らるゝもあやし。岩もる水は袖をひたし、瀧のしぶきは身におほひきて、今や千尋の底にもさそはれむと、いとおそろしきを、しばし

を遠き嶋にしも遷し奉らむとかまへけるよ。いかなるよき事世に多かりとて、この臣の心の底ひは思ひ知らるゝかし。かかる事いふはあしと人の云ふらめども、この日記など、人に見すべきものにあらねばとて心やり。それより左のかたに離れて、二荒山神社、是は式内の御神なればいと尊し、されど此の御やしるも、かのあたりにけおされて、たゞ末社の如く思ふ人あるらむといとかしこし。それより又離れて大猷院の廟あり。これもいさゝかのかはりこそはあれ、大かたは同じさまなり。そもそもおのがこたびふたら山にしも思ひ立ちしは、世の人並に斯かる廟どもを見んの心はさらに無けれど、こゝまでものしながら、彼の人たちのあとをしも忌み避けたらむ、はた何の武き事があらむと、人にしたがふ心はもたらねど、いさゝかのもの興へつれば、その宮守どもは、もとより何の心も無きものなれば、よろこびつゝ、心得がほにさき立ちて、あないなどいとはしくするもをかしけれど、ねんじて伏しをがみなどすれば、はては守の御符えさせてんなどいへるは、にくくなるもさすがにをかし。くりかへし又さかしらごとせらるゝよ。四時すぐる頃にやどりに歸りぬ。

十八日。中禪寺より湯本までものせむとて、午前五時半ばか

見るほどに、あないのをのこは、巖の上いたゞのほりに、又しも登れば、おそろしながら、あるやう有らむとあとよりたどり行けば、聳えたる岩のはざまに出づ。不動の像すゑたり。かたはらに昔の修行者のすみけむ菴室など、朽ちながら残り。かゝるあたりにても法師の徒は、命をすて、荒行などするよと、さすがに感おこしぬ。さてこたびはまた右の方なる岩ほを傳ひて、おそろおそろ、一足ごとに踏みしめつゝ、下れば、遂にもとの道に至りつきぬ。かかる危ふきありきは、年老いたるものゝすべき事はと、人のもときもこそすれと、その時は思ひしかど、女などの物するをさへあとにて見しかば、はじめ思ひしはあらざりけり、と後にぞ思ひなりぬ。されどその折は、いとおそろしさに歌もえ詠ますなりぬ。たゞかのたゞすみし時。

落ちたぎつ瀧のしぶきに拂はれて身さへ飛び散る心地こそすれと心のうちによみしをあとにて思ひ出でつ。たち歸りて、清瀧村、馬返村などを過ぎ、大谷川を彼方にわたる、こゝより上は道いとけはしく、坂ののほりいとくるし。や、登りて、水澤村といふに女人堂といへるがあり。昔は此處より奥には女の登ることをえゆるさざりしが、近きころよりゆりにたり



とぞ。道はますます峻しく、劍の峰といふ所に至れば、谷を隔て、遙に瀧二つ見ゆ。般若の瀧、方等の瀧といふ。そこに家あり。しばし尻うちかけて見る。景色よし。其處を出でて、またさかしき坂を三十町ばかり登りて、はじめて平なる處に至る。道より五六町ほど左に入れば華嚴の瀧あり。この瀧のさま、いきほひ物に異なり、ひとつきいと大なる岩を、刀なども下さまに削りなして。並べたらむさましたり。心も詞も及ばず。瀧はその岩の上より、ひたくだりにさはるものなくぞおつる。その長さ七十五丈とかや。更に水などの落つるとは見えず、たゞ雪などの、頭の上になだれか、るこ、ちす。音は百千の巖の一つに崩れ落つるが如く。なかばより下は、水烟四方にたちきらひて、石つほに落つるあたりは目も及ばず。そこに岩燕とて、よそになき小鳥あり、そのけぶりの中を飛びちがひ飛びかけりて、木の葉を散したらむやうなり。この瀧は傍よりも能く見ゆれど、なほ例の危きかけ路を下りて、木の根にまたがり枝にすがりて、こなたの岩の上より瀧つほをのぞく處あり。そこに至れば瀧の眞向にて、殊にけしきよし。されどいと物すごく、眼もくるめく心地して、そゞろ寒ければ、久しくはえ堪へて又のほる。さ

てもこの瀧こそは、まことに二荒山にならびなき大瀧には有りけれ。水源はこの上に湖のあなる。その水の一つにあつまりて、流れ下る所なれば、その勢はけしきはさるものにて、色のさをなること、藍もて染めたらむにも濃さまさりつべし。これぞこの今日處々にて渡りし大谷川の水上なる。かゝるすぐれたる所々を、法師の徒が心のまゝに、きたなき佛さまの名を負ふせ、般若よ華嚴よなど、つけつるこそいと心つきなけれ。されど人はいかに思ふらむ。長歌一首をよむ。  
音にきく華嚴のたきは 名つけたる故こそしらね  
天地のなしのまにまに 並み立てる巖を分けて  
ひた下り落つる其のさま 見あぐれば雲かともがひ  
見おろせば雪とふりつゝ 石つほにくづるゝ水は  
よもやまに烟を散らし やまたにを動かす聲は  
千萬のいかづちなして 見の極み聞きのことごと  
うつせみの世の人みなの こゝろさへ目さへ及ばず  
あやしくもくすしき瀧を 法の師のなにのさかしら  
そめ紙のけがしき名をば おふせそめけむ  
かくてもとの道にはかへらで、たゞちに中禪寺へ出づる道あり。湖を左に見わたしつゝ行く。かゝる荒山中に、うちひら

けたるうみのけしき、山々の遠く近くなみたてる姿、凡て言ひつくしがたし。繪にかゝまほしくおほゆ。ひろさは東西三里、南北一里とぞいふ。海の面は鏡の如く、水の色はさをに清くして、いさゝかの塵もなし。濱邊につくれる家々は、目の下にうみを見やりて、いづこもいづこも景色いとよし。なへの崎、くれの島など遙に見ゆ。中禪寺、今は中宮祠といふ。これぞ二荒神の本つ社なるべき。法師の徒が日光三社權現。また補陀落山中禪寺など、あやしき名を負せしを、近き比改めたりとぞ。されどなほ髪長どもも軒を並べて、何の觀音など云ひて、いつきををこそいまいしけれ、長歌みじか

歌。  
玉くしけふたらのうみは 眞木のたつあら山なかに  
さは水の流れたゝへて あを垣の山をめぐらし  
しら雲の影をうつして かがみなす澄めるみづ海  
浦見ればささなみ清く には見れば舟ぞ浮べる  
沖なかのかみつけ嶋は 水の上に根ざしをとどめ  
神のますあけのいがきは やま松の木ずるにはえて  
うちわたし見渡すきはみ とりよそふ四方の景色の  
あかずもあるかな

あゆみ行くみちのまにまに湖のかはる姿のめづらしきかな  
ふたゞびも見むと思へど二荒山ゆく道さかし海もはるけし  
それよりうみべに沿ひつゝ行く路には、樹々ども生ひ茂りて  
いとしづかなり。その木の間より、をりをりうみの見やらる  
るもさらに興あり。うみを離れば、右のかたに川にそひ  
つゝ行けば、龍頭の瀧あり。これは高き處より落つるにはあ  
らで、川のなだれに坂なしたる處を流れる水の、石にふれ  
巖に碎けて、おつる勢のはけしさ、龍頭の如くなればしか名  
づけたりといへり。秋は紅葉のよろしき處なれば、紅葉瀧と  
もいふなど人かたる。行き行きて廣き野原に出づ。二里四方  
もありといへり。秋の草花、今をさかりに咲き亂れて、すゝ  
きの穂に出でたる、女郎花のうち靡きたる、藤袴のかをれる  
など、見なれぬ目にはいとおもしろし。このあたり、二荒山  
のいたゞきたゞこゝもとに見ゆれど、なほ登らむには三里餘  
りもありといへり。その野を過ぎて、山々のせまれる處に坂  
あり。その坂をのほりて、はやしに分け入りて、すこし左に  
折れて見れば、また大なる瀧あり。湯の瀧と云ふ。この瀧は、  
今ゆくさきの湯本のあたりに、湯の湖といふありて、その水  
の落口なり。これも高き處より二つにわかれて斜におつ。瀧



つほのもとにおり居て見れば、岩の中程に大なる木あり。それを左右に分れたる水の、末は一つになれるなど、いと見どころあり。湯湖は、廣さ十四五町あるは二十町ばかりとかや。彼方此方にたわみめぐりてけしき異なり。道はその海にしたがひてつくりたり。深山木のいと大なるが苔むして、幾千年をか経たりけむ、かたへは折れ伏せるもあれど、伐りとする人もなし。木陰の道は日影も見えず、をぐらくしめやかに。それより七八町ばかりありて、湯本に至る。こゝはゆあみする人の多くあつまる處にて、軒どもあまた立ち並びて、さる山の中には似ぬ、よろしきつくりの家居も見ゆ。湯はあまたありて、それぞれに家をつくりかけたり。男女のわかちなく、心々にあみたるさまいとらうがはし。かくて暮方に其處に着きたれば、やどりもとめて憩ひつゝ、おのれも湯あみてけふのつかれをわすれぬ。

十九日。けふはなほ湯本にありて、終日のあみす。夜になりて月いとよく晴れたり。

二十日。けふもなほ同じ處なり。例の長歌みじか歌。

玉くしけ一荒のおくの 道もなきあら山なかに  
みゆこそは湧き出でにけれ そのみゆの出づる口々

むと思ひやらる。

二十日。けふも同じ處なり。

二十一日。朝とく湯本をたちて、もと來し道に立ち歸る。日光ちかくなるあたり、路の傍に大日池といふあり。大なる清水わき出でていとさぎよし、大日堂もあり。それより又少し下りて、川を左へわたりて願滿が淵といふところを見にゆく。こゝは大谷川の流のいたく迫れる所にて、大なる石どもに觸れて、水のいきほひ殊にはけし。向の岸の巖に弘法大師のゑりおける梵字と云へるが今も残れり。また護摩たく所などもあり。地藏の像などあまた立ち並びたり。心のとまるふしなし。見しまゝにて本の道に出づ。五時ばかりに今市につきぬ。

二十三日。午前六時に出でたつ。十一時ばかりに宇都宮に至る。午後三時過ぐるころ、蒸汽車にてこゝをたちて、九時に上野につきぬ。月いとあかし。車にて家に歸りぬ。(明治十八年八月二十四日しるす)

御嶽山紀行 明治二十四年

八月八日の日、大和田氏と共に、多摩郡なる御嶽山に登らむ

数々にしなことなるを うしはける神の御代より  
人草のやまひのためと そのみゆのその品々に  
いえぬべきみち定めけむ あみとあみきと來る人の  
その病いえぬあらねば 老いたるもめの童子も  
遠近のへだてをいはす やま川の遠きいとはず  
くるますらかよはぬ道を 年ごとに時をたがへず  
つどふもろ人

鏡なすみやの水うみ底きよしみそぎしがてらあみて歸らむ  
姥の湯といへるを、

あたたまるみゆのしるしは姥の名の山懐に入ればなりけり  
笹の湯といへるもあり。

夕ぐりのさやぐ霜夜も寒からじ底あたゝけきさゝの出湯は  
夕ぐれになりて、向の山よりたゞこゝもとの軒端まで、おり  
くる霧のけしきなど、山里の秋のけしき、いとしめやかな  
り。

ゆふ霧の降りくる軒にあらそひてみゆの煙ののほる淋しさ  
こゝに來りしより、すべて暑さをば忘れはてぬ。朝夕は涼し  
さ過ぎて、秋もなかばすぐるころのけしきなり。空の日々に  
いとよく晴れたるを見れば、都には如何なる暑さをかわぶら

と思ひたつ。つとめて家を出でて、車にて新宿に至る。そこにて六時五十分の汽車に乗る。よべはいたく雨ふりければ、いかにと思ひけるに、引きかへ、今朝は空よく晴れたれば、四方のながめよし。中野、境、國分寺の驛々を経て、立川に至る。こゝにて下りて、車をやとひて青梅の方へともものしつ。十町あまりも行けば、普濟寺と云へる寺あり。こゝは眺望のよろしき處なりとかねて聞きつれば、立ち寄りて後の庭に至る。けに聞きしにたがはぬ處なりけり。西の方にあたりて、山々の連れる中に、この國の高尾山、相摸の大山、その上に高く聳えたる富士の景色ものにまぎれず。それより北の方へ、今行くべき御嶽の山まで見ゆ。前は玉川の一すぢ、遠く近く流れてうち開けたり。こなたより汽車のとほるべき橋をうち渡せるが、たゞ目の前に見ゆ。向には日野の宿を離れてや、高き岡に、百草の松蓮寺などいふあたりまで見ゆ。玉川は川下まで遙に見えて景色いとよし。寺をいでて再び車に乗りて行く。拜島村にてしばしいこふ。こゝまで一里とかや。あまたの畑道、山路を登りくだる。道は石がちにて車もなつみ、日はや、高く昇りたれば、やうやう暑くなりぬ。されど折々は河原の方も見やられて、景色のよろしき處もあ



り。羽村につきぬ。こゝまでも二里なり。こゝは玉川の岸にて、上水をせき分くる處なり。大なる川みづを二またになしたる。石どもあまた積み上げて、八重に堤をつくり、大なる杭どもしけくうち並べて、水の増減をはかりておとすべくもせるなど、巧なり。徳川幕府の盛なる世にあたりてものせしわざとて、さすがに規模廣大なり。河原も。こゝはいとよくうちひらけたれば、流もさやかに見えたり、鮎つる人のここかしこに立ちさまよふさまも、いとけしきあり。この岸にて晝飯たうべなどしつゝ、居るに、青梅より武夫迎へに來たりければ、もろともまた立ち出づ。一里半にて青梅村なり。至りつきぬれば三時過ぎたり。この頃武夫が、しばしこの里の志村といふ人の家に、かり居をなしをりければ、やがてその家に至りて、酒のみ物語などして夕暮になりぬ。さて湯あみなどして、近きあたりを見むと出で立つ。この里のうらなる玉川のほとりに出づる程、日は暮れかゝりぬ。假橋を向ひの岸に渡れば、河原いと廣し。四方の梢はくれぬれど、水の上はまだしろくて、石にふれ行く波の色もよく見やられたり。

玉川の光もけちてすみぞめの夕べの雲のかけひたす見ゆ

はあらで、山川をせきてことさらに落すなりけり。これは詣づる人の、みそぎの爲にと作れるなれど、そのさま物ふりて水の音なひもいとさぎよし。これよりいよいよ山坂へかゝる、この間三十二町とかや。一町ごとにするしの石あり、のほりの道いとさかし。をりをりの雨にてうち流したるあとは、石のかぎり出でたる處もあり、土の堀れたるまゝ、にくほめる處もありて、疲れたる足には歩み煩ふ。されど谷々の樹の奥には、おもしろき鳥の囀るもあり、鶯はなほ今も盛に啼きわたれり。一足のほりては立ちどまり、汗拭ひつゝ、行くと、あつきことたとしへなし。かくするうちに、峰なる家見えそめたるぞ嬉しき。それに力を得て心を勵ましつゝ、からくして晝少しまへつかたに登りつきぬ。この山にて人をやどしなどするは、多くは元の社家なり。家居はさるあたりに似ずいと麗しく、門など高く作れるがあり。東屋といふ商人の家の、いと眺望よろしき樓をかりて、しばしやすらひて七代の瀧の案内もとめて立ち出づ。この瀧は本社の後の山より、草はらの中を分けつゝ、くだる、いぶせくせばし。木の根を分け、巖を踏み渡りなどして、谷の底まで遙にくだる。瀧の音は空に響きて聞ゆれど、木々の樹陰深くしけりて、いづこに

夕ばえの色も消え行く玉川に残るは波のひかりなりけりかくて河原にしばし息ひて水などむすぶほどに、まことに暮れはてれば立ちかへる。里中に至れば家ごとに燈火でらしめて、もの賣る棚などのさま賑ひたり。處から、都よりはさすがに涼しく覺ゆ。かくてこのあたりには、時鳥の稀には啼くことありと聞きつれば、夜もすがらいかにあらむとさすがにうちも寐られず、かた待ち居りけれど更におとづれもなし。時鳥なかむすがと時過ぎしあをめの里に尋ね來にけり九日。まだいと暗きより起きて、物くひ、よそひなどして、三人うち連れ御嶽にと出で立つ。昨日渡りし假橋をわたりて行く。こゝはうら道なれど、いと近しといへばものするなり。一里ばかり來て、まことの道と一つになりぬ。御嶽村に至る。こゝまでは聊かの上り下りはあれど、道平らかなり。こゝより峰まで一里半とはいへど、るなか道なればいと遠しと聞けば、しばしうちやすらふ。この村は玉川の南の岸にて、向は甲斐へものする大道なり。このあたりにては、河幅もや、せまりたれど、水はさをに流れていと清し。かくて玉川を離れて、左の方へと向ふ。行き行きて一つの橋を渡れば、こゝにみそぎの瀧と云へるあり。瀧はおのづからなるに

ありとも見えす。漸く下りはてつれば、響近くきこゆ。傍より流れ出づる泉を結びなど、つかれやすめてまたしも巖のほりて、始めて瀧のもとに至る。見れば、高くさし出でたる岩の、すこしくほめる處を、ひたくだりにくだりて、瀧つほまで障るものなく落つるさま、けしきことなり。瀧はいと高からねど、そのいさぎよき事ものに似ず。木々の生ひ茂れる間より、をりをり日かけは漏れども、少しも暑き色なく、汗あえたりし袖もすすろに軽く覺えぬ。

夏なくて幾七代をかすごしけむ日かけを流す瀧のよどみにかたはらに瀬織津姫の御名をゑれる石あり。

いく七代へにける瀧の糸なればせおりつ姫のくり出すらむこゝよりあやをの瀧、奥の院などに行くべきしるべあれど、道のいとさかしきに困じにければ、え行かて、再び溪を登り草を分けつゝ、もと來しかたに歸る。ありつる瀧にてかわきたりし袖、又しもしとゞになりて、苦しきこと限りなし。やうやう登りはて、御社にまうで奉る。いと高き石壇を登りてうちむかへば、社は千木高しりていと宏壯なり。本殿、拜殿、末社、美をつくしたり。みやつこたちの朝ぎよめ思ひやられ、あたりは塵もなし。處から心もすがすがしくおほゆ。そ



も此神はいかなる御神にかといふに、あるは大穴牟遲神と申し、あるは少彦名神とも申せり。また占をしり給ふ神なりとて、かの萬葉なる『武藏野にうらへかたやき』といふ歌をゑれる石ぶみもたてり。式に多摩郡大麻止乃豆乃天神社とあるを、この社なりとして、天保の頃に立てたる石ぶみもあれど、これは更にあたらぬことなるべし。占をしり給ふ神ぞといふより、さるさまにひきつけたりしにや。又しかひきつけて、みだりに占の神といひしにや。これら祝等にたづねまほしけれど、うるさければもだしぬ。奥の院といふはこゝより十八町はなれたり。そこには日本武尊を祀るといへり。かくてありつる家にかへりぬ。この家はいと高き處にて下へのぞみたれば、あまたの山々の峰をうち越えて、東北は筑波、日光をはじめ、遠近の名高き山々、まゆすみの如くに見えたり。かくするうちに、よもの夕日みなをさまり、谷々より霧の高く立ち昇るが、絶え絶え風になびきなどする、えもいはぬけしきなり。風の吹きやみたるにやあらむ、四方の霧ひとつになりて、多かりし山々もみな隠れはて、大海はらを見る心地するもいとあやし。その中に、いと高き山の空に近きが、一つ二つ残れるは、さながら沖の小島の心地して、帆ありぬ。

いとめづらし。この鳥よそにはあらぬにや、思ふに彼の佛法僧といへる鳥にやあるらむ。ごきたうとは異なることくなれど。すべて物の聲は此方こなたの取りやうにて、いかにも聞きなざる、ものなればと思へば、やがてぶつばふとも鳴くが如くに聞ゆ。こはうつなく佛法僧よ。それを神の御山の事なれば、御祈禱とは昔よりかへさまに呼びなし、にやと思ひなりぬ。

求めぬに三つのみ法みほも聞きてけり何を祈の鳥にかあるらむされど、御嶽の山に佛法僧のありしこと書けるものを見ねば、なほこれはよくあまたの人に聞きたゞしてむ。このあたり近くては、下野の黒髪山などには鳴くときけば、かけはなれてもえあらじかし。云ふうちに鳥も鳴きやみければ、人人も皆いぬ。なほ時鳥の聲きかぬ事をぞ誰も誰もいふ。

十日。朝とく起き出で、まだいとほのくらきに此山を立ち出づ。さるは、今日東京に歸るべければ急ぐなりけり。さしもさかしかりつる山坂も、時の間に下りはてぬ。御嶽村、柚井村などいふを過ぎて、このたびは本道の方にかゝりて、さて萬年橋といふを渡る。この橋はやがて玉川に渡せるなりけり。橋はいとせげけれど、丈は長くてさすがにけしきよし。

けたる舟もよりぬべく見ゆるに、空はいとあざやかに晴れて、雲の細うたなびきたるなど、すべてかゝる山の奥にあるべき景色とは見えず。

松風も瀧のひゞきも打ち添へて波をめぐらすみたけしま山かくて、さながら日は暮れはて、あたりも見えずなりぬ、いとあたらし。この山にては、時鳥の必ず啼きぬべきあらましにて来りければ、あるじ呼び出でて問へば、さきつ頃まではいとよく啼きつれど、このごろは更にえ聞き待らず。この御山には一種の珍らしき鳥の聲こそあれといふ。そは何の鳥ぞといふに、鳥の名は知り侍らず、たゞその鳴く聲の、ごきたうと聞ゆるによりて、ごきたう鳥と申すといふに、聞かまほしくなりぬ。さらばそれを聞きてむや、鳴きたらば告げよといへば、月夜にはいとよく鳴くを、やみの頃なればいかげあらむ、さるにても一聲ばかりは鳴きもしぬべしなどたのめて樓を下る。火ともし、物くひはてしころ、まことに御社の柱にあたりて鳴くものか。けに云ひしがごとき聲なり。ふくろふなどの、のどごゑにはあらで、いとさわやかなるに先づおどろかれぬ。あるじも樓の下より聲かけて、ごきたう鳥鳴くなり、出でて聞きたまへ、など登りくるも、したりがほな

こなたの岸に出づれば、甲州道と一つになりぬ。のほり下りの道甚だわろし。ひるつかた青梅に至る。其處にて酒のみ晝飯たうべてしばしいこふ。かくて武夫にわかれて、車やとひて出でたつ。けふは空はれていとあつし。このあたり玉川をおきては、何の見るめもなし。三時ばかりに立川につきぬ。汽車は五時五十分なりといへば、まだいとあつしとて、心にもあらず其のあたりの家にてやすらふ。いとあつければ氷などつゞしりて涼みをするほどに、や、夕風たちぬ。時になりぬと人々そ、めけば、そなたさまに物するに、早くもとゞろかしつ、来るものか。待ちつけてやがて乗りぬ。かくて七時頃に新宿につきて、家に歸りしは八時過なりき。明治二十四年八月望のころ牛込なる東えのき町の家にてしるす。

まさらぬ繪 明治二十五年

播磨なる飾磨けりまのいちのかちならぬ車の旅も日かず經にけりことし七月十三日、例の大八洲會のつどひに、人々うち寄りけるに、魚住長胤いふやう、今年もさるまじき用事ありて、播磨へものせむと思ふを、さきつ年はうちつゞきて、木村君、本居君と共にものせしが、こたびは一人なり、よき友も



がなと云ひ出でたるに、ふと心とまりぬ。おのれ曰ふやう、いつばかり立ちたまふぞといへば、あさてなりといふ。そは餘りにいそがはし、しばしのどめなばおのれも思ひ立つやうあらむといふに、いな日はのべじ、いかでつとめて、君も物せよといふ。さらばよくはかりて、明日までにきこえむとて歸れり。家にかへりて、かうかうといへば、よきをりなめり。思ひたちてよといふにもよほされて、俄かに其のこと魚住がりいひやりぬ。思ひあへぬこととて、何一つ装ふべき日あひもなければ、さはれとて萬をうちすて、十五日の午前十一時といふに、新橋の停車場にいたりぬ。魚住は早くこゝにて待ち居たり。それより汽車にのりぬ。治彦がこゝまで送りにものせしを、なほ品川まで行かむといへば、三人のりて、そこに家にかへしぬ。この近きあたりは都遠からねば、折々ものする處なれば、何のめづらしけもなし。時のまに國府津につきぬ。こゝよりは山川の景色もめあたらしければ、窓より見出しつゝ行く。道のあないよく知れる人と乗りあひにければ、そここゝと指さして、かしこは足柄の本道なり、左にあるは金時山なり、やゝ下りてやぐら澤の驛、道了権現の森、はるかに見ゆるは箱根山なりなど、一つ一つに教

ふるいとくはし。かくいふうちに、空くもり雨ふりいでぬ。夕だちにやあらむ、いと俄なり。山々のかひは早くふりけるにや、松田の驛あたりには、川水いたく濁りて水の音すさまじし。

さかわ川みなわさかまき流るなり夕立すらし足柄の奥山北、小山の間の隧道あまたあり。思ひもあへず、にはかにくら闇となれば、忽ち又あくるも、興あるもの、何となくもすごし。

入れば又出づれば入りて皆人のあなともあなと驚かれつゝ、常闇の世のひらけたる心地してかたみに人の面をぞ見る御殿場驛にいたる。こゝは富士の麓につゞきていとたかき處なり。所の名は、むかし徳川家康將軍が狩に出でたる時の、かりやの跡の名に残れるなりといふ。頼朝の卿の富士の巻狩にものせし時は、こゝより左の方なる野山に、今も其の蹟ありと彼のあない人をしへたり。さてその驛にて案内人とわかれぬ。けふは富士をこそ見めと思ひけるにたがひて、夕つかたよりの雨に、いづこもよく見えず。富士の山は麓まで雲立ち掩ひて、足高山も見えず。たゞ伊豆の方の山々ぞほのかに残れる。岩淵を過ぎて田子の浦に出づ。海の面はいと静か

に波も立たず。道にしたがひて軌道のめぐれるさま、行きせまりて隧道に入るなど、まことにおもしろし。たゞ富士の根の、いさ、かも見えぬのみぞあかぬ。静岡あたりにて日くれか、りぬ。大井川をわたる。昔わか、りし時、こゝにて輦臺といふものに打ち乗りて、いとおそろしかりし事など思ひ出づ。

せおはれてむかし渡りし大井川今は淵瀬のあやふけもなし天龍川にては、また暮れはてにけり。此川はおのが故郷なる信濃の諏訪の湖より流れ出づるところなりければ、

みづうみのながれと聞けばなつかしみ心たゞよふ天の龍川空くもりたれば、いつかたも見えず。たゞ車のとゞろく音をのみ聞く、いとかしまし。よるになれば、窓などもさして、あつきことものに似ず、人の扇つかふ音もあつかはし。袋井驛にて。

風をだに取りて包みて入れなましあつき堪へうき袋井の里舞坂の驛をすぎて今切にかゝる。このあたりは軌道第一の佳景ときけば、いかでかたはしをだに見てむと、せめて窓を開きて見やれど、空は墨をすりたらむやうにて、さらに海山のあやめもわかず。雨はしばしば降る、いとわびしきことたと

しへなし。人はつかれたるけしきも見えず、いびきといふものなど高くすなるに、わが身は眠りもやられず、はては腹立たしくさへなりてひそまりぬ。名古屋大垣などもたゞ過ぎに過ぎて、からくしてあかつき方に草津驛につきぬ。しばし行けば、勢多のからはし左に見え、比叡比良の山々も遠く見えわたれるに、はじめて目さむる心地す。大谷の隧道を過ぎて、山科、伏見にてはまことに明けはてたり。都ちかくの山山里々見えていとうれし。京都につきたるは午前五時すぎなり。三條上る木屋町なる、なにがしの宿をしばしからむとするに、さはりありとていなみければ、ひきかへして小橋のほとりなる大津屋といふにありぬ。そこにて朝飯などたうべてしばしいこひて、魚住はある摺紳の家とぶらはむとて出で行く。おのれは車をやとひて、まづ北野に詣でむと、北ざまに堺町門のうちに入れば、二十年あまりの程に、すべてあらぬさまになりはて、さばかり造り並べたりし公卿たちの家々ひとつもなし。垣のうちに木草生ひしけりて、名高き處々も見えず。や、行きて、御所の南門の前に出づ、左に折れて公卿門に至る。そのかみ、おのれ大學にかへまつりし時、此月十九日のことなりき、この御門をゆるされて、紫宸殿の



御庭にて舞御覽拜見せし時、烏帽子直垂を着して、日華門の廻廊に座しをれば、主上南殿に出御あり、公卿、殿上人、さまさまの御装束にてみはしのもとにみたり。程なく舞はじまり、太平樂・陵王などいふ舞樂を、まのあたり拜見せしも、只今のやうに面影に浮びぬ。さて舞果てぬれば、鶴の御料理を銘々に給はり、諸大夫の間にしばし慰ひたりし時の事など、思ひ出づるに心もたゞならず。今日は御垣の内に入るべくもあらねば、かへりみしつゝ、内裏をあとになして、はまぐり門を出つ。やゝ行きて北野にまうで奉る。九重のうちには、さばかり昔のさま變りぬれど、なべてはありし儘にて、此の御社は今も御榮えますこと、そのかみしばしば詣で奉りしに變らず。このあたりに、そのころ諏訪の殿の邸あり。そこに知れる人いまま住めりと聞きければ、立ちより見るに、いつしか變りはて、尋ぬる人も近き邊にうつりにけり。けふは空よく晴れたれば、鞍馬口より、木かけもなき田島の間を行く。道いとあつし。こたびは、堤を東さまに下加茂に至る。たゞすの杜にて、清水の下にしばしいこふ。

晝だにも身にしむ風を夕涼みただすの杜はましていかにぞ河合社を拜みて、午後十二時頃に三條の宿にかへれば、魚住

魚住も詠みける、

さまざまに昔のあとを思ひ出でて袖こそしほれ須磨の浦波  
この處は、しづかにうらさびたるをこそ、昔よりいひけれ。  
今の世には、都あたりの富める人ども、こゝかしこに家をつくりて、門など建てたる。これも世の遷り變れるなればすべ  
なけれど、いかなる人の住みて、何をながむらむと心つきな  
し。

うま人は玉のを物やまほるらむ玉藻かるてふ須磨の浦にて  
などつぶやかるゝもをかし。舞子驛にて車をおりて、垂水村  
の上月豊蔭ぬしを訪ふ。家にあるほどにて、いと喜びて迎へ  
入りて、盃などとり出で物がたりす。このぬしはかねて知り  
人なり。歌を好みてよめるが、學のかたにも志あつく、この  
國の古き書に見えたる名所のことなど、なにくれと語るついでに、さいつころ加古川の近きわたりの田島の中より、大なる石の碓二つ掘り出でたりとて、そのかたをも書きて、これ  
うつなく、大碓小碓二皇子の生れ給ひし所ならむと云へり。  
御母稻日大郎姫、此國にてうせ給ひしなど思ふに、けによし  
ありておほゆれど、其あたりの地名を委しく聞かざりしこそ  
悔しかりしか。夕つかたそこを出でて、人力車に乗りて行

はやく歸り居たり。晝飯などすぎて、二人してやどを出でつ。今日しも祇園の祭禮なりとて、町々いとにぎはし。山鉦など立てつらねたる間を分け行きて御社の前にまうづ。それより清水の瀧の下におりていこふに、暑さもしばし忘れぬ。こゝを出で、高臺寺、智恩院、栗田口、青蓮院等のあ  
ないを頼みて、座敷の間々を一覽し、寶物などをも見をはりて、かの疏水工事のもとに至る。そこにしばし舟などあやつるを見、南禪寺にいたりて龜山上皇の離宮なる御座の間、また寶物など拜見し、鴨川を渡りて三條に歸る。夜もすがらあつさは堪へがたきまでありき。

十七日。朝とく起き出でて七條停車場に至る、午前六時ごろなるべし。桂川を渡りて山崎に至れば、向ひに八幡山見ゆ。淀川の流れも見えたり。大和の葛城山、志貴山など、遙かに見渡されてけしきよし。梅田の停車場を過ぎ、神崎川を再び渡りて、午すこし前神戸に着きぬ。湊川、川底に隧道ありてそこをすぐ。

ものゝふの血汐そ、ぎし岩根をも切りとほしける川の下道  
須磨の浦にて、  
皆人の心よすてふ須磨の浦は波ぞむかしのしるべなりける

く。海邊の道にて、波の音といさぎよし。舞子の濱にて、  
さまざまの松の姿は少女らがまひ子の袖のかへるとも見ゆ  
道の傍に千坪といふ丘山あり。何ばかり高くはあらねど、廻りに堀など處々残れり。この山に、みかの大きさ一尺ばかりなるが、いと多く堀り据ゑてあり。すべて頂も山のめぐりも、大かた同じさまなり、今は毀けそこねて碎け散れるが、なほそのまゝなるもあり。その間に石をしき竝べたるものと見えて、大さ三四寸ばかりなるが、此處かしこにあらけあり。これは此國にある石にはあらで、みな淡路の島のなりといへり。こゝはむかし神功皇后の、韓國より歸り給ひし時、こゝにて鹽坂王・忍熊王の待ちとらむとて、仲哀天皇の御陵を作れるよしして、人夫をあつめ、淡路島の石を運びて、造れるあとなりと云へれどいかゞあらむ。かにかくに、古き所にてはあるなり。淡路島、たゞこゝもとに見ゆ、其あはひ五十町とかや。しばし立ちどまりて、見まほしけれど、車の走るにまかせつ。

をちかたの松の木蔭にあはと見し淡路の島も近づきにけり  
さまざまの島ども、車の行くにつれて、遠く近く見渡さる。  
あはち島その島なみに小豆じま家島見えてつぎのよろしも



など、歌のふるめきたると人わらふべし。魚住もこの景色を見てよみける、

家島の見ゆるも嬉し我が戀ふる宿の梢やいつこなるらむこれは、今歸り行くべきやどを、いつしかと思ひてなるべし。夕つけて明石の驛にとまる。この家のむかひに人丸明神の社、岡の上に見ゆ。車をやとひて行きて拜む。そこを下りて、明石の舊城の森に至る。樹木などは今も昔のまゝにて、處せきまで梢しけれり。町をよぎりて海邊の燈明臺に至る。見れば、淡路のは既くともしたり。しばした、すむ程に、遠近の浦々みな暮れそめぬ。このわたりの岸のみひとり残りて、なほ寄せくる波はしるく見えたり。

島がくれ過行く舟も燈火のあかしのしるべたどりてや漕ぐ暮れはて、やどにかへる。この里は魚住がわか、りし時、しばしありけるところなりとて、そのかみの事も語るついでに、

年を経て波たち歸り語らへば一夜あかしの名さへなつかしとよめるは、おもふことに堪へぬなるべし、何となく耳とまりてきこゆ。かゝる程に、魚住の親族なる何がしも此處に来て物語などす。いと心ゆくよのさまなり。

夜になれば、魚住は己が家なる廣峯へといそぐ。おのれはかき町なる袋屋といふにやどる。

十九日。けふは朝よりこの國の名所見むと出で立つ。よべ來あひたりし庭山兒島のぬしたち、ともにあないせむといふ。いと嬉れしくて、もろ共に朝とく車やとひて立ち出づ。この國の印南郡なる曾根天神は、むかし菅原大神のながされ給ひし時、此處にて手づから小松植ゑ給ひしが、枝葉しけりていと大きになれる、中頃枯れて今はその芽生の再び生ひけるなりといへり。もとの幹に残れるは、其上にやどをつくりて覆へり。今生ひたるは四方に枝をのばしたり。

おとしたる涙の種を根ざしにてそねめ榮ゆるそねの神まつ神主、菅原の何がしいで來て、さまざまのふるごとなど語れり。寶物など取り出でて見せたり。一里ばかり行きて生石村に至る。石の寶殿は、大きな石を四すみに切りたて、屋の形に作れる、其さまいとあやし、神ならではかゝるたくみ、いかでかと思ひやらるゝ。

神こそは石の宮居もつくりけめ及ばぬたくみ人に知れとか風土記を見れば、むかし聖德のみこの御世に、弓削の大連のつくれりし石なりとあり。さらば大連のつくれるにや。され

物思ふ旅のこゝろもあかし瀧なにかは更に名のみならまし十八日。あさとく明石の町をすぎて停車場にいたる。けふも天氣よし。午前に姫路につく。會員春山弟彦ぬしに道にあひぬ。それより直にその家にもものしつ。程なくあるじ歸り來て、湯などわかし、懇にもてなしたり。學の物語や何やとするほどに、日中になりければ、あつきにしばしいこへといひて、枕など出しければ、いふがまゝに眠につきぬ。この家はいとうちはれし處にて、庭に水など流し入れ、風吹きとほりて涼しければ暑も忘れぬ。夕つかた會員なる庭山武正、兒島八尋、弘田親厚の三氏とぶらひ來て、何くれと語らふうち、あるじ酒さかななど取出で、もてなす。たがひに歌よみかはして遊ぶ。あるじ、

姫路やま木立涼しき松かけに待つ人きぬと日ぐらしの鳴くかくれ住む心も嬉しかたぶける竹のあみどを叩き來ませば弘田ぬし

立ちよれば涼しかりけり古への風さやかなる言の葉のかけみやこびとまれに來ませりおいぬとも啼けや増位の山時鳥おのれも

言の葉の道は隔てぬものなれば飾磨の海もしかぞまぢかき

ど社傳には、なほ神代のものなりと云へり。

動きなき御代よろづ代の寶とて石の宮居は作りけらしも前に拜殿あり、大名持少彦名神をまつれり。神主何がし案内して、たゞこの上なる石をつたひて高木のほるに、ところどころ能く見えたり。すべてこのあたりは巖石多き所にて、その岩のはさまには櫻樹おほくあり。花ざかりには人どもつどひてにぎは、しとぞいふ。一里半ばかり行きて高砂にいたる。住吉大神の御社あり。いとうるはし。あひ生の松と云へるあり、めを一つに生ひたり。埒ゆひめぐらしていとおこそかにしたり。かの尉と姥とのむかし物語繪など、社頭にて人にさづく。

神さぶるすがたを見れば松蔭にいつ現はれし妹脊なるらむこゝを出でてまたいさゝか行けば、尾上松あり、こゝなるも男女一つになれり。尾上の鐘あり、こゝにも御社あり。古歌に尾上の松といへるは、こゝなるか、はたさきのなるか。鐘はいと古代のものと見えたり。霜のおきけむ曉に、さえたる音いかにぞと思ひやらる。

照る月の霜ふみまがふ夏の夜は尾の上の鐘も早あけぬめり北在家村といふに、刀田山鶴林寺といふ寺あり、こゝは聖德



太子のつくりたまへるところなりといふ。本堂、太子堂、鐘樓、三層塔などいふ。今より千四百年あなたの造營にて、そのかみのまゝなりといふ。けにもふりたる建物にて、大和國などにもかゝるはあらじとおほゆ。今はいたくそこなはれて見ゆれば、今よりの保存ようせずては、つひにあとなくなりぬべしかし。加古川驛に来るころは、いとあつくして日かけも堪へがたければ、車をばかへして汽車に乗る。夕つかた姫路にかへりぬ。今宵當處の弘田ぬしの家に招かれて、春山・魚住の二氏とともに行きぬ。あるじはきのふも春山氏まで訪ひ来て、懇にかたひたりき。いたれば、

君にかく訪はれましやは大八洲學びの道のたよりならずばこのぬしは、もと土佐の國の人なるが、こゝにてくすしの業をするなりけり。明治のはじめの頃は、官軍にしたがひて處處の戦などをし、それより陸軍の將校にてありしを、今は齢も老いたりとして、つとめをばかへして、くすしのかたはらに歌などよみて、みやびたるわざを好める人なりけり。

二十日。朝とく立ち出でて、車にて書寫山の麓まで至る。横關川を渡れば麓の村なり。かねて魚住がはからひにて、駕籠かくをのこを、廣峰よりこゝまでおこせたり。こゝにて山駕

籠といふものをかりて、それをしつらひてのる。のほりは十八町、奥の院までは二十五町とかや。こゝは古へは大利にて、かの後醍醐帝の伯耆より都に歸り給ひし時、行幸などもありし所なりければ、道などいといと廣かりけむを、近きころは寺領もなければ、風雨のたびに荒れゆけども、繕ふすべなく、木の根岩かど、心のまゝに道をふたぎて、踏み行くべきかたもなきを、駕籠かくをのこは物ともせず踏み登る。下を見おろせば目もくるめくばかりにていとあやふし。さすがに四方のながめはあしからず。

書寫<sup>かき</sup>す言の葉だにも及ばねばはては目をさへ奪はれにけりのほりはてぬれば堂あり。ふりたる大木どもひまもなく生ひ茂りて、雲を凌げらむさましたるあたりなれば、風の音も身にしみわたり、鳥の聲々さへつりて、しづかなることものに似ず。九百年ばかりのむかし、性空上人の開きしところとて、堂の額には、鎌倉の武士などの捷書も見えたり。みな當時の建物にて、回祿などもあらざれば、古代の様まのあたりに見ゆ。かの太子堂とはたがひて、さすがに今も保存の捷や備りけらし、香花たえず、詣づる人もこれかれありとか。堂を下りて、かちより山路をいさゝか行けば、奥の院なり、三

つの堂と云へるがあり、性空上人を安置せし堂もあり、中には損ねたるもあれど、掃き清めなどは大方よくしたり。もとの堂の方にたち歸りて、石階の前の家にて、しばし憩ひて茶など飲む。やうやう空も涼しくなりければ、また駕籠にうち乗りて下る。さきの麓の村より、こたびはもと來し道には歸らで、横關川を渡りて左の方なる廣峰の道にむかふ。やゝのほれば姫路のかた遙に見わたさる。城の天守も見えたり。大なる池ある處あり。堤にて見あぐれば、今行くべき峰の人

家、遙かに木の間に見ゆるは、まだいと遠きにやあらむ。此山も樹木生ひしけりていと高し。なかば過ぐる頃より路さかしくなりて駕籠ののこも苦しけなり。愈さかしくなりて、いきあへつゝ登るに、からくして夕つかた御社のほとりに着きぬ。宮には詣でずして直に魚住氏が家に至る。魚住が兄の宜長のぬし、家あるじにて住みたるなり。いたるを待ちうけて、家の人どもいとよくもてなすに、心もゆるみにけり。家は高き崖の上であり、其處より姫路の方を見れば、しかまの海のこりなく見ゆ。小豆島、家のしま、ほうせじま、たんが島、鞍掛島、やゝ左に淡路島の諸島、海の面にしきつらねたり。しばし休らふ程に、こゝの祠官祠掌、また舊き神官の

人々、谷口政堅、芝和忠、同潤一郎、福原政經、内海重章の諸氏、社務所にてあへせむといひおこせたり。すなはち魚住氏兩人と俱に行きぬ。まづ御社を詣で奉る。祭神は素戔嗚尊、相殿五十猛命を本殿として、左右に神々たちならびたまへり。午頭天皇と稱して、京都祇園の本社なりといへり。今は武大神と申し奉るとぞ。

ちはやぶる神の心の廣峯もたけきをむねと守りますらし社務所に至れば、はやく人ども待ち居りて、さまざまにもてなされたり。見れば夕ばえの雲東の空に長くひきはへたるが、夕日に照り輝きていと赤く見ゆ。かの中大兄命が、豊はた雲に入日さしと詠み給へるも、この海邊にての事なるべければ、うちつかはれぬ。たゞ今宵は月なき比なれば、その方のたがへるぞをしきや。やゝ暮れはてゝ、姫路よりしかまの浦まで、ともし火ひまなく見えたるなど、闇なるもなほをかしく、かくて數刻ものがたりして魚住氏に立ち歸る。こよひはこゝにとまりぬ。

二十一日。朝まだきよりよべの人々來あひて、また酒などのみぬ。歌一つと乞ひければ、短冊したゝめ、朝飯などたうべ



て、あるじに別れを告げ、魚住と二人してこのやどを立ち出づ。十八町ばかり下りて、其處にて車にのりて、走らせつ、時の間に姫路にかへる。けふは姫路城の天守を一覽せむと、かねて弘田ぬし、そのかたの人に頼み置きつるよしの文あれば、午時すぎに至るに、時刻おそなはりて、そのかたの人既に家に歸れるあとなりければ、え見ずて歸りぬ。いとくちをしけれど、けさ廣峰より遅く歸りしかば、いひおこしたる時刻を、こなたよりのたがへたるなればせんかたなし。それより姫路の町々を過ぎて、物などと、のへ宿に歸る。夕だち俄にふり出でて、雨のあしとおどろおどろし。一しきりにてやみけれど、あつさは大かた流したり。かくするほどに、この國の神東郡なる會員楠田壽吉氏來り。酒飲み物語などするうちに、春山、魚住二氏も來りければ、また盃の數まさりつ、心地よけなることどもいひて別れぬ。あすはこゝを立たむとて、宿のあるじに別つけなどするに、歌こひければ扇にかきつく。此屋をば袋屋といへりければ、

あめつちを袋にぬひてつ、むともあまるは家の實なりけり  
この家はなりはひの幸ありて、にぎはひ富めりと聞きつれば、それを思ひてことほぎたるなり。かくて夜になりて、春

山氏の家に別をつけに至りて、立ち歸りて寐ぬ。  
二十二日。停車場に至りて、五時過ぐる比の汽車に乗る。時のまに明石舞子などを過ぎて神戸につく。會員田所千秋ぬしの家にいたれば、かねてあないもしおきしかば、服部邦照、竹中眞左紀の兩氏、こゝに來あひて待ちをれり。いざこのあたりなる諏訪山にもせむとて、ともに車にてたち出づ。いたれば常磐樓といふ家にてまうけしたり。この樓のながめいとよし。海を見やれば、いさゝか東北の風吹き立ちて、波の音いさぎよし。和田の岬、淡路島、紀伊國の方の御崎、和泉の山々、難波の浦々はるかに見ゆ。すべてこのところを武庫の水門とぞいふ。心ゆくながめなり。かたみに酒くみかはし、あるは碁うち、湯あみなどして遊ぶ。かくて布引の瀧見むといひければ、田所ぬしあないせむとて、二つ車にて出づ。魚住は今宵は神戸にとまるべければ残り。さて瀧の下に至れば、おとに聞きしもしるく、流れ落つるさまことなり。瀧はまことにしらぎぬを引きはへたらむさましたり。瀧壺はむかしはいと深かりしかど、今はあせたりとて、人ども逆巻く中に入りて、およぐさまなど中々に興あり。しづきは袖にかかりていと冷かに、すべてあつさなごりなし。

いくよ、をおのづからなる日曝ひさらしに色もましろの布引の瀧田所ぬし

名も高く世に響きたる君なれば引きとめてよ瀧の絲水かくいふうちに雨ふり出でければ、いたく濡れぬさきにと立ち歸る。三宮驛にて田所ぬしと別れて、おのれは今宵西宮にとまらむといふ。ぬし別を惜みて歌などよみたり。しづ心なき程にてかへしもえせずなりぬ。夕つかた西宮に着きて吉井良秀ぬしを訪ふ。あるじ喜びて酒肴なぶとり出でもてなしたり。祠官吉井良晃ぬしも來あひて、酒たうべ、快く四方山の物語して夜ふけぬ。

二十三日。朝、良秀ぬしをあないにて御社にまうづ。此の御神は商の業を守りますとて、多くの人々の尊敬あつく、廣前もいと榮えまして清らかなり。よには西宮のえびす神とぞ申すめる。主神は蛭兒神にます。

足立たぬ昔はいさやしら波のをちのえびすも神ぞをさめし式内なる大國主西神社も境内にます。良秀ぬしは即ち此社の祠官なり。何くれの末社をも拜みて立ち歸りて、朝飯たうべなどするうちに、發車の時刻にもなれば、いとま告げて立ち出づ。停車場に至れば、神戸より魚住來あひたり。神崎、梅

田など過ぎて、十時ばかりに京都に着きぬ。こゝにてあとなる汽車の來るを待ちつ、暫時いこふ。十一時過に七條をたつ。けふはのりあひの人多くしていとあつけく、窓の外もよくは見えす。かくいふうちに、近江の湖水の邊に至るころは、いさゝか人も少くなりて、四方のながめもち見やられたり。彦根、米原など過ぎて關が原にいたる。松の尾山、南宮山など見ゆ。石田三成が中納言秀秋にはかられて、戦まけたりけむ古へ、思ひ出づれば今もいと悲し。

おもほえぬ松の尾山の山風に木の葉ちりけむ時をしぞ思ふ岐阜、木曾川などを過ぎて名古屋に出づ。魚住は、明日富士に登らむと兼て契りし人ありとて、こゝにて別れぬ。おのれは、此の里なる御園町の丸屋といふにやどる。さて湯あみし、飯たうべなどして、しばしうち休らひをれば、たゞ此の隣のまに小杉氏の聲ぞきこゆる。あなあやしと物よりのぞけば、まことに居たるものか。障子おしあけて入れば、かの方にも驚けるさまなり。久米氏もあり。もろともに細君をともなひて四人をり。いと珍らしければ、酒のみ物語などす。二氏はけふ東京を立ちて此處に來れるなりけり。あすは西京の方にもして、なほ奈良に至り、それより阿波の方に行か



むとするもあり、西國の方に物せむとするもあり、こよひ此處に來りあひたる、おほろけの事にあらずなど、かたみにいひて、さて夜も更けぬべければ別れてぬ。

家人にあふ心地して今宵しも心なごやの旅寢をぞするけふ日ねもす雨ふりて今宵もやまず。

二十四日。五時四十分の汽車に乗る。こゝの停車場にてかの人々にわかる。今朝もなほ雨はやまず。豊橋の驛に至れば、魚住そこに持ち居たり。など富士までは物せざりしといへば、よべの雨にいたく困じて、行くべくもあらねばこゝに宿りて、さて待ち居たるなりと云へるもをかし。蒲原の驛をすぐれば海邊に出づ。沖には大きき島々あまた見えていと面白し。常の道にては更に見ぬ處なり。めづらしけれど、島々の名など問ふべき人もあらねば、たゞに見つ、行く。鷺津の驛すぎて今切に至る。右の方は大海なり、左の方は入江なり。軌道の中にとほして、石もて岸をたゝみたるさまいとたぐみなり。兩岸に島々あまたあり、その島に松おひ茂りて水にひたれり。いにし日こゝを過ぎしは夜中にて、雨さへ降り暗かりければ、更に見えわかざりしを、今日はいとよく見えて心ゆくさまなり。古へは大海と湖とは離れて、其の中間に

田子の浦のあたりにては雨いたくふりきぬ。田植うるをとめどもの、いたくぬるゝを見て、

浦の名の田兒の袂やかならむ早苗とる手に雨こほれ來ぬ天龍川は諏訪の湖の下流なれば、なにとなくなつかしくて、

これやこのふる郷人の面かけを浮べ來にける天の中川午後は空晴れたり、五時ばかり名古屋につく。

十八日。天氣よし。名古屋をたちて美濃國いぶき山の麓にて、

雲拂ふ山の名にのみ残りけりいぶきの神のあと絶えしより午前九時ばかりに米原につく。そこより今は越前の方の汽車に乗りかへたり。柳瀬につく、そのかみ、柴田勝家が先手の軍のこゝに敗れにける心を思ひやりて、

淵を瀬に幾たびかへてやながせの深き恨や世に流すらむ十一時すぎる頃に敦賀につく、大島町なる某の家にやどる。それより官幣大社氣比神宮にまうづ。むかし相識れりける

神官たちの家をたづねてやどに歸る。平松周玄父子來れり。十九日。こゝより汽船にて、丹後國津まで海路をもせむとて船にのる、船の名は丹州丸とぞいふ。今日は空はれて海上鏡の如し。午前十一時より湊にいたりて船出を待つ。とかく

濱名橋ありよし見えたるを、明應の地震につち裂け大波うち入りて一つになれるを、今しも又かくうちつゞけるは、そのかみにかへれるが如し。

今ぎれも今はなはてとつながりて昔のきしにかへる波かな小夜の中山の隧道も、ありし夜は何ともわかざりしを、今日は能く知られたり。出づれば大井川なり。岩淵、御殿場の間も雨ふりて、思ひこし富士は今日も見えず。このたびのくちをしさは、たゞこれのみぞある。足柄の隧道をもたゞ過ぎに過ぎて、はやく新橋につきぬ。こゝにて魚住とかたみに無事をいはひて、うちわかれつゝ、車をやとひて牛込東横町の家に歸りぬ。午後六時すぎなりき。

須磨明石みつ、歸りて今更にまさらぬ繪をもはつる今日哉なかなか旅ねの空の戀しくてたづね残し、跡をしぞ思ふ明治二十五年七月二十七日あせぬぐひつゝ、しるしをへぬ。

### 天橋立紀行 明治三十年

ある人のさそふにまかせて、ことし明治三十年七月十七日、丹後國なる天橋立見にと思ひたつ。その日朝とくやどをたちて、新橋より汽車にのる。今日は空曇りて富士の山見えず。

するうちに漕ぎ出づ、四方のながめいとよし。こゝはかねてあひしれるあたりなれば、山々崎々など、昔おほえて心とまる。灣をはなれて大海に出づれば、何となく四方のけしき變りて、見るめもことなり。けふ風波なかりけれど、かゝる海路になれぬけにや、船酔していと心地なやめり。若狭、丹波の崎々には名所多ければ、よく見まほしと思ひて、其方の地圖なども來にけれど、よくも見やられず、船底に頭をつき入れて、人々の甲板に上り下りする音をのみ聞き臥せる、いとくちをしけれどせんかたなし。からうして頭もたけて窓など見やりても、たゞたふるゝ心地すれば、またもすべり入りぬ。かくあるあひだに日もやゝ西になりて、船の動揺も少し靜になりければ、今はいづこに來ぬらむと心もとなく人に問へば、天橋立はるかに見ゆなどいふあり、はやく宮津灣に入りぬるなりけり。やうやう思ひおこして見出せば、けにも松原のつゞきて立てるがあり。

橋立の近づく見ればいつしかと天路ちかくや我は來つらむかく云ふうちに、程なく人家など見ゆ、宮津の町なりけり。松原をば右に見なして湊に入れば、船はてぬといひのゝしるにつけても、過ぎにしかたを思へばいとくちをし。船よりを



りければ、かねて此の國のあひ知れりけるひと一人二人、ここに來あひて待ちをり。まづ其あたりの眺望よき家にゐりて入りて、しばしやすらふ程に、さばかり船酔したる心地みなさめぬ。そこに湯に入り、酒などすゝむるうちに、舞姫なども出で來て、所につけたる歌うたひ、例のさどびたるしらべなど聞くに、や、夜に入りぬ。そこを出で、諸ともに車に乗りて文珠といふ處に至りてやどりぬ。こゝは橋立にのぞめる里にて、いとけしきよしといへど、夜に入りぬれば海の面も見えず、そこに名高き三階の樓ある家に今宵はやどる。あたりいと清くしつらひたり。夜もすがら雨いたく降りて、波の音にうち合せたり。

十九日。あくるをまちて見出だせば、今朝は雨もやみて海上しめやかなり。

波の音も松ふく風もをさまりてあめに濡れ立つあまの橋立まづ景色の宜しき目にまとまりぬ。人々も皆起き出でて、茶などのみつゝ、山々里々こゝかしこと教へられて眺むるに、まこと珍らかなり。外海の嶋々も見ゆ。かの水江の浦嶋子が釣せし崎なども見えたり。橋立はたゞこゝもとより長く海に續きて、おほよそ一里もあらむとおほしき松原にて、海中を横

ぐらしたり。しばし海人どものあびきなどするを見て、橋立明神のおはします鳥居のほとりに、舟さしよせて松原におりぬ。この社は、中比のものに與謝宮と申して、切戸より橋立の内府中・眞名井原までも、悉く本社の領なりなどいひて、豊宇氣大神を祠りしが、雄略天皇の御世に内宮の御をしへに依りて、此の大神を伊勢の度會の山田原の外宮に選座奉らしめ給ひしなりといへるは、あとかたもなき妄り語なり。さてこの社、もとは文珠堂のありし處にありしを、こゝにうつせるなりといふ。その社のほとりに清水の湧き出づる處あり、かゝる海中にさる井のあるはめづらし。やゝすゝめば、道のせばき處は、およそ二十間ばかりなる處もあり。道は海よりいとしも高からねど、昔より波のこゆることなしといふ。大水の出づる時などには、この松原、道とともに海中より浮き出つと土人いへり。國々に浮嶋とてあるみなこの類にて、それは地中に古代の木根藻屑の凝れるが、いつとなくしまりて、大地とは成れるものから、水の地中に漬き入る時は、其地の自ら浮き出づるにて、更にあやしきことなし。この橋立も、神代に神の太空にのほり降り給ひしが、神の御寢ませる間に仆れたりと風土記にいへるを見れば、もとよりその海中

さまにわたれり。中にすこしき切れたる處あり、そこをきれどといふ。舟の出入するさまなどを詠めつゝある程に、やうやう明けはて、舟にてあさけたく烟の、苦のひまびまより立ち昇れるなどけしきそへたり。とばかりながめ入りて、のほるべき雲井の空をよそに見て昔や忍ぶ天のはしだて神の代にのほりくだりしふることも面影うかぶ天の橋立雲の上に通はぬ路となりしより波にたゞよふ天のはしだてさて、まづ近きあたりなる文珠堂見に行く。この堂は平重盛のおとゞの建立せしなりといふ。そのかみおとゞこの國を領せし時、よしありて此の伽藍は造れるなりといへり。けにも其の建築いと古く、材木なども今の世にあるべくもあらず。中にはそこなはれたる處もあり、柱なども根をつぎたるがあれど、なほもとの儘にて、造り改めたらむとおほしき處は見えず。庭には松の古木立ち並びて、いく百歳をか經にけむ、いたく物さびたり。このあたり橋立いと近く、手に取るばかり見ゆ。立ちかへりて朝飯たうべて、その漁人に舟をやとひて近き海べのりあるく。海は内も外もいと清く、其中に松の竝木の生ひ立てる一すぢの道いと遙かなり。内海の廣さも、大凡五六十町ばかりはあらむと見えて、四方の山々をめぐ

にありし木の根、藻屑など化して、その儘にあるが故にこそあれ。さることを知らぬをこのものは、地の浮き出づるといふことわりやあるべきなど云ふめるは、いまだしきことどもなり。さて、その松原を石など拾ひつゝ行く、道いと清し。その行きとゞまる處、即ち府中大垣村にて、この國の一宮、國幣中社・籠神社なり。祭神は住吉大神なり、この御社俗に籠守大明神と申せども、まことにはかつまの神社とよむことにて、住吉大神のまたの御名鹽筒老翁が、神代に無目籠アナルツツを作り給ひし古事によれる御名なりといへる説、いとよろしかめり。さらば籠神社と申すべし。これをも中比には、式内なる眞名井神社なりといふ説もありしが、それは早くわきまへたる説どもありて、僻ごとなり。鳥居の古き額には籠大明神とありて、勅額なりともいひ、また小野道風の書なりとも申し傳へたるは、今はおろして籠之神と書きたる扁額と掲げかへたり、いとあたらしきことなり。さて其處よりまた舟にのりて、漕ぎ廻りつゝ見れば、この灣をめぐりて村々いと多し。遠くはなれて成相山名高し。中野村、小松村、國分寺村、男山村など、みな國府の地にて、そのかみは賑はひにしを、今は多くは農や海人どものすまひとなりて、おとろへためり。



かくするうちに雨にはかに降り出でければ、からく急ぎて岩瀧村といふ湊に舟をつけたり。こゝは、この内海をひと目に見わたして、橋立までもさはるものなし。眺望よき樓にしばし憩ひてものなどくひつゝ、そこより車をやとひてうしろの山にかゝる、こゝまでは與謝郡なり。今行く道は宮津町より峰山といふ處に通ずる沿道にして、山にのほれば弓木村なり。こゝは天正の頃、當國の領主一色氏が居城にて、織田氏のために滅されし處なりとて、城墟のこれり、やゝのほりて峠にかゝるほど、道いとさかしく、雨さへふりて行きなやめり。峠を下りて三重村なり。こゝは和名抄にも丹波郡三重郷と出でたる處にて、式に三重神社ともあり。此の峠の名を大内峠といふ。こゝは古へ、顯宗、仁賢の二帝、いまだ王子におましましける時、御父市邊押磐皇子、雄略天皇に殺され給ひしかば、二王子は都をのがれて丹波に下り給ひて、それよりこの地にしばし御身をしのびておはし、處なりと、この國のこと書ける書に見えたり。なほ處の人のいひ傳ふるを聞けば、この三重村を下りてはたる處に五十河村といふあり。そこにそのかみ五十日眞黒人と云へる長者あり、この二王子をあはれみ奉りて、おのが家にかくしおきて養ひ奉りしとな

り。よしある地名なりけり。日と河との字のたがひこそあれ、俗に今もいかにだにといふと云へり。その長者のもとにつかはれ在しける時の古事にやありけむ、今も此國にては五月五日、のほりの繪に、牛飼わらはの牛に乗れる繪をかきて、牛飼殿と名づけて語り傳ふとなむ。近き頃までもそのならはしありといへり。童謡なども残りりとぞ。これは二王子都にかへりて帝位につき給ひし後に、そのかみいまして時のさまを忍びがきて、いひ傳ふる事とはなしにけむと、そのかみを思ひ奉るにいとものびがたし。折しも雨いみじう降りいで、旅の衣もしと、にぬれぬ。

旅衣三重の一重はとほりけり雨も涙もふりこほれつゝ、周枳村、道の右に見ゆ。そこに大宮賣神社おはします。式内大社なり。この村はむかし大嘗會の主基にあたりし處なりといへり。いさゝか道へだたりたればえまうです。大野村に至れば日や、くれがたになれり、こゝは峰山町へ行く道と、二箇村、五箇村などいふ方へ行く道とのちまたなり。その五箇村のうちに、久次村といふあり。そこに式内比沼麻奈爲神社た、せ給へり。こたびは其の御社に詣で奉らむとのあらまじなりければ、今は久次村の方へと分れて行く。このわたりに

ては日も全く暮れはてぬれば、四方の景色もよく見やられず。雨も折々降りて道いと行きなやめり。からくして、夜になりて到り着きぬ。そもそもこの神社の御事は、古へはかにかくにいへるものもなかりしを、中比いたく衰へまし、にやありけむ、當國のうちにて、こゝぞかしこぞと、とりどりにいひひて、遂に御あともさだかならぬやうになりしを、天保の比、伊勢の國人御巫清直が、この久次村なるをまことの御社ぞと考へ云へる書ありて、いと明らかにありぬるを、なほその實地につきて考へ見むとて、ふりはへて斯くはものしたるなりけり。

二十日。朝、眞名爲神社にまうづ。この御社は比治山の麓の奥まりたる所なり。古へは此所よりや、下りたる田島字に、大宮屋敷と今いへる、そこに御社ありしを、中比の戦亂に領主一色氏のともがらが、當地に割據し、城砦を建てしころ、故ありてこゝにうつせるなりと云へり。けにそのあたりは雑垣、神門段、御屋敷、下垣等の字、今も残りてあり。さて境内のさまを見るに、年へにたる樹ども小ぐらきまで生ひ茂りて、いと奥ふかし。御社は南向にて、本殿、拜殿、さばかり大にはあらねども、處からいたく神さびたり。鳥居には

比沼眞名井原豊受皇太神宮の扁額ありていとふるし。いつの代に何人の書きて掲げしものならむ、知りたけれども、書體いとふるびたる額字のさまなり。また近き比、久邇宮の書きたまへる扁額もあり。この御社のあやしき事は、五穀をしろしめす大神とて、今も神殿の下なる土中より、土にてなれる米の涌き出づること絶えず、まうづる人のそれをとかく得まほしがる事とて、あたりをきびしくふたぎて、御椽の下に入ることをふせぎたりとて、ことさらに入り口を開きて聊か取り来て見せつ。そのさまを見るに、質は土にてありながら、米の形に少しもかはらず。なほ聞くに、この米時によりて増減あり、多き時は土にうづ高く盛りあがりてありと云へり。それは神の御心のよろこび給ふ時の事なりとて、みな人あつくうやまへり。さて拜殿にてしばしいこふ。風いとよく吹きとほしたり。

心さへ涼しくなりぬ神の名のひぢのまな井の水やかよへる古代の棟札など取り出でて見せたり。されどふるきは皆まことの物ならず、うつしなり。近き世のは領主京極氏の名など見えたり。それらはおほよそ百年あまりの物なれば、かの額字とはこよなし。されど古代より眞名井神社、また豊受大神



宮など申し来りしとは、これかれものに見えたり。ざるを近き比、隣區に鱒留村と云ふが有りて、そこに藤社大明神といへる村社のあるを、式の眞奈爲神社なりと云ひ出づる説ありて、この御社をばあらぬさまに云ひ出づる人あり。一新のころ官へも其のこと申し出でしかども、證なしとて取上げられざりけるを、猶あらぬ書などを作りて人をも勧め、ともすればうちうちにさる説をいひ出づるぞあぢきなき。この鱒留といふ村も比治山の麓にて、天正の比は砦などもありしこと、ものには見えたり。しかるに昔もさるたばかりしたる者ありしと見えて、當國の舊事記といふ地誌に、舊くよりある丹後風土記の文をひきて、かの和奈佐老翁、和奈佐老媪に、天女の養はれし古事を書きて、『爰天女善酒を醸す云云。其家豊にして土形に富めりし故に、土形の里といふ』と云へる本文に次ぎて『又、醸酒の價に替へて富貴になりし故に、榊富村とも謂ふ』といへる數句を補ひて、鱒留を榊富にとりなし、村名をふるくせむとて、かゝるしれ文つくれるは、作者のさかしらにて、はやく百年ばかりもむかしのことなりけり。この風土記の文は、はやくもろもろの古事にも引きて、みん人の知れるを、かゝるしれ文を加へたりとて誰かはうべなは

む。笑ふべし。さてまた榊富里の下にも、豊宇賀能賣命の神詠とて、天の原ふりさけ見れば霞たちの歌を出せるは、この藤社大明神を、麻奈爲神社なりとおのづから思はせむと巧める好意あらはれたり。もとより此の藤社明神も、豊宇賀大神を祭れる社にてはあらめども、この社にて舊く出だし、神符のありしを見るに、藤社大明神蠶御守護など書きて、奈麻爲れど其の村に氏子といふものもなし。この村の産土神は八大荒神とて、外に社ありしを、近き頃その氏子をこの藤社の方にうつして、祭日をも改めなどして、再び其の好意をつぎしものなるが、殊に可笑きは、藤社の社字を私に略き、藤大明神となして、藤は山の名の比治に同じ、などいひ出でたるは、神を誣ひ人を欺きたる所業といひつべし。久次村の方なるは、ふるくよりの神符にも比沼眞名井大神宮と記したるにて更にまぎれなし。ざるを官に資縁して、よからぬ計策どもをめぐらしたることなども、他に聞きたれば後にもいふべし。

二十一日。けふ比治山に登らむとて、朝まだきより其の用意したり。いと高き山なれば、年老いたる身などにはいかゞあ

らむとあやぶまれ、此頃の暑もいとほけしけれど、さはれ名高きあたりを、たゞに見過さむやはとて、あないの人も、あまたものして上りぬ。そもそも此の山は、風土記に『丹波郡郡家西北隅方有比治里此里比治山頂有井』とありて、當郡の西北にある山にて、西は即ち熊野郡に隣れり。郡家は和名抄に『丹波郷、今丹波村』といふが有りて、これ丹波丹後二國の名のとなり。それより南にあたりて足下山あり。比治山と山脈はつゞきてあれども、中間に山の切れたる處ありて、そこをとほりて此の郡より熊野郡を経て但馬のかたへものする街道なり。これを比治峠といふ。鱒留村はこの上り口なり。ふるきふみどもに『比治山、一名眞名井嶽。一名、昨石嶽といふ』とあり。また足下山、一名伊去奈子嶽といふ。これをも眞名井嶽といへり。今見るに足下山と比治山とは方角いさゝか變れども、山脈の同じきより昔は何れをも眞名井嶽といひしにや、今にては知りがたし。足下山は歌などにもよみて名高き處なり、當國一の高山にて、この丹後の海人ども、この嶽を陸の目あてとすと云へり。かくて思ふに、むかし豊宇賀大神の天降りまし、は、比治山の方か、また足下山の方か、これも定めがたきが如くなれど、なほ本社の傳によ

れば、比治の方を眞名井嶽といひて、其方に天降り給へりと云へり。其の山に眞名井の水ありといへど、今はさるさまの井も見えず。風土記にも『頂に井あり、其名を麻奈井といふ。今既に沼となれり。この井に天女八人降り來り、水を浴す』とあれば、そのかみはやく沼となりてあせしにやあらむ。さてまた、この比治を比沼とも古書にとりどりにあれど、攝津國風土記にはさだかに比遲と書きたれば、沼の字は誤なるが如くなれど、當國の風土記に『土形里此自中間至于今時便云比沼里』と二方にいへれば、いづれを誤とも定めがたし。かくて山に昇ること大凡二十町も來つらむとおほしき處より、澤二つにわかれて、いづれのかたよりも水流れ出でたり。いさゝかの瀧あり、これを眞名井の瀧といふと云へど信じがたし。このあたりはいまだ麓の方に近く、そのつづきには田などもあまたありて、かたがた麗水ともおほえず。されどよき木蔭あれば、そこにてしばしいこひて、水など飲みつゝ又のほる。これより上はいとけはしく、登るにくるしめり。半腹とおほしき處の道ばたに大石あり。うへは平なり。これは頂にありけるが、この處に落ち下れるなりといへり。この石を、豊宇賀大神の天神に饗膳奉りし机なりと



も、または此神みまかり給ひし御形を残せる石なりなど、さまざまのあやしき事ども言ひ傳ふれど、信じがたき説どもなり。からくして登りはてたるは午時なり。日は隈なく照りてあつきこと限りなし。

わけ行けば袖も袂もひぢ山にあせかきなげくみな月のそらこの山の西の方に、すこし離れて來迎山と云へるがあり。そこは天神の降らせ給へるを、大神の迎へさせ給へる處なりといひ傳ふ。大きな樹ども生ひしけれり。その山は何處にてもよく見ゆる處なりけり。頂に至れば、小松、あるひはうばらの類おひ茂りて大木はなし。いさ、かなる陰をもとめて其處に庭を敷き、携へたる瓢など開く。さて案内の人の教ふるまゝに、四方を見渡せば、いつ方も一目に見おろさる。山々を越えて海まで遙に見えたり。たゞこゝもとに聳え立てるは足下山なり。その山、ものよりことなり。まづ海のいと近きは、天の橋立の内外の海にて、このころ經て來し湊々山々くまもおちず。丹後富士といふ山など雲の上に見ゆ。それより宮津灣の出さきの嶋々まで見ゆ。西北に向へば、久美濱の湊、小天橋など云へる松原も手にとるばかりなり。東南のかたは、丹波の山々うち續きて限りもなし。頂上は風いとよく

吹きとほして、處からいと涼しく立ちま憂けれど、かへさの道も遙かなれば、もとしかたに立ち歸る。すこし下れば風も絶えて日いとあつし。昇りはさしも覺えざりつれど、下り道はいと急にて、石など踏みては折々くつがへるべくなりぬるにいたく困じぬ。ありし瀧のもとにて、水飲みなどしてやすらひつゝ、やうやう日の西になりぬるころ麓に下りつきぬ。あつき事ものに似ず。かくて湯に入り衣ぬきかへなどして、人ごゝちつきぬるころ。酒のみ氷はみなどしてつかれを忘れぬ。

二十二日。けふは何方へもえゆかず。昨日のつかれに脚さへ痛みぬれば、ひねもす物語などしてくれぬ。

二十三日。今日も。  
二十四日。今日は峰山にもせむとて、人々と共に出で立つ。朝とく此處を出でて先づ田代村にいたりぬ。こゝは久次の隣村なり。稻代谷といふもあり。こゝは豊宇氣大神を古へ祀りし處なりと云ひ傳ふ。大神の御田の稻種ひたし、處なりとて、井あり。そこに苗代田といふが今もありて本社領なり。こゝは南の方いとよく打ちひらけて比治山を西に負ひ、見わたしよき處なり。まへに府岡といふあり。四道將軍の館

跡なりと言ひ傳へたり。倭姫命世記に、『雄略天皇二十一年冬十月、倭姫命教覺給久云云。丹波國與佐之小見比沼之魚井原坐道主王子八乎止女乃齋奉御饌都神・止由氣大神乎、我坐國欲止誨覺給支』とあるを見れば、四道將軍のうち、丹波道主王この地に住みまして、大神を崇み給へるあまりに、其の御女・八乎止女を齋女として齋き奉り給へるなるべし。さらばこの府岡といふ處は、將軍の館跡とはいへど、其の御息女の齋宮の舊趾にもあるべし。其頃はこの田代村に、まことに御社ありけらし。この府岡も久次の區域のうちなり。今は久次・二箇・五箇・鱒留の四箇村を合せて、五箇村といへども、そのかみ五箇といふは其の中の一村なり。さてそれより新治村に到る。この村は和名抄に新沼とある郷なり。沼は治の誤なること知られたり。それより菅村、こゝに村社久津方社の森あり、これは麻奈爲神社の神輿行宮の舊跡なりと言ひ傳ふ。俗に御旅所と云へり。次に峰山町なり、こゝは一新の頃まで領主京極氏の居城なり。この町はづれなる赤坂村に式内咋岡神社あり、これも祭神は豊宇氣大神なり。この社、古代には比治山の麓なる神所段といふ所の山にありしを、天正年中に峰山なる山祇山といふに移し、を、今の赤坂村に遷し

たるは元和年中のことにて、それより京極氏の氏神と崇めて、今に至れりと云ひ傳へたり。然るに近き頃に、この式社を廢して、久次村なる麻奈爲神社を、咋岡神社といひ出で、さてかの鱒留なる藤社明神を麻奈爲神社と改めしめむとたくめるものありて、その事をうべうべしく書きて申し立てしかども、其の事ならず、やむこと得ずともとのまゝになりぬと云へるは、まことにあさましき事なり。さて、己がこたび此の御社の事を、かくまで處々に云へるを、いかなる事にかと人のいぶかしみ思ふもありぬべけれど、この麻奈爲神社こそは、伊勢外宮の本つ御社にして、おほろけの御神にあらぬを、かくまで後世にまどはしくなれるがいとうれたくて、かく繰りかへしくだくだくは云ふなり。ゆめこと好むと人な思ひそよ。

二十五日。けふもやどりにあり。  
二十六日。けふは朝とくこゝを立ちて、但馬國城崎郡なる温泉にもせむとて出づ。府岡を經て鱒留村なる藤社明神の前を過ぎ、それより峠にかゝる。このあたり、この頃のほりし比治山の麓なり。菱山峠といへるを境にて熊野郡なり。佐野、野中、橋爪などいふ村々を過ぎて、午時に久美濱に至



る。こゝは家居も多く、よろしき町なり。この郷は和名抄にも出でたり。この久美濱灣は、北に對ひたる入海にてうちひらけたり。その入海の口にさし出でたる磯あり、松生ひつきたり、それを小天橋といひて、天橋立にむかへて皆人のめづる處なり。しばしいこひて晝飯たうべ、そこより峠にかゝる。三原峠といふ。丹後但馬の境なり。この峠にて、海を見渡したる、けしきのよろしきは更なり。過ぎこし丹後の國の山々、足下山、比治山などいよく見ゆ。道はさかし。宜しき程の峠二つをこえて、但馬國城崎郡なる川の出口なり、そこを津居山灣といふ。川の名は豊國川とも、内川ともいふといへり。廣さ大凡二町餘りもありぬべし。舟にてかなたの岸に渡る。海人どもの家居おほし。川に浴ひて十四五町も行けば、湯島村温泉なり。村に至れば人家多し。浴室ども入りこみていとにぎはひたり。學校などの設もありて、家作りも今様なるがあり。ゆとうやといふ宿をかりて旅のよそほひをよく。湯の出づる處はいと多けれど、この屋は湯にいと近く便よし。まつ入りて、そのさまを見れば、いと清けなり。湯桁いと廣くて、いくつと數へまほしきまじたり。その上に並み居て、人ごとにひさくと云ふものにて我が身にうちかけ、ま

た桶などに酌み入れて、細き桶もて、あるは腰、あるは背など、思ひ思ひにうたするもあり。さまざまの功能などしるしものありて、おのがじし其の方の病をいやすとにやあらむ、遊び人はすくなきやうなり。おほよそ一日に三度ばかりを節度として入ることにて、餘りしけく浴するはよからずといふ。さて此の處は前に大川あり、また海も近ければ、思ひしよりも心ゆく處にて、鮮魚などは多かり。湯島とはいへども、川中の島にはあらず、山かたつきてある里なり。前は川に臨みてあれば、うちひらけて景色よし。

島山のよろしきさとの湯の島はとこ世の國の離れじまかも二十七日。けふは朝とく湯あみてのちは、いとつれづれなれば、こゝろやりに長歌などよむ、

城の崎のなかを流るゝ　うち川の川の岸なる  
湯の島は夏なき里と　みな月のあつき盛りを  
皆人のたづねきたりて　出づる湯の中に入り立ち  
島山のかけをもめでて　あさ川にをぶねを浮べ  
ゆふ川に貝をも拾ひ　おもしろみ心ごゝろに  
遊ぶたのしさ

みな月のあつき流るゝきの崎のみの煙は涼しかりけり

けにあつさは東京などとはこよなくて、いと涼しき處なりけり。

十八日。この湯島より、やゝ一里ばかりも川をのほりて、赤石村といへるあり、川に添ひたる處なり。その山に石山とてあやしき石出づる處あり。おのづからなる石山にて、その石のさま、なべてのかたち似ず、あるは四角なるさまし、あるは六角なるさまして、長き柱を立てたらむが如し。それに縦にも横にも、下より積み上げたらむさましたるなり。その石を矢もてくづして、かたはらよりかきとれば、ことごとく一つ一つの平石になりて、家などつくる礎には、そのまゝに用ゐらる。それを昔より處の人したよりくづしとる。そのあと深き洞となれり。いつの比よりか是れを玄武洞と名づく、まことに奇觀なり。洞の中はいと廣く、あまたの人ども、住みぬべく作れる石窟の如くなれども、底には水みちて入りがたし。たゞ洞門の外よりうかがひ見るに、今も此のとりのさしたる石、頭の上にくづれかゝらむさまして、見るもあやふし。この事は、はやく古事記傳にも、當國伊豆志の名義をときたる處に云へるやう、「この地の山より異しき石の出づるといへば、其の由の名なるべし。その山は石山と云ひて高き

山なる、傍に大きな洞ありて、石はその洞の奥よりぞ出づる。その石のあやしきことは、形おのづからみな方にして、石匠の作りなしたらむが如し。かゝれば出石といふは、この石より起れる名とぞきこえたる」と云へりき。けにこの説の如し。但し此處は城崎郡にて、出石郡とは六里もへだたれりと聞けば、名義にも聊たがへるが如し。もしくは、上古は此わたりまで出石郡にてもありけむか知りがたし。すべて此處のみならず、この城崎郡には、處々に石山多し、出石の方はいかゝあらむ、國人などによく聞かまほしき事なり。今日この石山見むとて、朝より舟をやとひて漕ぎのほる。川水いとよよし。處々に洲などありて、水のめぐれるさま、景色よし。また海人どものすなどりし、貝などあさるも珍らかなり。風はいと涼しく吹きて、心地よし。

たび衣きのさき川に舟うけてあつさを流す袖のすゞしさなどいふうちに玄武洞の下につきぬ。そこよりおりて、道もなき草はら、またかの石ども切り取りしあたりは、小石ども數多ちり亂れて道いとわろし。そこを踏み分けて、洞の下に至りてしばし見るうちに、あとよりもまた來る人どもの舟あり。女など乗せて遊びながら見にくるもあり。こゝは外に見



るべきものなければ立ち歸る。かへさは流のまにまになれば、舟いとはやし。

むしろ帆を奥吹く風にはらませてこゝろの儘に下る舟かなはやく湯島につきぬ。

二十九日。けふは都にのほらむとて、まだ夜深くこゝを立ちて、車にてこたびは川のほとりの道につきてのほる。夜のうちに豊岡町に至る。こゝより出石に分れて行くべき道あれども、今は生野銀山街道のかたへと行く。あまたの村々をへて、佐野といふ處に至れば、こゝより氣多郡なり。式内氣多神社上郷村にあり。網場村に至る。式内和奈美神社あり。こゝは早く養父郡なり。道端より見えたり。按ずるに和奈美は絹網なり。今なんはと云ふは訛れるなりけり。この神は天湯河祈命を祭ると云へり。むかし垂仁天皇御世に、譽津別王のために、鶴を此の國にとらしめ給ひしことありて、湯川祈命、鳥を追ひ尋ねて出雲國に詣りて捕へ獲たりとも、但馬國にて獲たりとも日本紀に見えたり。古事記には高志國に到りて、和那美之水門に網を張りて得たりとあれど、越國にはさる地名見えず。此の國に顯に和奈美神社おはしますが上に、今網場村といふ名さへ残りてあれば、確かなり。こゝは城崎

り。むかし此の川を渡りし時は、水多くて景色よかりしかば、そのをり『舟しばしわれにかせ山いづみ川かは風ぬるしこきぞ遊ばむ』とよみたりしが、今日は此の比のひでりに水かれはて、たゞ聊ばかりの流あり。汽車にてさへありければ、そのかみの面影なし。午前に京都にいたる。

いつ見ても面がはりせでうれしきは東の山べ加茂の川水八月一日。けふ汽車にて二條停車場より嵐山見に行く、友とする人は猪熊淺磨なり。大堰川を舟にてのほる、けしきいとよし。

水清く岩おもしろき大堰川舟もこゝろも行くにまかせぬ春秋の花も紅葉もなつ川に又ひとしほのけしきをぞ見るとのところに下りて暫時いこひぬ。夜に入りて汽車にて都に歸る。

いにしへの人に問はゞや夕まぐれさかのを分くる心細さは二日。泉涌寺にまうでて、月の輪のみはかをかみて青山に隠れましけむ影をしぞ思ふ稻荷の停車場より、山科を経て醍醐に行く。醍醐、朱雀、兩帝の陵を拜みて立ちかへる。をりから夕立にはかに降りいでて袖もしと、にぬれぬ。笠取山を見て、

川の上流にて、川ある處なりければ、水門とは名づけしなりけり。なほ城崎郡にも久々比神社ある、かたがた此の國によりあり。されば鶴をとらしめ給ひしことは、越の國にはあらで、此の國にての事なりけりと早く考へおかれし人もあり。養父に到れば、道ばたに式内夜夫坐神社あり、養父大明神と申す。祭神は大己貴命をはじめ、五座の神なりとぞ。行き行きて、午時に生野にいたる。こゝは世に名高き銀山ある處なり。たゞ此の驛ちかきあたりに製造所の棟など見えたり。湯島より此處まで十七里なりといふ。こゝよりは汽車ありてそれに乗る。早く播磨國姫路にいたる。明石、須磨などもただ過ぎ過ぎて、神戸にいたりやどりぬ。

三十日。神戸を立ちて、大阪より河内路を経て大和に入る、奈良にて猿澤池の畔なる家にやどる。まだ早ければ春日神社を拜み、若草山、東大寺、興福寺など見に行く。おのれ一新のころ、しばらく興福寺の東門前なる観音院といへるに住みて、書など教へけるが、其院は早く取りこぼたれて、今は公園となりて芝おひしけれり。

ありし世をたどる野原の道の邊にしかごと鹿の教へ顔なる三十一日。奈良をたちて木津川を渡る、この川はいづみ川な

笠とりの山さへもれぬ夕だちに人はうべこそ袖ぬらしけれ三日。朝、京都をたちて靜岡にいたりてやどる。

四日。午時すぐるころ東京につく。

かくかきをへて。

言の葉も筆もおよばぬ橋立はまだふみみぬと人に言はまし

### 新年旅 明治三十一年

年改りても、寒さのいと堪へ難きに困じをりけるころ、駿河の國はいと暖なる地にて、中にも駿東郡なる靜浦といふところ、浦の景色もよく、波の音も靜かなるあたりなり。そこに知れる人のあるに、しばらくものせずとす、むる人のあるにもよされぬ。一月六日の朝こゝを立ち出づ。沼津といふ驛までは常にかはれることなし。今日はいと寒くて、朝より雪なども少し降り出でければ、富士のけしきも見えず。午後よりは晴れたり。驛に至り着きける頃は日もさしいでぬ。そこよりおりて人車をやとひて、道を左の方へととる。狩野川のしりを渡りて、海のほとりを行く、波の音いと清し。我入道、牛伏などいふあたりを経て、夕つけて江の浦村にいたるぬ。はやくより其處に至りてありける人のがり行きける



に、待ち喜びて四方山の物語す。とかくして其の日は暮れぬ。あくる日を待ちてやを見出せば、この家の前より海にて、波たゞこ、もとに打ち寄せたり。きのふは空曇りて、道すがらいと寒かりしに、今日は名残なく晴れてあたりの景色いとよし。こゝは昨日過ぎし海岸とかはりて、海の三方を山もて掩ひたれば、大なる波などは立たず。南の方に淡島とて、いとよろしきほどの島をもて、海の入口をふたぎたれば、さながら一つの湖のごとし。水はいと深しとて、岸まで大船のよれるなど、いとめづらかなり。さりければにや舟の出入は絶えず。處のさま静なる方にはあらず。波の音よりも海人どものさへつりあふ聲ども、何となく耳かまし。されど暖かなることは聞き及びしにたがはず、風いと静かにて、冬などを過ぎむにはいとよろしき所なり。

かゝみなす海のおもてのしづ浦に底の玉藻も浮び出つらむ朝風ふきぬるみて、海上烟こめたりけるを、

霜置かぬするがの海の朝ほらけ波のけぶりぞ沖にただよふあるあした、向ひなる伊豆の山に初雪のふれるを見て、

するが人けさは寒さをおほゆるらむ初雪しろし伊豆の遠山南の方の山々をこえて、伊豆の山まで遙に見渡さる。この灣

白波を帯にめぐらす淡の島あはにや風のひきむすぶらむ日うらゝかに晴れて、海の面に波といふものなし。うちつけに秋のくれ方などの心地す。この國はなべて暖國なるが、この浦は殊に暖かなりと處の人はいへり。さて處々あそびありきて、夕つ方もとの湊に歸りぬ。かくしてある間に、はやく五六日も過ぎぬれば、いざやこのついでに、伊豆國修善寺の温泉に、ゆあみにもせむと言ひ合せて、あるあした出でたつ。その道はかの旅村といふ處より山に入りて、例の石の洞門などうちすぐれば、はやく伊豆の國なり。この山を旅坂といふ。道はいとしも峻しからねど、折々は車よりおりてもしつ。彼方へ越ゆれば、はやく箱根あたりの山々、街道なる松の並木も見えたり。天城山はるかに雲居にあらはれたり。吹風や天城の山を越えつらむあまぎる雲も晴れのきにけり江間、あま野などいふ村を過ぎて大仁村に出づ。こゝは沼津、三島の方よりものする大道なり。狩野川を此方彼方にうち渡りてある村に出づれば、下田街道と修善寺道と分るゝちまたなり。その道を右にとれば修善寺村なり。やゝ川に沿ひて上る。この川は桂川とも桂谷ともいふ。村に至れば川の兩岸に湯いと多し。中ほどに橋あり、その橋を渡りて大川とい

のめぐりは、この江の浦より、左の方に續きて村々とも数多ある中に、たゞ村、くち村など、海を隔て、たゞ此の家より真向ひに見えたり。その行く道々は、石を切りとほし、隧道など作りて、たよりよくものしたり。凡て此のあたりの山々より、かの伊豆石とか世にいふ石をおびたゞしく切り出だせるが、その切れるさまいと巧みなり。その切りとりたる跡などの波にさらされたる、いと白く雪のふれるがごとし。よる波にさらしさらして巖さへ白くなりぬる江の浦の里この灣を舟にのりて、淡島をめぐり見むと漕ぎ出づ。島をはなれて見渡せば、海の面いと廣し。遠く近くの山々波の上に見ゆるが中に、富士の山目の前に聳えたり。あしたか山にはいまだ雪なけれど、富士はその上に、きはだちて真白に見ゆ。玉などを臺にのせたらむが如し。かの天日矛がもて來にけむ寶の名おほえて、

富士の根を雲居のよそに捧げけり是や名にたてる足高の山その山につゞきて、東海道の驛々、岩淵、田子、三穂の浦まで見え、また伊豆の方は、この近きわたりなる重寺、三津の浦々より、大瀬崎までうちつゞきたり。淡島の大きさは、めぐり一里もありぬべし。

ふ家に至る。この家にも湯あり。まづあみてつかれをやすめつ。いとよき程のあつさにて身にかなひたり。

月人のあみて流しゝするなれや桂の川に出づるいで湯は軒端の梅の花や、ほゝゑめるを、

梅の花いまだかすまぬ冬の日はみゆの烟にかをりそめけりこの近きわたりに修善寺あり。何ばかり大にはあらねど、處からものさびたり。そのつゞきに源範頼朝臣の墓祠あり。今は木も切り畑にすかれて、聊そのかたちを殘せり。川向なる頼家將軍の墓、わづかなる五輪の、かけそこなはれたる上に雨おほひして、前に碑など立てたり。そのかみのこと思ひやるにいとあはれなり。長歌一首をよむ。

かまくらの二代の世つぎ      みなもとの軍の將は  
臣の子のあしきしわざに      家の子の其のたばかりに  
をさめしる國をもはなれ      にぎひにし家をもおきて  
つれもなき此の山かけに      おもはぬに失はれけり  
奥つきをこゝとは聞けど      ありてなきその石碑も  
風ならで塵は掃はず      月ならで人は訪ひこず  
百代にも千代にもつきじ      君がうらみは  
この修善寺の里は四方に山をたゝみて、中に川を流したれ



ば、處のさま静かにて、みやび人などの遊びに来る處なりと聞く。ことに夏の比は涼しとて集ひくる人多しといふを、今はまだ寒ければ、寒をさくるかたにはいとよろしく、をりをり湯浴みて、いとつれづれなるまゝに、長歌など思ひつゞける。

かつらがは岸のほとりに 出づる湯を下樋にとほし  
家ごとに屋ごとに引けば あしびきの病をさむと  
こゝにしもつどふ諸人 やまがはの流を清み  
春秋の色うるはしみ よと共に賑はひにけり  
しゆぜんじの里

また一首

みゆき降る冬のあしたの 堪へがたき寒さをさくと  
あたゝけき此の山里を はるばるに尋ねしければ  
岩の間にみ湯は涌きいで 山もとに梅は匂ひぬ  
かつらがは水の音さへ 吹く風にゆるびて春の  
こゝちこそすれ

やどのあるじ大川某も、歌よめりとて見せたり。これよりも詠みて與へつ。この隣村なる、熊坂村にすめる竹村五百枝、其の父はむかし相識れる人なり。今の人も歌このみて訪ひき

おくりてこそ立ち別れにしか。明治三十一年一月二十日

たる。また其の親族なる狩野中の郷村に、飯田守年といふ歌よみあり。その人は早くなくなりたるが、その孫なる充雄といふ人、このごろ國學院の生徒にてありければ、そのちなみに、其の家より物などおこせたり。その中に椎茸のいと新しく、味よきを送れるをめでて歌よあり。

椎柴のときはの色をにほひにて心のたけを我に見せたる竹村も歌こひければ書いて與へつ。かゝる人どもに折々訪はるゝ外には、さらにすべきことなし。かくて五六日ばかりとどまりけるが、あるあした此の人々に別れて、こたみは、馬車といふものをやとひて、その宿より乗る。あまたの村々をすぎて、南條、北條、にら山などをあとになして、午時に三島につく。三島神社を拜し奉る。この社は先づ年詣でしことあれば、今日はじめにはあらず。それより時のまに沼津に着きぬ。まだ日は高けれどけふはこゝにとまりぬ。つとめてみれば天氣よし、沼津より汽車にのりて見出せば、富士は隈もなく眞白なり。この二三日雨がちにてありけるが、この嶺の雪のたけぞまさりけむ、おろしくる風は寒けれど、雪の色はまた一入のながめなり。かくて足柄山の麓をすぎて、相模の國にいりたつまで、富士の見やらるゝかぎり、しばしば見



蓬室集の印刷なりぬれば、何にても書き添へてよといはるるに、おのれも葉末の雫受けたる身なれば、いなまんやうもななく、心に残る大人の御面影をだに、しるして見んとぞ思ひなりぬる。

大人の御名を建樹の知りたるは、今の帝國大學の東京大學といひし頃の年表にて、源氏物語の講義を受け持たせ給ふよしを讀みたるが始にて、いかで一たびにてもまのあたり御物語うけたまはらばやと思ひしは、其かみの希望なりき。

後おのれも大學の編輯所に出で入る身となりて、大人も日毎のやうに教場の歸るさには立ちより給ひしかば、いつしか知り知られつゝ、こゝかしこの歌文章の圓居などにて、膝をまじへ盃とりかふるまでの中となりき。明治十六七年の事なりしと覺ゆ。

其頃長歌會といふが始まりて、月に一たびの會合に、大人また缺かせ給ふ事なかりしが、ある時おのれに語り給はく、長歌よむ事は、縣居鈴屋の翁いでおはしてより盛になりたれど、ただ萬葉に習ふのみにて、我おもひをのぶる器ならぬを如何にせん。こゝに見る處ありて、しらべ姿をば萬葉に借れども、詞は古今以後のを採りて、優によみなしたるは、海野

釋を書きはじめたるは、武夫の生れたる又の年にて、嘉永六年なりしかば、今年にて四十五年になりぬ、思へば永のなじみなりと語り給へり。かいなでの御筆すさびならぬは、是にても知らるゝぞかし。

大人また謠曲を好ませ給ひぬ。御みづから謠ひ給ふ事は、田村の外きゝたる事なけれど、人のを聞くを好み、また能見る事を此上なき樂しみとし給ひしかば、おのれもしばしば御供申したりき。評し給ふ事もいと巧にて、寶生九郎の鞍馬天狗に、月は鞍馬の僧正がと、白頭の毛を左手につかみて見あけたる物凄さは、獨得の術なるべしとて、是のみ幾年へても忘れ給はざりき。

いつの春なりけん、ふと思ひ立ちて、共に東京の花見めぐりたる事ありしが、折しも上野の東照宮の祭禮にて、神樂殿には笛の音おもしろく舞のはじまりたる處なりしに、いづこに行かせ給ひけん大人見え給はず。尋ねれば山なす人をおしわけて、舞臺ちかく立ちつゝ、見物して居給ひしなり。歸るゝおのれは童ごゝろ猶ほ失せずして、今に神樂がすきなりとぞ宣ひし。なほ世の人の知らぬ事にて、老いたる後まで大人が誇り給ひしは、風の絲目と障子張なりしと語らば、さてもと

遊翁こそあれ。今の長歌よまん者は師とすべきに足りなん。されど調べをいたはるあまりに、腰よわきに流るゝ弊あれば心すべきなりと。大人が長歌の風調の獨りことなるゆゑをさとりぬ。遊翁は執心のあまり、誰にもあれ、長歌を詠め詠めとすゝめしに、ある人反歌だにえよみ侍らぬをといひしかば、然らば發句にても添へおけといはれし事さへありきとて、髻なでおろしつゝ、笑ひ給ひし事、なほきのふの心地す。

大人の縣居翁を尊びて、十月のつごもりには神酒魚など捧けつゝ、御魂祭をし給ひ、鈴屋翁はことに敬ひ慕ひ給ふとて、何にても御靈代にすべき御筆のあとをと、今の本居翁に乞はせ給ひしに、鈴屋翁のみづから書かせ給ひし古事記傳竟宴の折の探題なりとて、忍穂耳尊としるせる紙を得たまひしかば、いたく喜びて御扉の内にこめ、神棚にをさめ給ひしが、今も其家に残りて、又大人の御形見とさへぞなりぬる。

大人が世のきはみの御事業は、日本書紀の通釋にありしは、人の知れるところ、いつまゐりても文机の上に日本書紀を見ぬ事なく、赤き青き白き筆して書き入れたる上に書き入れ、校合しては直し、直しては訂正しなど、よくもかくまでと驚かるゝ事多かりしが、身まかせ給ふ四五年前に、おのれ通

あきるゝ、教子たちもありなん。

旅は常に好ませ給ふ事とて、夏といひ冬といひ、西に東にしばくし給ひしが、おのが隨行せしは、磯部、鎌倉、武州の御嶽などなりき。伊勢におはしける時も、必ず來よ、山室山まうで諸共にせんなど宣ひおこせしかど、事とけぬ間に、病えて歸り給ひしぞかなしかりける。

御嶽には時鳥きかんとてなりしが、その夕べ宿りの近くに棟上の祝ありて餅まきたりしを、大人とそゝろありきしながら拾ひ歸りしなど思ひいづれば、すゝろに其かみの戀しきを、宿りのおうなに、砂糖あらずや餅をえたるにといひたりしかば、大人は止めよゝゝ是をこそとて、盃廻し給ひつるも夢に似て夢ならず。

大人の御病やうやう重りゆかせ給ひし頃、ある日の事なりき、人ありて今朝はいつもよりあしく見えさせ給ふと告げ來しかば、急ぎ訪ひまるらせたるに、今日しも母の命日にあたれば、みづから迎に來りしならんと宣ふ。いなゝゝさる事やは侍るべきなど、慰め申しはしたれど、下にはいと氣づかひ參らせたるに、また御心やひらけ、ん。神代の文字の御あけつらひなど始まりて事まぎれぬ。『もえわたる心の火をも鎮め



ませ、しるしみつはの神ならば神』とよみて、井の水に沈めしめ給ひしも、此頃の事なりき。みまからせ給ふ一月ばかりの前にもありけらし。思ひ出つれば限なく、わき出づる涙を拂はんとすれば、筆のすゝみかぬるを如何にせん。よしさばれ、後見ん人の忍草にもと、花ならぬ言の葉、二ひら三ひら摘み出でたるになん。時は明治の三十六年、三年の御祭ことをへたる又の春、花ならぬ若葉なつかしき榎町のやどりにて

大和田 建 樹

飯田武郷傳

附年譜



## 飯田武郷傳

飯田武郷は、信濃國高島の藩士なり。通稱彦介、後に守人と改め、家を蓬室と名づく。世々その藩主諏訪侯に仕ふ。文政十年丁亥十二月六日、江戸・芝・金杉の邸藩に生る。父は小十郎武敏、母は飯島義道の女、名を諦子と言ふ。

年五六歳、學ばざるに能く四書を素讀す。人皆是を奇とせり。天保三年正月、父を喪ひ、母また飯島氏に歸復せしかば、叔父・裏安、後見して以て之を傳育す。十一歳にして芙蓉館に遊び、漢學を服部元濟に受け、數年にして其の業を了ふ。時に本居宣長翁の著書を読み大に感ずる所あり、轉じて皇學に志し、平田篤胤の門に入り、和歌を海野遊翁(幸典)に學べり。

嘉永五年壬子、始めて日本書紀の註釋を著はさんと志し、即ち先づ伊勢神宮に詣で、尋で京都に上りて、皇居を拜し、普く近畿の地理古跡を探り、歸來筆硯を清めて稿を起せり。時に年二十六歳なりき。

六年癸丑六月、亞米利加合衆國の水師提督ペルリ兵艦を率ゐて浦賀に來り、通商を求む。幕府答ふるに明年議定せむ事を以てす。ペルリ便ち錨を掛けて去り、安政元年甲寅正月、再び浦賀に來航するや、幕府、海内の輿論を斥け、獨斷して其の請を容れ、尋で井伊直弼を大老に擧げ、五年六月、勅裁を仰がずして外交條約を假定せしより、尊王攘夷の論、漸く諸國に發り、討幕の志士皆奮起せり。時に王政復古の主動者・岩倉(具視)公は、公武合體論者たるの故を以て勸を蒙り、文久二年九月、洛外・岩倉村に追はれしも、常に皇綱を挽回せむ事を計り、西郷、大久保、木戸、小松等と謀議を通じ、密かに諸藩勤王の志士を懷撫す。時に武郷は郷里・上諏訪に在り。篤學の名夙に遠近に知られ、其門に遊びて皇學を受くるの士、凡て尊王を説かざるもの無し。是を以て武郷、屢ば公の密旨を蒙るに逮び、遂に同志を糾合し、大に成す所あらむとす。乃ち家督を長男武夫に譲り、以て其の時機に至るを待てり。



慶應三年丁卯正月、明治天皇即位し給ふに及び、公、勅許に與りて入洛し、乃ち王政復古の實行を計畫す。斯くて其の策る所漸く進み、討幕の密勅、薩長兩藩に下りしかば、西郷隆盛等、先づ江戸城下を擾亂せしめ、次ぎて關東地方を攪拌し、幕府の激怒を促して戦端を開かしめ、虚に乗じて勅旨を遂行せむと謀れり。時に武郷、其の檄を受けて江戸に赴き、友人權田直助、落合直亮等と相謀りて隆盛に應じ、同志を糾合して數百人を得たり。是に於て武郷は江戸を辭し、行く往く同志を募りて郷里に歸り、本營を下諏訪に置いて志士を統率し、以て機熟するに備へしが、當時高島の藩主諏訪侯は、幕府の老中たりしかば、佐幕の藩士亦頗る多く、竊かに武郷の出入を窺ひて身命を狙ふ者、常に絶ゆる事なかりしも、能く其の危ふきを凌ぎて畫策に努力せり。

是より先き、幕府の士に小島四郎將滿と云ふ者あり。變名して相良總三と稱す。英傑にして勤王の志篤かりしかば、江戸の同志等乃ち總三を以て總監に推し、落合直亮を副監と爲し、三田の薩邸を以て屯營に充て、大に活躍する所あらむと期せり。是に於て總三、自ら諏訪に來りて武郷を訪ひ、信・武の連絡を精しからしめ、行動を共にせん事を議らひしかば、武郷乃ち石城東山を選び、薩邸に遣はして其の任に當らしむ。

是より嚮、水戸の浪士・武田耕雲齋正生、尊王攘夷の志士を率ゐ、中山道を経て京都に赴かむとするや、幕府、高島・松本の二藩に命じて、之を下諏訪に要撃せしむ。是に於て元治元年十一月二十日、藩主兵を動かして樋橋(和田峠の山麓)に邀へ、銃隊を備へて之を撃ち、耕雲齋の帷幕の俊傑・今辨慶を始め、浪士若干名を斃せり。然れども高島の先鋒は小澤正弘、立木定保等の勤王派之に與り、敢て戦ふ事を欲せざりしかば、士氣沮喪して甚だ奮はず。已にして藩軍大に敗れ、遂に潰走して路を開くや、小野の志士倉澤清也等、竊かに武郷の意を含み、耕雲齋の軍を嚮へて、先導して之を伊那に送り。時に石城東山(石城また石垣に作り、別に里見と稱す。名は一作、東山は其號なり)祝盃を擧げ、酔に乗じて往きて今辨慶の穴を斬り、家に齎して之を啖ひ、更に大盃を傾けて揚言して曰く、「義士・今辨慶の肉を食み、益勤王の志を厚うす」と、武郷之を聞きて叱責して曰く、「其の志は流輩に超ゆと雖も、行ふ所は禽獸に類せり。予等自今交を絶つべし」と。

と。東山酔醒めて悔のれども及ばず、蟄居謹慎する事、之を久しうせり。

已にして武郷、相良總三の需に應じ、江戸の薩邸に派遣すべき士を詮衡すと聞きて、東山身を挺して武郷を訪ひ、一死その任に當りて昔日の罪を贖はむ事を請ふ。武郷素より此人をして爛醉の失に埋れしむるを惜しめり。即ち同志等を集めて別宴を開き、勵ますに一首の和歌を以てす。其の歌に曰く、

唐人が別れし水の心さへ汲みて知らる、此の夕べかな

と。蓋し風蕭々兮易水寒の意を諷へる也。武郷その別に臨みて東山を誡めて曰く、「足下酒癖あり。請ふ自重して之を慎しめ」と。東山唯々として袂を別ち、江戸に赴きて其の任に努むる所ありしも、輒もすれば銳氣豪放に過ぎ、或は密に江戸城に入り、火を放たむとして果さず。尋で目黒に遊びて鯨飲し、偶幕吏等の横暴を極むるを見て之を斬る。然も衆寡敵せず。遂に捕へられて其の討幕の士なるを知られ、四谷傳馬町の獄中に毒殺せらる。(年卅四)。依りて總三、部下の士を馳せて之を武郷に報じ、以て東山に代ふるの士を需む。

是に於て武郷更に岩波廉之助(眞薦)を遣はして薩邸に入らしめ、自らは又策る所あり、竊に藩を脱して京都に上り、直助、直亮、二人を入京せしめ、東西相呼應するの道を闢き、且つ相與に岩倉公の下陣に宿し、日夜公に接して其の旨を受け、出で、は諸藩勤王の志士を御し、入りては歴史・典故の諮詢に應じ、大に維新の畫策に參與せり。

此の年十月十四日、征夷大將軍・徳川慶喜、遂に大政の奉還を請奏す。天皇之を聽し給ひ、勅使を先帝の御陵に遣はし、王政復古の告祭を爲さしめ給ひ、尋で攝關・將軍・議奏・守護職等の官職を廢し、新に三職を制め給ひて、織仁親王を總裁と爲し、嘉彰親王、晃親王、及び三條、岩倉兩公等を議定に任じ、西郷、大久保等を以て參與と爲給ふ。

此の間、慶喜は尙ほ其の去就を闡かにせず、會桑二藩の兵を率ゐて二條城に在り、薩・長の兵と對峙して危機甚だ迫り、風説頻に行はれ、城兵或は先づ諸藩勤王の士を襲はむとすと傳ふる者あり。同志等の起居甚だ靜かならず。是に於て武郷士氣の沮喪せむ事を懼れ、一日幕府の士に扮し、従者平五郎を後に從へ、傲然として二條城門の闕を排して入る。衛卒等



禮を厚うして敢て咎めず。乃ち城兵等の抜刀して屯集せる間を彷徨し、其の雜説に耳を傾け、終日城内の形勢を視察す。既にして宵に紛れて城門を出づるや、從者平五郎密かに問ひて曰く、『將軍は城内の何處に在りし乎』と。武郷、偵吏の尾行する者あるを知り、顧みて他を言ふ。從者其の意を悟らず、聲を擧げて再び之を問ふに及びて、偵吏大聲喚んで曰く、『間諜なり遁すべからず』と。城兵之を聞きて左右に起り、群を爲して二人を追撃す。武郷闘ひ且つ走り、身を以て岩倉邸に免れ、詳かに其の視察する所を披瀝し、城中の士氣の振はざるを告ぐるや。同志等掌中に汗を握りて、且つ驚き且つ悦び、乃ち祝宴を催して歎を盡せり。然も武郷は從者を悼み、憂愁の色を泛べて敢て飲まず。時に血に塗れて闖入し來れる者あり。倉皇として叫びて曰く、『飯田先生は二條城外に斬殺せられぬ。余は塹壕の内に投じて、纔に遁る、事を得たり』と。衆、醉眼を豁きて睜れば、即ち從者の平五郎その人なりし也。(備考。當時、岩倉公の門内に一步を入れば、幕府も手を下す事能はざりし也。)

已にして慶喜の大阪城に走るや、會・桑二藩の宮門警衛を撤せしめ、之に代ふるに薩・藝・土の兵を以てす。武郷、歡喜措く能はず、直ちに之を同志に報じ、更に將來の行動を策せむと欲し、晝夜兼行、諏訪に歸る。時に十二月二十八日なり。衆みな勇躍、益努力せむ事を期せり。

後數日、深夜武郷の寓居を叩きて、竊に『先生』と呼ぶ者あり。怪しみて戸を開きて見るに、蓬髮の一乞丐兒、伸吟して袖に縋りて倒れぬ。氣息奄々として將に死に瀕する者の如し。乃ち燈火を挑けて能く之を見れば、曩に江戸に派せし岩波廉之助なるに驚き、直に同志の醫師・大山玄純を招きて治療せしむ。既にして廉之助語つて曰く、『去十二月廿日の夜、江戸城西の丸炎上す。幕府、其の犯人の薩邸に潜むを探知し、之を捕縛せむ事を交渉するや、薩邸留守居役・篠崎彦五郎、浪士總監・相良總三等、斷乎として之を斥けしかば、同月二十五日拂曉、幕軍大學來り襲ひて薩邸を燒討す。乃ち奮撃突戦し、敵を倒す事十數人、遂に下腹に此の槍傷を負ひぬ。然れども纔に血路を開き、品川に遁れて遙に海を望めば、薩艦は已に同志等を收容し、錨を上げて遠く沖邊に去れり。是に於て自ら瘡を檢め、粘土を以て之を掩ひ、菰を纏ひて乞食

に扮し、藁を食ひ水を飲み、晝は入りて山中に匿れ、夜は出で、間道を辿り、箱根を越え富士川を溯り、漸くにして此處に來れり』と。武郷乃ち厚く勞ひて之を勦り、日を経て快癒せしむるを得たり。

慶應四年(明治元年)正月、慶喜竟に會・桑二藩の兵を前驅とし、姫路・高松等譜代諸藩の兵を帥るて京師に向ふ。薩・長の二藩朝命を奉じて鳥羽・伏見の間に拒ぎ、大に之を敗る。慶喜乃ち大阪に退き、更に海路より江戸に走る。是に於て征討の令下り、諸藩勤王の士を編制して親兵と爲し、以て二條城に屯せしめ、尋で高松實村、滋野井公壽、綾小路俊實、鷲尾隆聚等、搢紳家の諸公子内勅を受け、鎮撫使を拜して官軍先鋒を督し、東海・東山・北陸の三道より江戸に進發す。勤王の士、來り投ずるもの群を做し、過激の從、或は直ちに横濱を衝きて、攘夷の志を遂行せむとす。事、朝廷に聞え、諸公子等京都に召還せらる。

是より嚮、相良總三は江戸の薩邸に奮戦し、品川の沖に繋留せる薩艦に乗り、同志等を收容めて紀州に到るや、艦・傾きて操縱する事を得ず。乃ち上陸して京師に著す。時に慶應四年正月六日、伏見の役に後ること數日なり。是に於て總三、綾小路卿に上達し、討幕の先陣を承はらむ事を請ふ。卿、即ち推舉の勞を探り、東山道官軍先鋒を命ぜらる。時に總三、太政官に上請し、『凡そ官軍の過ぐる地は、本年の租税を免除せむ。仍て軍須を調達すべし』との官符を賜はり、之を帶びて即ち發向し、近江・美濃を経て信濃に入り、下諏訪の本營に駐屯し、附近十藩に檄して勤王の兵を募集す。志士競ひ集り、威・大に振ふ。爲めに諸藩の惡む所と爲り、『維新を畫成すべき費途、當に幾許か算るべからず。宜しく免租許容の官符を沒收し、相良を召還すべし』と議定す。乃ち太政官の置政一變し、總督府また拒む事を得ず。遂に板垣退助をして、相良に代らしめしかば、退助東下して相良を招致し、官符返上の議を傳へ、京師に歸還すべきを命ず。總三、之に應ぜず。時に變亂の常習として、無賴の徒、先鋒に加はれるもの甚だ多く、官符に託せて濫りに徵發を恣にし、竊に略奪を事とせしかば、沿道の諸藩、不平を訴ふるもの漸く遠近に起れり。時に岩倉公は副總裁の職に進み、鎮撫總督たりしを以て、其の訴を聞きて相良を詰責す。是に於て總三、自ら責を負ひ、斬罪に服して下諏訪に梟首せられ、同志六名、亦刑に



行はる。實に惟れ三月二日なり。(後年、朝廷その冤罪を量決し、總三に正四位を賜ひ、以下六名に各從五位を賜ふ)。

當時武郷は高松公の帷幕に參與し、公を擁して甲府に在りしが、總督府の召還する所となりしを以て、便ち京都に赴かむとし、富士見、金澤、高遠を過ぎて伊那に至り、飯田を経て中津川に出でむとす。已にして大平峠に掛るや、適ま倉澤清也等の京師に志すに遭へり。武郷曰く、『足下は何處に行かむと爲るものぞ。相良は未だ諏訪に來らざる歟』と。倉澤曰く、『先生、戲謔を弄する勿れ。相良は斬に處せられしにあらざるや』と。此に武郷、始めて相良が刑に行はれし事を知り、嗟嘆之れを久しうして曰く、『同志等相良を失はば、懷ふに予等を俟つもの有らむ。即ち此處より諏訪に到りて、更に足下等の後を追ふべし』と。倉澤等曰く、『是れ危きも亦甚し。先生郷里に脚を入れなば、必ず相良の轍を踏みなむ。京都に赴くも亦た然也。たゞ速に他郷に去りて、姑く難を避くるに如かじ』と。武郷肯せず。踵を廻らして諏訪に赴き、夜陰密かに相良の梟首を奪ひ、同志等と共に之を假葬し、更に長驅して京都に到る。此の行、武郷陰に惟らく、始め岩倉公、相良に歸洛を命じ、尋で其の部下の暴舉に出づるや、忽ち罪に訊ひて刑に處す。宛も機に乗ずるもの有るに似たり。公、或は予等同志を忌む事ある歟と。乃ち歸洛を公に報せず。竊に將來の行動を策せむと爲り。

時に權田直助、落合直亮の二人、武郷の偶居を訪れて曰く、『既往、二月十日ばかり、予等岩倉公の命を受けて關東に下り、三月三日、復命の爲め更に上洛し、旅亭に遊息ひて數日を送りしが、昨夜西川善六に會ふや、足下、同志等に離れて此處に住み、獨り竊に起臥すと聞きて、恠しみて訪へる耳。請ふ雌伏する所以を聞かむ』と。是に於て武郷、相良の斬に處せられし事を告ぐるや、二人も亦初めて之を知り、悲憤・慷慨・交々措く能はず。三人熟々客年の事を懷ふに、公・予等をして帷幄に列し、或は諸藩勤王の志士を鼓舞せしめ、或は古典法制の調査を依囑し、胸襟を披きて事毎に懇談し、待遇する事甚だ厚かりき。然るに復古の功成りしより、倏忽にして攘夷の令を停め、尋いで相良を斬に處せしめ、加之これを梟首す。其の所爲掌を返すが如く、去就、殆ど昔時と矛盾す。思へば疑團頻に生じ、再慮すれば切齒に堪へざるものあり。是に於て與に議りて曰く、『須らく不日公を訪ひ、審に其の胸裏を糾し、若し君國を害ふの意を懷くもの有らば、直

に公を刺さんのみ。然らずんば相良も亦予等を恨みむ』と。時に倉澤清也來り會し、之を聞きて池村某に告ぐるや、池村驚愕して色を失ひ、急遽西川善六に訴へ、西川更に之を岩倉公に傳ふ。(西川善六は近江の豪商也。吉輔と稱し、家號を伊勢久と云ふ。平田鏡胤の門に遊び、倉澤清也と共に白川侯に召されて帶刀を許さる。巨萬の費を勤王の士に頒ちし人と云ふ。明治四十年贈從四位に叙す)。

是に於て翌日岩倉公の使者、直亮、直助の旅宿に來り、命を傳へて曰く、『公、卿等を俟つ事急なり。請ふ速かに來訪せよ』と。二人曰く、『是れ公の余等を殺さんと計るもの也。今日の事、退いて災禍を蒙らんより、進んで公の智壁を刺し、然る後自刃するに有るのみ』と。直亮・直助の二人先づ結束し、匕首を懷にして公の邸に候す。公、佩刀を解きて引見し、侍臣を去らしめて徐に曰く、『公事多端の故を以て卿等を見ざる事甚だ久し。曩に關東の視察を托せり。其の情況を聞かむと欲す。請ふ近づきて坐すべし』と。二人茫然敢て近づかず、口を噤みて坐す。公曰く、『卿等予を疑ひ、將に暗殺せんとすと聞く、果して真とすべきや否や』と。二人また答へず。公曰く、『卿等黙して言はざるは、當に是れ真也と斷すべきのみ。請ふ是を把りて予を刺すべし』と。即ち懷刀を出して其の前に置く。二人手を拱きて未だ答へず。時に武郷後れて至り、進んで懷刀の傍に坐して曰く、『公、曩に相良を斬らしめ、以て之を梟首せしめしは如何』と。公曰く、『然り相良が終焉の事、昨夜詳に之を聽き、流涕尙ほ未だ袖に乾かず。されど相良の部下事を誤り、尾張藩以下、續々不平を訴ふ。是を以て已む事を得ずして之を斬らしめぬ。皇軍の先鋒にして濫に掠奪を事とせば、誰か能く王政を稱ふべき。且つ事施いて總督府の威信に關す。此の故に涕を揮ひて罪を正せり。たゞ之を梟首せしめしは、時に卿等の如き諮詢者なかりしが故の失なりき。今にして悔ゆれども既に及ばず。密に聞く、卿が其の首を斂めしは、以て予が失を補ふもの歟。顧みて慚愧に堪へざる也。曩に卿を召還せしめたる所以の者は、卿をして相良の轍を踏まざらしめむの意に出でしのみ。希くば今日より以往、予が別館を以て卿等が居に充てむ。請ふ速かに移轉して、復予が爲めに努めん事を』と。依つて刀劍、竝に黄金を賜ひ、厚く其の勞を慰藉せらる。是に於て疑團氷釋し、爾來三人協力奮勵、公の爲めに獻替する所あり。特に公は武郷の



豪爽にして阿らず、懐ふこと有る時は忌憚なく之を建白し、又其の諮詢に方りては、博學にして古今の例を引き、直に之に答ふるを敬愛し、優遇すること他に超えたりき。

既にして神佛混淆の禁令出づるや、諸國の社僧みな還俗して神官となり、遽に神典を攻究せんとす。時に武郷は公に獎されて、南都新神官の聘に應じ、古典の講筵を奈良に開けり。來り學ぶ者頗る多く、所謂新神官・九條公子（舊大乘院門跡）近衛公子（舊一條院門跡）等の公卿指神の流を始めとし、諸大夫、侍、北面の人々等、競ひて其門に入りしかば、武郷の學風、頓に堂上に滿つるの概ありき。

同年十二月、京都大學創建せらるゝに及び、召されて皇學所御用掛を命ぜられ、尋で講師と爲り、特に拜謁を聽さる。舊藩主之を聞きて高島藩の名譽なりとし、其の脱藩の事を責めず、特に祿を増して之を賞せり。

明治二年、高島藩も亦諸藩の例に倣ひ、學校を建て、皇學所を設け、武郷を召還して皇學教授と爲す。時に岩倉公、人をして之を停めしめ、長く諮詢に與らん事を懇懇せられしも、公と藩主との恩惠を比ぶるに、一は數年に過ぎずして、一は累代に係はれりとし、即ち固辭して京師を退き、郷里に歸りて其の教授と爲れり。後年、その人言つて曰く、「先生、公の懇懇を容れ、終始其の事に當りしならんには、高位顯官も意の如く成りしならむ」と。武郷之を聞き眉を擧めて曰く「然り這般の思慮に至りては、下愚の者と雖も能く之を運らさむ。然れども始め予が公に接せしは、只勤王の志を遂げんが爲めのみ、適その知遇を得るに及びて、榮譽利達の楷梯を植てむと計るは、其の志の本を覆へすものにして、陋も亦甚しと謂つべし。抑も予をして尊王の志を懐かしめしは、原これ皇學の貶なり。故に其の學に親しみて終始一貫す。何ぞ宰相も之に如かんや」と。

是の年二月、東京に大學校開設せられ、權田直助は大學中博士に任ぜられ、武郷の二男永夫は高島藩貢進生と爲り、大學南校に入れり。時に落合直亮は伊那縣判事に任じ、尋で大參事に進み、一日武郷を訪ひて久濶を舒す。是に於て武郷、直亮と相議り、相良總三の首を改葬し、大に祭典を下諏訪に行ふ。往時の志士會する者群を爲し、各々詩歌を詠じて靈を

慰む。武郷の歌に曰く。

花ならば咲かまし物を	花ならば散らまし物を	はなならぬ小島の君は	ふゆごもり春の彌生の
櫻ばな咲くをも待たで	時の間に移ろひにけり	現身は果敢なきものか	國の爲め君の御爲めと
たちねの親をも別れ	わか草の妻をも措きて	梓弓ゆはず振りおこし	射つる矢の末も通らず
劍太刀たかみ押しねり	みがきつる心もとけず	丈夫やかなしかりけむ	丈夫の悲しくはあれど
天がけり後こそ見らめ	國がけり今こそ知らめ	世のひとの語り傳へて	あめ地に殘る其の名は
はる花の榮ゆるがごと	香に匂ふごと		

此の歌『悼小島四郎將滿歌』と題して蓬室集に出でたり。（因に記す。落合直亮は武藏國多摩郡駒城野の士なり。堀秀成の門に遊びて皇學を修む。慶應三年、相良總三等と結び、變名して水原一郎と稱し、薩邸に入りて國事に盡瘁す。彼の江戶城西丸を炎上せしめしは、實に直亮の計に出つと云ふ。維新後伊那縣判事に任じ、尋で大參事に進みしが、明治四年横濱打拂事件に坐し、幽閉せらるゝに至りて失脚す。後年鹽竈の宮司となり、明治廿七年十二月歿す。年六十八。養子直文その家を繼ぐ。）

明治五年秋九月、高島藩廢せられ、皇學所亦た罷むに至り、翌年三月十五日、氣比神宮の宮司に任じ、後、貫前、諏訪、淺間（富士）等の宮司に轉ぜしが、九年四月、官を辭して家を東京に移し、七月、大教院講師に聘せられ、十一年、太政官修史館御用掛を拜し、尋で東京大學教授と爲り、十九年三月職を辭し、同二十一年、皇典講究所講師となり、二十三年國學院講師を兼ね、翌年慶應義塾大學部教授に聘せられ、二十六年神宮教校教授と爲り、同二十九年帝國文科大學講師を命ぜらる。凡そ武郷の官職に在るや、晝は公務に執掌し、夜は著作に従事し、殆ど眠食を忘るゝに至る。故を以て眼疾を發し、將に其の明を失はんとす。是に於て翌年九月職を辭し、専ら治療を講ずと雖も、尙ほ間を偷みて著述の事を棄てず、研鑽考究する事四十八年の久しきに亘り、明治三十二年己亥の春、終に其の稿を脱して畢生の業を了す。總て七十卷、紙



數八千九百枚に及べり。名づけて『日本書紀通釋』と云ふ。

始め、武郷此の稿を起せるの秋、伊勢神宮に詣で、禱る所ありしかば、今年その功成るに及びて、更に神宮を拜せんとするの志あり。時に神宮皇學館その意を迎へ、且く教授たらん事を需めしを以て、武郷喜びて之に應ぜしが、數月にして病を獲、東京市牛込區東槇町の家に歸り、明治三十三年庚子八月二十六日、安らかに臥して長き眠に就けり。壽七十四。

武郷、始め同藩の士、山中正展の長女順子を娶りて三男を儲く。安政四年順子を喪ひ、更に正展の三女文子（昭和五年現存、歳八十九）を迎へて四男三女を擧ぐ。長男武夫は諸社の宮司に任じ、明治三十二年、父に先ちて歿す、年四十九。次男永夫は大學南校に業を受け、尋で國學を修めて別に家を爲せり。大正七年歿す、年六十五。三男安國は松田氏を繼ぎ、明治十七年歿す、年二十八。長女一子は萬延元年二月に生れ、同年四月天歿す。四男元彦は大學古典科を出で、南郭服部元喬の家を繼ぐ。次女慶子は大和田建樹に嫁し、明治二十六年歿す、年二十七。三女明代子は嘗て高島藩勤王の士たりし小澤正弘の嗣子侃（醫師）に嫁す。五男治彦は始め特許局審査官に任じ、後官を辭して辨理士の職に就けり。六男弟治は國學教員と爲り、大正四年歿す、年三十九。七男季治、家學を承け家を繼ぐ。

武郷、常に酒を嗜み、復歌文を好み。風月花鳥の興、離合人事の感、一たび觴を擧ぐれば便ち滔々として迸出す。和歌一千五百餘首、雅文七十餘篇、收めて蓬室集に在り、特に其の長歌に至りては、自から一家の風を爲せりといふ。

### 飯田武郷年譜

文政〔仁孝天皇〕

十年（丁亥）十二月六日、江戸・芝・金杉將監橋の諏訪侯邸に生る……………一歳

十一年（戊子）……………二歳

十二年（己丑）山中正展の長女・順子（前室）生る……………三歳

天保

元年（庚寅）……………四歳

二年（辛卯）……………五歳

三年（壬辰）正月二十七日、父飯田武敏歿す年三十九〇母てい子、飯島氏に復す……………六歳

四年（癸巳）……………七歳

五年（甲午）……………八歳

六年（乙未）……………九歳

七年（丙申）諸國大饑饉……………一〇歳

八年（丁酉）服部元濟の門に入りて漢學を修む〇徳川家慶、征夷將軍を拜す……………一一歳

九年（戊戌）……………一二歳

十年（己亥）……………一三歳

十一年（庚子）先帝・光格天皇崩……………一四歳

十二年（辛丑）……………一五歳



十三年(壬寅) 山中正展の三女・ぶん子(後配)生る.....一六歳  
十四年(癸卯) 平田篤胤の門に入る○正月始めて諏訪に行き、岡村・清水・片羽等に居住す.....一七歳  
弘化

元年(甲辰) 海野遊翁の門に遊びて和歌を學ぶ.....一八歳

二年(乙巳) 東都火.....一九歳

三年(丙午) 仁孝天皇崩.....二〇歳

四年(丁未) 孝明天皇御即位.....二一歳

嘉永

元年(戊申) .....二二歳

二年(己酉) 山中正展の長女・順子を娶る.....二三歳

三年(庚戌) 秋九月、母てい子大患の報に接し、江戸に赴く.....二四歳

四年(辛亥) 秋九月、長男・武夫、諏訪に生る.....二五歳

五年(壬子) 正月七日、母てい子歿す年四十五○日本書紀通釋の稿を起す.....二六歳

六年(癸丑) 伊勢神宮に詣で、京都御所を拜し、近畿の地を探攷して諏訪に歸る○此年六月、亞米利加合衆國の水師提督ペルリ、浦賀に來航す○將軍家慶薨じ、家定其職を襲ふ.....二七歳

安政

元年(甲寅) 正月、ペルリ再航す○二月、次男・永夫、諏訪に生る○三月、江戸に赴き、矢ノ倉の邸に住む.....二八歳

二年(乙卯) 前年以降、尊王攘夷の論諸國に起る○十二月二日、江戸大震.....二九歳

三年(丙辰) 米國總領事バルリス下田に來る.....三〇歳

四年(丁巳) 正月、諏訪に歸る○九月、三男・安國、諏訪に生る○十月廿七日、妻、順子歿す年二十九.....三一歳

五年(戊午) 二月、山中正展の三女ぶん子を娶る○六月、幕府專斷、外交條約を假定す○七月、將軍家定薨じ、定茂其職を襲ふ.....三二歳

六年(己未) 江戸に赴く.....三三歳

萬延

元年(庚申) 二月、長女・一子生れ、四月夭歿す○三月三日、義士十七名、櫻田門外に大老伊井直弼を刺殺す.....三四歳

文久

元年(辛酉) 諏訪に歸る.....三五歳

二年(壬戌) 岩倉具視公、密かに勤王の志士を懷撫す。武郷之に與る.....三六歳

三年(癸亥) 武郷、密かに勤王の士を糾合す○十二月、四男・元彦生る.....三七歳

元治

元年(甲子) 十一月二十日、武田耕雲齋、信州和田峠に戦ふ.....三八歳

慶應

元年(乙丑) .....三九歳

二年(丙寅) 三月十五日、家督を長男武夫に譲り、討幕の機を熟するに備ふ○八月、將軍家茂薨じ、慶喜其職を襲ふ.....四〇歳

三年(丁卯) 七月、次女・慶子生る○江戸に赴き、諏訪に歸り、更に京に上り、歳末歸諏す.....四一歳

明治 [明治天皇] 元年七月、江戸を改めて東京と稱し、八月、御即位の式を擧げ給ひ、九月、元を明治と改む。



元年(戊辰) 相良總三斬首せらる○三月、甲府に赴き、復た京都に上る○京都大學創建せらる……………四二歳  
 二年(己巳) 八月、藩に歸りて皇學所教授と爲る……………四三歳  
 三年(庚午) 八月、三女・明代子生る……………四四歳  
 四年(辛未) 三月、横濱打拂事件に坐し、權田直助、落合直亮等幽閉せらる……………四五歳  
 五年(壬申) 九月、高島藩廢せられ、皇學所亦罷む……………四六歳  
 六年(癸酉) 三月、氣比神宮々司に任じ、越前に赴く○九月、五男・治彦、諏訪に生る……………四七歳  
 七年(甲戌) 貫前神社、諏訪神社等の宮司に任ず……………四八歳  
 八年(乙亥) 淺間神社(駿州富士郡大宮)宮司に任ず……………四九歳  
 九年(丙子) 四月、宮司を辭し、家を東京に移す○大教院教師と爲る……………五〇歳  
 十年(丁丑) 三月、六男・弟治、麻布區今井町に生る○三男安國、西南役に從軍す……………五一歳  
 十一年(戊寅) 太政官修史館御用掛と爲る……………五二歳  
 十二年(己卯) 十月、麴町區紀尾井町三番地に移る……………五三歳  
 十三年(庚辰) 七月、元彦と共に甲信に遊び、八ヶ嶽に登る○東京大學教授と爲る……………五四歳  
 十四年(辛巳) 元彦、服部南郭の家を繼ぐ……………五五歳  
 十五年(壬午) 十二月、七男・季治、麴町區紀尾井町に生る……………五六歳  
 十六年(癸未) 十二月、次女慶子、大和田建樹に嫁す○岩倉具視公薨す年五十九……………五七歳  
 十七年(甲申) 六月、三男・安國歿す。年二十八……………五八歳  
 十八年(乙酉) 八月、小中村義象を伴ひて日光に遊ぶ。一荒紀行あり……………五九歳  
 十九年(丙戌) 東京大學教授を辭す……………六〇歳

二〇年(丁亥) 五月、牛込東榎町に移轉す(五月、權田直助歿す、年七十七)……………六一歳  
 二一年(戊子) 十二月、皇典講究所講師と爲る……………六二歳  
 二二年(己丑) 七月、諏訪に赴く○八月、鎌倉に遊ぶ……………六三歳  
 二三年(庚寅) 四月、三女明代子、小澤侃二に嫁す○國學院講師と爲る○御嶽に遊ぶ……………六四歳  
 二四年(辛卯) 二月、慶應義塾大學部教授と爲る○六月、高崎に遊ぶ……………六五歳  
 二五年(壬辰) 七月、播磨に遊ぶ。紀行『まさらぬ繪』あり……………六六歳  
 二六年(癸巳) 八月、治彦と房州に遊ぶ○十月、大和田慶子歿す○神宮教校教授と爲る……………六七歳  
 二七年(甲午) 七月、征清の師起る(十二月、落合直亮歿す、年六十八)……………六八歳  
 二八年(乙未) 治彦、砲兵少尉(一年志願兵)に任じ從軍す……………六九歳  
 二九年(丙申) 一月、帝國大學文科大學講師と爲る○七月、敦賀、京都、岡山、嚴島、琴平、屋島に遊ぶ……………七〇歳  
 三〇年(丁酉) 七月、天橋立に遊ぶ○九月、眼疾に罹り、大學講師を辭す……………七一歳  
 三一年(戊戌) 一月、伊豆修善寺、駿州靜浦等に療養す……………七十二歳  
 三二年(己亥) 日本書紀通釋七拾卷脱稿す○諏訪、松本、越前、伊勢に遊ぶ○十一月、長男・武夫歿す……………七三歳  
 三三年(庚子) 八月二十六日歿す……………七四歳



附録

眞に不朽の名著

東京帝國大學教授 辻 善之助  
東京帝國大學史料編纂部長 文 學 博 士

今や昭和の文運その盛を致し、書籍の刊行せらるゝもの汗牛充棟も尠ならず。而も以て永く後代に傳ふるに足るべきの書は甚だ稀である。其の中に於て、故飯田武郷翁の日本書紀通釋の如きは、眞に不朽の著と稱して、何人も異論なかるべきものであらう。日本人は固より、世界の學者が我が古典を研究せんとするに當つて、必ず先づ手にすべきはこの書である。嘗て我が東京帝國大學に在つて、久しく獨逸文學の講座を擔任したドクトル・フローレンツ氏が、獨逸譯日本紀を編するに當つても、此の書が最も多く參考せられたのであつた。此の書世に出でてより既に三十餘年、今に至るも尙ほ國史國文の學徒の間に尊重せられ、本居宣長翁の古事記傳と併稱せらるゝも偶然で無い。宜なり、其の版を重ねて頒布せられんとするや。蓋し本書の如きは、此の後も重版又重版、永久に人間に傳へられ、飯田翁が刻苦淬勵の跡は、後進學徒に向つて模範を示し、訓誡を垂れるであらう。

「日本書紀通釋」を推獎す

京都帝國大學教授 三浦 周行  
文學博士

したり、惟神なる古語の意義について、世の神道家の誤解を排撃したり、聖德太子と神祇崇敬との關係を検討したりしたあたり、何れも侵し難き自信の閃きが見える。翁の研究態度は實に根本的、徹底的に闡明せざれば已まざるの概があるから、其の解説にはもとより今日から見て多少の餘地あるものがないとはいはぬが、微に入り細を穿つて精緻を極め、さりとして「日本書紀傳」の冗沓がなく、一體に繁簡宜しきを得てゐる點を、第四に擧ぐべきであらう。

私は翁の生前教へを請うた事はないが、學生時代に皇典講究所で、數回翁の講演を傍聴した事がある。其の頃の翁は眉の濃い鬚髯のある一見古武士の風ある人であつたが、一度口を開かるゝと、諄々として説いて倦まぬ極めて地味な話振りであつた。それがよく此の「日本書紀通釋」の上に現はれてゐる。私は今は絶版同様になつて、坊間容易に得難い此の書が新装して世に出でたのを見て、喜びの餘り世の未だ此の書を知らざる讀書子に推獎したい。

古典研究の一大秘鑰

東京帝國大學名譽教授 芳賀 矢一  
國學院大學長 文學博士

日本紀は古事記と違つて、古くから研究せられてゐたから、傳寫本も多いし、註釋書の印行せられたのも少くない。註釋書は時代により、作者により、各その特長もあり、缺點もあつて、段々と進んで来たのであるが、本居宣長翁が古事記第一を唱へて、たうとう古事記傳を完成したので、日本紀は國學者の手には後廻しにされた。この缺點を補はうといふのが、鈴木重胤翁や、飯田武郷翁の努力となつてあらはれたので、就中、飯田翁の通釋は餘りに冗長でもなく、

故飯田武郷翁の「日本書紀通釋」は本居宣長の「古事記傳」に於けるが如く、翁が一生の心血を注がれた不朽の名著であるが、世間では「古事記傳」あることを知つてゐるも、「日本書紀通釋」を知らないものが多いやうであるから、私は平生「日本書紀通釋」の利用より得た印象から、其の特長とも見るべき二三の點を擧げて見よう。言ふ迄もなく日本書紀は、六國史といはるゝ勅撰の國史の隨一であつて、彼の皇祖の天壤無窮の神勅も、此の書にのみ出でてをり、我國建國の由來を始めとして、古代史の明確なる知識を得んとするには、古事記と此書とに據るの外ないから、古來註釋の書も少くないが、「日本書紀通釋」は、他の漢文の諸註釋書と違つて、何人にも讀み解き易き假名文で書かれてをり、終始完結してゐる點を第一に擧げなければならぬ。且つそれらの多くの註釋書の中では「日本書紀通釋」が最も後に出來たものであるだけ、主なる諸學者の要點が、よく引用されて居るから、讀者は自然他の註釋書を手に入れずとも間に合ふことを、第二に擧げなければならぬ。それといふも翁が博覽の上に識見頗る穩健であつて、奇説を銜ふ事なく、忠實に諸家の學說を擧げて、反對説でも長所があればこれを見通さずして「卓見ながら非なり」などと評されてゐるを見受ける。それだけ自身は確とした徵證がなければ斷定を避けられ、所謂石橋を叩いて渡るともいふべき堅實さがある事を、第三に擧ぐべきであらう。此の點は平田篤胤と大體に於て正反對であるといへる。さりとして翁の獨特の見解はもとより隨所に現れてゐる。例へば天智・天武兩天皇紀の前後の齟齬を指摘したり、神武天皇の鳥見靈時について「古事記傳」に、城上郡の等彌と宇陀郡の鳥見とを、一所の別れたものと見たのを打消

さりとして疎略な節とはなく。古今の諸説を涉獵して自己の卓見を加へられたもの、翁が一代の著述として、死に至るまで研究を續けられた誠に貴い學界の産物である。先年一度印行せられて、學者に利益を與へたことが多大であつたが、今や新しい意味を以ての古典研究が次第に盛にならうといふ今日、更に改版せられるのは何よりの慶事とおもふ。これからさき、日本紀を研究しようと思ふものは、どうしても此の通釋を見なければならず、又見るのが最も安全で、最も有益な方法であるといはなければならぬ。

心血を傾注せる學界の珍籍

國學院大學教授 松本 愛重  
文學博士

飯田武郷先生の日本書紀通釋に、今回息の元彦、季治の兩君が、五百數十頁に亙る精密な一大索引を附せらるゝに至つたのは、學界の爲め誠に喜ばしい事であると思ひます。

私は明治十年の春の頃、毎日曜日に先生の御宅に通つて、日本書紀の講義を聴き、後には先生の御宅に居つて、修學の傍ら先生の指圖に依つて、此の通釋の參考書の書抜きや、稿本の清書その他の御手傳をした。先生の生涯は全く此の日本書紀の研究に委ねられ、一意之に従事せられた熱心の程は、私の能く承知して居る所であります。

元來先生は、本居宣長翁が一生の精力を古事記傳の大著述に注がれた事に感じて、若年から日本書紀の註釋を志し、その方の研鑽に熱中せられたが、嘉永の五年に初めて註釋の稿を起し、普く日本書紀の古寫本、異本等を探り求めて比較考定し、また諸先輩友人の意見をも參酌して、其上に自説を加へ、數回稿を改めて、明治三十三年、



先生逝去の数月前に、漸く完成せられたもので、その歳月は實に五十年の久しきに亙つてゐます。

先生が修史館、東京大學、帝國大學文科大學、國學院、伊勢皇學館等に勤務せられたのも、畢竟は日本書紀研究の參考資料を借覽し度い爲めで、之が利便を得る爲めには、如何なる困難をも辭せられなかつたが、その反對の場合には如何なる好地位をも惜氣なく辭せられました。

また先生と、水戸の國學大家栗田寛先生とは無二の親友で、時々會合しては研究上の意見を交換せられた。かゝる次第で通釋の中には、栗田先生の説も所々に引用されてあります。兩先生とも大酒家で、少しく興に乗ると夜の十二時過ぎ迄も盃を手にし乍ら互に日本紀の話が盡きぬので、私はお蔭で兩先生の話をお聴き事を得ましたが、今日になつて追懐すると、先生が此の通釋に於る造詣と苦心とは實に異常なもので、益々敬慕の念を深くします。日本書紀通釋全五卷四千餘頁の大著述は全く先生畢生の心血を傾注せられて出來た學界の珍籍と申さねばなりません。何うか此の一大遺著を世に普及せしめて先生の英靈に酬い度いものであると思ひます。

武郷先生終身の事業

帝國學士院會員 徳 富 蘇 峰

頃る飯田君、其の先人武郷先生の 大著日本書紀通釋を寄せ來りて曰く、是れ先人畢生心血の凝る所、今や此書を改版に附せむとす。請ふ批評を愛しむ勿れと。記者國史の智識に於て、實に曠々たり、豈に漫りに喙を容れむや。

生の素志にあらざるべきも、其の集めて大成したる一點に於ては、彼我一轍と云ふに憚らず。

試みに先生が校訂したる諸本の一斑を擧ぐれば、延喜本、嘉禎本、嘉曆本、禁中御本、永和本、應永本、永享本、明應本、永正本、祕閣官本等、枚舉に遑あらず、其の博引、旁證、凡そ有らゆる限りを極めざるはなかりし事、只だ此の一點に於ても、之を察するに難からず。吾人豈に滿腔の敬意を表せずして已まんや。

古典研究の最大權威

東京帝國大學史料編纂官 山 本 信 哉

我が光輝ある國體を宣明し、我が建國の精神を發揮しようとするには、是非とも先づ古典に精通しなければならぬ。古典には古事記もあり、萬葉集もあり、各々其の特長を備へて居るが、就中其の精細を極めたものは日本書紀である。

日本書紀が、我が古典中の權威であり、我が古代史の研究上、必要缺くべからざるものであることは、我が建國の理想たる天壤無窮の神勅が、本書を除いては他に決して見出し得ないといふ一事によつても之を證して餘りあるのである。

日本書紀は、獨り我が建國の理想を見るに足るのみならず、苟も我が氣候風土に順應せる國民性の源泉を探り、其の良風美俗によつて發達したる民族宗教及び國民道德の根底を究め、又我が國家文明と離るべからざる政治經濟、工藝、美術、其の他百般の事物の起原を知らんと欲するものの一寶庫である。

日本書紀は、斯る國家的寶典である。世界的珍籍であるが故に、古

然も國史に關する興趣に至りては、聊か其の一嚮の味ひを解せざるにあらず。但だ不幸にして、從來斯る大著に接するの機會を有せざりしを遺憾としたるのみ。

今更ら言ふ迄もなく、古事記と日本書紀とは、帝國歴史の双柱也。書紀の文飾ある、未だ古事記の素樸、簡實に若かずと稱する者あれども、二者各々其の特色あり、與に俱に少く可らず離す可らざるは、記紀の單語を以て、約一千二百年間傳來したるに依りて知らるべき也。

頼ひに古事記には本居翁の「古事記傳」あり。然も日本書紀に至りては、注脚家の古往今來、其人に乏しからざるに拘らず、未だ集めて大成するものを見ず。是れ蓋し飯田武郷先生が、其の終身の事業を此の目的に獻げたる所以ならむ歟。

此書は實に嘉永五年に稿を起し、明治三十二年に之を了り、翌三十三年の春、病牀に於て最後の校閲を施せしもの、乃ち先生の一生涯と始終する者と謂ふ可き也。

今其の分量を見れば、紙數八千九百餘枚、之を菊板の十五行四十餘字詰にして無慮三千九百四十六頁と爲す。其の量に於て空前なるを知るべし、然らば則ち其の實質奈何。

記者は此の點に於て、自ら憑據者として斷言する能はず。されど先生が虚心坦懐、前人の足跡を辿り、更に其の及ばざる所、若しくは及ばんと欲して遑なかりし所に及ぼしたるは、之を信ずるに難からず。即ち先生は強ひて他に同じからざるの説を唱へ、徒らに新見を標榜するにあらずして、唯だ其の妥當、精細を期したるもの如しと推定せざるを得ず。

されば之を本居翁の古事記傳に比して優劣を論ずるが如きは、先

來幾多の學者が、之が研鑽に従事し、其の註釋を試みたものも亦尠くはなかつた。即ちこれを前にしては多人長等の日本紀私記があり。藤原通憲の日本紀抄があり、卜部兼方の釋日本紀、忌部正通の神代卷口決、吉田兼俱の日本紀神代抄等があり、之を後にしては、谷川士清の日本書紀通證があり、河村秀根の書紀集解があり、鈴木重胤の日本書紀傳等がある。併しながら、此等の多くは、僅に神代卷の註釋書であつて、偶々全部を解釋したものがあつても、何れも漢文で綴られ、其概要を註せるに過ぎない。而も是等の諸書は、今や殆ど古書珍本に屬して、其價も不廉であり、之を購入しようとしても容易に得られないのである。

飯田武郷先生の著、日本書紀通釋は、嘉永五年から明治三十二年まで、凡そ四十八年間、先生が畢生の心血を注いで作られた一大傑作である。先生は此間常に自ら延喜本、嘉禎本、嘉曆本等の、諸家祕藏の古寫本數十本を以て其の本文を對校せられ、前述の註釋書等を集めて之を大成せられたのみならず、更に諸家の祕本、珍籍を博引旁證して、舊説の杜撰誤謬を訂正せられ、先人未發の卓見をも掲載せられて居る。實に古典研究の最大權威と稱しても決して溢美ではあるまい。

今や我が思想界は、動もすれば紛亂せんとし、國家の前途、眞に寒心に堪へないものがある。是時に當て其の思想を善導し狂瀾を既倒に回へさうとするものがあつても、其の多くは、我が古典を讀まざ、偶々之を讀むものがあつても適當な註釋書が無い爲に、能く我が國體の淵源を究め、我が建國の精神を了得して、終に我が國家生存の性命に即することの出來ないのは甚だ遺憾である。茲に本書の刊行に際し、聊か素懷を記して世の識者に訴へ、併せて之を推奨する次第である。(終)



昭和五年四月廿五日印刷  
昭和五年四月三十日發行

(日本書紀通釋 全六册 非賣品)



製複許不

著作者 飯田武鄉

相續者 飯田季治

發行者 川俣馨一

印刷者 井上源之丞

東京市小石川區竹早町三十二番地

東京市小石川區竹早町三十二番地

東京市本所區番場町四番地

發行所

内外書籍株式會社

振替口座東京 八九六〇番  
電話小石川(85) 三〇五四番  
三二六九番

刷印場工分所本社會式株刷印版凸











